ズシテ去レリ」

【循環端ナシ】 事の窮るところを知らざるをいふ、孫子の兵勢に「奇正相生、如循環之無端、孰能窮之」また荀子に「始則終、終則始若環之無端也」

【荀卿】 字は況、周の趙の人年五十にして始めて來りて齊に游學す、齊の襄王の時、卿最も老師たり、楚に適き蘭陵の令となる、書數萬言を著し、六經を羽翼す、荀子といひ、世に傳はる、荀或は孫に作る、

【春曉】 はるのあけぼの、杜詩に「春來常早起」また「惜花春起早」の句あり、孟浩然の詩に「春眠不覺曉、處處聞啼鳥、夜來風雨聲、花落知多少」袁枚の詩に「千枝紅雨萬重烟、畫出詩人得意天、山上春雲如我懶、日高猶宿翠微巔」

【俊傑】 淮南子泰族訓に「知過萬人者、謂之英、千人者謂之俊、百人者謂之豪、十人者謂之傑」——は、才德の衆に優る者をいふ、孟子に「尊賢使能、——在位」

【春暄】 暄は溫なり、春のあたたかさこと、詩經の疏に「一人遇——則四體舒泰」

【殉國】 殉は從なり、國難に從つて死する義、漢書李陵傳に「常奮不顧身、以殉國家之急」殉は狥に通用す、宋史畢士安傳に「寇準方正、慷慨有大節、忘身狥國、秉道疾邪、云云」また中論に「奉君忘身、狥國忘家」

【春山笑フガ如シ】 (春山如笑)郭熙の畫山水論に「春山ハ淡冶ニシテ笑フ如ク、夏山ハ蒼翠ニシテ滴ル如ク、秋山ハ明淨ニシテ洗フ如ク、冬山ハ慘淡トシテ睡ル如シ」

【荀子】 二十卷、簡明目錄に「周ノ荀況撰ス、唐ノ楊倞ノ註アリ、ソノ書大旨勸學ニ在リ、而シテ其ノ學、德ヲ修ムルヲ主トス、徒ニ以テ人ノ質ヲ恃ミテ學ヲ廢センコトヲ恐ル、故ニ激シテ性惡ノ說ヲナシ、後儒ノ詬厲ヲ受ク、要スルニ其ノ聖人ヲ宗法シ、王道ヲ誦說スルトコロ、終ニ韓愈ノ大醇小疵ノ評ヲ以テ定論ト爲ス」

【春秋】 魯の史記の名にして孔子の筆削にかかるものなり、隱公の元年に起りて哀公の十四年に終る、十二公二百四十二年間の事迹を擧げて、上下の名分を明かにし、周室を尊ぶの意を寓す、春秋に三傳あり、公羊・穀梁・左氏なり、三傳共に十三經に列す、公羊傳は周の公羊高の述ぶる所ろ、漢の何休の註、唐の徐彥の疏なり、穀梁傳は、周の穀梁赤の述ぶる所ろ、晉の范甯の註、唐の楊士勛の疏なり、左傳は、周の左氏といふ者の撰にして、晉の杜預の註、唐の孔穎達の正義なり、

【春秋高シ】 年老いたるをいふ、戰國策に「君之春秋高、而封地未定」とあり、また劉向の新序に「楚丘先生行年七十、披裘帶索、見孟嘗君、君曰、先生老矣、春秋高矣云云」

【春秋富ム】 年少をいふ、年少ければ、餘年多し、以て財の竭きざるに比して富といふ、史記の齊悼惠王世家に「今高后崩、皇帝春秋富、未能治天下」

【春秋鼎盛】 春秋は、年齡なり、鼎は當なり、方なり、鼎盛は、方に壯なるをいふ、漢書賈誼傳に「天子——」

【荀氏ノ八龍】 人の良きを兄弟多きを稱していふ、後漢書に「荀爽字ハ慈明、潁川潁陰ノ人ナリ、父淑字ハ季和、賢良方正ニ擧ゲラレ、對策シテ朗陵侯ノ相ニ補ス、事ニ莅ミテ明理、稱シテ神君ト爲ス、子八人アリ、竝ニ名稱アリ、時人八龍トイフ、爽幼ヨリ學ヲ好ミ、十二ニシテ春秋論語ニ通ズ、潁川之ガ語ヲ爲リテ曰ク、荀氏八龍、慈明無雙ト」

【純臣】 忠純正直の臣なり、左傳隱四年に「石碏——也」

【春社】 春の社日なり、禮記に「仲春ノ月、元吉ヲ擇ビ民ニ命ジ社セシム」註に「社ハ后土ナリ、民ヲシテ之ヲ祀リ、以テ農ヲ祈ラシム、春分ノ前後ニ近キ戊ノ日ヲ謂フ、元ハ吉ナリ」

【巡守】 天子諸國を巡るをいふ、書經の舜典に「五載一——」また孟子に「天子適諸侯曰——、巡守者、巡所守也」

【醇儒】 漢書賈山傳に「涉獵書記、不能爲——」の注に「醇ハ雜ナラザルナリ」醇は通じて純に作る、後漢書鄭康成傳に「稱爲純儒」

【春樹暮雲】 遠方に在る友を憶ふを「詩——之句」といふ、杜甫の春日憶李白詩に「渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論文」と、渭北は杜の居る地、江東は李の居る地、

【逡巡】 却退なり「アトシサリ」史記魏世家に「翟璜——再拜」また莊子に「子貢——而有愧色」過秦論に「九國之師、——遁逃」

【逡遁】 逡巡に同じ、却退なり、管子に「桓公蹴然——」また漢書の贊に「——有恥」の註に「遁讀ンデ巡ニ同ジ」

【蠢蠢】 蟲などのうごめく貌、また動搖の貌、左傳に「今王室實——焉」

【恂恂】 信實の貌、論語に「於鄉黨——如也」また溫恭の貌とも解く、また恐懼の貌、爾雅に「恂ハ慄ナリ」と、柳文の捕蛇者說に「——而起」

【循循】 次序ある貌、論語子罕篇に「夫子——然善誘

【諄人諄】「ネンゴロ」に告げ誨ふる義、詩經の大雅に「誨ル爾——」朱傳に「詳熟ナリ」と、左傳襄三十一年に「趙孟年未ダ盈ツ五十ニ、而——焉如ニ八九十者」また忠謹の貌、後漢書卓茂傳に「勞心——」

【醇醇】厚き貌、老子に「其政悶々、其民——」註に「ソノ政教寛大ナレバ、民——富厚ニシテ、自ラ相親睦ス」

【恂恂如】溫恭の貌、論語に「孔子於ニ鄉黨ニ、——也」

【潤色】文章に手を入れて、文采を加ふるをいふ、論語に「子曰、爲レ命、裨諶艸創之、世叔討論之、行人子羽脩飾之、東里子產潤色之」とあり、命とは、辭命の文なり、裨諶以下四人は、皆鄭の大夫、艸は畧なり、創は造なり、艸藁を造爲するをいふ、討は尋究なり、論は講議なり、行人は使をつかさどる官、脩飾は之を增損するをいふ、

【純粹】不雜なり、易の乾卦に「剛健中正、純粹精也」また至美を純といひ、齊同を粹といふとも解す、楚辭に「昔三后之——兮、固衆芳之所在」

【春水滿ニ四澤ニ】陶淵明の四時の詩の起句なり「——ニ夏雲多ニ奇峯ニ、秋月揚ニ明輝ニ、冬嶺秀ニ孤松ニ」これなり、春水、夏雲、秋月、冬松以て四時の奇景を盡すに足る、許彥國詩話にいふ「四時詩、此願長康詩、誤入ニ彭澤集中ニ」とあり、未だ果して然るか否かを知らず、

【純正蒙求】三卷、元の新安胡炳文撰す、炳文、李瀚の蒙求多く對偶を以て工を求め、盡くは法戒に關するあらざるを以て、因つて是の書を作る、上卷は敎を設けて人倫を明かにすることを敍す、中卷は身を立て己を行ふことを敍す、下卷は人を待ち物に接することを敍す、每卷一百二十句、併せて自らこれが註を作る和版あり、

【浚渫】泥あくたの類をさらへて深くするをいふ、水經の注に「不嘗——ニ」

【駿足長阪ヲ思フ】俊秀の人、艱難に逢ひて、其の才を試みんことを思ふに喩ふ、文選の陸厥の詩に「駿足思ニ長阪ニ」

【瞬息ノ閒】極めて短き時閒をいふ、瞬は「メタタキ」息は、一呼吸なり、杜詩に「得失瞬息閒」

【潤澤】うるほす義、孟子に「若夫——之、則在ニ君與ニ子矣」淮南子に「夫水者大不ニ可ニ極、深不ニ可ニ測、上天爲ニ雨露、下地爲ニ——、無ニ公無ニ私、水之德也」

【濬哲】濬は幽深なり、哲は智なり、——は、深智に同じ、書の舜典に「——文明、溫恭允塞」

【俊德】俊は大なり、大德に同じ、書の堯典の「克明ニ——」に「以ニ親ニ九族ニ」の註に「俊ハ峻ニ同ジ」

【舜ノ徒】善を爲すにつとむる者は、皆舜の「ナカマ」なりとの義、孟子に「雞鳴而起、孳孳爲ニ善者ハ舜之徒也」

【春葩】春の花、劉勰の新論に「陽氣主ニ生ニ物、所ニ樂也、陰氣主ニ殺ニ物、所ニ慽也、故——含ニ日似ニ笑、秋葉泫ニ露如ニ泣」

【俊髦】俊は萬人に秀でたるをいひ、髦はすぐれて長き髮をいふ、また髦士とも用ふ、詩經に「髦士攸宜」とあり、爾雅に「髦ハ俊ナリ」と、郭璞曰く「士中ノ俊ハ、猶ホ毛中ノ髦ノ如シ」

【春坊】太子の宮をいふ、宮僚備要に「太子宮曰ニ——」

【駿馬ノ骨ヲ買フ】（死馬ノ骨を見よ、

【潤筆】揮毫料をいふ、北史の鄭譯傳に見ゆ、歐陽公の歸田錄に「蔡君謨、既爲ニ余書ニ集古目錄序ニ刻ニ石、其字尤精勁、爲ニ世所ニ珍、余以ニ鼠鬚栗尾筆銅綠筆大小龍茶惠山泉等物ニ爲ニ潤筆ニ、君謨大笑以爲ニ太淸而不ニ俗」

【春氷ヲ涉ル】（涉ニ春氷ニ）春氷は薄くして解け易し、その上を涉るは、陷溺の恐あり、以て危險を感ずるに喩ふ、書經に「心之憂危、若ニ踏ニ虎尾ニ涉ニ于春氷ニ」

【春風醉ヲ勸ム】白樂天の詩に「花下忘歸因ニ美景ニ、樽前勸レ醉是春風」

【春風ノ中ニ坐ス】（坐ニ春風中ニ）良師に從ひ薰陶せらるるをいふ、書言故事に、侯仲良の語錄を引きて曰く「朱公掞名ハ光庭、明道先生程顥ニ汝州ニ見エ、歸リテ人ニ語ツテ曰ク、光庭在ニ春風中ニ坐了一月ト、」春風は能く萬物を發育す、光庭いふ、程明道先生に從學して倍〻長益する所ろあること春風の中に坐するが如しと、

【醇朴】朴は樸に同じ、心が純粹にして僞なく、すなほにして虛飾なきをいふ、朱熹の句に「風俗頗——」

【餟餘】餟は食の餘なり「クヒノコシ」禮記に「——不祭」

【舜能ク象ヲ化ス】劉氏人譜に「昔舜ノ弟ニ象トイフ者アリ、屢舜ヲ殺サント欲ス、舜之ニ接スルニ友愛ノ道ヲ悉ス、象遂ニ惡ヲ改メ化シテ善人ト爲レリ、明ノ王陽明之ヲ論ジテ曰ク、舜ノ能ク象ヲ化スルハ、其ノ機、只象ノ不是ヲ見ザルニ在リト、至言トイフベシ」

【醇醪】美酒なり、以て才德すぐれたる友に喩ふ、江表傳に「程普以ニ年長ニ侮ニ周瑜ニ、瑜折レ節不ニ與較ニ、普後自敬服而親ニ重之ニ、乃告ニ人曰ニ、與ニ周瑜ニ交、若ニ飲ニ——醇ニ、不ニ覺ニ自醉ニ」

【春蘭秋菊俱ニ廢スベカラス】各〻特長ありて、共に棄つべからざるに喩ふ、事文類聚に裴子餘、鄒縣ノ尉

ニ補セラル、時ニ同列ノ李朝隱、程行謀、皆文法ヲ以テ著稱セラル、子餘獨リ文學ヲ以テ名ヲ知ラル、或ヒト長史陳崇業ニ三子ノ優劣ヲ問フ、崇業曰ク、春蘭秋菊、俱不可廢也ト」

【醇醨】 醇は厚酒、醨は薄酒、漓に通じ用ふ。爾雅註疏序に「——既異、步驟不同」酒の厚薄を以て、民俗の厚薄に轉用す、淳漓とも書く、

【蓴鱸ヲ思フ】 久しく異鄉に宦遊せるものが故鄉へ歸らんことを懷ふに用ふ(張翰蓴羹)蓴羹)を見よ、

【朱明】 爾雅に「夏ヲ朱明トイフ」夏氣は赤くして光明なるに由る、

【受命ノ君】 天命を受けて王業を爲す所ろの君をいふ、史記周紀に「西伯蓋——之—」

【首陽ノ愁】 太平記卷四に見ゆ(伯夷叔齊)を見よ、

【須臾】 頃刻の閑なり、中庸に「道也者不可ー—離、離ルベキハ道ニアラザルナリ」僧祇律に「二十念ヲ一瞬トナシ、二十瞬ヲ一彈指ト名ヅケ、二十彈指ヲ一羅預ト名ヅケ、二十羅預ヲ一須臾ト名ヅク、一日一夜ニ三十須臾アリ」

【茱萸】 山茱は灌木にして、葉は「キノコヅチ」に似て毛なく對生す、春、葉に先だちて枝の節毎に四瓣の黃花簇り開く、大さ三分許、實は「アヲキ」の實の如く秋後熟して赤し、吳茱は喬木にして高さ丈餘、枝四方に廣がり、根に「ヒコバエ」叢生す、葉は漆に似て大きく數少く、厚くして對生す、夏、黃白花、枝の梢に簇り開く略「カヘデ」に似たり、實の大さ二分餘、扁くして五稜あり、紫赤なり、古名「カハハジカミ」又一種に食茱あり喬木、二三丈、木に刺多し、葉は「オニグルミ」に似て狹長鋸齒あり花實共に略「カヘデ」に似たり 支那にては九月九日に高きに登り、——の房を頭に挿むときは邪惡を避くべしといひ傳ふ、王維の詩に「遙知兄弟登高處、遍挿ー—少一人」また杜甫の詩に「明年此會知誰健、醉把ー—仔細看」風土記に「九月九日俗ー房ヲ折リ以テ頭ニ挿ム、イフ惡氣ヲ辟除シテ初寒ヲ禦グ」と、また福建志に「建寧府重陽ノ日、高ニ登リ——酒ヲ飲ム——ヲ名ヅケテ辟邪翁トナス」和名の「グミ」とは異り、

【侏離】 蠻夷の語聲、分明ならざるなり、後漢書南蠻傳に「衣裳斑闌、語言——」離一に儁に作る、通ず、

【儒林ノ四傑】 元史に「柳貫、浦陽ノ人、同郡ノ黃溍、及ビ臨川ノ虞集豫章ノ揭傒斯ト名ヲ齊シクス、人號シテ儒林ノ四傑トナス」

【鷲嶺】 五精舍の一、大藏、法數に「——山名也、以其山形似於鷲鳥、故以名焉、中爲精舍、佛居此而說法也」

【首領ヲ保ツ】 (保首領)領は頸なり、身體を全く保つをいふ、左傳襄十三年に「得ー—以沒」史記匈奴傳に「各保其首領而終天命」

【銖錙ノ姦】 銖は二分五厘、錙は二十四銖なり、些細の義、銖錙の姦は些細なる姦惡をいふ、漢の趙廣漢(字ハ子都)京兆尹に遷る、善く鈎距をなして——も皆之を知る、

【輸掠】 物を奪ひ取りて、送り來るをいふ、左傳昭二十年に「斬刈民力、—其聚」また杜牧の阿房宮賦に「取掠其人倚疊如山、一旦有不能輸來其閒」とあるも——の意なり、

【酒帘】 帘は酒家の「カンバン」の代りにたつる旗、おもに青色を用ふ、故に青帘ともいふ、鄭谷の句に「青帘認酒家」と、李中の句に「閃閃ー—招醉客」と、三才圖會に「——ハ卽チ酒旗ナリ」

【戍樓】 城上の「ヤグラ」敵を望むために設く、譙樓に同じ、儲光羲の送別詩に「寒雲隱ー—」

【儒分レテ八ト爲ル】 韓非子に「孔子之後、儒分爲八」とあり、子張氏・子思氏・顏氏・孟子・漆雕氏・仲良氏・孫氏樂正氏これなり、

【書】 文の一體なり、字書に「書ハ舒ナリ、ソノ言ヲ舒布シテ簡牘ニ陳ブルナリ」とあり、書の用は至つて廣し、下より上に對しては奏といひ、啓といひ、狀といひ、疏といひ、牋といひ、劄と云ふ、皆書の別稱なり、簡牘も書の一體にして、或は手簡とも、小簡とも、尺牘ともいふ、簡畧の義を含めり、秦漢以來、皆親知往來問答の閒に用ふ、かくて牋は專ら之を皇后太子諸王に用ふ、書に辭命議論の二體あるも、共に散文なり、凡て書の體はもと言を盡すにあれば、條暢優柔に、其情意を通するを以て主とすべし、

【序】 文の一體なり、文體明辨に「爾雅ヲ按ズルニ云フ、序ハ緒ナリ、字モ亦敍ニ作ル、言フココロハ、其ノ善ク事理ヲ敍シテ、次第序アルコト、絲ノ緒ノ若キナリ」と、また堂の東西に在る、牆をいふ、爾雅に「東西牆、謂之ー—」と、また學校の名、禮記の學記に「家有塾、黨有庠、術有ー—」

【助】 殷と周との世に於いて、井田の制によりて取り立てたる租稅法をいふ、殷にては公田七十畝の中にて十四畝を廬舍とし、その周圍の田を受け耕す八家のもの餘の五十六畝を平分して七畝づつに分ち耕

し、その收穫をもて租稅とす、周にては、公田百畝のうち二十畝を廬舍とし、その周圍の田を受け耕す八家の者、餘の八十畝を十畝づつに分ち耕し、その收穫をもて租稅とす、つまり十一分の一を租稅として取り立つる法なり、孟子に「殷人七十而助」とあり、詳しくは孟子を見よ、

【書案】「ツクエ」歐陽修の讀書の詩に「初如兩軍交乘勝方酣戰、至哉天下樂、終日在——」書儿に同じ、

【書帷】書齋の「トバリ」錢起の詩に「遠岫入——」また白居易の詩に「夜雪有佳趣、幽人出——」

【書幃】前に同じ、幃はひとへの「タレギヌ」周邦彥の句に「螢度破窓、偸入——」

【書淫】讀書に耽るをいふ、事文類聚に「劉孝標見ル所ロノ博カラザルヲ苦ミテ、異書アリト聞カバ、必ズ往イテ祈メ借ル、清河ノ崔慰祖、之ヲ——ト謂フ」また晉書皇甫謐傳に「謐典籍ニ耽玩シ、寢ト食トヲ忘ル、時人之ヲ——ト謂フ」淫は度に過ぐるなり、

【頌】詩の一體なり、文體明辨に「按ズルニ詩ニ六義アリ、其ノ六ヲ頌トイフ、頌ハ容ナリ、盛德ノ形容ヲ美メテ、其ノ成功ヲ以テ、神明ニ告グル者ナリ（中略）ソノ詞、或ハ散文ヲ用ヒ、或ハ韻語ヲ用フ、劉勰イフ、頌ノ體タル、典雅ニシテ辭ハ必ズ清鑠、敷寫、賦ニ似テ華侈ノ區ニ入ラズ、敬愼、銘ノ如クニシテ規戒ノ域ニ異リト」

【時雍】民をして、和らぎ平かならしむる義、書經の堯典に「黎民於變、時雍」雍は和なり、漢書功臣表に「昔唐以萬國、致——之政」

【鍾愛】至りてめでかはゆがる、南史に「特所——」

【鍾繇】皓の曾孫、字は元常、書を善くし謀を好む、魏の文帝に仕へ、武亭侯に封ぜらる、女孫琰善く文を屬し、羣籍を博覽す、王惲に適く、禮儀法度中外の稱するところとなる、

【踵ヲ接ユ】（接）踵は足後なり「カカト」をいふ「カカト」を交へ接するは、絕えざるをいふ、戰國策に「韓魏父子兄弟、——而死於秦者百世矣」

【升ヲ以テ石ヲ量ル】（以升量石）升は少量、石は多量なれば、量る能はず、よりて不肖者が、賢者を測ること能はざるに喩ふ、淮南子に「使桀度堯、是猶——也」

【鍾皓】字は季明、潁川の人、少くして篤行を以て稱せらる、徵辟せらるるも皆就かず、李膺歎じて曰く「鍾君ノ至德師トスベシ」と、陳寔・荀淑・韓韶と、潁川の四

長となす、後漢の桓帝の朝に、林慮の長となる、諸儒頌して曰く「林慮懿德非禮不處、悅此書詩弦琴樂、古五就州招、九膺台輔、逡巡主命、卒歲容與」

【鍾馗】唐の武德中擧に應じて第せず、階に觸れて死す、後ち明皇晝寢して夢みらく、一小鬼玉笛を盜む上叱す、忽ち大鬼あり、破帽藍袍角帶して小鬼を捉へ、その目を刳き、擘きて之を啖ふ、上問ふ、對へて曰く臣は終南の進士なり擧に應じて第せず、階に觸れて死せり、旨を奉じて袍帶を賜ひて之を葬らる、誓つて天下の虛耗の妖孽を除かんと、吳道子に命じて之を圖せしむること、夢中見るところの如くせしむ、これよりその像を畫きて妖魔を驅るの符とす、巨眼多髯、黑き衣冠をつけ拔劍して小鬼を捽するの像是れなり、

【繩糾】繩は直なり「スミナハ」にて正すなり、糾は正なり、過を矯正するをいふ、書の問命に「匡其不及、繩愆糾謬」一解に、糾は擧なり、其の「アヤマチ」を發擧するをいふと、

【惷愚】惷は物慾に蔽はれてくらき義、禮記に「寡人——冥頑」惷は生來に物事の差別等を知るの才能なき義のときは音「タウ」周禮に「三赦曰惷愚」

【鍾巒】字は仲偉、雅の七世の孫、學を好み詩を善くす、南齊に仕へ、官西中郎に至る、詩品三卷を作りて古今の詩人を品藻す、その論多くは公平なり、

【松化石】四川通志に「重慶府永川縣ノ來蘇鎭ニ相近キ處ニ——アリ、石質ニシテ松理ナリ或ハ一二三尺許、大サ合抱ナルベシ俗ニ雷燒石ト呼ブ」

【冗官】無用の官なり、冗は雜なり、剩なり、蘇軾曰く「政ヲ爲スニハ三冗ヲ去ルニアリ、曰ク——冗兵冗費」

【勝國】左傳に「勝國者、絕其社稷、有其土地也」とあり、亾國の義に用ふ、例へは清朝人の文に——とあれば、明朝を斥していふが如し、

【證左】左驗に同じ、當時左右に在りて、其の事を見て以て證する者、史記五宗世家に「請逮勃所與奸諸——」勃は常山王劉勃、

【乘槎】槎は査に同じ「イカダ——は「イカダ」に乘る、北史に「——下釣磯」

【縱囚】舊唐書太宗紀に「貞觀六年十二月辛未、親錄囚徒、歸死罪者三百九十人于家、令明年秋末就刑、其後應期畢至、詔原之」とあり、新唐書も同じ、白居易の詩に「死囚四百來歸獄」とある是れなり、後漢書の獨行

傳に、戴封が中山の相に遷りし時、四百餘人の犯罪を哀み、期日を約して家に遣り歸らしめたるに、皆違ふものなかりければ、天子詔書もて褒美せられし事あり、又虞延傳、鍾離意傳にも見ゆ、太宗のこの擧、蓋し之に倣へるならむか、歐陽修に——論あり、參看せよ、

【鍾子期】 周の楚の人、伯牙善く琴を鼓し、子期善く之を聽く、伯牙の意高山に在れば、曰く、巍巍乎として泰山の若しと、志流水に在れば曰く、蕩蕩乎として流水の若しと、子期死して伯牙絃を絶ちてまた鼓せず、曰く世に音を知る者なしと、

【松實ヲ服ス】 神仙傳に「偓佺好ンデ松實ヲ食フ、能ク飛行スルコト走馬ノ如シ、ソノ服スル者ハ、皆三百歳ニ至ル」

【丞相】 宰相に同じ、丞は承なり、相は助なり、君主の意を承け助くる義、史記秦紀武王二年の條に「初置——」

【勝商】 富商をいふ、管子に「游子——之所道」

【勝情】 景勝の地を好むの心をいふ、世說に「非徒有——、有濟勝之具」

【勝者ノ用フル所ロハ敗者ノ棋】 (勝ッ者ノ)を見よ

【稱首】 首として稱する義にて、その「ナカマ」にて、特に傑出せるもの、司馬相如の封禪文に「前聖之所以永保鴻名而常爲——者用此」また荀悅の文に「扼腕而游談者、以四豪爲——」この四豪とは孟嘗平原信陵春申の四君なり、晉書樂康傳に「天下言風流者、以王樂爲——」と王は王獻之なり、

【松樹千年終ニコレ朽チ、槿花一日自ラ榮ヲ爲ス】 (松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮)駿臺雜話「朝がほの花一時」の條に引けり、白氏文集卷の十五、放言五首の第五に「泰山不要欺毫末、顏子無心羨老彭、——————、————、————、何須戀世常憂死、亦莫嫌身漫厭生、生去死來都是幻、幻人哀樂繫何情」とあり、和漢朗詠集の槿の題下にも引けり、莊周の死生を一にし釋氏の世を夢幻視すると同意、

【繩繩】 戒慎なり、詩の周南に「宜爾子孫——兮」朱註には「——ハ絕エザル貌」と、また際涯なき貌と解する——は、音ビン

【繩樞】 「ナハ」の「トボソ」貧家のさま、過秦論に「陳涉甕牖——之子」とあり(桑樞ノ蓬戶)を參看せよ、

【稱制】 (制ヲ)を見よ、

【蹤跡】 「アトヲツケル」春渚紀聞に「往青州——之、果有州民麻氏」

【仍孫】 昆孫の子、仍は重なる義(昆孫)を見よ、

【勝地】 形勝の地をいふ、頭陀寺碑文に「楚都之——也」

【承塵】 居處の上に施して塵土を承くる者、長押の類なるべし、三輔決錄に「鳩アリ——ノ上ヨリ飛ンデ几前ニ下ル」と、後漢の雷義傳に「義嘗テ、人ノ死罪ヲ濟フ、罪者金一觔ヲ以テ之ヲ謝ス、義受ケズ、金主、義ノ不在ヲ伺ヒ、默シテ金ヲ——ノ上ニ投ズ、後チ屋宇ヲ葺理シ金ヲ得タルニ、金主已ニ死セシカバ、乃チ以テ縣曹ニ付ス」

【冗長】 冗は冗官の冗に同じく「ムダ」なり、長は長物の長に同じく、餘剩無用の義なり、文賦に「要辭達而理舉、故無取乎——」

【頌德】 人の德行をほめたる義、北史に「立碑——」

【勝敗ノ數】 數は計なり、凡そ數といふは、成敗利鈍得失輕重等を計算する義、史記黥布傳に「——之、未可知也」

【承乏】 官に任ずるといふ謙辭、空乏を承けて、しばらく之を補ふの意、左傳成二年に「敢告不敏、攝官——」と、註に「猶ホ匱ニ代ルトイフガ如シ」と、匱は乏なり、

【松柏ノ操】 松や「カヤ」の歳寒にも、しぼまざるに喩へて、人の堅き「ミサヲ」を稱していふ、南史に「與——比操」(歳寒クシテ)を見よ、

【松柏ノ下、其ノ草殖セズ】 (松柏之下、其草不殖)左傳の語、草、松柏の下に處れば必ず生長せず、物兩ながら盛なる能はざるをいふ、

【承平】 天下太平の世を受けつぐ義、漢書食貨志に「累世——」

【繩墨】 「スミナハ」規律をいふ、また正しき手本の義、禮の經解に「——之於曲直」

【勝母ノ閭ニ過ラズ】 (不過勝母之閭)勝母は里の名、其の名の不順を忌みて、里門に入らざるなり、淮南子に「曾子立孝——、墨子非樂不入朝歌之邑」また鄒陽書に「里名勝母、而曾子不入、邑號朝歌、而墨子返車」(邑勝母ト)を參看せよ、

【毳毛】 肉に附く細毛なり、鳥獸皆やはらかき細毛を生じて、自ら溫むるなり、書經の堯典に「鳥獸——」

【烝民】 烝は衆なり、衆民の義、書經の益稷に「——乃粒」粒とは粒食の義、

【松明】 「タイマツ」燕閒錄に、戴石屏の「——夜當燈」の句を引きていふ「深山ノ老松ノ心、汕アル者蠟ノ如シ燭ニ代フ、之ヲ——トイフ」

【從容】 安なり「ユッタリ」として迫らざる義、書經の

君陳篇に「——以和」また中庸に「——中」道聖人也」

【慫慂】 誘ひ勸む「ススメタツル」品字箋に「——ハ勸ナリ」揚子方言に「南楚ニテ、凡ソ己レ喜怒スルヲ欲セズシテ旁人說スル者、之ヲ——トイフ、一ニ從容・縱臾・將養・縱勇・從諛ニ作ル」

【稱量】 料り度るなり、管子に「人有ニ逆順事有ニ稱量」

【書ヲ校スルヿ、塵ヲ掃フガ如シ】 (校)書如掃(塵)事文類聚に「筆談ニイフ、宋宣獻、博學喜ンデ異書ヲ藏ス皆手自ラ仇校ス、常ニイフ、書ヲ校スル塵ヲ掃フガ如シ、一面掃ヘバ一面生ズ、毎ニ三四校猶ホ脫誤アリ」とあり、

【書ヲ曝ス】 (曝)書)四民月令に「七月七日ニ經書及ビ衣裳ヲ曝ス蠹セズ」と、また世說に「郝隆七月七日ニ人皆衣ヲ曝ス 隆庭中ニ於テ日ニ向ヒ仰臥ス、人其ノ故ヲ問フ、答ヘテ曰ク、我ハ腹中ノ書ヲ曝スナリト」

【疽ヲ吮フ】 (吮疽)疽は一種の危き「ハレモノ」史記の吳起の傳に「卒有ニ病疽者、起爲吮之」癰ヲ)を見よ、

【書ヲ以テ御スル者ハ、馬ノ情ヲ盡サズ】 (以書御者、不盡馬之情)書物上にて、學びたる馭法を以て、馬を馭すとも、馬の情を知らざる故に、意の如く馭する能はず、これ實地に就きて研究するにあらずば、功をなすこと能はざるに喩ふ、戰國策に諺に曰ク、書ヲ以テ御スル者ハ、馬ノ情ヲ盡サズ、古ヲ以テ今ヲ制スル者ハ、事ノ變ニ達セズ、故ニ法ニ循フノ功ハ、以テ世ニ高ブルニ足ラズ、古ニ法トルノ學ハ、以テ今ヲ制スルニ足ラズ」

【諸葛孔明】 孔明は亮の字、琅琊陽都の人、身の長け八尺、昭烈帝に仕へ、丞相と爲り、武鄉侯に封ぜらる、年五十四卒す。忠武と謚す、

蜀相　杜甫

丞相祠堂何處尋、錦官城外柏森森、映階碧草自春色、隔葉黃鸝空好音、三顧頻繁天下計、兩朝開濟老臣心、出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟、

【諸葛孔明出師ノ表】 蜀志に「諸葛亮蜀ニ相ト爲リシトキ、誠心ヲ開キ公道ヲ布キ、衆思ヲ集メ、忠誠ヲ盡シテ以テ政ヲ爲セリ、其ノ師ヲ出シテ魏ヲ伐ツトキ、表ヲ後主ニ上ル、中ニ言アリ、曰ク臣鞠躬シテ力ヲ盡シ、死シテ而シテ後チ已マン、成敗利鈍ニ至リテハ、臣ノ逆メ覩ル所ロニ非ズト」

【諸葛瞻】 三國の世の人、字は思遠、亮の子、少くして聰慧、累遷して尙書僕射となる、蜀人咸その才敏を喜ぶ、朝廷一善政佳事ある毎に、瞻の建倡せし所ろにあらずと雖も、百姓皆曰く、葛侯の爲す所ろなりと、後魏の鄧艾蜀を伐つや、書を遺りて瞻に降を誘ふ、瞻怒りて艾の使を斬り、遂に戰ひて之に死せり、

【諸葛亮】 前の(諸葛孔明)を見よ、

【徐幹】 字は偉長、三國の魏の人、陳琳・阮瑀・應瑒・劉禎・曹植・王粲と皆文章を好み、建安七子と號す、中論を著す、

【徐乾學】 字は原一、健庵と號す、崑山の人、八歲文を能くす、康熙庚戌第三人に及第す、官刑部尙書に至る、勅して一統志・會典・明史・古文淵鑑等の書を修せしむるに、皆その總裁を命ぜらる、好みて人物を奬進し、海內の名士、その門に集る、讀禮通考・澹園集・傳是樓書目等の著あり、乾一音ケン を正とす、

【書櫃】 「ホンバコ」王安石の勸學文に「有即起書樓、無即致——」

【徐熙】 宋の畫人、圖繪寶鑑に「——金陵人、世爲江南望族、畫花木禽魚蟬蝶蔬果、妙奪造化」

【杵臼】 身の貴賤に拘らずして交るを——の交といふ、後漢の公沙穆來りて大學に遊ぶ、資糧なし、乃ち服を變じて客傭す、吳祐の爲めに賃舂を爲す、吳祐ニ傭ハレ、賃錢ヲ受ケテ學資ヲ給スルナリ)與に語り、大に驚き遂に共に交を杵舂の閒に定む、

【書笈】 「ホンバコ」類書纂要に「——ハ書箱ナリ」

【書經】 初學記に「書者按釋名、言書其時事也、上世帝王之遺書、有三墳五典・訓誥・誓命、孔子刪而序之、斷自唐虞、以下迄于周、凡百篇、以其上古之書、故曰尙書、遭秦滅學、竝亾、漢興、濟南人伏勝、能口誦二十九篇、至漢文帝時、欲立尙書學、以勝年且九十餘、老不能行、乃詔晁錯、就其家傳受之、其後魯恭王壞孔子故宅、於壁中得古文尙書・論語・悉以書還孔子、武帝乃詔孔安國定其書、作傳義、爲五十八篇」とあり、

【諸行無常】 傳燈錄に「爾時世尊拘尸那城ニ至リテ、諸ノ大衆ニ告グ、吾レ今背痛ム、涅槃ニ入ラント欲スト即チ熙連河ノ側ノ娑羅雙樹ノ下ニ往イテ、右脅ニシテ足ヲ累ネテ、泊然トシテ寂寂ス、復タ棺ヨリ起ツテ母ノ爲メニ說法シ、幷ニ無常ノ偈ヲ說イテ曰ク、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」

【食味ヲ二セズ】 食物は一品にて、二味を重ね用ひざるは、儉なり、左傳に「昔閻廬食不二味、居不重席」また史記の管晏傳に「食不重肉、妾不衣帛」とあるも同じ、

【蓐醫】 產科醫なり、夢溪筆談に「有一——、適在其家」また乳醫ともいふ、書敍指南に見ゆ、

【屬厭】 屬は足なり、厭は鬢に同じ、鬢き足るをいふ、左傳昭二十八年に「願以小人之腹爲君子之心、——而已」

【燭ヲ秉リテ夜遊ブ】 (秉燭而夜遊)李太白の春夜宴桃李園序の語、文選の古詩に「晝短苦夜長、何不秉燭遊」とあるに本づく、

【食客】 寄宿せる浪人「キヤクフラフ」史記孟嘗君傳に「——嘗數千人」

【食牛ノ氣】 幼にしてすぐれたる志氣あるをいふ(牛ヲ食フ)を見よ、

【屬續】 (續ヲ屬ク)を見よ、

【食頃】 須臾なり、食事する閒にて、短き時をいふ、史記封禪書に「——復入焉」法華經に「六十小劫、喩如一——」

【蓐月】 「ウミヅキ」難月・臨月に同じ、儒門事親に見ゆ、

【食言】 言を出して、其の言を守らざるをいふ、書經の湯誓に「朕不食言」とあり、漢書の匈奴傳に「朕聞古之帝王、約分明而不食言」の註に「言ヲ食ハバ、終ニ不信ヲ爲ス、其ノ前言ヲ棄ツルコト、食ミテ盡スガ如シ」左傳僖十五年に「我食吾言背天地也」

【燭犬日ニ吠ユ】 (燭犬吠日)燭の犬は、日を見ること少し、故に日を見るときは吠ゆ、以て見識狹き者、他人の卓絶の言行に對して、疑ひて囂囂たるに喩ふ、韓文に「燭中山高霧重、見日時少、每至日出、則群犬疑而吠之也」

【蜀江】 白氏六帖に「蜀成都有濯錦之江」云云、また山謙の丹陽記に「歷代尙未有錦、而成都獨稱妙、故三國時、魏則市於蜀、吳亦資西蜀、至是始乃有之」と、十訓抄第七に「——とて錦洗ふと詩歌に作る所あり」とあるは是れなり、

【蜀魂】 「ホトトギス」の異名(蜀魄)を見よ、

【食指】 「クスリユビ」齊書に「方搖——、半日乃息」

【職事】 藏人の唐名、

【蓐收】 秋の神なり、禮記に「孟秋之月、其帝少昊、其神——」左傳の註に「秋物摧蓐而可收也」

【食指動ク】 「ゴチソウ」になる前兆なり、左傳の宣四年に「楚人黿ヲ鄭ノ靈公ニ獻ズ、公子宋、子家ト將ニ見エントス、公子ノ食指動ク、以テ子家ニ示シテ曰ク、他日我此ノ如クナレバ、必ズ異味ヲ嘗ムト、入ルニ及ンデ宰夫將ニ黿ヲ解カントス、相視テ笑フ、公之ヲ問フ、子家以テ告グ、大夫ニ黿ヲ食ハシムルニ及ンデ、子公ヲ召シテ、與ヘズ、子公怒ル、指ヲ鼎ニ染メ、之ヲ嘗メテ出ヅ」註に「手ノ五指ヲ巨指・食指・將指・無名指・小指トイフ、食指ハ、第二指ナリ、黿ハ大鼈ナリ、與ヘザリシハ、指ノ動クヿヲシテ、効無カラシメント欲シテナリ」

【屬者】 近時の義、漢書李尋傳に「——頗有變」また從ふ者をいふ、史記の項羽本紀に「——者百餘人耳」

【蜀相】 諸葛亮をいふ(諸葛孔明)を見よ、

【濠署】 しめりけ多くしてあつし、「ムシアツシ」蒸暑に同じ、柳宗元の句に「南州——醉如酒」

【唧唧】 蟲などの多くあつまりて、かなしみなく貌、歐陽修の秋聲賦に「四壁蟲聲、——如助余之歎息」

【蓐食】 朝早く寢蓐(ネドコ)の中にて食事するをいふ、蓐は褥に同じ、左傳に「訓卒利兵、秣馬——、潛師、夜起」

【燭照】 燭龍の照すが如く、分明に視ゆるなり、楚辭に「日安不到、燭龍何照」の王註に「天之西北幽冥無日之國、有龍銜燭而照」

【色然】 公羊傳哀六年に「——而駭」註に「驚貌」とあり、

【食前方丈】 饌食が前に列なる者、方一丈なり、甚しき「ゼイタク」をいふ、孟子盡心下篇に「——、侍妾數百人、我得志弗爲也」また漢書嚴助傳に「重五味、方丈於前」韓詩外傳に「北郭先生妻曰、結駟列騎、所安不過容膝、——所甘不過一肉之味」

【蜀道難】 (李白)を見よ、

【色聽】 罪人の顏色を觀てその曲直を判するをいふ、(色ヲ以テ)を見よ、

【職田】 職分に應じて官より給する田地、一に職分田といふ、文獻通考に「隋開皇中、始給——又給公廨田」

【軾ニ伏ス】 (伏軾)軾は車前の橫木、人の憑るところ、釋名に「軾ハ式ナリ、伏シテ式敬スル所ロナリ」史記淮陰侯傳「酈生者一士也、伏軾掉三寸舌、下齊七十餘城」

【職方】 天下の地圖を司り、その土地に關する事務を執る役、周禮に「——氏掌天下之圖、以掌天下之地」

【蜀魄】 「ホトトギス」の異名、蜀の望帝の魂魄化してこの鳥となるとの傳說に本づく、華陽志に「帝禪位開明、升西山隱焉、時適二月、子規鳥鳴、故蜀人悲鳥鳴也」

【觸蠻】 (蠻觸ノ)を見よ、

【植物】 草木の屬をいふ、周禮地官に「原隰其植物宜」叢物ニまた西京賦に「——斯生動物斯止」

【齋夫ノ利口ハ張釋之コレヲ黜ク】 駿臺雜話「天下の寶」に見ゆ、史記張釋之傳に「釋之從行登虎圈、上問上林尉諸禽獸簿、十餘問、尉左右視、盡不能對、虎圈嗇夫、從旁代尉對、上所問禽獸簿、甚悉、欲以觀其能、口對

響應無窮者、文帝曰、吏不當若是邪、尉無賴、乃詔釋之拜嗇夫爲上林令、釋之久之、前曰、中略夫絳侯東陽侯稱爲長者、此兩人言事、曾不能出口豈學此嗇夫諜諜利口捷給哉、且秦以任刀筆之吏、吏爭以亟疾苛察相高、然其敝徒文具耳、無惻隱之實、以故不聞其過、陵遲而至於二世、天下土崩、今陛下以嗇夫口辯而超遷之、臣恐天下隨風靡靡爭爲口辯而無其實、且下之化上、疾於景響、舉錯不可不審也、文帝曰、善、乃止、不拜嗇夫、とあり、嗇夫とは虎圈を掌る者なり、無賴とは才の恃むべきなさなり、

【職分田】 わが朝の位田に同じ、通典に、「——亦職田トイヒ、又職田子トイフ、一品ハ十二頃、二品ハ十頃、已下九品ニ至ルマデ各〻差アリ」と、わが朝の——は大臣四十町、左右大臣三十町以下各自差あり、官職に對して賜はるものなれば唐の——とは異なれり、

【屬目】 目を注ぎて視るをいふ、左傳に「師——之一二」

【色養】 父母の顏色を見て、その氣に入るやうに孝養するをいふ、晉書潘岳傳に「膝下——」

【燭龍】 山海經に「鍾山ノ神ヲ名ヅケテ燭陰トイフ、視ヲ晝ト爲シ、瞑ヲ夜トナス、吹ヲ冬トナシ、呼ヲ夏トナス、身ノ長千里、人面蛇身赤色ナリ、マター——ト名ヅク、天ハ西北ニ足ラズ、陰陽消息ナシ、故ニ龍アリ火精ヲ啣ミ以テ天門ヲ照ス」

【徐廣】 字は野民、晉の東莞の人、世〻學を好む、廣に至りて尤も精しく百家の書研覽せざるなし、嘗て車服儀注及び晉紀四十一卷答禮問百餘條を撰す、晉に仕へて驍騎將軍に至りぬ、

【書畫船】 錦字箋に「米元章出遊スル毎ニ、船ヲ以テ書畫ヲ載セ、自ラ隨フ、人皆之ヲ識リテ曰ク、此レ米家ノ——ナリト」

【書契】 木を刻み、其の側に書し、事を約する者、易の繫辭に「上古結繩而治、後世聖人易之以——」

【舒元輿】 唐の東陽の人、元和中進士に第し、監察御史に擢てらる、按劾して縱す所ろなし、中丞に累遷し、奏辯明審なり、未だ幾くならず同中書門下平章事に拜す、嘗て牡丹賦を作る、時にその工を稱す、

【諸侯ノ選】 材能衆に過ぐること、列國より撰拔せしが如き者をいふ、左傳に「皆——之一也」

【如今】 當今といふに同じ、杜甫の句に「飄泊至——」

【書佐】 「カキヤク」「イウヒツ」通鑑の宋紀に「——荀宗道」

【書齋】 書を讀むために設けたる「へや」なり、歐陽公の東齋記に「或曰、齋謂夫乎、心以養思慮、若於此而齋戒也、故曰齋事物紀原に「漢ノ宣帝、齋居シテ事ヲ決ス、此レ齋ノ名ノ起ナリ、晉ノ太和中ニ、陳郡ノ殷府君、水ヲ引イテ城ニ入レ池ヲ穿ツ、殷仲堪此ノ池ノ北ニ於テ、小舍ヲ立テテ書ヲ讀ム、百姓呼ンデ讀書齋ト爲ス、則チ齋ノ始ハ、疑フラクハ此レヨリス」

【初三】 月のはじめの三日をいふ、白樂天の句に「可憐九月——夜」

【書肆】 書を賣る店なり、揚子法言に「好書、不要諸仲尼、書肆也」とあり、書を賣る市肆にて義を釋くこと能はざるをいふ、

【處子】 處女に同じ、孟子に「踰東家牆而摟其——、則得妻、不摟則不得妻、則將摟之乎」とあり、摟は牽なり、莊子に「肌膚如冰雪、綽約如——」また男女にかかはらず、年未だ長ぜざる者の稱とす「ムスコ」「ムスメ」

【處士】 仕へずして家に居る士をいふ、孟子の滕文公下篇に「諸侯放恣、——橫議」とあり、また史記の滑稽列傳に「今世之——、時雖不用、幗然獨立、塊然獨處」

【庶子】 庶子ノ春華ヲ採リテ、家丞ノ秋實ヲ忘ル【忘れづれ草】（採庶子之春華、忘家丞之秋實）駿臺雜話「つれづれ草」の條に引けり、浮華なる文詞を好みて實益あることを棄つるをいふ通鑑六十七に「魏公操、孫權ヲ擊ツ、少子臨菑侯植ヲ留メテ鄴ヲ守ラシム、操諸子ノ爲メニ官屬ヲ高選シ邢顒ヲ以テ、植ノ家丞ト爲ス、顒防閑スルニ禮ヲ以テシ、屈撓スル所ロナシ、是ニ由ツテ合ハズ、庶子劉楨ハ文辭ニ美ナリ、植之ヲ親愛ス、楨書ヲ以テ植ヲ諫メテ曰ク、君侯、庶子ノ春華ヲ採リテ、家丞ノ秋實ヲ忘ル、上ノ爲メニ、謗ヲ招ク、其ノ罪小ナラズ、愚實ニコレヲ懼ルト」胡註に「漢ノ制、列侯ハ家丞庶子各〻一人ヲ置ク、侯ニ侍シ家事ヲ理ムルヲヲ主ル」

【書紳】 （紳ニ書ス）を見よ、

【書社】 古の制、二十五家を里とす、里に各社を立て、戶口と田數とを書して之を藏む、故に二十五家の地を書社といふ、史記の孔子世家に「楚昭王將以書社地封孔子」

【處守】 居守に同じ、左傳に「高鮑、——」

【沮洳】 漸濕なり「ヌカルミ」の地をいふ、詩の魏風に「彼汾——」注に「水ノ浸ス處、下濕ノ地ナリ」

【徐庶】 三國の時、長社の人、嘗て諸葛亮を昭烈に薦む、曹操その母を獲るに及びて庶、昭烈に謂つて曰く、本將軍と事を圖らんと欲せしも、今は母を失ひ方寸亂れぬ、請ふ此より辭せんと、遂に操に歸せり、

【所生】 父母なり 詩の小雅に「夙興夜寐、毋忝爾——」解に父祖をいふと、

【諸生】 書生をいふ、通俗篇に「諸生猶諸侯、雖一人亦得云諸」史記曹相國世家に「盡召長老——」

【庶績咸熙】 庶績は衆功なり、咸は皆、熙は廣なり、衆功皆廣まるをいふ、書經の堯典に「允釐百工、——百工は百官、

【汝是畜生發菩提心】 太平記卷九に見ゆ、鈔に「是ハ梵網經云、若見牛馬猪羊一切畜生、應心念口言——、コレハ菩薩ノ行ヲオコシ、戒法ヲ行スル者ハ畜類ヲ見テモ、菩提ノ心ヲススメテ發セシムル義ナリ、今聖モ少シコノ意ヲ知リテイヒツジンナレモ正シク資名卿ニ對シテ汝ハコレ畜生ナリトイヒタルハ、無下ニ可笑シキ事ナリト」

【書癡】 讀書に耽りて、他に心を寄せざると癡の如きをいふ、唐書の竇威傳に「竇氏子弟皆喜武、獨威尚文、諸兄詆爲——」と、黄庚の詩に「耽書近欲癡」

【徐穉】 字は孺子、後漢の南昌の人、家貧しく常に自ら耕稼し、その力にあらざれば食はず、恭儉義讓居るところ人その德に服す、太守陳蕃特に榻を設けて以て之を禮す、累擧せらるるも皆就かず、室を築きて隱居す、時に南州高士と稱す、靈帝蒲輪を以て聘せんと欲せしも至らず、

【助長】 速に成らんことを欲して却つて事を害するをいふ、孟子公孫丑上に「心勿忘、勿——也」とあり、宋の愚人が苗の長ずるを助けんとて一一苗を揠きて伸したるに、その苗忽ちに枯れたりといふ例を引きて說けり、

【處女】 未だ嫁せざる女をいふ、處は居なり、家に居る義、處子ともいふ、孫子の九地篇に「始如處女、敵人開戶、後如脫兎、敵不及拒」とあり、品字箋に「女ノ未ダ嫁セザルヲ——トイヒ、士ノ未ダ仕ヘザルヲ處士トイフ」

【庶徵】 書經洪範の八を——といふ「モロモロノシルシ」なり、曰く雨、曰く暘、曰く燠、曰く寒、曰く風、曰く時と、雨暘燠寒風各〻時を以て至る故に時といふ、

【所天】 戴き敬ふ人をいふ、臣は君を——とす、宋史刁衍傳に「堯舜、篤善道、垂化、而民謂之——」子は父母を——とす、吳質の書に「——優游典籍之場」とあるは父を斥す、妻よりは夫を——とす、李白の去婦詞に「十五許嫁君、二十移——」類書纂要にも「婦ハ夫ヲ以テ天ト爲シ、子ハ父ヲ以テ天ト爲シ、臣ハ君ヲ以テ天

トナス、故ニ妻ハ夫ヲ稱シテ——ト爲ス」

【初度ノ辰】 書言故事に「自稱生日、曰初度之辰、離騷皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名」と見ゆ、皇とは、皇考なり、古人自ら死せし父を皇考といふ、覽は觀なり、揆は度なり、屈原言ふ亡父我が初度の時節を觀て、善き名を賜ひ正則といひ、字を靈均といふとの義、度は時節の節の如し、

【書ハ心ノ畫ナリ】 揚子法言に「言心聲也、書心畫也、聲畫形、君子小人見矣」

【書判】 書は楷法のすぐれたるをいひ、判は文理の優りたるをいふ、韓文の河南少尹李公墓誌銘に「——出其倫」とあり（身言——）を見よ、

【書ハ名姓ヲ記スルニ足ル】 （書足ル記名姓）學は深く修むるに足らずとの意、史記項羽紀に「籍曰、書足以記名姓而已、劍一人敵不足學、學萬人敵」漢書には名姓を姓名に作る、

【胥靡】 刑徒をいふ、胥は相なり、靡は繫なり、鐵鎖にて相繫がるるをいふ、史記殷紀に「說爲——、築傅險」說は傅說なり、莊子庚桑楚に「——登高而不懼」漢書楚元王傳の註に「靡ハ隨ナリ、古者相隨ツテ坐スル輕刑ノ名ナリ」

【諸父】 叔父伯父をすべて——といふ、詩經の伐木に「既有肥羜、以速——」羜は羊の子なり、速は召請なり、

【如夫人】 人の寵妾をいふ、左傳の僖十七年に「齊侯好內、多內寵、內嬖如夫人者六人」とあり、齊侯は桓公なり、內を好むとは、女色を好むなり、夫人の如き者とは、妾媵の寵を得て、夫人の如く遇せらるる者をいふ、

【徐勉】 字は修仁、東海郯の人、幼にして孤、貧にして清節を勵ます、徐孝嗣之を見て曰く、これ人中の騏驥、必ず能く千里を致さんと、南北朝の時、梁に仕へて吏部尙書となる、嘗て客と夜坐す、時に官を求むる者あり、勉色を正して曰く「今日止可談風月、不宜及公事」と累官して左僕射中書令に至る、

【書圃】 書物の多きを稱す、司馬長卿の、上林賦に「修容乎禮園、翺翔乎書圃」園といひ圃といふは、その物の多きをいふ、

【胥命】 諸侯相會合し、たゞ約言を申ねて、相命ずるのみにして、血を歃りて盟ふことをせざるをいふ、春秋桓三年に「夏齊侯衛侯——于蒲」公羊傳に「相命也、何言乎相命、近正也、古者不盟、結言而退」とあり、また荀子に「春秋善——、而詩非屢盟」と、屢盟とは、詩の小雅に「君子屢盟、亂是用長」とあるを斥す、

【初夜】 戌の時なり、初更或は甲夜ともいふ、今の午後八時、遺教經に「初夜後夜亦勿レ有レ廢」

【助理】 理は治なり、天子を助けて天下を治むるをいふ、漢書百官志に「——萬機」

【黍離ノ嘆】 故都を過ぎて、その廢墟となれるを嘆息するをいふ(彼ノ黍離離)を見よ、

【黍纍】 極めて少量をいふ十黍を纍となす、漢書律曆志に「權輕重者不レ失——」

【黍粢ヲ失ハズ】 (不)失黍粢黍も粢も「ハカリ」の稱にて、極めて少量なり、十黍を粢とし、十粢を銖とす、少しの「チガヒ」もなき幾なり、漢書律歷志に「度長短者不レ失毫釐、量多少者不レ失圭撮、權輕重者——」

【書篋】 書を藏むる篋なり、また下の故事に由りて、徒らに書を讀みて、其の義に通ぜざる者に喩ふ、晉書劉柳傳に「劉柳爲僕射時右丞傅迪廣讀書而不解其義、柳讀老子而已、迪每輕柳、柳曰、卿讀書而無所解、可謂——矣、また圓機活法に「李邕諳貫古今、然不能屬文、故時號曰——」

【子來】 子の父の事に趨く、召さずして自ら來る如きをいふ、詩經大雅靈臺篇に「經始勿亟、庶民——」とあるに本づく、

【蝨ヲ貫クノ技】 (貫蝨技)弓の巧手をいふ、列子湯問に「甘蠅古之善射者、彎弓而獸伏鳥下(中略)以燕角之弧、朔蓬之箭射之貫蝨之心」とあり、蝨は「シラミ」

【蝨ヲ捫ル】 (捫蝨)を見よ、

【虱褌中ニ處ル】 (虱處褌中)虱は蝨に同じ「シラミ」なり、褌は、釋名に「褌ハ貫ナリ、兩脚ニ貫キテ、上、腰中ニ繫グナリ」とあり、「サルマタ」の類即ち犢鼻褌なり、晉書阮籍傳に「羣虱之處褌中、逃乎深縫匿乎壞絮、自以爲吉兆也」とあり、以て苟安の徒に比す、

【虱ノ生ズル所ロヲ爭フ】 劉氏鴻書に「長公外紀ニイフ、東坡閑居ノ日ニ、秦少遊ト夜酒宴ス、東坡虱ヲ捫リ得テ曰ク、コレコノ蝨ハ垢ノ生ズル所ロナリト、少遊イフ、然ラズ綿絮ヨリ成リタルモノナリト、互ニ相辯ズルコト久シクシテ決セズ、明日佛印和尙ニ問ヒテ疑ヲ質シ、負ケタル者ハ一席ヲ設ケテ勝チタル者ヲ饗スベシト約シテ歸ル、少游佛印ノ門ヲ叩キテイフ、今日東坡ト虱ノ生ズル始ヲ辯ゼシニ、東坡ハ垢ヨリ生ズトイヒ、愚ハ綿絮ヨリ生ズト、爭ヒテ決セズ、明日師ニ問ヒテ決セント約ス、幸ニ綿絮ヨリ生ズト答ヘヨ、後日當ニ饋飩ノ會ヲ設クベシト、スデニ去ル、

シバラクアリテ東坡至リ、マタ前事ヲイヒ、願クハ虱ハモト垢ヨリ生ズト答ヘヨ、勝ツトキハ冷淘ヲ作ラント、明日三人相會シテコノ事ニ及ブ、佛印曰ク、コレ曉リ易キ事ナリ、虱ハ垢ヲ身トシ、絮ヲ脚トス、先ヅ冷淘ヲタベテ後チニ饋飩ヲタベント皆手ヲウツテ大ニ笑ヒ、宴ヲ設ケテ相樂ム」と、冷淘は水花ともいふ、切麥の類なり、饋飩は不托ともいふ「ウンドン」なり、

【虱ハ頭ニ處リテ黑シ】 (虱處頭而黑)人は交る所ろによりて化せらるるに喩ふ、朱に交れば赤くなると同じ、文選に「——、麝食柏而香」柏は「カヤ」

【芝蘭】 書言故事に「朋友ノ作成ヲ謝シテ、仰拜芝蘭之化」トイフ」家語の六本篇に「與善人居、如入芝蘭之室、久而不聞其香、即與之化矣、與不善人居、如入鮑魚之肆、久而不聞其臭、亦與之化矣、是以君子謹其所與處」

【芝蘭玉樹庭堦ニ生ズ】 (芝蘭玉樹生庭堦)人才の多く一門より出づるに喩ふ、晉書謝安傳に「安嘗戒約子姪、因曰、子弟亦何預人事、而正欲使其佳、諸人莫有言者、玄答曰、譬如芝蘭玉樹、欲使其生於庭堦耳」玄は謝玄、

【尸利】 寵を固くして、祿を利することを主とするのみをいふ、禮記に「近而不諫、則——也」

【支離】 はなればなれに分散するをいふ、莊子の人閒世篇に「夫——其形者、猶足以養其身、終其天年、又況——其德者乎」

【梓里】 鄕里をいふ、詩經の小雅小弁に「維桑與梓、必恭敬止」桑梓は父母の植ゑしところ故に恭敬す、これより鄕里の義とす(桑梓)を參看せよ、

【緇流】 僧侶をいふ、緇は黑色なり、僧は黑衣を被る故にいふ、釋氏要覽に「此レ衣ノ色ニ從ヒテ之ヲ名ツクルナリ」とあり、緇徒に同じ、

【而立】 三十歲なり、論語爲政篇に「三十而立」とあり、孔子の語、立とは志に從つて進み わが求むる所ろを得て、堅く之を守り、如何なる事物も、これを動すこと能はざるをいふ、

【絲綸】 天子の詔命をいふ、禮記緇衣篇に「王言如絲、其出如綸、王言如綸、其出如綍」とあるに本づく(綸言)を見よ、

【四輪ノ國】 輪は猶ほ通の如し、國人四方に適くに、通ぜざる所ろなきをいふ、戰國策に「趙僅存哉、然而——之一也」

【師旅】 詩の小雅の「我師我旅」の箋に「五百人ヲ旅トナ

ス」とあり、師は五旅即ち二千五百人をいふ、周禮にも「五旅爲師」とあり、また必ずしも人員にかかはらずして、軍隊の義にも用ふ、論語に「加之以——」

【紫稜】 紫石稜なり、晉書に、劉惔が桓溫を評して「眼如紫石、鬚作蝟毛磔」といへり、また宋濂の秦士錄にも「雙目有——」とあり、稜一音ロウ

【汁ヲ啜ラント欲ス】 利を得んことを希ふに喩ふ、史記の魏世家に「彼勸太子戰攻欲啜汁者衆」

【四靈】 麟、鳳、龜、龍の四をいふ、禮記の禮運に「何謂——麟鳳龜龍、謂之——」とあり、靈とは神靈の義、此の四獸皆神靈ありて、他物に異なるを以て故にいふ、

【砥礪】 皆「トイシ」なり、砥は礪よりも細かなり、轉じて研ぎ磨く義に用ふ、禮記の儒行に「——廉隅」

【辭令】 猶ほ詞章の如し「コトバツカヒ」史記屈原傳に「博聞彊志、明於治亂、嫺於——」また禮記に「禮義之始、在于正容體、齊顏色、順——」

【素キ絲ノ染マンコトヲ悲ム】 淮南子に「楊子見逵路而哭之、爲其可以南、可以北、墨子見練絲而泣之、爲其可以黃、可以黑也」とあり、高誘の註に「憫其本同而末異」とあり、

【白キ骨鋤カレテ云云】 井上文雄の古戰場を弔ふ文に見ゆ、文選の古詩に「古墓犂爲田、松柏摧爲薪、白楊多悲風、蕭蕭愁殺人」また白氏文集に「古墓何代人、不知姓與名、化爲路傍土、年年春草生」などある句によりてかけり、

【尸祿】 尸は主なり、職務を憂へず、ただ祿を食むことを主とするをいふ、漢書鮑宣傳に「以拱默——爲智」

【四六排偶】 六朝駢儷體の文をいふ、四字若くは六字の對句に綴る文なり、字數は八字十字等種種あれども發端は多く四字六字に作る（文章ノ四體）を參看せよ、

【城、隍ニ復ル】 （城復于隍）沿極りて亂を生ずるの譬、易の泰卦に「——」とあり、隍は城下の池なり、隍土を掘り、之を積みて城と爲すは、治道を積みて泰を爲すが如し、故に城土の頽れて隍に復へるは、泰の終りて、又否に反るが如きなり、楚辭に「悲太山之爲隍」とあるも亦同じ、

【子路米ヲ負フ】 （子路負米）孔子家語致思篇に「仲由字ハ子路、孔子ニ見エテ曰ク、負重涉遠不擇地而休、家貧親老不擇祿而仕、昔、由ノ二親ニ事ヘシ時、常ニ藜藿ノ實ヲ食ヒ、親ノ爲メニ米ヲ百里ノ外ニ負ヒタリキ、親沒セシ後、南ノカタ楚ニ遊ブ、從車百乘積粟萬鍾茵ヲ累ネテ坐シ、鼎ヲ列ネテ食ス、藜藿ヲ食ヒ、親ノ爲メニ米ヲ負ハント願欲スレドモ、得ベカラザルナリト、子曰ク、由ヤ親ニ事フル、生事ニハ力ヲ盡シ、死事ニハ思ヲ盡ス者ト謂フベシト」

【雌黃】 黃色の繪の具なり、古は書物の誤字を正すに用ふ、故に轉じて文章を可否する義にも用ふ（口中ノ雌黃）を見よ、

格言八則

人臣盡民力以美宮室臺池、重賦斂以飾子女狗馬、此謂養殃 （韓非子）

人君之惻怛於民也、國有飢者、食不重味、民有寒者、冬不被裘 （淮南子）

人體欲得勞動、動搖則穀氣得消、血脈流通、病不得生、譬猶戶樞不蠹也 （三國志華佗傳）

仁者何以樂山、山者萬人之所瞻仰、草木生焉、萬物殖焉、飛鳥集焉、走獸伏焉、生萬物而不私、育群物而不倦、出雲導風、天地以成、國家以寧、有似夫仁人志士 （韓詩外傳）

仁者不以盛衰改節、義者不以存亡易心 （列女傳）

志意修則富貴道義重、輕王侯 （文中子）

思索生知、慢易生憂、暴傲生怨、憂鬱生疾 （管子）

樹木盛則飛鳥歸之、芻草美則禽獸歸之、人主賢則豪傑歸之 （呂氏春秋）

ス

【瑞雲】 めでたき雲、慶雲に同じ、西京雜記に「祥瑞之雲、曰慶雲、亦曰景雲、亦曰卿雲、外赤內青曰繇雲」

【推演】 推しひろむる義、敷衍に同じ、漢書外戚傳に「不知一一聖德、迺先帝之志」

【隨園三十種】 二百四十一卷、清の袁枚撰す、隨園の藏版本なる、小倉山房文集三十五卷、同詩集三十七卷附續篇二卷以下三十種の書を合せ收む、

【隨園詩話】 十六卷補遺十卷あり、清の袁枚撰す、詩に關する論說記事を筆に隨ひて記せしものにて、詩學の參考とすべし、

【醉翁】 歐陽修六一居士と號し、又別に一一と號す、その一一亭記に「太守與客來飲于此、飲少輒醉而年又最高、故自號曰一一也」

【誰何】 誰ぞと問ふこと、史記の始皇本紀に「良將勁弩、要害ノ處ヲ守リ、信臣精卒利兵ヲ陳ネテ誰何ス」の註に「何ハ猶ホ問ノ如シ」とあり、淮南子に「不知爲之者誰何」とあるは、たゞ「誰ゾ」の義なり、

【隨何】 漢に仕へ謁者たり、高祖のために、九江王黥布に說きて楚に畔き、漢に歸せしむ、

【推敲】 (推敲)を見よ、

【水行蛟龍ヲ避ケザルハ漁父ノ勇ナリ】 (水行不避蛟龍者、漁父之勇也)莊子の語、下に「陸行不避兕虎者、獵夫之勇也、白刃交于前視死若生者、烈士之勇也、知窮之有命、通之有時、臨大難而不懼者、君子之勇也」漁父獵夫の勇より烈士の勇に及び、君子の大事に至る淺より深に說き及ぶ、

【隋高祖ノ玄文ヲ崇ブ】 太平說卷十七に見ゆ、煬帝天台大師を師とし、法華玄文の講を受けしをいふ、

【水旱】 洪水と「ヒデリ」と、漢書に「堯有九年之水、湯有十年之旱」涔旱に同じ、淮南子に「時有涔旱災害之患」

【水嬉】 水に舟をうかべてたのしみ遊ぶをいふ、述異記に「日與西施爲一一」

【炊臼ノ夢】 妻を喪ふをいふ、酉陽雜俎に「江淮ノ王生、善クトス、賈客張瞻トイフアリ、將ニ歸ラントシ、臼中ニ炊グト夢ミ、王生ニ問フ、生曰ク、君歸ラバ、妻ヲ見ザラン、臼中ニ炊グハ釜ナキナリト、瞻歸レバ、妻已ニ卒ス」釜は婦と音同じ、故にいふ、

【炊金饌玉】 盛饌をいふ(金ヲ炊ギ)を見よ、

【醉吟先生】 唐の白居易、東都に居り、意を詩酒に放にし、池沼を疏し石樓を香山に創し、自ら號して一一一といふ、又香山居士ともいふ、

【醉鄉記】 王績の作るところの文、績字は無功、隋末の王通の弟なり 一一一を著し、以て劉伶の酒德頌に次ぐ、

【水鏡私ナシ】 (水鏡無私)蜀志の李嚴傳の注に「夫水ハ至平ニシテ邪ナル者法ヲ取ル 鏡ハ至明ニシテ醜ナル者、怒ルナシ、水鏡ノ能ク物ヲ窮メテ怨ナキ所以ノ者ハ其ノ私ナキヲ以テナリ」

【吹噓】 人に薦め擧げられんことを求むるを一一の力を借るといふ、杜甫の句に「願借一一送上天」一一は「イキ」を吹きかくるなり、

【垂拱】 衣をながく垂れ、手をこまぬくをいふ、無爲にして治まるを一一の治といふ、書經の武成に「信ヲ惇クシ、義ヲ明カニシ、德ヲ崇ビ功ニ報ユ 一一シテ天下治マル」又單に敬禮の義とす、禮記に「侍於君一一」拱とは左右の手の拇指を相拄へ他の互の四指を組み合すをいふ、

【水魚ノ親】 親密なること、魚の水に於けるが如きをいふ、蜀志の諸葛亮傳に「先主遂ニ亮ニ詣ル、凡ソ三タビ往イテ乃チ見ユ、因ツテ人ヲ屏ケ、與ニ事ヲ計リ之ヲ善トス、是ニ於テ情好日ニ密ナリ、關羽張飛悅バズ、先生曰ク、孤ノ孔明アルハ、猶ホ魚ノ水アルガ如シ、願クハ復タ言フコトナカレト」杜甫の詩に「稍令社稷安、自契魚水親」

【翠華】 天子の旗をいふ、上林賦に「建翠華之旗」の註に「翠旗ハ翠羽ヲ以テ旗ヲ飾ル」

【水火ヲ通ゼズ】 近鄰の組合の者と雖も、亦交際往來せざるをいふ、漢書孫寶傳に「杜門不通水火」

【炊火ナシ】 祭祀の絕えたる義、漢書燕王傳に「趙氏無炊火焉」

【隋和ノ材】 隋は隋侯の珠、和は和氏の璧、材の美なるに喩ふ、司馬遷の書に「雖材懷隋和行若由夷、終不可以爲榮」由夷は、許由伯夷をいふ、

【水經】 支那の水道を記す、記するところ、黃河楊子江以下四十餘川なり、唐書藝文志に「桑欽ノ一一三卷」とあり、北史の酈道元傳に「道元學ヲ好ミ、奇書ヲ歷覽シテ 一一注四十卷ヲ選ス」とあり、この書は武英殿聚珍版全書中に收めたるを善本とす、

【遂古】 遂は往なり、往古に同じ、楚辭天問に「一一之初

誰傳道之」邃古は上古に同じ、邃は遠なり、

【誶語】「セメノノシル」卓氏藻林に「誶ハ責讓ナリ猶ホ詬罵ノ如シ」

【垂拱】（——）を見よ、

【綏寇紀略】十二巻、補遺三巻、清の吳偉業撰す、明末崇禎の時の流賊の事より明の亡ぶるまでの事を紀せり

【隋侯ノ珠】珍らしき大珠なり、淮南子に「兕虎在於後、隋侯之珠、在於前、弗及、援者、先避患而後就刑」說苑に「隋侯之珠國之寶也、然用之彈、曾不如泥丸」とあり（隋珠）を見よ、

【隋侯傷レタル蛇ヲ見テ藥ヲ付ケテ之ヲイヤス云云】十訓抄第一に見ゆ、搜神記に「隋侯大蛇ノ傷ヲ被レルヲ見テ、藥ヲ以テ之ヲ活ス、後チ蛇還リテ報ズルニ珠ヲ以テス、其ノ大サ徑寸、純白ニシテ夜光明アリ、月ノ照スガ如シ　一名隋侯珠一名ハ明月珠」とあり、なほ（隋珠）を見よ

【推轂】人を推擧するをいふ、史記の魏其武安列傳に「魏其武安俱好儒術、推轂趙綰爲御史大夫」の註に「——ハ自ラ卑下シテ之ガ爲メニ車轂ヲ推スガ如キヲイフ」とあり、また荆燕世家に「推轂高帝、就天下」とあるは、轂を推して前進せしむるが如く。其業を助成するをいふ、

【水梭花】僧家にて、魚肉の戒を破る者、實の名をいふを恥づ、故に魚の異名に用ふ、東坡志林に「僧、酒ヲ謂ツテ般若湯トナシ、魚ヲ水梭花ト爲シ、鷄ヲ鑽籬菜トナス、人不義ヲナスアリテ、之ヲ文ルニ美名ヲ以テスルハ此レト何ゾ異ナラン」

【出師ノ表】（諸葛孔明）を見よ、

【水心鏡】異聞集に「天寶中、揚州進——、背有盤龍、言鑄鏡時、有老人、自稱、姓龍名護、以五月五日、於楊子江心鑄之、後大旱祠龍乃雨云云」

【水心集】二十九巻、宋の葉適撰す、劄狀奏議序記詩賦等を輯む、適字は正則、淳熙五年の進士、司業となる、韓侂胄に忤ひて貶せられ門を杜ぢて書を著し、卓然として一家を成す　學者之を仰ぐこと泰山の如く、水心先生と稱す、嘉定十六年卒す、年七十四、

【垂迹和光】太平記巻二に見ゆ、佛は本地、神は垂迹といふは、佛家の說、神は本地、佛は垂迹とは神道よりいふ義なり、和光とは老子に見ゆ、ここは佛の光を和らげて神とあらはれ衆生を利益する姿をいふ

【隋珠ヲ以テ雀ヲ彈ズ】（以隋珠彈雀）少を得て、多を失ふに喩ふ、莊子の讓王篇に「以隋侯之珠彈千仞之雀、世必笑之、是何也、則其所用者重、而所要者輕也」とあり、日記故事に「隋侯齊國ニ往イテ、一蛇ノ沙中ニアリ、頭上ニ血アルヲ見ル、隋侯杖ヲ以テ挑テ、水中ニ放チテ去ル、後回リテ蛇ノ所ニ至ル、乃チ蛇一珠ヲ啣ンデ來ルヲ見ル、隋侯敢テ取ラズ、夜夢ニ、脚ニ一蛇ヲ踏ム、驚キ覺ムレバ、乃チ珠ヲ得タリ、光明月ノ照スガ如シ、世號シテ隋侯ノ珠トナス」とあり、註に「隋侯、姓ハ祝、字ハ元暢」

【遂初】初の思ひ通りになる義、晉書に「孫綽居會稽、遊放山水十餘年、作——賦以致其意」これによりて官を辭し野に處ることに借り用ふ、

【隋書】八十五巻、唐の魏徵等勅を奉じて撰す、帝紀列傳の外に、禮儀音樂律曆天文五行食貨刑法百官地理經籍の十志あり、之を五代史志といふ、もと別行の書なりしが、後人之を隋書に附入せしにより竟に隋志と稱するに至れり、和版あり、十志中、經籍志は、後漢以後に於ける藝文の源流を考へ、眞僞を別つに便なり、清の章宗源の隋經籍志考證十三巻あり、

【惴惴】憂ひおそるる貌、詩の秦風に「臨其穴、——其慄」

【彗星】「ハハキ」星、星の尾に光氣ありて形「ハハキ」に似たるによりていふ、楚辭の九歌に「登九天撫——古は——出る時は、災禍の前兆なりとて、一名を「ワザハヒボシ」ともいひ、また妖彗とも連用す、

【醉石】廬山記に「陶淵明居ル所ロノ栗里、大石アリ、淵明常ニソノ上ニ醉眠ス、名ツケテ——ト曰フ」

【誰昔】誰は發語の辭、疇昔に同じ、詩の國風に「——然矣」

【垂涎】（涎ヲ垂ル）を見よ、張元幹の詩に「扁舟莫浪發、鮫鰐正——」

【睟然】和らぎうるほふ義、潤澤の貌、孟子に「君子所性仁義禮智根於心、其生色也——見於面、盎於背、施於四體」

【水族】河海にすむ魚類、杜甫の句に「逶迤羅——」

【水碓】水の力をかりて舂く「カラウス」正字通に「桓譚新論——曰轓車、註今俗依水涯、設水車、轉輪與碓身、交激使自舂、卽其遺制也」とあり、水磑・水礱皆同じ、

【錐刀ヲ以テ泰山ヲ墮ツ】（以錐刀墮泰山）至微の力を以て、至大の敵を犯すも、毫も害ふ所ろなきをいふ、荀子に「以詐遇齊、譬之猶——也」

【錐刀ノ末】細事に喩ふ、轉じて小利をいふ、左傳の昭

六年に「錐刀之末、將盡爭之」　また淮南子に「背道德之本、爭於錐刀之末」

【垂橐】　橐は底なき「フクロ」橐中物を容れずして空しく垂るるをいふ、國語に「諸侯之使、——而入、稠載而歸」

【水竹院】　咸淳臨安志に「——落ハ、孤山ノ西冷橋ノ南ニ在リ、賈似道ノ別墅ナリ、理宗帝御書奎文之閣アリ、閣ノ下ヲ堂ト爲シ、秋水トイフ、堂前ハ湖濱ニ枕ム、左ハ孤山ヲ挾ミ、右ハ蘇隄ヲ帶ブ、波光萬頃、闌檻ト相直リ、少シノ障礙モナシ、マタ道院勧亭等アリ、傑然トシテ登覽ノ最タリ」

【垂釣】　（釣ヲ垂ル）を見よ、

【垂髫】　髫は小兒の頂後に垂るる髮「タレガミ」「ウナキ」説文に「小兒垂結也」とあり、後漢伏湛傳の「髫髮厲志」の註に「髫髮謂童子垂髮」とあり、

【隋ノ煬帝】　隋の第二世、名は廣、文帝の第二子、位に即きて首として洛陽の顯仁宮を營む、丁を役すること二百萬人、江嶺の奇材異石を發し、又海内の嘉木異草珍禽奇獸を求めて以て苑囿に滿つ、又通濟渠を開き、長安の西苑より穀洛水を引き河に達し、河を引き汴に入れ、汴を引き泗に入れ以て淮に達す、又民を發し刊溝を開き江に入る、旁に御道を築き、樹るに柳を以てす、長安より江都に至るまで離宮を置くこと四十餘所、人を遣し、江南に往き、龍舟及び雜船數萬艘を造り、以て遊幸の用に備ふ、西苑は周二百里その内に海を爲る周十餘里、蓬萊方丈瀛州の諸山を爲る、高百餘尺、臺觀宮殿山上に羅絡し、華麗を窮極す、宮樹凋落すれば綵を剪つて花葉と爲し之を枝條に綴る、好んで月夜を以て宮女數千を從へ、騎して西苑に遊ぶ、清夜遊の曲を作り、馬上に之を奏す、かく驕奢を極めたるのみならず大業七年帝自ら將として高麗を擊ち、大に民力を竭盡せしかば、天下騷動し、盜賊蜂起す、大業十三年帝南遊して江都に在り、唐公李淵兵を太原に起し、遙に帝を尊びて太上皇となし、代王を立つ是を恭皇帝となす、煬帝は後ち宇文化及に縊殺せらる、

【翠ハ羽ヲ以テ自ラ殘フ】　翠は翡翠とて「カハセビ」といふ鳥なり、うつくしき羽ある故にころさる、以て人の才智あるが故にかへりて災にあふに喩ふ、劉子新論に「翠以羽自殘、龜以智自害、丹以含色磨肌、石以抱能碎質」とあり、莊子にも「山木自寇也、膏火自煎也、桂可食、故伐之漆可用故割之」とあるに同じ、困學紀聞にも「蘇子云、蘭以芳自燒膏以明自焚、翠以羽殃

身、蚌以珠自破」とあり、

【推輓】　前より牽くを輓といひ、後より送るを推といふ——は人を推薦するをいふ、左傳襄十四年に「衞君必入、夫二子者、或輓之或推之、欲無入得乎」輓一に挽に作る、

【翠微】　山の八合目の邊をいふ、爾雅に「未及上曰——」この疏に「未ダ頂上ニ及バズ、旁ニ在リテ陂陀タルノ處、山氣青縹色ナリ、故ニ——トイフ」と、許謙の詩に「十二闌干倚——」

【綏撫】　安んじて、なでいつくしむ、吳志に「虛心——、得其歡心」

【水母】　海中に生ずる動物「クラゲ」郭璞の説に「——目鰕」

【水步】　水軍と步兵との義、吳志に「——八十萬」

【吹毛】　禪語、劍の名、

【吹毛ノ咎】　太平記卷二十六に見ゆ、すこしの過をもさがし咎むる義、韓非子に「人君大躰者、不吹毛而求小疵」とあり（毛ヲ吹キ疵ヲ求ム）を見よ、

【垂楊】　「シダレヤナギ」梁元帝の句に「垂柳復——」

【騅逝カズ】　騅は「アシゲ」の馬、また項羽の乘りたる馬の名（拔山ノ力）を見よ、

【悴容】　やせ衰へたる容、謝靈運の詩に「朽貌改鮮色、——變柔顏」

【隨陸武ナシ】　（絳灌）を見よ、

【水栗】　菱芰なり「ヒシ」武陵記に「兩角曰菱、三角四角曰芰、通謂之——」

【鄒衍ガ六月ノ霜ヲ感ジ】　駿臺雜話「妖は人より起る」に見ゆ、鄒衍は齊人、陰陽の理に通じ、荒唐の説をなす、詳しくは史記孟荀列傳に見ゆ、淮南子に「衍事燕王、盡忠、左右譖之、王繫之獄、仰天而哭、五月天爲之下霜」と、燕王は惠王、

【鄒忌】　周の人、琴を鼓するを以て齊王に見ゆ、王之を喜ぶ、後ち齊の相となる、齊に三鄒子あり、前は——、次は鄒衍、後は鄒奭、

【樞機】　樞は戸樞なり、戸の由りて開閉する所、機は弩牙なり、弩の由りて張弛する所、故に事の要を——といふ、易の繫辭に「言行君子之——」また國語に「耳目心——也」

【數奇】　不仕合をいふ、書言故事に「命乖クヲ——トイフ」註に「命ハ數ナリ、奇ハ虧ナリ」と、史記の李廣傳に「廣自ラ請ヒテ曰ク、願クハ前ニ居テ先ヅ單于ニ死セント、大將軍青、亦陰ニ上ノ誡ヲ受ク、以爲ラク、李

廣老イテ——ナリ、單于ニ當ラシムルナカレ、恐クハ欲スル所ヲ得ザラント」註に「奇ハ不偶ナリ」奇は奇數故に不遇の意とす

【芻豢】 草食するを芻といふ、牛羊の類、穀食するを豢といふ、犬豕の類孟子に「理義之悅我心猶——之悅我口」また荀子に「人之情、食欲有——」

【嵩呼】 天子の萬歳を祝する義、漢書に「武帝、登リテ嵩ニ禪ス、吏卒咸萬歳ト呼ブ者三スルヲ聞ク」とある故事に本づく、一に山呼ともいふ(萬歳)を見よ、

【崧山】 次の(嵩山)を見よ、

【嵩山】 河南省の開封府の西に在り、初學記に「嵩高山ハ五岳ノ中岳ナリ」とあり、釋名に「嵩字或ハ崧ニ作ル、山大ニシテ高キヲ崧トイフ」と、白虎通に「中央ノ岳獨リ高字ヲ加フル者ハ、何ゾヤ、中央ハ四方ノ中ニ居リテ高シ、故ニ嵩高山トイフ」と、王元之西征記に「其ノ山三十六峯、東ヲ太室トイヒ、西ヲ少室トイフ、相去ル十七里、嵩ハソノ總名ナリ、之ヲ室トイフ者ハ、ソノ下ニ各石室アルヲ以テナリ」と、詩經に「嵩高維岳、峻極于天、維岳降神生甫及申、維申及甫、維周之翰」

【趨舍】 向背といふに同じ、史記伯夷傳に「巖穴之士、——有ル時」

【鯫生】 鯫は小魚なり、故に其の身を卑下して、——といふ、猶ほ小生といふがごとし、漢書の張良傳に「鯫生我ニ說ク」の註に「鯫生ハ小人ナリ」

【芻蕘ニ詢フ】 (詢ニ芻蕘)芻は、草を取る者、蕘は薪を取る者「キコリ」博く下問を爲して、微者と雖も措かざる義なり、詩經の大雅に「先民有リ言、詢ニ于芻蕘ニ」善言は、往くとして在らざるなきをいふ、朱子曰く「先民ハ古ノ賢人ナリ、古人詢フコトヲタフトビテ芻蕘者ニ及ブ、況ヤソノ僚友ヲヤ」と、猶は芻の俗字なり、十訓抄第三に「聖人は芻蕘にはかるともいへり」とあるは、この詩の句によれり、元稹の詩に「——分ニ棄捐ニ」

【樞密使】 唐の制、————は內臣を以て之に任ず。後唐の莊宗、郭崇韜を用ひて、宰相と分ちて朝政を秉らしむ、文事は中書より出で、武事は樞密より出づ、此れより後、その權漸く盛んなり、宋朝に至り號して西府となす、使は樞密院の長官なり、容齋隨筆に「唐ノ世ノ——ハ專ラ內侍ヲ以テ之ニ爲ス、五代以來始メテ士大夫ヲ參用シ、遂ニ執政ニ同ウス」

【鄒陽】 漢の時の齊の人吳に仕へ文辨を以て名を著す、吳王陰に邪謀あり、陽上書して諫むれども納れられず、去て梁に之き、孝王に從ひて遊ぶ、譖せられて吏に下さる獄中より上書し、出さるるを得て卒に上客となる、

【芻靈】 草を束ね人の形と爲し、以て死者の從衞とする者、「ワラニンギャウ」禮記に、「孔子謂爲——者善」

【鄒魯之學】 孔孟の學をいふ、鄒は孟子、魯は孔子の生地なればなり、莊子の天下篇に「鄒魯之士、縉紳先生」とあり、南史羊侃傳に「——遺風、英賢不絕」

【末大必折】 樹木の枝葉大なれば、本根を折るの義、支族大なれば、本宗を蹈すに喩ふ、左傳に「————尾大不掉」

【過ギタルハ猶ホ及バザルガ如シ】 (過猶不及)論語先進篇に見ゆ、孔子の語、道は中庸を以て至極と爲す、賢智の過ぎたるは、愚不肖の及ばざるに勝れるが如しと雖も、其の中道を失ふことは、則ち一なるをいふ、

【進ミテハ忠ヲ盡サンコトヲ思フ】 孝經に「進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡」またこの中の前二句は、左傳に林父の君に事ふるを稱す、

【筋信ビ骨強シ】 (筋信骨強管子に「人能ク正靜ナレバ皮膚裕寬ニ、耳目聰明ニ、筋信ビ而シテ骨強シ、乃チ能ク大圓ヲ戴キ而シテ大方ヲ履ム」

【沙ヲ含ミ人ヲ射ル】 (含沙射人)(沙蟲)を見よ。

【墨ヲ磨ルハ病夫ノ如ク、筆ヲ把ルハ壯士ノ如クス】 (磨墨如病夫、把筆如壯士)墨をするは手やはらかにせざれば墨汁あらくして筆のはこび自由ならず、筆を把るに力なければ、文字勁からず故に喩ふ、岩栖幽事に見ゆ、陳繼儒の語、

【速ナランコヲ欲スレバ則チ達セズ】 (欲速則不達)論語に「子曰ク 速ナランコヲ欲スル無レ、小利ヲ見ルコ無レ、速ナランコヲ欲スレバ則チ達セズ、小利ヲ見レバ則チ大事成ラズ」の註に「事ノ速カニ成ランコトヲ欲スルトキハ、則チ急遽ニシテ序無ク、反テ達セズ」

【寸陰】 少しの時間をいふ、淮南子に「聖人不貴尺之璧而重寸之陰」また魏の文帝の典論に「古人賤尺璧而重——」

【寸ヲ得レバ王ノ寸】 (得寸則王之寸)駿臺雜話「祕事は睫」の條に見ゆ(遠交近攻)を見よ、

【寸ヲ詘シテ尺ヲ信ブ】 詘は屈なり、信は伸なり、文心雕龍に「詘寸以信尺、枉尺以直尋、棄偏善之巧、學具美之績」また淮南子に「詘寸而伸尺、聖人爲之、小枉而大直、君子行之」

【寸進尺退】 得る所ろ少くして、失ふ所ろ多きをいふ、老子に「用兵有言、吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而

退尺」また韓愈の上李侍郎書に「進寸退尺、卒無所成」

【寸鐵人ヲ殺ス】 鶴林玉露巻七の殺人手段の條に「宋景論禪云、譬如人載一車兵器、弄了一件、又取出一件來弄、便不是殺人手段、我則只有寸鐵、便可殺人、朱文公亦喜其說、(中略)曾子之守約、寸鐵殺人者也」

【寸馬豆人】 荆浩の畫山水賦に「凡畫山水、意在筆先、丈山尺樹、――― 遠人無目、遠樹無枝、遠山無皴、隱隱似眉、遠水無波、高與雲齊、此其訣也」

【寸裂ノ錦黻ハ未ダ堅完ノ常布ニ若カズ】 (寸裂之錦黻未若堅完之常布)錦の「ズタズタ」に裂けたるは手織木綿の丈夫なるには及ばずとの義、抱朴子に見ゆ、

格言八則

寸鮹游二牛迹之水一、不レ賞二橫レ海之巨鱗一 (抱朴子)
務レ進者、趨前而不レ顧レ後、榮貴者、矜レ己而不レ待レ人、智不レ接レ愚、富不レ賑レ貧 (後漢書朱穆傳)
須臾無レ忘二其爲レ賢者、必困二其性一、百步之中、無レ忘二其爲レ容者、必累二其形一 (文子)
隨時快樂隨時過、一日清閑一日僧 (傳家寶)
醉裏乾坤大、壺中日月長 (金聖歎水滸傳評)
數間茆屋閒臨レ水、一盞秋燈夜讀レ書 (劉禹錫)
試レ鑒書二新竹一、張レ琴和二古松一 (李義山)
欲レ窮二千里目一、更上一層樓、有二一分工夫一、便有二一分境界一 (呻吟語)

セ

【井蛙】 (井底ノ)を見よ、

【性相近シ、習相遠シ】 論語陽貨篇に「子曰、性相近也、習相遠也」とありて、朱註に「氣質ノ性ハ、固ヨリ美惡ノ同ジカラザルアリ、然レドモソノ初ヲ以テ言ヘバ、則チ皆相遠キコト甚シカラザルナリ、但善ニ習ヘバ善、惡ニ習ヘバ惡トナリ、是ニ於テ始メテ相遠キノミ」

【西安府】 陝西省に在り、禹貢雍州の域、周の王畿の地、秦に關中と曰ひ、唐に長安と曰ひ、明に至り改めて西安府と名づく、

【征衣】 征は行なり、「タビゴロモ」をいふ、戴復古の詩に「簦笠相隨走路岐、一春不換舊――」

【正位】 「タダシキ位置、禮をいふ、孟子滕文公に「立天下之――」

【霽威】 怒の解くるなり(威ヲ霽ス)を見よ、

【聖域】 聖人の地位をいふ、韓愈進學解に「絕類離倫、優入――」

【西域記】 (大唐――)を見よ、

【西域ノ妖僧傅毅ヲイノリ殺ストテ自ラ暴死ス】 駿臺雜話、妖は人より起るに見ゆ、毅は奕の誤なるべし、通鑑巻百九十五に「太史令傅奕、精究術數之書、而終不之信、遇疾、不呼醫餌藥、有僧自西域來、善咒術、能令人立死、復咒之使蘇、上擇飛騎中壯者試之、皆如其言、以告奕、奕曰、此邪術也、臣聞、邪不干正、請使咒臣、必不能行、上命僧咒奕、奕初無所覺、須臾僧忽僵仆、若爲物所擊、遂不復蘇」と、奕は唐の高祖につかへ太史丞となる 太宗の貞觀十三年壽八十五にして卒す、

【誠意正心】 意は心の發する所ろにして、心は身の主とする所ろなり、意を誠實にし、心を修正するをいふ、大學に「欲正其心者、先誠其意」

【誠意伯文集】 二十卷(書誥頌表等共一卷、郁離子二卷、序記雜著等共五卷、詩十卷、春秋明經二卷)明の劉基撰す、基の學術經濟は耶律楚材・劉秉忠に似、而して文章は則ち二人の上に在り、その詩は沉著頓宕自ら一家を成し、高啓に亞ぐべし、その文亦宋濂の亞なり、二人に突過する能はざる者は、神鋒の豁露せるのみ(劉基)を參看せよ、

【清異錄】 二卷、宋の陶穀撰す、穀字は秀實、戶部尚書に進む、この書は唐及び五代の新異の語を采り、天文地

理君道以下三十七門に分ち凡て六百四十八事を錄せり、

【齊雲】 古の名高き高樓の名、五代史に「韓建、昭宗幸其鎭、登齊雲樓、西北望京師、思歸」と、白居易の——樓晩望の詩に「——樓北面、半日凭欄干」自註に「樓ハ蘇州ニ在リ」と、王元之の黃州竹樓記に「——落星高則高矣」

【青雲紫陌ノ譏】 氣の合はざるそしりをいふ、范石湖の、姑蘇同年會詩序に「此ノ時ニ當ッテ、榜ヲ通ズルノ士、意氣相與ニ甚ダ厚ク、否レバ則チ青雲紫陌ノ譏アリ」とあり、青雲は天に在り、紫陌は地に在り、意氣合はざること、天地の懸隔するが若しとなり、

【青雲ノ士】 史記の伯夷傳に「太史公曰、閭巷之人、欲砥行立名者、非附青雲之士、惡能施于後世哉」の註に「青雲之士トハ、聖賢ノ言ヲ立テテ、世ニ傳フル者ヲイフ、孔子是レナリ、青雲ニ附クトハ、則チ伯夷顏淵是ナリ」とあり、また高位に登るをいふことあり、史記の范雎傳に「范雎帷帳ヲ盛ニシ、侍スル者甚ダ衆クシテ之ニ見エシム、須賈頓首シテ死罪ヲ言ッテ曰ク、賈意ハザリキ、君能ク自ラ青雲ノ上ニ致サントハト」

【青雲ノ交】 書言故事に「仕宦相與ニスルヲ青雲ノ交アリトイフ、江淹曰ク、袁叔明ハ、余ト青雲交アリ、直ニ杯酒ヲ銜ムノミニアラズト」

【正營】 正一に怔に作る、惶恐して安んぜざるをいふ、漢書王莽傳に「人民——、無所錯手足」

【精衞海ヲ塡ム】 (精衞塡海)精衞は、小鳥の名なり、海を塡めんと欲して、木石を啄み來りて海に投ずるも、其の効なし、以て無望の事を企て、徒勞するに喩ふ、山海經に「發鳩之山有鳥曰精衞是炎帝之女、往遊于東海、溺而不反、是故精衞常取西山之木石以塡東海」

【世嬰時網ニ牽カル】 (牽世嬰時網)文選に見ゆ、世の中の俗累に纏はれ牽制せらるる義、

【聲援】 援くるに、唯聲のみを用ひて、手を下さざるをいふ、任昉の書に「若使郢部救兵接——、則單于之首久懸北闕」

【說苑】 二十卷、漢の劉向の撰なり、君道・臣術・建本・立節・貴德・復恩・政理・尊賢・正諫・敬愼・善說・奉使・權謀・至公・指武・說叢・雜言・辨物・修文・反質の二十篇に分ち、一篇を以て一卷とす、每篇初に序說あり、次に逸事を載す、關嘉の說苑纂註桃井源藏の說苑考等參考の資とすべし、

【精ヲ得テ、麤ヲ忘ル】 (得精忘麤)列子に「秦、九方皐ヲシテ馬ヲ求メシム、報ジテ曰ク、牝ニシテ黃ナリト、往イテ之ヲ視レバ、牡ニシテ驪ナリ、伯樂曰ク、其ノ精ヲ得テ其ノ麤ヲ忘ル、其ノ內ニ在リテ其ノ外ヲ忘ルト」馬の駿を相するは毛色や牝牡等の外に於て觀るべし、その內の神を知れば、其の外の毛色等は忘るるとも可なりとなり、

【姓ヲ冒ス】 (冒姓)他姓を假稱するをいふ漢書衞青傳に「青——衞氏」

【性ヲ伐ルノ斧】 女色をいふ(伐性)を見よ、

【制ヲ稱ス】 (稱制)天子の詔を制書といふ、天子に代りて制度の命を行ふをいふ、史記呂后紀に「今太后——、王呂昆弟諸呂無所不可」

【生ヲ視ルコト死ノ如シ】 (視生如死)心を勞し、意を苦しむる所ろなきをいふ、列子に「——視富如貧、視人如家、視我如人」

【生ヲ養ヒ死ヲ送ル】 (養生送死)生者を養ひ、死者を送るをいふ、禮記の禮運に「禮儀也者、所以養生送死事鬼神之大端也」

【生ヲ聊ンゼズ】 (不聊生)聊は賴なり、心に賴み安んじて生活する能はざる義、史記主父偃傳に「丁男被甲、丁女轉輸、苦——」

【箕ヲ擺ス】 箕ハ「ハハキ」箕をかかへ道を淸めて人を迎ふるは之を敬ふ所以なり、史記に「魏ノ文侯箕ヲ擺シテ以テ朋友ヲ迎フ、手ヲ握リテ歡乎生ノ如シ」と、杜詩に「掃逕望三益」とあるも同じ、三益とは論語に「友直友諒友多聞益矣」とあるをいふ、箕は一音「スキ」

【世家】 世世祿秩ある家なり、王安石の讀孔子世家の文に「太史公帝王ヲ叙スレバ、則チ本紀トイヒ、公侯、國ヲ傳フレバ、則チ世家トイヒ、公卿特起スレバ、則チ列傳トイフ、此レ其ノ例ナリ」蘇軾の詩に「——不可恃、如倚折足几」

【聲價】 猶ほ名譽といふが如し、風俗通に「張伯坐養——也」

【稅駕】 稅は脫なり、猶ほ駕を解くといふが如し、休息するをいふ、史記李斯傳に「物極則衰、吾未知所——」

【齊諧】 古書の名、莊子逍遙篇に「——者志怪者也」と、一說に「齊國ニ行ハルル諧謔ノ書ナリ」と、諧とは「オドケ」

【生涯】 人の一生の閒をいふ、終生といふが如し、莊子に「吾生也有涯、而知也無涯、以有涯隨無涯殆已」

【靜好】 「シヅカニシテヨシ」琴瑟——は夫婦の和合せるをいふ、詩經に「琴瑟在御、莫不——」

【晴好雨奇】 山水の景色の晴雨共によきおもむきあるをいふ、蘇軾の飲湖上初晴復雨の詩に、

水光瀲灩晴方好、山色空濛雨亦奇、欲把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜、

とあり、芭蕉の「象潟の雨や西施がねむの花」の句はこの詩を翻案せしなり、

【生客】 はじめての客、熟客の反、志林に「子由作棲賢堂記、僕爲書之、且欲與廬山結緣、它日入山不爲——」也

【西岳】 崋山の別稱、書經舜典に「至于——」

【精核】 核は覈に同じ、精細に究め明らかにする義、漢書馬融傳に「博覽典雅、——數術」

【誠懇】 懇もまた誠實なること、——は、まことの心、禮記に「忠信——之心」

【說客】 人を說きすすめにゆく辯者をいふ、史記に「鄒生常爲——」

【噬嗑】 噬は齧なり嗑は合なり、齧み合す義、易經に「——而亨」とあり、頤中に物あるときは、害を爲す、齧み合すときは、其の害亡びて亨通するをいふ、

【西河文集】 一百七十九卷、清の毛奇齡撰す、奇齡字は大可、學者西河先生と稱す、康熙十七年博鴻に擧げられ、檢討となり、康熙五十二年卒す年六十七、著書數十種あり、西河の文縱橫辨博卓然として一家を成せり、

【井幹】 井の上にかまへたる欄、キゲタ、集韻に「幹井垣也」と、莊子の秋水に「吾跳梁乎——之上」また樓閣の名、漢書の郊祀志に「武帝立——樓、高五十丈」註に「木ヲ積ミテ高ク樓ヲツクル、井幹ノ形ノ若クス」と、班固の西京賦に「攀——而未半、目眴轉而意迷」

【征雁】 「ユクカリ」歲華紀麗の注に「哀蟬無留響、——鳴南霄」

【精悍】 鋭くしてつよくかいがいしきなり、史記游俠傳に「解爲人短小——」、解は郭解、

【青眼】 親愛する目つきをいふ、晉書阮籍傳の字面（白眼）を見よ、

【西漢會要】 七十卷、宋の徐天麟撰す、唐會要の體にならひ、漢書に載するところの制度典章及び紀志表傳に見ゆるものを取り、帝系・禮樂・輿服・學校・運曆・祥異・職官・選擧・民政・食貨・兵・刑法・方域・蕃夷の十五門に分ち類記せり、

【凄其】 寒くすさまじき義、詩經に「緡兮綿兮、——以風」と、また張養浩長安孝子の詩に「退省百無有、滿屋風——」と、其は語辭なり、

【清暉】 清らかなる「ヒカリ」謝靈運の詩に「昏日變氣候、山水含——、——能娛人、遊子瞻忘歸」

【青宮】 太子をいふ、東宮に同じ、初學記に「——ハ一ニ東宮トイフ、太子ノ宮ナリ」神異經に「東明山有宮、青石爲墻、高三仞、門有銀榜、以青石碧鏤、題曰天地長男之宮」

【正誼堂全書】 清の張伯行が宋儒及び宋儒の說を羽翼するに足るところの諸家が著書を節錄合輯せしものなり、同治七年閩浙總督左宗棠等之を校刻し、合せて唐宋八大家文選・范文正公文集等の五種をも續刻せり、

【齊魏實ヲ論ズ】 通鑑擥要、周顯王十四年に「魏惠王、問齊威王曰、齊亦有寶乎、威王曰、無、有、惠王曰、寡人國雖小、而有徑寸之珠、照車前後各十二乘者十枚、豈以齊大國而無寶乎、威王曰、寡人之寶、與王異、吾臣檀子守南城、則楚人不敢爲寇泗上、盼子守高唐、則趙人不敢漁于河、黔夫守徐州、則燕人祭北門、趙人祭西門、徙而從者七十餘家、有種首者、使備盜賊、則道不拾遺、此四臣者、將照千里、豈特十二乘哉、惠王慚」とあり、檀子は齊の公族、采を檀城に食む、因りて以て氏となす、南城は齊の南境に在り、故に名づく、泗は水の名、魯國卞縣陪尾山に出で、西南して彭城を過ぎ、又東南して下邳を過ぎ、淮水に入る、泗上は泗水の上なり、盼子の盼は一に盻に作る、即ち田盼なり、高唐は東昌に在り、徐州は司馬彪曰く、魯國薛縣は六國の時徐州と謂ふと、祭西門とは燕趙、齊の侵伐を畏る、故に祭りて以て福を求むるなり、

【正氣ノ歌】 正氣は天地人間に通じて自ら存ずる正大の氣をいふ、正氣の歌は、宋の文天祥の獄中の作なり並に序あり左に錄す、

正氣歌幷序

予囚北庭、坐一土室、廣八尺、深可四尋、單扉低小、白閒短窄、汙下而幽暗、當此夏日、諸氣萃然、雨潦四集、浮動床几、時則爲水氣、塗泥半朝、蒸濕歷澜、時則爲土氣、乍晴暴熱、風道四塞、時則爲日氣、簷陰薪爨、助長炎虐、時則爲火氣、倉腐寄頓、陳陳逼人、時則爲米氣、駢肩雜遝、腥臊汙垢、時則爲人氣、或圊溷、或死屍、或腐鼠、惡氣雜出、時則爲穢氣、疊是數氣、當之者、鮮不爲厲、而予以孱弱、俯仰其間、于茲二年矣、嗟呼、是殆有養致、然爾、亦安知所養何哉、孟子曰、吾善養吾浩然之氣、彼氣有七、吾氣有一、以一敵七、吾何患焉、況浩然者、乃天地之正氣也、作正氣歌一首、

曰、
天地有正氣、雜然賦流形、下則爲河嶽、上則爲日星、於人曰浩然、沛乎塞蒼溟、皇路當清夷、含和吐明庭、時窮節乃見、一一垂丹青、在齊太史簡、在晉董狐筆、在秦張良椎、在漢蘇武節、爲嚴將軍頭、爲嵇侍中血、爲張睢陽齒、爲顏常山舌、或爲遼東帽、清操厲氷雪、或爲出師表、鬼神泣壯烈、或爲渡江楫、慷慨吞胡羯、或爲擊賊笏、逆豎頭破裂、是氣所磅礴、凜冽萬古存、當其貫日月、生死安足論、地維賴以立、天柱賴以尊、三綱實繫命、道義爲之根、嗟予遘陽九、隸也實不力、楚囚纓其冠、傳車送窮北、鼎鑊甘如飴、求之不可得、陰房鬼火、春院閟天黑、牛驥同一皁、鷄栖鳳凰食、一朝蒙霧露、分作溝中瘠、如此再暑寒、百沴自辟易、哀哉沮洳場、爲我安樂國、豈有他繆巧、陰陽不能賊、願此耿耿在、仰觀浮雲白、悠悠我心憂、蒼天曷有極、哲人日已遠、典刑在夙昔、

風簷展書讀、古道照顏色、

【世及】 猶ほ世襲といふが如し、父子相承ぐをいふ、後漢書二十八將傳の贊に「朝有——之私」

【青金】 「ナマリ」說文に「鉛ハ——ナリ」

【青衿】 若き學生を——といふ、詩の鄭風に「青青子衿、悠悠我心」の註に「青青ハ純綠ノ色、衿ハ領ナリ」少年の書生は青色の衿の衣を服するに由る、

【精金良玉】 人品の純良にして溫和なるに喩へていふ、程伊川が撰びし明道先生行狀に「充養有道、純粹似精金、溫潤如良玉」

【清狂】 心清潔にして狂者に似たるをいふ、陸游の句に「詩酒——二十年」

【井魚】 ハ與ニ大ヲ語ルベカラズ】 (井魚不可與語大) 見識のせまき人とは、共に大事を談るに足らざるに喩ふ、淮南子に「——レ——ー、拘於隘也夏蟲不可與語寒篤於時也」また荀子に「坎井之蟲不可與語東海之樂」とあるも義同じ、坎井は壞井なり(井底ノ)を參看せよ、

【聖皇】 天子を尊稱していふ、班固の東都賦に「——握乾符大にして之を化するを聖といふ、春の至りて萬物自ら化生するが如きなり、握乾符とは天命を秉握して天下を掌中に運らすをいふ

【生活】 生命を保つをいふ「イキナガラフ」孟子に「民非水火不——昏暮叩人之門戶求水火無弗與者至足矣」

【稅關】 支那の——は新舊二種あり、舊海關は、周末よりすでにこれあり、水陸四通の要地に設け、そこを通過する貨物に對して、原價百分の五の稅を課し、中央政府の直轄に係る、新海關は江海各港に附設せる、所謂洋海關にして、海外輸出入品に課稅する所とす、千八百八十三年の擬定に依れば、江海全部を分ちて、十九稅關區と爲し、每區に稅務司を置き、總稅務司に隸屬せしむ、

【齊桓晉文】 齊の桓公と晉の文公となり、五霸の中にても最も勢の强かりし人なり、孟子の梁惠王篇に「——之事可得聞乎」

【精華錄】 十二卷、清の王士禎(阮亭又漁洋ト號ス)撰す、順治十三年より康熙三十九年に至る古今體詩を編次す、その詩神韻を以て宗とす、辭を措く清新、清朝詩家の正宗と稱せらる、清の惠棟の漁洋山人精華錄訓纂十卷目二卷自撰年譜二卷あり、參考すべし、

【成蹊】 (桃李言ハザレドモ)を見よ、

【清景】 「キヨラカナル、ケシキ」曹植公讌詩に「明月澄——、列宿正參差」また宮殿の名、宋史地理志に「宮中有延慶安福觀文——慶雲玉京等殿」

【聖經】 聖人の書、唐書藝文志に「自孔子在時方修明——、以紬繆異而老子著書論道德」

【清曉】 天氣の清らかなる「アシタ」宣和畫譜に「僧巨然有雲嵐——圖」杜甫の詩に「力疾坐——」

【晴曉】 「ハレタル、アシタ」宣和畫譜に「王詵有煙嵐——圖」

【精曉】 「クハシク、シル」資治通鑑に「明皇——音律」

【聲教】 聲は風聲、教は敎化をいふ、猶ほ風敎といふが如し、書の禹貢に「——訖于四海」

【猩血】 「シャウジャウ」の血は最も赤し、故に花などの赤さにたとふ、張祜の上巳樂に「猩猩血綵繫頭標、天上齊聲擧畫橈」

【霽月】 本編の(光風——)を見よ、

【生業厚】 生活に要する產業の「アツキ」をいふ、財產の富める義、南史謝靈運傳に「靈運因祖父之資——甚——貲產厚に同じ、

【清妍】 清くして「ウルハシ」宣和畫譜に「林下才華雖可尙筆端人物更——」

【精妍】 物事の「クハシク」「ミガカレタル」をいふ、妍は研に通ず、蕪城賦に「才力雄富、士馬——」

【猘犬】 「キチガヒ、イヌ」又「タケキイヌ」猘は猘に同じ、李商隱の詩に「城中——憎蘭佩」

【省減】 「ハブキ、ヘラス」漢書宣帝紀に「方今天下少事、繇役——、兵革不動、而民多貧、盜賊不止、上計簿具文而已」

【清言】 風流高雅にして絕えて俗氣なき言をいふ、北史崔伯謙傳に「少讀經史、晚好老莊、容止儼然無慍色、

親賓至則置酒相娛——、不及俗事、士大夫以爲儀表ニ

【靖獻】（先王ニ）を見よ、

【贅言】 贅は附肉をいふ、——はむだな言なり、揚子法言に「書不經非書也、言不經非言也、言書不經、多多贅矣」とあり、言ふところは、言書、經に合はずば、之を知ること愈多くして、愈害をなして、用無きこと、身の「コブ」あるが如しとなり、

【清獻公】（趙抃）を見よ、

【西湖遊覽志】 二十四卷、志餘二十六卷、明の田汝成撰す、汝成字は叔禾錢塘の人、嘉靖五年の進士、この書名勝に附するに事蹟を以てし細大漏さず、その體地志雜史の閒に在り、卷首に宋朝京城圖湖山一覽圖浙江省城圖あり、志餘は南宋の逸聞を採錄せり、

【成功】 てがらの成就せし義、論語に「巍巍乎其有——也」

【成功ノ下ニハ久シク處ルベカラズ】（成功之下、不可久處）功成りて後ち、退隱せざれば、怨を受け禍を招くに至る義、史記蔡澤傳に見ゆ、

【正鵠ヲ失ハズ】 正も鵠も皆射の的なり、目的にたがふことなきをいふ、禮記の射義に「孔子曰、射者何以射、何以聽、循聲而發、發而不失正鵠者、其唯賢者乎、若夫不肖之人、則彼將安能以中」の註に「布ニ畫クヲ正トイヒ、皮ニ棲マシムルヲ鵠トイフ、賢者ハ弓矢ヲ持スルコト審固ナリ、故ニ能ク的ニ中ツ、不肖者ハ能ハザルナリ」中庸に「射有似乎君子、失諸正鵠、反求諸其身」

【青瑣】 戶に刻して連瑣の文をつくり、青漆もて塗るは、天子の門の制なり、事文類聚に「漢ノ舊儀ニ曰ク、黃門ハ、黃門令ニ屬ス、日暮レテ入リテ青瑣門ニ對シテ拜ス、名ヅケテ夕郎トイフ」と、成語考に「朝廷曰紫宸、禁門曰青瑣」

【星槎】 槎は槎なり、筏なり「イカダ」——は世界を周遊する舟又公使などの乘る舟などをいふ、拾遺記に「堯位ニ登リテ三十年ニ、巨査アリ、西海ニ浮ブ、査上ニ光アリ、夜ハ明カニ、晝ハ滅ス、常ニ浮ビテ四海ヲ繞ル、十二年ニシテ天ヲ一周シ、周リテ復始マル、名ツケテ貫月査ト曰ヒ、マタ挂星査トイフ」と、宋之問の詩に「賓至星槎落、仙來月宇空」と、查は槎に通ず

【眚災】 眚は過誤をいひ、災は不幸をいふ、書の舜典に「——肆赦、怙終賊刑」怙は恃むことあるをいひ、終は再犯をいふ、

【誠齋集】 一百三十二卷、附錄一卷、宋の楊萬里撰し、その子長孺編す、一官一集齊王儉の例に倣ふ、その詩江西詩派の末流に沿ひ、或は粗厲頹唐を免れずと雖も而かも才思健拔包孕宏富、以て羣材を籠罩するに足る、

【誠齋詩話】 宋の楊萬里撰す、主として宋人の詩を論じ、時に唐詩に及び、論文の語も亦少からず、誠齋詩を以て一家を成す、故にその論、往往理に中れりと雖も、閒〻奇僻の見を雜るものあり、享和二年の和版あり、

【星霜】 星は一年に天を一周し、霜は毎年降る、故に一年を、一星霜と爲す、杜牧集に「經幾年曰幾換——」とあり、

【精爽】 精は神なり、爽は明なり、精靈に同じ、左傳に「心之——、是謂魂魄、魂魄去之何以能久」

【悽愴】 いたみかなしむ、禮記に「霜露既降、君子履之、必有——之心、非其寒之謂也」

【腥臊】 「ナマグサキ」臭なり、史記の晉世家に「犯肉——何足食」と、犯は咎犯、

【靚粧】 鮮かに粉黛を施すをいふ、上林賦に「——刻飾」

【星霜ヲ經】 年を經るをいふ、星霜を見よ、

【枘鑿相容レズ】 物の相齟齬して合はざるをいふ、鑿を見よ、

【征驂】 驂は車に駕する三頭の馬、——は遠方に行く車に駕せる馬をいふ、王勃の文に「高林靜而霜鳥飛、長路曉而——動」劉秉忠の句に「五更殘月照——」

【青山只青ヲ磨ス】 書言故事に「常ヲ改メザルヲ青山只青ヲ磨ストイフ、朱晦庵ノ詩ニ浮雲一任閑舒卷、黃古青山只磨青ト、前句ハ雲移リ山動カザルヲイヒ、後句ハ山ノ形色萬古改マラザルヲイフナリ」

【西山文集】 五十五卷、宋の眞德秀撰す、德秀、朱子の鄉に生れ、力めて朱子の學を崇奉す、故にその文、大抵儒者の言たるを失はず、駢體はその最も長とするところなり、

【青山骨ヲ埋ムベシ】 青き山には、到る處に我が骨を埋むべしとの義必ずしも故鄉の山にのみ、葬らるべきにあらずとの意、東坡の弟子由に別るゝ詩に「是處青山可埋骨」とあり、わが僧月性の題壁の詩にも、

男兒立志出鄉關、學若不成死不還、埋骨豈唯墳墓地、人閒到處有青山、

とあり、

【世子】 諸侯の嫡子をいふ、猶ほ天子に太子といふが如し、孟子滕文公上篇に「滕文公爲——」（太子）を見よ、

【生祠】 現存者のために立つる祠をいふ、劉氏人譜に、「宋ノ眞山先生泉州ニ知タリ、民ノ舒慘ヲ視ルコト猶

ホ己ノ休戚ノゴトシ、苟モ毫髮モ以テ人ニ及ボスベキコトアレバ、敢テ其ノ力ヲ盡サズンバアラズ、其ノ去ルヤ、邦人、公ノ爲メニ生祠ヲ立ツ、詩アリ云フ、西方又出一活佛、南極今添兩壽星ト」事物紀原に「漢ノ於公縣吏ノ曹タリシ時、獄ヲ決スルコト平カナリシカバ、郡ノ人於公ノ爲メニ——ヲ立ツ、——ヲ立ツルコトハ、漢ノ世ヨリ始マル」

【生紙】 「スキタルママノカミ」(熟紙)を見よ、

【生齒】 ことし生れたる子、當歲子をいふ、周禮の司民に「掌登萬民之數、自——以上、皆書于版、司寇獻于王」の註に「齒ヲ生ジテ體備ル、故ニ齒ヲ以テ、ソノ年ニ名ツク」

【西施】 孟子の疏に「——ハ、越ノ美女、吳王夫差大ニ之ヲ幸ス、市ニ入ル每ニ、人見ンコトヲ願フ者ハ、先ヅ金錢一文ヲ輸ル」と、また拾遺記にも「西施越ノ女所ノ謂西子也、有絕世之美、越王匄踐、獻之吳王夫差、夫差嬖之、卒至傾國」とあり、淮南子に「曼容皓齒形姣骨佳、不待傅粉芳澤而美者、西施陽文也」と、孟子に「西子蒙不潔、則人皆掩鼻而過之」

【青紫】 漢の制にて、印綬に、公侯は紫、九卿は青を用ふ、故に公卿の義とす、漢書夏侯勝傳に「士病不明經術、經術苟明、取——、如俛拾地芥耳」

【制使】 勅使をいふ、唐律釋文に「天子所使謂——」

【誓詞】 「チカヒコトバ」正字通に「宋ノ元豐以後、神前ノ——ヲ誓狀トイフ、今ノ俗、——モ亦牒トイフ」

【筮仕】 左傳に「畢萬筮仕于晉、遇屯之比」とあり、仕宦の吉凶を占ひ、然る後ちに仕ふる義、轉じて必ずしも筮占を用ひざるも、初めて仕宦する義、品字箋には「初任之ヲ——トイフ、筮ハ猶ホトノ如キナリ、言フココロハ、新進ノ人、未ダソノ能否何若ヲトセズ、試ニ官ニ當ラバ優劣見ハル」とあり、一說とすべし、

【贅子】 類書纂要に「——ハ子ヲシテ他人ノ家ニ出デテ贅壻タラシムルナリ」と、俗に所謂養子なり、イリムコ

【成就】 就もまた成るなり「デキアガル」「ジャウジユ」とも讀む、史記呂后紀に「三年方築長安城、四年就、五年六年——」

【靜修】 靜かにおちつきて身を修むる義、諸葛亮の子を戒むる書中に「靜以修身、儉以養德」

【青州從事】 好き酒の異名、事類全書に「晉桓溫有主簿、善別酒、好者、謂青州從事、惡者、謂平原督郵、蓋青州有齊郡、平原有革縣、從事謂到臍下、督郵言在脇上」

とあり青州と平原とは地名、從事と督郵とは官名、此を以て、好き酒を青州從事といひ、惡しき酒を平原督郵といふ、そは青州に、齊縣あり、齊と臍と同音なるを以て義を借り、好酒は直ちに腹臍に至るを謂ふ、從事の官は高く、青州は國大なり、好酒を貴ぶ意なり、平原は、郡にて小く、督郵は官卑し、惡酒を卑めて云ふ、又平原郡に革縣あり、革と脇と同音なるを以て、惡酒は、胸脇の上に住まり、飲んで下らざるをいふなり

【青紫ヲ取ルコト芥ヲ拾フ如シ】 公卿の位を取ること至りて易きに喩ふ(青紫)を見よ、

【正室】 嫡子なり、禮記文王世子の註に見ゆ、また本妻、

【凄日】 秋の日をいふ、纂要に「春ヲ遲日トイヒ、夏ヲ畏日トイヒ、秋ヲ——トイヒ、冬ヲ愛日トイフ」

【正字通】 十二卷、明の張自烈撰す、この書或は清の廖文英の撰となすも、實は自烈の撰、文英衡州に在りて金を以て之を購ひ、掩て己が有となして版行せしなり、首に吳源起の序あり、次に文英の自序あり、曰く梅誕生の字彙世に行はる、然れども、正韻韻會二編を墨守して折衷するところ罕なり、又未だ嘗て經史と字學とに淹通し、相發明すること無く或は眞を亂し、或は略して未だ備らず 學者以て從ふところを定むるなし、因て六書の善本歷代の字學を蒐集し、校正釐定し以て南康の白鹿洞に版行し、名づけて正字通といふと、四庫全書提要に「此書梅膺祚ノ字彙ニ視ブルニ、考證稍博シ、然レドモ徵引繁蕪頗、舛誤多シ、又喜デ許愼ノ說文ヲ排斥ス、尤モ穿鑿附會ヲ免カレズ、善本ニアラザルナリ」とあれども、亦全く捨つべきにあらず、

【生死肉骨】 (死ヲ生シ)を見よ、

【西施ニ唐突ス】 (唐ニ突西施)書言故事に「好人ニ觸犯スルヲ——ニ——トイフ、晉ノ周顗字ハ伯仁、少クシテ重名アリ 庾亮嘗テ謂ツテ曰ク、諸君咸君ヲ以テ樂廣ニ方ブト(樂廣の賢に比する義)顗曰ク、何ゾ乃チ無鹽ヲ刻畫シテ西施ニ唐突セシムルヤト、刻畫ハ雕琢ナリ、無鹽ハ齊ノ醜婦、西施ハ越ノ美女、周顗自ラ謙シテ我ヲ以テ樂廣ニ比スルハ、無鹽ヲ雕刻シテ西施ニ對セシムルガ如キナリト」

【成人】 猶ほ全人といふが如し、論語に「子路問——、子曰若臧武仲之知、公綽之不欲、卞莊子之勇、冉求之藝、文之以禮樂、亦可以爲成人矣」また丁年に達する者の稱、嵇康の絕交書に「男歲八歲未ダ——ニ及バズ」

【清晨】 晨は夜のひきあけ「シノノメ」——は、空氣の清らかなる朝をいふ、張九齡の句に「山川歷歷在——」

【聖人】 その德神明にして測られざるの號、論語に「——吾不得而見之矣、得見君子者斯可矣」と、管子に「——畏微愚人畏明」老子に「——無常心、以百姓爲心」淮南子に「——見是非、若黑白之于目辨」關尹子に「——師蜂立君臣、師蜘蛛立網罟」雲笈七籤に「——求福于未兆、絕禍于未有」また天子の稱とす、唐書に見ゆ、

また清酒の異名、事類全書に「徐邈字景山、仕魏爲尚書郎、時禁酒、而邈私飲沉醉、趙達問以曹事、邈曰、中聖人、達白之、太祖怒、鮮于輔進曰、醉客謂酒清者爲聖人、濁者爲賢人、邈偶醉言耳、後文帝幸許昌、問邈曰、頗復中聖人否、邈曰、昔子反斃於穀陽、御叔罰於飲酒、臣嗜同二子、不能自懲、時復中之、帝大笑曰、名不虛立」

【精神】 「心なり、莊子に「——四達、竝無流所不極、上際于天、下蟠于地」

【精神一到何事カ成ラザラン】 志次第で、何事も成就するをいふ、朱子曰く「陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成」

【省心雜言】 一卷、宋の李邦獻撰す、修身處世に資する格言多し、されば、四庫全書提要にも「其書切近簡要、質而能該、於範世勵俗之道、頗有發明」といへり、大旨學の本は正心に在り、然れども物欲の來りて之を蔽障するが故に、時時省して之を正さざるべからず、故に省心を名となすなり、

【聖人尺ノ璧ヲ貴バズシテ寸ノ陰ヲ重ンズ】 (聖人不貴尺之璧而重寸之陰)文子の語、下に「時難得易失也」とあり、この語淮南子にも出づ、魏の文帝の典論にも「古人賤尺璧而重寸陰」とあり、

【聖人ニ中テラル】 (中聖人)酒に中てられたるをいふ(聖人)を見よ、

【棲神ノ域】 父祖の墓所をいふ、書言故事に「陳堯佐自らその墓に誌して曰く、有宋潁川生堯佐字希元、年八十二、不爲夭、官一品、不爲賤、卿相納祿、不爲辱、祖可歸見父母棲神之域矣」と、納祿とは致仕して祿を受けざるなり

【聖人ハ物ニ凝滯セズ】 (聖人者不凝滯於物)楚辭の漁父辭に「夫レ聖人ハ、物ニ凝滯セズ、而シテ能ク世ト推シ移ル」の註に「凝滯トハ、其ノ身ヲ困辱セザルナリ」

【西施モ醜キ所ロアリ】 賢者と雖も、亦時に過失あるを免れざるに喩ふ、淮南子に「嫫母有所美、西施有所醜」とあり、嫫母は、古の醜き女なれども、行の貞正なるは、是れ美き所ろあるなり、西施は古の美女なれども、行、必ずしも貞正ならず、是れ醜き所ろあるなり、

【精舍】 (精舍)を見よ、

【槥車相望ム】 槥は小棺なり、軍に從ひて死する者は、槥を以て其の喪を送る、槥を載する車、道に相望むは、戰死者の多きをいふ、漢書韓安傳に「士卒傷死、中國——」

【青籜笠】 あをだけの笠(籜笠)を見よ、

【青蛇ノ劍】 太平記卷四に見ゆ、萬花谷三十三に「龜文龍藻白虹——屢鏤步光皆劍名云云」とあり、ただ屢字は、他の書に多く屬に作る、

【星宿海】 黃河の源なり、宋史河渠志に「至元二十七年、世祖皇帝命學士蒲察篤實、西窮河源、今西番朶甘思南鄙、曰——」者、其源也」

【醒酒石】 唐餘錄に「李德裕於平泉別墅、探天下珍木惟石爲園池之玩、有——、德裕尤所寶惜、醉即踞之」

【青春】 春をいふ、春は東方、その色は青し故にいふ、楚辭の大招に「——受讓」(白日)を見よ、

【制書】 「ミコトノリ」なり、蘇氏の演義に「制ハ禁ナリ、斷ナリ、君上、人ヲ用ヰル、或ハ制斷シテ之ヲ行ヒ、或ハ禁制シテ之ヲ止ム」とあり、文體明辨に「按ズルニ、顏師古曰ク、天子ノ言、一ヲ制書トイフ、制度ヲ爲スノ命ヲイフナリ云云」

【齊書】 五十九卷、梁の蕭子顯撰す、子顯は齊の高帝の孫なり、本紀八卷、志十一卷、列傳四十卷に分つ、

【世繩】 世の中の「キヅナ」世網、世累に同じ、魏書の註に「羈絆於——」

【征忪】 おそれあわてる、壬褒の句に「百姓——無所措其手足」征忪に通ず、

【怔忪】 驚きおそるゝ貌、四子講德論に「秦時百姓——」

【正色】 禮記の玉藻に「衣正色、裳閒色」註に「正色トハ、青・赤・黃・白・黑、五方ノ正色ナリ」

【聲色】 音聲容色の義、轉じて淫聲女色の義に用ふ、書經に「惟王不邇——、不殖貨利」

【生芻】 刈りて未だ枯れざる「マコモ」詩經に「——一束其人如玉」

【井井】 經畫端整の貌、荀子儒效に「——兮其有條理」也、また往來連屬の貌、易の井卦に「往來——」

【栖栖】 いそがしき貌、論語に「丘何爲是——者與」丘は孔子の名、

【清世】 清く平かに治る世、呂覽に「古之——」

【清靜】 清くして靜かなるなり、また清淨に通じ用ふ、

即ち道家者流の無爲恬淡なる心をいふ、

【凄凄】 秋風などのさびしく吹く貌、詩經の四月に「秋日——」すべてすさまじき貌に用ふ、

【菁菁】 青青と盛んに茂る貌、詩經に「——者莪」また淇奥に「綠竹——」

【萋萋】 草の盛んなる貌、詩經の周南に「維葉——」また蒹葭に「蒹葭——」

【濟濟】 衆盛の貌、一解に威儀多さなりと、詩の大雅文王篇に「——多士、文王以寧」

【整齊】 軍隊などの行列をそろへる義、呂覽の簡選に「行陣——」

【嗟臍】 後悔するも及ばざるをいふ(臍ヲ嚙ム)を見よ、

【贅壻】 贅は「コブ」なり、貧くして妻を娶る能はず、婦家に就きて壻となる者をいふ、人の「コブ」の如く、餘剩物の義なり、史記滑稽傳に「淳于髡者、齊之——也」また贅子ともいふ「イリムコ」

【西清古鑑】 四十卷、附錄錢錄十六卷、清の乾隆十四年梁詩正等勅を奉じて撰す、詩正字は養仲、蕭林と號す、錢塘の人、雍正八年の進士、この書三代以上古器の圖式、宣和博古圖、呂氏の考古圖より外、その記載極めて少し、乾隆帝內府儲藏の古器を表章せんと欲し、梁詩正等に命じ博古圖に倣ひ、三代より唐に至る古器の形模を精繪し款識を備摹し以て此の書を成す、錢錄は上伏羲より下元代に及ぶまでの貨幣の輪郭肉好廣狹長短の制を摹せり、

【清聖濁賢】 清聖は清酒をいひ、濁賢は濁酒をいふ、魏志徐邈傳に「醉客謂酒清者爲聖人、濁者爲賢人」

【正正ノ旗、堂堂ノ陣】 孫子の軍爭篇に「無邀正正之旗、無擊堂堂之陣」の直解に「正正トハ旌旗ノ整治スルナリ、旌旗ノ整治セル豈ニ之ヲ邀フルベケンヤ、之ヲ邀フレバ、反テ彼レノ爲メニ乘ゼラル、堂堂トハ、行陣ノ盛大ナリ、行陣ノ盛大ナル、豈之ヲ擊ツベケンヤ之ヲ擊タバ、反テ彼レノ爲メニ勝タル」とあり、

【制詔】 制とは帝王制度の命なり、詔とは告令なり、天子の命令を稱す、史記秦紀に「命爲制、令爲詔」

【聖節】 天子の「ゴタンジャウビ」大學衍義補に「玄宗、帝生ルルノ日ヲ以テ千秋節トナス、此レ後世ノ人君始メテ生ルルノ日ヲ以テ節トナシテ表賀スルノ始ナリ、前代ニ在ツテハ、一君毎ニ一節トナス、宋ノ太祖ハ長春節トナシ、太宗ハ乾明節トナスノ類ナリ、我ガ朝ハ列聖一ニ萬壽節ヲ以テ名トナス、未ダ易フルコトアラザルナリ」と、聖旦ともいふ、

【精切】 くはしくして確かなる義、元史に「布置謹嚴、援據——」

【征繕】 征は賦、繕は補なり、賦稅を富まして、甲兵を補ひ治むる義なり、國語に「不憚——、以立孺子」

【盛饌】 人を饗することの盛なるなり、論語に「有——必變色而作」

【青氈】 家の舊物といふ義に用ふ、晉書王獻之傳に「獻之夜臥齋中、而有偸人、入其室、盜物都盡、獻之徐曰、偸兒、——我家舊物可特置之、群偸驚走」とあるに本づく、

【牲牷】 「イケニヘ」牲は牛羊豕なり、牷は牛の純色にして體全く具るをいふ、左傳桓六年に「吾——肥腯」

【聖善】 母を稱していふ、詩の邶風に「凱風自南、吹彼棘薪、母氏聖善、我無令人」の註に「聖ハ叡、令ハ善ナリ棘以テ薪ト爲ス可キトキハ、則チ材ノ成レルナリ、然レドモ美材ニ非ズ、故ニ以テ子ノ壯大ニシテ善無キヲ興ズルナリ、復タ聖善ヲ以テ其ノ母ヲ稱シ、而シテ自ラ令人ナシトイフ、其ノ自ラ責ムルヤ深シ」と、北夢瑣言に「相國——遇疾苦」

【清楚】 清く「サツパリ」したる義、楚は鮮なり、納還——は借財を「キレイ」に「ハラヒカハス」義なり、

【凄楚】 心にかなしみて苦痛を感ずること、李子卿聽秋蟲賦に「志苦者易——」

【盛唐】 唐の玄宗の開元元年より代宗の大曆の初までの稱、開元天寶の際は、唐代文學の極盛の時にして、李白、杜甫を始め、王維・岑參等輩出し、詩學最盛の時なり滄浪詩話に「論詩如論禪、漢魏晉與盛唐、則第一義也」

【青綺甲】 萌黃威の鎧なり、北轅錄に「甲士皆——居左、紅綺甲居右」とあり、綺は「クミヒモ」條に同じ、

【制吒迦】 不動明王の夾侍なり、頭に天衣をまとひ、左に三鈷を執り、右に金剛棒を杖く、

【聖澤】 ひじりの「メグミ」天子の恩をいふ、曹植の句に「沐浴——」

【聖旦】 天子の「ゴタンジャウビ」明律に見ゆ(聖節)を見よ、

【聖斷】 天子の御決斷(キリモリ)をいふ、貴耳集に「大臣去留出自——宸斷、聖擇に同じ、

【清談ノ露ヤウヤウ繁キ程云云】 駿臺雜話「月は世世の形見」に見ゆ、秋夜のやうやうふけゆきて草葉におく露のしげくなれるを、清雅なる談話の次第に濃かになるにかけていふ、杜甫の詩に「清談玉露繁」とあるなどによるか、

【井地】 井田に同じ、孟子に「使畢戰問——」

【生知】 生れながらにして知る者なり、論語に「生而知之者上也」

【棲遲】 詩經衡門に「衡門之下、可以棲遲」の註に「棲遲ハ遊息ナリ」ユッタリトアソブ」衡門は「カブキモン」をいふ、淺陋なりと雖も、しかも亦以て遊息すべしと、遲は「タダズム」の義、

【掣肘】 類書纂要に「肘動カサント欲シテ、之ヲ掣ク、言フココロハ人事ヲ作サント欲シテ、行フコト能ハザルナリ」と、成語考に「人ノ牽制ヲ受クルヲイフ」と、家語に「宓子賤、字ハ不齊、魯ニ仕ヘテ單父ノ令トナル、君ノ、讒人ヲ聽用シテ、己ヲシテ其ノ政ヲ行フコトヲ得ザラシムルヲ恐レテ 故ラニ君ノ近吏二人ヲ請ヒテ、與ニ俱ニ官ニ至ル、二吏ヲシテ書セシム、輒チ其ノ肘ヲ掣ク、書善カラザレバ、則チ從ッテ之ヲ怒ル、吏患ヘテ辭シテ魯ニ歸ル、子賤曰ク、子ガ書甚ダ善カラズ、子勉メテ歸ラバ、君ニ報ジテイヘ、宓子臣ヲシテ書セシメテ、而シテ臣ガ肘ヲ掣ク、書惡シケレバ 又臣ヲ怒ルト、邑ノ吏皆之ヲ笑フ、君以テ孔子ニ問フ、孔子曰ク、不齊ハ君子ナリ、其ノ材任霸王ノ佐ナリ、節ヲ屈シテ單父ヲ治メテ、以テ自ラ試ム、意フニ其レ此ヲ以テ諫ムルカト、公悟ッテ大息ス」と、說文に「肘ハ臂節ナリ」

【井中星ヲ視ル】 尸子に「自井中視星、所見不過數星、自丘上以望、則見始多也、私心井中也、公心丘上也人私心に蔽はるるときは見るところ狹きに喩ふ、

【成竹】 豫め考案を定むる義、蘇軾の畫竹記に「畫竹必先得成竹於胸中」と、成算の義に轉用す、晁補之の詩に「與可畫竹時、胸中有——」と、與可は文與可とて宋の有名なる畫人、竹を畫くに妙なり、

【青女】 霜の神をいふ、淮南子の天文訓に「青女乃出、以降霜雪」の註に「青女ハ天神、青蘋玉女、霜雪ヲ主ル」

【靜女】 詩經の——篇に「——其姝」靜は閑雅の意、また「ミサヲ」正しき義、姝は美色なり、

【齊女】 蟬の異名(蟬)を見よ、

【青塚】 大明一統志に「大同府王昭君墓、在古豐州西六十里、地多白草、此塚獨青、故名——」

【青帝】 春の神をいふ、尙書緯に「春爲東帝、又爲——」

【井底ノ蛙】 見る所ろ小なるに喩ふ、莊子の秋水篇に「井蛙ニハ以テ海ヲ語ルベカラザルハ、虛ニ拘スレバナリ、夏蟲ニハ、以テ氷ヲ語ルベカラザルハ、時ニ篤ケレバナリ 曲士ニハ以テ道ヲ語ルベカラザルハ 敎ニ束ネラルレバナリ」とあり、虛は、井中の空なり 曲士は、鄉曲の士なり、後漢書馬援傳に「馬援隗囂ニ謂ッテ曰ク 子陽ハ井底ノ蛙ノミ、而シテ妄リニ自ラ尊大ニス」とあり、子陽は、公孫述の字、

【青鳥ヲ投ズ】 太平記卷二十に見ゆ 漢武故事に「七月七日、忽有青鳥、飛集殿前、東方朔曰、此西王母欲來、有頃王母至、二青鳥夾侍王母傍」と、これによりて使者の事にも、書簡の義にも用ふ、

【井田】 周の世の田制なり、孟子に「方里而井、井九百畝、其中爲公田、八家皆私百畝、同養公田」

【星傳】 火急を要する宿驛の乘馬なり、權德輿の句に「——指湘江」飛傳といふに同じ、

【生徒】 弟子なり「ヲシヘゴ」後漢書寇恂傳に「恂素好學、乃修鄉校、敎生徒、聘能爲左氏春秋者、親受學焉」また晉書賀循傳に「朝廷嘉其能、令敎育——」

【性度】 性質に同じ、「ウマレツキ」吳志に「——恢廓」

【成童】 「コドモ」の十五歲以上の稱、後漢書李固傳の注に「——年十五也」禮記內則に「——舞象、學射御」

【齊東野語】 二十卷、宋の周密撰す、密字は公謹、湖州の人、淳祐中、義烏令に官し、宋の亡後仕を求めず、家に終る、この書錄するところ、宋史の闕を補ふに足るもの少からず、和版あり、

【齊東野人ノ語】 妄誕の說なり、孟子に「此非君子之言、齊東野人之語也」齊國の東鄙に居る野人の妄說にして、信ずるに足らざるをいふ、支那の書、妄說には多く齊人を引き、愚人には多く宋人を引けり、

【盛德ノ士ハ亂世ノ疏ンズルトコロナリ】 說苑に「美女者、醜婦之仇也、盛德之士、亂世所疏也、正直之行、邪枉所憎也」

【齊ニ在リテハ太史ノ簡】 (在齊太史簡)文天祥正氣の歌の中の一句、春秋左氏傳に「齊侯ノ弑セラレシトキ其ノ大夫崔杼賊ヲ討ゼズ、太史自ラ崔杼君ヲ弑スト書ス、崔杼怒リテ之ヲ殺ス、其ノ弟嗣ギテ書シ、而シテ殺サルル者二人、其ノ弟又書ス、乃之ヲ舍ス、南史氏、太史盡ク死スト聞キ、自ラ之ヲ書セント欲シ 簡ヲ執リテ以テ往ク、途ニシテ既ニ書セシト聞キテ乃チ還リ

【靜熱ニ勝ツ】 心を淸靜にすれば熱にうちかつをいふ、老子に「躁勝寒、靜勝熱、淸靜爲天下正」

【青年】 わが國にて少年の義に用ふれども、典據を知らず、蓋し詩經に「青青子衿」とありて少年を青衿といふより來りたるものなるべし、青は春の色なり、故に少年は青色の衿をつくるなり(青衿)を參看せよ

【盛年重ネテ來ラズ】（盛年不重來）晉の陶淵明の雜詩十二首の第一にある句なり、曰く「人生無根蔕、飄如陌上塵、分散逐風轉、此已非常身、落地爲兄弟、何必骨肉親、得歡當作樂、斗酒聚比鄰、――――、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人」

【生年百ニ滿タズ、常ニ千歲ノ憂ヲ懷ク】（生年不滿百、常懷千歲憂）文選の古詩の句なり、人生百年に滿たずして、千歲の計を營み、常に以て憂とするをいふ、

【生ノ樂シキヲ知リテ、未ダ生ノ苦シキヲ知ラズ】列子に「人胥知生之樂未知生之苦、知老之憊未知老之佚、知死之惡、未知死之息也」

【性ハ相近シ】（性相近シ）を見よ、

【青ハ藍ヨリ出ヅ】學問して師より勝るをいふ（青ハ藍）を見よ

【生ハ寄ナリ死ハ歸ナリ】人の世に在るは、百年に過ぎず、故に寄といふ、死滅は、猶ほ故土に歸るが如し、故に歸といふ、淮南子に「生寄也、死歸也、何足以滑和」滑は亂なり、

【西伯羑里ニ囚ハル】（西伯囚羑里）史記の周本紀に「崇侯虎、西伯ヲ殷紂ニ譖シテ曰ク、西伯善ヲ積ミ德ヲ累ネ、諸侯皆之ニ嚮フ、將ニ帝ニ利ナラザラントスト帝紂乃チ西伯ヲ羑里ニ囚フ、閎夭ノ徒之ヲ患ヘ、乃チ有莘氏ノ美女・驪戎ノ文馬、有熊ノ九駟他ノ奇怪ノ物ヲ求メ、殷ノ嬖臣費仲ニ因リテ之ヲ紂ニ獻ズ、紂大ニ說ビテ曰ク、コノ一物以テ西伯ヲ釋スニ足ル、況ヤ其ノ多キヲヤト、乃チ西伯ヲ赦ス」とあり、漢書地理志に「羑里ハ地名亳州ニ在リ」と、一說に殷獄に名つけて羑里といふと、

【清白宰相】淵鑑類函卷の六十四に「宋慶曆中杜衍爲相、苞苴貨殖、不敢到門、時號――――」

【清白吏子孫】事文類聚後集に「楊震性廉ナリ、子孫常ニ蔬食步行ス、或人產業ヲ開カシメント欲ス、震曰ク後世ヲシテ稱シテ清白吏ノ子孫タラシム、此ヲ以テ之ニ遺ス、亦厚カラズヤト」また「靈帝楊震ノ孫奇ニ謂ツテ曰ク、卿ハ强項、眞ニ楊震ノ子孫ナリト」

【靜ハ熱ニ勝ツ】心を靜に持つときは、熱氣にうち勝つことを得るをいふ、老子に「躁勝寒、靜勝熱」

【聖ハ益ニ聖ニシテ、愚ハ益ニ愚ナリ】（聖益聖愚益愚）韓愈の師說に「古ノ聖人、ソノ人ニ出ルヤ遠シ、猶ホ且ツ師ニ從ツテ問フ、今ノ衆人ハ、其ノ聖人ニ下ルヤ亦遠シ、而シテ師ニ學ブコトヲ恥ヅ、是故ニ聖ハ益ニ聖ニシテ愚ハ益ニ愚ナリ、聖人ノ聖タル所以、愚人ノ愚タル

所以ハ、ソレ皆此ニ出ヅルカ」

【世範】三卷、宋の袁采著す、采字は君載、宋の信安の人、進士の第に登り、邑宰となり廉明剛直を以て稱せらる、四庫全書提要に「其ノ書、睦親・處己、治家ノ三門ニ分ツ、立身處世ノ道ニ於テ、反覆詳盡ス、文字ハ俚ニ近シト雖モ、末俗ヲ砥礪スル所以ノ者、極メテ篤摯ト爲ス」といへ

【青ハ藍ヨリ出デテ藍ヨリモ青シ】（青ハ藍ヨリ）を見よ、

【成美】誘掖奬勵して人の美を成さしむるなり（君子ハ人ノ）を見よ、

【濟美】（世其ノ美）を見よ、

【齊眉ノ禮】夫に敬ひ事ふる禮をいふ（案ヲ擧ゲテ）を見よ、

【萎斐貝錦】詩經の小雅に「萎兮萎兮、成是貝錦、彼譖人者、亦已太甚」とあり、萎斐は、小文の貌、また文章相錯るをいふ、貝は、介蟲、文彩あり、錦に似たり、萎斐の形に因り、之を文りて貝錦を成すとの意にして、讒人、人の小過に因り、飾りて大罪を成すに比す、一說に、貝錦は錦なり、其の文貝の如し、故にいふと、李白の詩に、「萎斐暗成貝錦粲然」

【世父】伯父をいふ、爾雅に「父之昆弟、先生爲――、後生爲叔父」世とは嫡長にして統を繼ぐ者、漢書王莽傳に「――大將軍鳳病」釋名に「父ノ兄ヲ――トイヒ、又伯父トイフ、伯父ノ弟ヲ仲父トイヒ、仲父ノ弟ヲ叔父トイヒ、叔父ノ弟ヲ季父トイフ」

【征夫】道を行く人なり、行人に同じ、國語の晉語に「莘――」

【青蚨】錢の異名、搜神記に「青蚨ハ蟬ニ似テ稍大ナリ、子ヲ草閒ニ生ムコト蠶ノ如シ、其ノ子ヲ取レバ母即チ飛ビ來ル、母ノ血ヲ以テ錢八十一文ニ塗リ、子ノ血ヲ以テ錢八十一文ニ塗リ、物ヲ市フ每ニ、或ハ先ヅ母錢ヲ用ヒ、或ハ先ヅ子錢ヲ用フレバ、皆マタ飛ビ歸リ、輪環止ムコトナシ」

【凄風】寒くしてすさまじき風、左傳昭四年に「春無――、秋無苦雨」また西南の風をいふ、呂覽有始に見ゆ、

【成風ノ功】太平記卷二十四に見ゆ、莊子の「運斤成風」を見よ、

【清風朗月一錢ノ買フヲ用ヒズ】風月を賞する快樂は、一錢をも費さずして之を受け得るをいふ、李白の襄陽曲に「清風朗月不用一錢買、玉山自倒非人推」また赤壁賦に「且夫天地之閒、物各有主、苟非吾之所有、

雖一毫而莫取、惟江上之清風與山間之明月、耳得之而爲聲、目遇之而成色、取之無禁、用之不竭、是造物者之無盡藏也、而吾與子之所共適」とあるも、意は同じ、

【聖武記】 十四卷、清の魏源撰す、源字は默深、湖南邵陽縣の人、道光二十四年の進士、この書清の開國より道光に至るまでの清主の武功を記す、

【聲聞情ニ過グ】 聲聞は名譽なり、情は實なり、名譽の實に過ぐるをいふ、孟子に「聲聞過ぐ情、君子恥之」

【清廟】 左傳の桓公二年に「清廟茅屋」とありて、註に「廟ハ宗廟ナリ、清トハ肅然トシテ、清淨ノ意」とあり、李商隱の韓碑の詩に「點竄堯典舜典字、塗改——生民詩」——は周の文王の德をほめたたへたる詩の名、

【聖謨】 謨は汎く議して定むる「ハカリゴト」——は極めてすぐれたる謀策にて多く帝王の「ハカリゴト」に用ふ、書經に、大禹謨、皐陶謨あり、また書經に「——洋洋、嘉言孔彰」とあり、

【青盲】 「アキメクラ」筆苑雜記に「托——不仕」と矇の義、矇は眸子あるも見るとなきをいふ、

【世網】 世事の係累に喩へていふ、卓氏藻林に「世網ハ、事ノ嬰纏スルニ喩フ」文選に「世網嬰我身」世繩に同じ、

【世味】 世の中に處する「アヂ」ふた人情、境遇などにいふ語、陸游の句に「——年來薄似紗」

【齊民】 平民に同じ、民は齊等貴賤なし、故にいふ、史記平準書に「——無藏蓋」蓋藏は蓋ひ藏むべき物、

【正名】 論語子路篇に「子路曰、衞君待子而爲政、子將奚先、子曰必也正名乎」とあり、名は實の賓、實は名の主たり、その名あれば必ずその實なかるべからず 故に名實を相稱はしむるを——といふ、

【性命】 易の說卦に「窮理盡性至於命」とあるに原づく、宋儒學問の大綱たり、程子曰く「天ノ付與スル之ヲ命トイフ、之ヲ稟ケテ我ニ在ル之ヲ性トイフ、事物ニ見ハルル之ヲ理トイフ、理ヤ性ヤ命ヤ、三者未ダ嘗テ異ルコアラズ」と、易の乾卦に「乾道變化、各正——」疏に「命ハ人ノ稟受スルトコロ」とあり また——は生命に通じて「イノチ」の義にも用ふ

【盛名】 さかんなる名譽をいふ、後漢書黃瓊傳に「——之下、其實難副」名の盛んなる程に、その實のそはざるをいふ、

【清明】 寒食の節の後、兩日を清明の節といふ、鄴中記に「并州俗、冬至後、百五日爲介子推斷火冷食、謂之寒食」とありて、この日は終日火を用ひざるなり、燕朝樂事に「清明即兩日、謂之寒食」とあり、孝經緯に「春分後十五日、斗乙ヲ指スヲ清明ト爲ス」とあり、六帖に「清明ハ三月ノ節桐始メテ華サク」

【聲名稍減ズ】 名譽が前よりはやや減りたるをいふ、冊府元龜に「蘇環牧人時、稱良吏、及居相位、——」

【聖門人物志】 十二卷、明の郭子章撰す、子章字は相奎、隆慶五年の進士、官兵部尚書に至る、この書は孔子の門に遊ぶ者と、之に私淑して孔廟に從祀せらるる者とを輯めて之が小傳を作り、論贊を附せり、卷末に明代の會典祀儀釋菜等の事を附記せり、

【西門豹】 萬姓統譜に「戰國魏鄴令、鄴俗素信巫覡、歲爲河伯娶婦、選良民處女、投河中、豹問知其害、曰、今歲娶婦、幸來告、吾亦送之、至見其女、豹曰醜、煩大巫入報、即投之河中、又繼投二人、群巫驚懼乞命、從此遂止、因開其河、爲十二渠、以溉田」とあり、詳しくは史記の循吏傳、漢書溝洫志を見よ、

【青陽】 春をいふ、爾雅に「春爲青陽」の註に「氣青クシテ溫陽ナリ」「夏爲朱明」の註に「氣赤クシテ光明ナリ」「秋爲白藏」の註に「氣白クシテ收藏ス」「冬爲玄英」の註に「氣黑クシテ清英ナリ」

【清揚】 眉上廣くして、眼清きなり、詩經に「——婉兮」また揚は眉の上下をもすべていふ、

【聖陽花】 茶の異名、潛確類書に「雙林大士、自往蒙頂、結庵種茶、凡三年、得絕佳者、號——、持歸供獻」

【青蠅】 群小に喩ふ、詩の小雅に「營營——止于樊、豈弟君子無信讒言」とあり 營營は往來して飛ぶ貌、樊は藩なり、ガキ、青蠅藩籬に群がり飛び、其の聲囂くして、人聽を亂る、以て群小の讒言を進め主聽を蔽ふに喩ふ、箋に「蠅ノ蟲タル白ヲ汚シ黑カラシメ黑ヲ汚シ白カラシム、佞人ノ善惡ヲ變亂スルニ喩フ」とあり、陳子昂の詩に「——一相點、白璧遂成寃」蒼蠅を見よ、

【星羅】 星の如く多く列るをいふ、西都賦に「列卒周匝、——雲布」齊書孔稚珪傳に「傳騎——、沿江入漢」

【晴嵐】 嵐は山の氣の蒸してうるほへるもの、——は晴天の日、山に起る一種の氣をいふ、鄭谷の句に「——染近畿」

【性理】 宋儒の性命理氣の學をいふ、

【性理大全】 七十卷、明の永樂十三年に、胡廣等勅を奉じて撰す、廣字は光大、吉水の人、建文二年の進士、成祖の朝、侍講より文淵閣大學士に進む、この書二十五卷までは周子太極圖說一卷通書二卷、張子西銘一卷、正

蒙二卷、邵子皇極經世書七卷、朱子易學啓蒙四卷、家禮四卷蔡元定律呂新書二卷蔡沉洪範皇極內篇二卷を收む二十六卷以下は、理氣、鬼神性理等の十三目に分ちて群書を採錄すれども、統紀なきを以て、康熙帝その要を提げて性理精義を撰せり、

【聲律】 耆舊續聞に「四聲分韻ハ沉約ニ始マル 唐ニ至リテ、乃チ——ヲ以テ士ヲ取ル、則チ今ノ律賦コレナリ、凡ソ表啓ノ類、近代(宋)ニ至リテ——尤モ麗ナリ、或ハ平仄ニ乖ケバ 則チ之ヲ失黏トイフ 然レドモ文人奇ヲ出ス、時ニコノ格ニ拘セザル者アリ」

【勢利ノ交】 權勢財利の爲めに交るをいふ、文中子に「勢ヲ以テ交ハル者ハ、勢傾クトキハ則チ絕ユ、利ヲ以テ交ハル者ハ 利窮スレバ則チ敗ル、君子ハ與セザルナリ」と君子は勢利の人と相交はらずして、但だ道義の人と相交はるをいふ、

【青龍白虎湯】 甌北詩鈔に「儒餐自有窮奢處、白虎青龍一口呑」の註に「俗ニ豆腐青菜ヲ以テ、——、——ト爲ス」

【生靈】 生民に同じ、晉書慕容盛傳に「——仰其德、四海歸其仁」

【清洽】 きよらかなる義、王褒の句に「朝露——而隕其側兮」又水の名、張衡の西京賦に「耕父揚光於——之淵」また風の聲、宋玉の風賦に「清清冷冷愈病析酲」

【青藜杖】 青き「アカザ」の杖藜杖を見よ、

【青帘】 「サカヤ」にたつる、めじるしの旗(酒帘)を見よ、

【清漣】 きよらかなる「サザナミ」謝靈運の句に「綠篠媚——」

【青樓】 遊女屋をいふ 梁の劉邈の詩に「倡女不勝愁、結束下青樓」また曹子建の樂府美女篇に「借問女安居、乃在城南端、青樓臨大路、高門結重關、容華耀朝日」また翠雨軒詩話に曰く「齊武帝于興光樓上施青漆、謂之青樓、是青樓乃帝王之居、故ニ曹植ノ詩ニ、青樓臨大路、駱賓王ノ詩ニ大道青樓十二重トアルハ言其華也、今以妓居爲青樓誤矣、云云」また同書に梁劉邈詩に倡女不勝愁、結束下青樓を以て殆ど妓居を稱して青樓となすの始めとし青樓の事に就きての一義となせり、按ずるに青翠紅等の文字皆物の奇麗なる事に用ふるを常とせり、故に婦人の居所を稱するより、轉じ來て終に妓樓を——といふこと出來しと見ゆ、唐詩に「閨中少婦不知愁、春日凝粧上翠樓」の翠の字も同じ、

【成王桐ノ葉ヲ玉トイヒテ叔虞ニ賜ハス】 (天子ニ戲言)を見よ、

【西王母】 列仙傳一に「——、即龜臺金母也、姓緱、諱回、字婉妧、一字太虛、漢元封元年、降武帝殿、進蟠桃七枚於帝、自食其二、帝欲留核、母曰、此桃非世間所有、三千年一實耳云云」

【靈】 初學記に「風俗通ニ曰ク、舜——ヲ作ル、ソノ形參差トシテ以テ鳳翼ニ象ドル、白虎通ニ曰ク、——ハ中呂ノ氣ナリ、易通卦驗ニ曰ク、——ハ夏至ノ樂ナリ、五經通義ニ曰ク、竹ヲ編シ之ヲ爲ル、長尺有五寸、博雅ニ曰ク、——ノ大ナル者ハ二十三管、底ナシ、小ナル者ハ十管、底アリ、三禮圖ニ曰ク、底ナキ者之ヲ洞簫トイフ(中略)古ノ善ク——ヲ吹ク者 秦女弄玉・仙人——史・漢ノ元帝靈帝アリ」

【小遺】 小便なり、漢書東方朔傳に「醉入殿中、——殿上」

【招隱ノ詩】 左太冲の作るところ二首、文選卷の二十二に出づ、劉良曰く「天下ノ溷濁ヲ思苦ス 故ニ隱者ヲ招尋シ、退イテ仕ヘザランコトヲ欲ス」と、その詩の首に曰く「杖策招隱士、荒塗橫古今、巖穴無結構、丘中有鳴琴、白雪停陰岡、丹葩曜陽林、石泉漱瓊瑤、纖鱗或浮沈、非必絲與竹、山水有清音、云云」世說王子猷戴安道を訪ふの條にも「詠左思招隱詩、忽憶戴安道」とあり、

【招搖】 星の「ヲザス」をいふ、淮南子時則に「——指寅」また「サマヨフ」貌、文選甘泉賦に「徘徊——」

【消搖】 逍遙に同じ、寬縱自適の貌、禮の檀弓に「——於門」

【逍遙】 あちらこちらとさまよひ歩くさま、說文に「——ハ猶ホ翺翔ノ如シ」と、詩の鄭風に「河上乎——」離騷に「——以相羊」また消搖に作り、また徜徉に作る、同じ、

【蕭何】 沛の豐の人、初め沛の主吏椽たり、高祖亭長たり、何常に之を左右す、從つて關に入るに及び、獨り先づ秦の律令及び圖書を收めて之を藏す、漢楚の雄を爭ふや、何常に關中を守り、餽餉を轉給し、軍中乏しきことなからしむ、天下既に定り功第一を以て酇侯に封ぜらる、開國の名相たり、卒して文終と謚せらる、

【紹介】 「ナカダチ」となりて、ひき合せするをいふ、史記の鄒魯列傳に「平原君曰、勝請爲紹介、而見之於先生」の註に「——ハ猶ホ媒介ノゴトシ 且ツ禮ニ賓至ルトキハ、必ズ介ニ因リテ以テ辭ヲ傳フ、紹ハ繼グナリ」

【少艾】 艾は美好なり、容色美好の少年少女をいふ、孟子に「知好色則慕——」

【邵康節】（——）（邵雍）を見よ、

【小學】六卷、宋朱熹編す、その實は門人劉子澄の編、古來の嘉言善行を類輯して、内外二篇となし、童蒙の讀本とす、貝原篤信監定の小學集疏參考とすべし、

【小學紺珠】十卷、宋の王應麟撰す 天道律曆地理人倫性理人事藝文歷代聖賢名臣氏族職官治道制度器用徹戒動植の十七類に分ち、名數によりて編次し小學に便せり、和版あり、

【宵旰】宵衣旰食の略、あさはやく起きて衣服をつけ、日くれて後に食膳に向ふ、天子の政に勤勉したまふに用ふ、旰は晩なり、漢書張湯傳に「日旰天子忘食」とあり、また唐書に「無——之憂」

【小韓子】明史に「方孝孺少クシテ聰穎絶倫ナリ、雙眸烱烱トシテ電ノ如シ、書ヲ讀ムニ、一目十行竝ビ下ル、髫齔ノ時ニ方リテ、既ニ善ク文ヲ屬ス、鄉人稱シテ小韓子トス、學士宋濂其ノ文ヲ見テ之ヲ薦メテ京ニ至ラシム、太祖召シテ親シク文ヲ試ミ、太子ニ謂ヒテ曰ク、此レ異人ナリ、留メテ以テ汝ヲ輔ケシムト、燕王ノ簒立スルニ及ビテ、屈セズシテ遂ニ節ニ死ス（方孝孺）」を參看せよ、

【招麾】指麾に同じ、「サシマネク」荀子の成相篇に「呂尙——般民懷」

【銷金帳下】黄金を銷費し盡して、惜まざる場所の義、遊女屋等に用ふ、書言故事に「宋ノ陶學士穀、妾アリ、本黨大尉進ノ家姬ナリ 一日雪フル、穀雪水ヲ取リテ團茶ヲ烹ル、妾ヲ顧ミテ曰ク、黨ノ家ニ此ノ景アリヤ否ヤト、曰ク、彼レ粗人安ゾ此ノ景ヲ識ラン、但ダ能ク銷金帳下ニ於テ、淺ク斟ミ、低ク唱ヘ 羊羔美酒ヲ飲ムノミト、穀大ニ慚ヅ」

【少君】（鮑宣ノ）を見よ、

【昭回】昭は光、回は轉なり、其の光天に隨つて轉ずるをいふ、詩の大雅に「倬彼雲漢、——于天」倬は著なり、大なり、また蘇軾の韓文公廟碑に「草木衣被——光」

【焦竑】字は弱侯、明の南京江寧の人、萬曆十七年、殿試第一を以て、翰林修撰に官す、萬曆四十八年卒す、年八十、著すところ、國史經籍志・老莊翼等あり

【小過ヲユルシテ賢才ヲ見ルベシ】十訓抄第一に見ゆ、論語子路篇に「仲弓爲季氏宰、問政、子曰、先有司、赦小過、舉賢才」と、有司は衆職なり、宰は衆職を兼ねれども、事必ず先づ衆職に爲さしめ、而して後ちその成功を考ふるときは己勞せずして事皆舉るなり「見ル」とは察して知り用ふる意、

【韶濩】（——）を見よ、

【蕭關】秦の北關なり、平凉府鎮原縣に在り、史記に「漢文帝ノ時、匈奴蕭關ニ入ル」とあるは即ち是れなり、長安を距ること千里餘、

【小奚】奚は「シモベ」——は年わかき「シモベ」唐書に「小奚奴背古錦囊」

【小經】易・書・春秋公羊・穀梁傳をいふ（大經）を見よ、

【僬僥】短人なり、史記仲尼世家に「——氏三尺、短之至也」また列子に「從中州以東四十萬里、得——國人長一尺五寸」

【小姑】「子ジウトメ」夫の妹をいふ、王建の新嫁娘の詩に「未諳姑食性、先遣——嘗」

【韶濩】韶は虞舜の樂、濩は殷湯の樂、周禮春官の大司樂の疏に「濩ハ即チ救護ナリ、救護シテ天下ヲシテ所ヲ得シムルナリ」と、韓文の上襄陽于相公書に「正聲諧——濩一音」（クワク）

【小功】三ヶ月の喪服なり（大功）を見よ、

【招魂】「タマシヒヲマネキカヘス」卓氏藻林に「古者人死スレバ、人ヲシテ屋ニ升ラシメ以テ之ヲ招ク、荆襄ノ俗、或ハ以テ之ヲ生人ニ施ス、宋玉、屈原ノ魂魄離散セルヲ閔ム、故ニ——ヲ作リテ以テ其ノ精神ヲ復シ其ノ年壽ヲ延バシメントス欲スルナリ」後漢書趙咨傳の注に「——復魄」

【銷魂橋】天寶遺事に「長安ノ灞陵ニ橋アリ、來ヲ迎ヘ去ヲ送ル、皆此ニ至ル、呼ビテ——ト爲ス」

【小歲】冬至をいふ、亞歲に同じ、魏書孝文帝紀に「太和十五年十有一月初罷——賀」

【照歲燈】歲時記に「除夕燈ヲ點スルヲ——トイフ」

【噍殺ノ音】噍は急にしてかなしむなり、殺は減りて隆ならざるなり、禮記の樂記に「——之作、而民思憂」また「其哀心感者、其聲噍以殺」

【小倉山房外集】六卷補遺一卷清の袁枚撰す、この書は枚の四六文を收錄す、枚詩文を以て一家を成す、而して四六文はその尤も長ずるところ、跌宕贍麗にして六朝の體格を得たり、

【小倉山房詩集】三十七卷、附續二卷、清の袁枚撰す、枚の詩性靈を主として古を師とせず、務めて新奇を求むるの弊、輕薄淺俗に流るるに至る、

【笑殺】笑ふことの甚しきなり、恨殺・惱殺・愁殺等の殺皆同じ、南史桓崇祖傳に「自可拍手——」

【鄉散】しづかにしてひまなること、唐書に「野服——」

【抄紙】紙をすくこと、天工開物に見ゆ、

【梢子】 梢は「コズエ」轉じて船の柁尾をもいひ、また「柁」をもいふ、字彙に「船柁尾曰梢、今人謂篙師爲——、或作筲」と、訓蒙字會にも「俗ニ船上ノ篙師ヲ謂ッテ——トナス」「サヲサシ」

【簫史】 列仙傳二に「——得道、好吹簫、秦穆公、以女弄玉妻之、遂教弄玉吹簫作鳳鳴、有鳳來止其屋、公爲作鳳臺、後弄玉乘鳳、——乘龍、共昇天去、故秦人作鳳女祠、時有遺音云云」

【蕭寺】 寺を——といふ、梁の武帝姓は蕭、諱は衍、佛を好み、佛寺一萬三千餘を創建す、故に——といふ、

【小事】 ヲ輕ンズル勿レ小隙舟ヲ沈ム】 (勿輕小事、小隙沈舟)列子の語、下に「勿輕小物、小蟲毒身」とあり、

【小醜】 醜は類なり、小人の類をいふ、國語に「王猶不堪況爾——」

【少室】 達磨尊者の九年面壁せし處なり、河南の嵩山の三尖峰中の東なるを大室といひ、西なるを——といふ、その峰中に少林寺あり、故に少林少室といふ、祖庭事苑に「嵩山少林、初祖面壁之處、西域記云、其山東爲太室、西謂——、高八百六十丈、上方十里、少室與太室相望、但小耳」

【蕭瑟】 「モノサビシ」蕭蕭に同じ、また風の吹きすさぶ聲をいふ、楚辭九辯に「悲哉秋之爲氣也——、草木搖落而變衰」

【小忍バザレバ則チ大謀ヲ亂ル】 (小不忍則亂大謀)婦人の仁、匹夫の勇の如きは、忍ぶこと能はず、故に大事を謀り之を成すこと能はざるの謂なり、論語衛靈公篇に「巧言亂德、——」

【小人】 身分の賤しき者をいふには、孟子に「有——之事」とある——の如し、心のまがりて度量せまき者をいふには論語に「——窮斯濫矣」とある——の如し、即ち君子の反對なり、王充論衡に「——恥其面不如子都、古の美貌を以て名高き人、君子恥其行不如堯舜」荀子に「——之學也、入乎耳、出乎口、口耳之間、則四寸耳、曷足以美七尺之軀哉」また同書に「——能則倨傲僻遠、以驕溢人、不能則妬嫉怨誹、以傾覆人」

【小盡】 陰曆の小の月の終をいふ、歲華紀麗の注に「三十日ヲ大盡ト爲シ、二十九日ヲ——ト爲ス」

【蕭森】 木立の高く生ひ茂りて「モノスゴキ」をいふ、張九齡の詩に「江城何寂歷、秋樹亦——」

【小人窮スレバ斯ニ濫ス】 論語衛靈公篇に「子曰君子固窮、小人窮斯濫矣」と濫とは溢るるなり、法度の外に放出するをいふ、小人は困窮の場に臨みて、兎角に安

んずること能はず、法を越えて非をするものなりとの義、

【小人ニシテ高位ヲ踏ムコトヲ嫌フ】 十訓抄第六に見ゆ、これは賈島が王鳳凰賦中の語に「嫌小人而踏高位、鶴有乘軒、惡利口之覆邦家、雀能穿屋」とあるを斥す、衞ノ懿公ガ鶴を參考せよ、

【小人ノ過ハ必ズ文ル】 (過ヲ文ル)を見よ、

【小人ノ交ハ甘クシテ醴ノ若シ】 (醴水)を見よ、

【小人ノ勇】 匹夫の勇に同じ、荀子に「輕死而暴、是小人之勇也」

【小人面ヲ革ム】 (小人革面)易の革卦上六に「君子豹變——」とあり、參辭に「——、順以從君也」と、小人はその心盡く變化して善に遷ることは得ざるも、その外貌を改革して上の風化に從順せしむるを得べしとなり、

【小心翼翼】 翼翼とは、恭愼の貌、詩の大雅文王篇に「維此文王、——」

【抄寫】 「ヌキガキ」抄錄に同じ、事文類聚に「梁袁峻——日課五十紙」

【灑洒】 洒一音、サイ——は「サッパリ」としたる義、清淨なり、北山移文に「——出塵之想」

【小祥】 一周忌をいふ、眞俗佛事編に「禮記ニ據ルニ、親亡シテ十三ヶ月ノ祭ヲ——トイフ、二十五ヶ月ノ祭ヲ大祥トイフ(中略)祥ハ「サイハイ」ト訓ス凶服ヲ去ッテ吉服ニ從フ義ナリ」

【霄壤】 大差あるに喩ふ、類書纂要に「霄壤ハ天地ナリ霄は天に近き雲氣をいふ、

【瀟湘】 水の名、湖南省なる洞庭湖の南に在り、湘水は永州府の北を流れ、湘江に至りて瀟水と合す、河水清澄十尋の底を見るべし、この邊、風光佳絶なるを以て——八景の名あり、

【蕭牆ノ憂】 (蕭牆之憂)「ウチワ」の騷動をいふ、蕭牆は門屏なり、禍患は、近く門屏の中に在るの義にして、內變あるをいふ、蕭は肅なり、牆は屏をいふ、君子相見るの禮、屏に至りて肅敬を加ふ、論語の季氏篇に「吾恐季孫之憂、不在顓臾、而在蕭牆之內也」顓臾は小國、魯國の附庸なり、韓非子に「不謹蕭牆之患、而固金城於遠境」

【椒酒】 「サンセウ」その他の藥を調合してひたせる酒、屠蘇(トソ)の類なり、荆楚歲時記に「正月一日長幼以次拜賀進——」と、錦字箋に「元日——ヲ進ム、次第少ヨリ老ニ至ル、今ノ屠蘇ハソノ遺意ナリ、又元日酒ヲ

飲ムヲ長命盃トイフ」

【小春】 陰暦十月をいふ「コハル」荆楚歳時記に「十月天氣和暖春ニ似タリ、故ニ——トイフ」竹を參看せよ、

【抄書】 讀書の際、心に感じたる事をぬきがきする義、抄は鈔に同じ、南史王筠自序に「余少好——、老而彌篤、雖過見瞥觀、皆即疏記、後重省覽、歎息彌深」と、蘇軾の詩に「白首尚——」

【宵燭】 螢の異名(螢)を見よ、

【銷暑招涼之珠】 暑氣を消し、涼氣を招く寶玉、王嘉の拾遺記に「黒蚌千歳、一生珠、昭王常懷此珠、當隆暑之月、體自涼、號曰——————」

【焦遂】 唐人、口吃にして客に對して一言を出さず、醉後應答響の如し、飲中八仙歌にいふ「——五斗方卓然、高談雄辯驚四筵」

【憔悴】 憂ふる貌、詩經に「或燕燕居息、或——事國」孟子に「民之——於虐政未有甚於此時者也」また瘦せ衰ふる義、屈原の漁父辭にも「顏色——形容枯槁」

【小成】 小事を成し遂げたる義、禮記の學記に「七年視論學取友、謂之——」

【小星】 妾の異稱なり、詩の召南の小星篇に「嘒彼小星、三五在東、肅肅宵征、夙夜在公、寔命不同」の註に「嘒ハ微ナル貌、三五ハ其ノ稀ナルヲイフ、蓋シ初昏、或ハ將ニ明ケントスル時ナリ、南國ノ夫人、后妃ノ化ヲ承ケテ、能ク妬忌セズシテ、其ノ下ヲ惠ム、故ニ衆妾ノ之ヲ美ムルコト此ノ如シ、蓋シ衆妾君ニ進御スル、敢テ夕ニ當ラズ、星ヲ見テ往キ、星ヲ見テ還ル、故ニ見ル所ロニ因リテ興ヲ起シシナリ」

【宵征】 「ヨル行ク」こと、前條を見よ、

【少成天性ノ若シ】 孔子家語に「少成若天性、習慣成自然」とあり、漢書賈誼傳にも出づ、

【招召】 人、をまねくをいふ、楚辭招魂の序に「招者召也、以手曰招、以口曰召」

【招招】 說文に「手ニテ呼ブナリ」詩經の邶風に「——舟子」傳に「——ハ號召ノ貌、聲をあげて呼ぶにもいふ、

【悄悄】 憂ふる貌、詩の邶風に「憂心——」悄然、悄乎、悄切と同じ、

【蕭蕭】 さびしき義、凄涼なり、史記刺客傳に「風——兮易水寒」雨の「サビシク」ふる貌にもいふ、

【瀟瀟】 風雨の暴疾なる貌、はやくしてはげし、詩經の鄭風に「風雨——」

【蟏蛸】 「アシタカグモ」詩の豳風東山に「——在戶」朱註に「——ハ小蜘蛛也、戶無人出入、則結網當之」と、爾雅に「——長蹻」郭注に「小蜘蛛長脚者、俗呼爲喜子」、陸璣云、此蟲來著人衣、當有親客至、有喜也、幽州人謂之親客」と、人家の簷外に多く網を結ぶ身小にして脚甚多し、

【擾擾】 猶ほ紛紛といふが如し、亂るる貌、國語に「唯有諸侯、故——焉」

【簫韶九奏スレバ、鳳舞ヒ魚跳ル】 太平記 卷十七に見ゆ、書の益稷に「簫韶九成、鳳凰來儀」とあるに本づく、簫韶は舜の樂の名、樂の面白きに感じて然り、魚跳るとは、荀子に「瓠巴鼓瑟而游魚出聽」とあるなどを思ひ合せて書きたるものなるべし、

【饒舌】 多言をいふ、俗にいふ「オシヤベリ」なり、傳燈錄に「閭丘胤、出デテ丹丘ニ牧タリ、豐干禪師謂ツテ曰ク、若シ任ニ到ラバ、文殊普賢ニ謁セヨ、天台ノ國清寺ニ在リ、爨ヲ執リ器ヲ洗フ者、寒山拾得是レナリト、閭丘胤寺ニ至ツテ之ヲ訪フ、二人廚ニ在リ、爐ヲ圍ンデ笑語ス、閭丘覺エズ拜ヲ致ス、二人聲ヲ連ネテ叱咄ス、寺僧驚愕シテ曰ク、大官何ゾ風狂漢ヲ拜スルヤト、寒山閭丘ノ手ヲ執リ、笑ツテ言ツテ曰ク、豐干饒舌ト、久シクシテ之ヲ放ツ」豐干は彌陀佛、寒山拾得は文殊普賢の化身なりといふ、

【蕭然タル環堵】 駿臺雜話「年にはつかし」に見ゆ、いとせまき住居をいふ、蕭然はものさびしき貌、晉書陶潛傳に「環堵蕭然、不蔽風日、短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也」(環堵ノ室)を見よ、

【昭蘇】 回生なり、暗にして明を得るが如く、死して更に生くるが如きをいふ、禮記の樂記に「蟄蟲——」註に「昭ハ曉ナリ、蟄蟲以テ發生スルヲ曉トナシ、更息スルヲ蘇トイフ」

【蕭疎】 「マバラ」にして、さびしき義、范成大の詩に「瘦草——已似秋」

【樵蘇】 樵は薪を取り、蘇は草を取るをいふ、史記淮陰侯傳ニ「——後爨、師不宿飽」また文選に「——往而無忌」

【少壯不努力、老大徒傷悲】 文選二十七、長歌行に「青青園中葵、朝露待日晞、陽春布德澤、萬物生光輝、常恐秋節至、焜黃華葉衰、百川東到海、何時復西歸、——————」

【消息】 時の「ウツリカハル」をいふ、易の豐卦に「日中則昃、月盈則食、天地盈虛、與時消息」の註に「消息ハ進退ヲイフナリ」とあり、禮記の月令の註には「陽生ズルヲ息トナシ、陰死スルヲ消ト爲ス」とあり、また文選の註

には「消ハ往ナリ、息ハ來ナリ」とあり、書札を消息といふも、亦往來の意なり、晉書に「陸機語レ犬曰、我家絶無書信、汝能齎書取消息、不、犬遂至家、得報還洛」とあり「タヨリ」「オトヅレ」杜甫の詩に「因君問——こまた——は動止の如し、蜀志諸葛亮傳に「承知——、慨然永歎」

【昭代叢書】 清朝人の雜著を編す、甲乙丙三集は、張潮の編、丁集以下は後人の續輯に係る、

【少男風】 將に雨ふらんとして急に至る風をいふ(少女ノ風)を見よ、

【笑中ニ刀アリ】 (笑中有刀)表面に溫和を裝ひて、内に害心を蓄ふるをいふ、事類全書に「李義甫、容貌溫恭、人ト語ルトキハ、必ズ嬉怡微笑ス、而シテ狡險忌克ナリ故ニ時ノ人義甫ヲ笑中ニ刀アリト謂フ」

【消長】 消は盡なり、滅なり、——は、猶ほ榮枯の如し、易の泰卦に「君子道長、小人道消」

【邵長蘅】 字は子湘、青門と號す、清の江蘇武進の人、少くして奇童と稱せらる、十歳諸生と爲り、試必ず高等、後ち舉子の業を棄て、益〻心を六經三史に潛め久之にして融釋貫串し、大いにその辭を放にす、論者以爲らく、清初文を以て鳴る者、侯方域と魏禧とより外は、惟青門鼎足して立つべしと、著す所ろ正誼堂集・古今韻略等あり、卒する年六十八、

【昭著】 明かにいちじるし、明著に同じ、南史に「若斯——顯著・彰著など略同じ、

【小重陽】 陰暦九月十日をいふ(重陽)を見よ、

【陪直】 正字通に、陪は通じて峭に作ると、次の(峭直)を見よ、

【峭直】 峭は山のけはしきをいふ、——は急なり、嚴厲なり、人と爲りのきびしくおごそかなるをいふ、漢書鼂錯傳に「錯爲人——刻深」

【詔勅】 文心雕龍に「詔ハ誥ナリ、敕ナリ、百姓ニ告ゲ敕フル所以ナリ」と、文體明辨に「秦天下ヲ幷セ、命ヲ改メテ制トイヒ、令ヲ詔トイフ、是ニ於テ詔興ル、漢ノ初メ命四品ヲ定ム、其ノ三ヲ詔トイフ、後世之ニ因ル」とあり、勅は戒勅なり、戒勅して文を爲る、實に詔の切なる者なり、漢の制に、天子の命令に四あり、其の四を戒書といふ、卽ち戒勅なり、わが國にては、大寶令の義解に「謂詔書勅書、同是綸言也、但臨時大事爲詔、尋常小事爲勅」とあり、

【少女ノ風】 微風をいふ、魏志管輅傳の註に「清河旱、倪太守問輅雨期、輅言樹上已有少女微風、樹間陰鳥和

鳴、又少男風起、衆鳥和翔、其應至矣、須臾果大雨」

【椒庭】 後宮をいふ、椒房に同じ、卓氏藻林に「椒房殿名、皇后所居」とあり(椒房)を見よ、

【霄雷】 高峻の貌、淮南子原道訓に「上游於——之野、下出於無垠之門」

【蕭條】 極めてさびしき義、蕭蕭に同じ、班固の燕然山銘に「——萬里、野無遺寇」淮南子齊俗訓の注に「——ハ深靜ナリ」

【小篆】 (大篆)を見よ、

【焦土】 燒けつち、杜牧の阿房宮賦に「楚人一炬、可憐——」

【蕭統】 字は德施、小字は維摩、梁武帝の太子、性仁孝にして寛和よく衆を容る、書を讀むに五行俱に下る、嘗て周秦以來の詩文を編次し文選といひ、大に世に行はる、中大通三年四月薨ず、年三十一、朝野之を痛み、昭明と謚す、

【焦頭爛額上客トナル】 (焦頭爛額爲上客)昔、人あり、火災のあらんことを憂へて、豫防の策を立て、煙突を曲げ薪を他に徙せと勸めたれども、用ひられず、その後果して火を失ふに至り、頭を焦がし、額を爛らして、之を鎭めし者は、尊ばれて上客となり、豫防策を進めしものは、恩澤を蒙らざりき、以て禍亂を未萌に察し、之を妨ぐの策を講ぜしものは捨てられ、鎭定の功を立てたる者のみ、重賞を受くるに喩ふ、漢書霍光傳に「曲突徙薪亡恩澤、——————」

【小頓】 「ナカヤスミ」「コヤスミ」客越志ニ「過浮橋——」

補陀寺」

【燋熱大燋熱】 太平記 卷二に見ゆ、八大地獄の中の第六第七の名なり、俱舍論には「炎熱極炎熱」とあり、罪人の身よりも又外の器物などよりも皆猛火を出して互に相燒害する所ろの地獄なり、燋は焦なり、

【招牌】 「カンバン」莊子駢拇篇に「自虞氏招仁義以擾天下也、天下莫不奔命於仁義」この林希逸の註に「招ハ猶ホ今人ノ——ト言フガ如シ」と、招子に同じ、

【椒房】 漢官儀に「皇后ヲ椒房ト稱ス、其ノ實蔓延シテ升ニ盈ツルニ取ル(子孫の椒子の如く多からんとを欲するなり)椒ヲ以テ室ヲ塗ルハ、溫暖ニシテ惡氣ヲ除クニ取ルナリ、猶ホ天子ノ殿上ヲ、朱泥ニシテ、丹墀トイフガ如シ」

【蕭望之】 字は長倩、漢の東海蘭陵の人、杜陵に徙る、素より重望あり、仕へて太子太傅に至る、宣帝疾篤し、遺詔を受けて政を輔け、尙書の事を領す、元帝位に即く、

望之師傅を以て重んぜられ、匡正するところ多し、後ち弘恭・石顯のために害せらる、

【召伯ガ政ノヤハラカナリシニ、州民甘棠ノ詠ヲナシ】十訓抄第一に見ゆ、民が召公の德を思慕する餘り、公が嘗てやどりし甘棠の樹までを愛せしとなり（甘棠ノ條を見よ、

【燒尾荒鎭】三代實錄貞觀八年正月二十一日の條下に「是日敕禁諸司諸院諸家諸所之人、————并責人求飲及臨時群飲」と見えたり、さて燒尾は唐書にいふ、大臣始めて官を拜すれば、食を天子に獻ず、名づけて燒尾といふ、蘇環相と爲る、食貴く百姓の不足せるを以て、獨り進めずと、然れども唐人の小說に載する所ろは此れと同じからず、乃ち云ふ士の初めて登科し、及び官に在る者、遷除せらるれば朋僚慰賀す、皆盛に酒饌を置き、音樂して之を宴するを燒尾となすとあり、されば燒尾は置酒宴樂するをいへり、荒鎭とは三代實錄私記に云ふ「酒無度謂荒鎭鎭者沈湎之意ナリ」とあり、封演聞見錄に「士子初登榮進及遷除、朋僚慰賀、必盛置酒饌音樂、以展歡宴謂之燒尾說者、有虎變爲人、唯尾不變須爲燒除乃得成人、故以初蒙拜授、如虎得爲人、本尾猶在脫體既合、方爲焚之」と、また聞見錄に「初メテ登第シテ宴ヲ設クルヲ燒尾燕トイフ、說ク者イハク、新羊羣ニ入リテ、抵觸ス、須ラク尾ヲ燒キテ乃チ定ルベシ」

【詔武】詔は舜の樂、武は武王の樂なり、論語八佾に「子謂詔盡美矣、又盡善也、謂武盡美矣、未盡善也」

【笑柄】「ワラヒグサ」玉堂叢話に「陳太常嘗テ誤リテ戶部ニ入リ、稅銀ヲ入ルル者ヲ見テ驚キテ曰ク賄賂公行此ニ至リテ極マルト、人以テ——ト爲ス」

【昭穆之序】宗廟の制は、中央に太祖の廟ありて、左に二代目、右に三代目、また左に四代目、右に五代目と、此の如くいりちがへて、左を昭といひ、右を穆といふ、又祭る人の坐位にも、昭穆の序ありて、其の次序に從ひて坐するを禮とするなり、禮記の王制に「天子ハ七廟ナリ、三昭三穆、大祖ノ廟ト與ニ七ツ、諸侯ハ五廟ナリ、二昭二穆、大祖ノ廟ト與ニ五ツ、大夫ハ三廟ナリ、一昭一穆、大祖ノ廟ト與ニ三ツ、士ハ一廟ナリ、庶人ハ寢ニ祭ル」とあり、又祭統に「夫レ祭ニ、昭穆アリ、昭穆アルハ、父子遠近長幼親疏ノ序ヲ別チテ亂ルナキ所以ナリ、是ノ故ニ、大廟ニ事アレバ、則チ群昭群穆咸ク在リテ、其ノ倫ヲ失ハズ」

【抄本書】「ヌキガキボン」巖棲幽事に「——如古帖、

不必全帙皆是斷璧殘珪」

【照冥】「ボンノオクリビ」熙朝盛事に「七月十五日俗ニ傳ヘテ中元ノ節トナス、僧家盂蘭盆會ヲ建テ、燈ヲ西湖及ビ塔上河中ニ放ツ之ヲ——トイフ」

【昭明太子】（蕭統）を見よ、

【焦螟蚊睫ニ集ル】（焦螟集於蚊睫）焦螟は蟲の至微なる者なり、人の世に在りて互に相爭ふを達觀するときは、猶ほ焦螟が蚊睫の中に集まりて、相觸るるが如しとなり、列子に「江浦之閒生麽蟲、其名曰焦螟、群飛而集於蚊睫、而相觸也」晏子にも見ゆ、張華の賦に「焦螟巢於蚊睫、大鵬彌乎天隅」

【邵雍】字は堯夫、宋の河南の人、學を爲す堅苦刻厲、寒けれども爐せず、暑けれども扇せず、夜、席に就かざる者數年なりき、北海の李之才初めて雍を百源に見、授くるに物理性命の學を以てす、是に於て妙悟自得する所ろあり、德氣粹然人に遇ひて貴賤賢愚となく、一に接するに誠を以てす、羣居燕飲笑語終日、甚だ異ることを人に取らず、人の善を言ふを樂みて、未だ嘗てその惡に及ばず、神宗の熙寧十年卒す、年六十七、元祐中康節と謚す、著す所ろ、皇極經世書・觀物篇・伊川擊壤集等あり、雍の學を世に百源學派と稱す、程明道行狀に「明道兄弟、初メ其ノ父ニ侍シテ、邵堯夫ヲ識ル、後堯夫ヲ天津ノ廬ニ訪フ、堯夫酒ヲ携ヘテ、月ニ陂上ニ飲ミ數ブコト甚シク、論議終夕、明日、二程周純明ニ謂ヒテ曰ク、昨堯夫先生ニ從ヒテ游ビ、其ノ議論ヲ聽クニ、振古ノ豪傑ナリト、周曰ク、言フ所ロハ如何、曰ク、內聖外王ノ道ナリト、又曰ク、堯夫ハ襟懷ノ放曠ナルコト、空中ノ樓閣ノ如ク、四通八達スト」

【招來】人を招きすすめて己の方へ至らしむる義、史記に「大夏之屬、皆可——而爲外臣」

【小流】ちささながれ、荀子に「不積——、無以成江海」

【小利ハ大利ノ殘】小き利をはかるは、大なる利を得る上に、害となるをいふ、韓非子に「十過、一ニ曰ク小忠ヲ行フハ、則チ大忠ノ賊ナリ、二ニ曰ク、小利ヲ顧ルハ則チ大利ノ殘ナリ云云」また、說苑の敬愼篇に「小忠ハ大忠ノ賊ナリ、小利ハ大利ノ殘ナリ、戰ヲ好ムノ臣、察セザルベカラズ」論語の子路篇に「見小利則大事不成」とあると同じ、

【少林】（少室）を見よ、

【照臨】貴人の過ぎり訪はれしにいふ、左傳文十二年に「襄仲辭玉曰、君不忘先君之好、——魯國、鎭撫其

社稷重之以大器寡君敢辭玉云云」また天子の位に即きて下萬民に臨まるる義にも用ふ

【噍類ナシ】 遺類なきをいふ噍は嚼(カミコナス)なり、また生活して噍食する者なき義、漢書高帝紀に「襄城無噍類」

【鷦鷯深林ニ巣クフモ一枝ニ過ギズ】 (鷦鷯巣於深林、不過一枝)人各其の分に安んずべきに喩ふ、莊子逍遙遊の語、鷦鷯は一に巧婦鳥ともいふ「ミソサザイ」巣を深山の崖の樹枝に營む 人の髪、馬の尾等を以て蘆花を綴りその形機の如く極めて巧緻なり(偃鼠)を見よ、

【譙樓】 譙は遠を望み、敵をうかがふために、城門の上にたてたる高樓、康熙字典に「——城樓也」と、漢書陳勝傳には「戰譙門中」とあり、——は一に戍樓ともいふ、

【蕉鹿】 鄭人野に薪する者あり、駿鹿に遇ひ、之を擊つて斃す、人の之を見んことを恐るるや、遽に之を隍中に藏し之を覆ふに蕉を以てす、俄にしてその藏するところの處を遺る、遂に以て夢となすと列子に見ゆ、

【世界】 楞嚴經卷四に「世爲遷流界爲方位」とあり、世とは遷流とて時の遷り變り行く義、過去現在未來と時の流行するをいふ、界とは境界の義にて上下四方の界限をいふ、即ち世は時間にて堅に就きていひ界は方面にて幅に就きていふ、この時間と方面とを具ふるものを——といふ、

【施餓鬼】 餓鬼に施す義、無緣の亡者の靈を弔ひて讀經供養するをいふ、眞俗佛事編に「吾ガ門ノ徒ハ日日必ズ此法ヲ可修儀軌ニモ所獲福利果報不可校量トイヘリ云云」

【是耶非耶】 (天道ハ是カ)を見よ、

【斥鷃】 鷃は鷄に同じ(フナシウヅラ)斥は澤なり、小澤にすむ小鳥なり、己の分を知らずして妄に人を笑ふを「——笑」といふ、莊子逍遙游に「有鳥焉其名爲鵬背如泰山翼若垂天之雲搏扶搖羊角而上者九萬里絕雲氣負青天然後圖南且適南冥斥鷃笑之曰彼且奚適也云云」とあるに本づく、

【席暖ナルニ暇アラズ】 (席不暖)韓愈の爭臣論に「孔席不暖」とあり、孔子四方に周流して、其の教を行はんとす、座席未だ暖まらずして、則ちまた他に往くをいふ、

【石尤風】 江湖紀聞に「石氏ノ女、嫁シテ、尤郎ノ婦トナル、尤出デテ歸ラズ、妻之ヲ憶ヒ、病ミテ亡スルニ臨ミ、歎ジテ曰ク、吾レ其ノ行ヲ阻ムル能ハザリシヲ恨ム、今ヨリ凡ソ商賈ノ遠行スル者ハ、吾レ當ニ大風ヲ作シ、天下ノ婦人ノ爲メニ之ヲ阻ムベシト、自後商旅打頭ノ風ニ値ヘバ、則チ曰ク此レ——ナリト」宋武帝丁督護歌に「願作——、四面斷行旅」

【赤衣使者】 赤蜻蜓なり、古今注に「一名——、亦名赤弁丈」大窪詩佛の詩に「——向風飛」

【尺一】 天子の詔をいふ、東坡いふ「尺一東呼我歸」と、品字箋に「漢ノ制、一尺一寸ノ簡牌ヲ以テ天子ノ詔ヲ寫シシヨリテイフ」と、後漢書陳蕃傳に「——選舉」

【積羽舟ヲ沈ム】 (積羽沈舟)至つて輕き物も、多く積み重ぬるときは、遂には舟を沈むるに至る、以てつまらぬ事にても、說く者多きときは、つひに惑はさるるに至るに喩ふ、戰國策に「張儀魏王ニ說キテ曰ク、天下ノ游士、日夜腕ヲ搤シ、目ヲ瞋シ、切齒シテ以テ從ノ便ヲ言ヒ、以テ人主ニ說カザルハナシ、人主ソノ辭ヲ覽テ、ソノ說ニ牽カル、惡ンゾ眩セラルルナキコヲ得ンヤ、臣聞ク、——群輕折軸衆口鑠金積毀銷骨ト、故ニ願クハ大王ノ之ヲ熟計センコヲト」史記張儀傳にも見ゆ、

【石堰】 堰は字書に「壅水也」とあり、——は石をたたみて水をせき留むるなり「キセキ」

【石燕翔ル】 雨の降る前兆、錦字箋に「零陵山中ニ、石燕アリ、將ニ雨フラントスレバ、則チ飛翔シテ生クルガ如シ」この事、五雜組に見ゆ、石燕は飛ぶ理なし、よりて其の實なくして名のみあるを石燕飛ぶといふ、

【績ヲ考フ】 (考績)人の賢否、事の得失を考へ察する義、書經に「三歲一考黜陟幽明」

【席ヲ前ム】 書言故事に「重ク人ヲ待ツヲ之ガ爲メニ席ヲ前ムトイフ、漢書ニ、賈誼長沙王ノ大傅タリ、文帝之ヲ徵ス、至リテ入リ見ユ、上因テ鬼神ノ本ヲ問フ、誼ツブサニ然ル所以ヲイフ、夜半ニ至リ文帝席ヲ前ムト」前席は坐する所ろの席を促近するをいふ、

【席ヲ以テ門トナス】 (席門)を見よ、

【石介】 字は守道、徂徠と號す、宋の兗州奉符の人、天聖八年の進士太子中允に遷る、慶歷五年卒す、年四十一、著すところ、徂徠集・唐書糾繆あり

【石交】 交りの堅きをいふ、戰國策に「此所謂棄仇讎得一者也」

【釋褐】 仕官すること(褐ヲ釋ク)を見よ、

【石敢當】 徐氏筆精に「今人家正門、適當ノ巷路ニ、小石碑ヲ立テ、鐫シテ——トイフ、按ズルニ、西漢ノ史游ガ急就章ニ、——トイフ、顏師古ノ注ニ、衞ニ石蜡、石

買・右惡アリ云云、ソノ後、以テ族ニ命ズ、敢當ハ、向フ所ロ敵ナキナリト、姓源珠璣ニ曰ク五代ノ劉智遠、——ヲシテ鐵鎚ヲ袖ニシテ晉祖ニ侍セシム、———格鬪シテ死ス、後人故ニ凡ソ橋路衝要ノ處、必ズ石ヲ以テソノ形ヲ刻シ、ソノ姓字ヲ書シ、以テ民居ヲ捍グト、一說大イニ相伴シカラズ、亦日ニ用ヒテ察セザル者ナリ」

【積氣】 天をいふ、列子に「——成ル天、積形成ル地」

【石牛道】 (金牛ヲ)を見よ、

【積毀骨ヲ銷ス】 (積毀銷骨)讒毀の言多きときは、堅き骨も遂に銷え盡くるをいふ、一說骨は骨肉の骨なりと、亦通ず(衆口)を見よ、

【石季倫】 (晉ノ———)を見よ、

【夕曛】 「ユフヒ」曛はいり日の餘光なり、杜甫の句に「螫弧照ニ——」

【碩果】 碩は大なり、——は大いなるくだもの、易に「——不レ食」

【席卷】 天下を收め取ること、席を卷くが如く易きをいふ、賈誼の過秦論に、秦ノ孝公殽函ノ固ニ據リ、雍州ノ地ヲ擁シ、君臣固ク守ッテ以テ周室ヲ窺フ、天下ヲ席卷シ、宇內ヲ包舉シ、四海ヲ囊括スルノ意、八荒ヲ幷呑スルノ心アリ」と、括は囊の口を結ぶなり、能く天下を包含するをいふ、八荒は八方の邊をいふ、史記に「明天子在上、兼文武、——四海」

【石經】 後漢の靈帝諸儒に詔して五經を定め石に刋す、古篆隸書を爲す、さて——には、漢・唐・淸等の別あり、漢石經は、殘字六百七十五字、唐石經は、開成二年、西安府學石本にて、十三經の中、孟子なかりしを、明人補刻す、淸石經は、乾隆五十八年敕刊、嘉慶八年敕して改定す、國子監石本にて、十三經備る、石經の事は、顧炎武の、石經考、翁方綱の漢石經殘字考等に就きて知るべし、

【赤縣神州】 漢土の異稱、史記孟軻傳に「中國名曰——、赤縣神州內、自有九州、禹之序、九州是也、不得爲州數、中國外如赤縣神州者九、乃所謂九州也」また晉書孝武紀に「神州赤縣翻成被髮之鄉」また畿內の縣の稱、

【石鼓】 錦字箋に異苑を引きて「晉武ノ時、吳郡ノ臨平ノ岸崩レ、一——ヲ出ス、之ヲ扣クニ聲ナシ、張華ニ問フ、華曰ク、蜀中ノ桐材ヲ取リ、魚形ニ作シテ之ヲ扣クベシ、則チ鳴ラント、ソノ言ノ如クスルニ、聲十里ニ聞ユト、歐陽修云フ、——ハ岐陽ニ在リ、韋應物ハ以テ文王ノ鼓ニシテ宣王ニ至リテ詩ヲ刻スルノミト爲ス、

韓退之ハ、直チニ以テ宣王ノ鼓ト爲ス、今ノ鳳翔孔子廟中ニ在リ、鼓ハ十アリ先時數野ニ弃ツ、鄭餘慶廟ニ置ク(中略)ソノ文見ルベキ者、四百六十五、磨滅シテ識リ難キ者過半ナリ」と、韓退之に——歌あり、共に古文眞寶前集に收めたり、

【斥候】 「モノミ」の兵、斥は「ハカル」度なり、候は「ウカガフ」視なり、望なり、敵を視望して、その動靜を度る義、左傳襄十一年に「納ニ——、禁侵掠」また漢書趙充國傳に「常以遠ニ——爲務」唐律に「——ニ遣ハサレ、賊ノ來ルヲ覺ラザル者ハ徒三年」の疏議に「指斥候望ノ義」とあり隋書の本紀に「帝——ニ勅シテ、輙チ驅迫スル「有ルヲ得ザラシム」とあり、六韜の龍韜の必出篇に「——常ニ戒ム」の解に「——ハ烽燧ヲ望ミ、險阻ヲ檢行シ、盜賊ヲ伺候スル所以ノ者ナリ」

【石洪】 (石處士)を見よ、

【尺吳寸楚】 高山の上より諸國を望みて、その狹小に見ゆる形容詞、豆人寸馬といふと同じ、袁中郎の文に出づ、

【赤根菜】 「ホウレンサウ」なり泉州府志に「菠薐ハ、西域頗稜國ニ出ヅ、頗、訛リテ菠ト爲ス、俗ニ——ト呼ブ」と、格致鏡原に「菠薐一名ハ波菜、一名ハ波斯菜、一名ハ——、淸異錄ニ雨花菜ト爲ス」

【釋菜】 釋は舍なり、菜は蘋蘩の屬、祭るに蘋蘩の屬を供へ舍くのみにして、牲牢幣帛を薦むることなし、祭禮の輕き者、孔子の祭の名、禮記に「始立學者、既興器用幣、然後——」明史本紀に「明ノ太祖洪武十五年、國學成ル、帝將ニ釋菜セントス、議者曰ク、孔子聖人ト雖モ臣ナリ、禮宜シク一奠再拜スベシト、帝曰ク、聖孔子ノ如キ、豈職位ヲ以テ論ズベケンヤ、昔周ノ太祖、孔子ノ廟ニ入リテ、將ニ拜セントス、左右曰ク、陪臣ナリ、拜スベカラズト、太祖曰ク、百世帝王ノ師ナリ、敢テ拜セザランヤト、遂ニ再拜ス、朕深ク其ノ左右ノ言ニ惑ハザリシヲ嘉ス、今朕宜シク特ニ尊崇ヲ加フベシト」

【射策】 疑義を難問する爲めに、之を策に書し、其の大小を量り、署して甲乙の科と爲し、之を列ね置きて、彰はさず、射る者をして其の得る所ろに隨ひて、之を解釋せしめ、以て優劣を判つをいふ、漢書蕭望之傳に「以——甲科爲郎」

【赤痣】 「ホクロ」南史の梁丁貴嬪傳に「生而有——在左臂療之不滅、又體多疣子」

【戚施】 爾雅に「——面柔也」の注に「——ノ疾ハ仰グ能ハズ、面柔ノ人常ニ俯ス、之ニ似タルニヨリテ名ヅク」

と、國語に「胥臣曰、ーー不可使仰」の註に「ーーハ僂人ナリ」と、詩の邶風に「得此ーー」「セムシ」

【石絨】 元史に「ーー織以爲布、火不能燒」と、和名「イシワタ」にて織りたるを火浣布といふ、

【積聚】 (ーー)を見よ、

【隻日】 奇數の日をいふ、一三五七九の如し、偶數の日を雙日といふ、釋文瑩の玉壺清話に「唐ノ高宗ノトキ、寰宇寧靜ナリ、長孫無忌隔日ニ事ヲ視ンコヲ請フ、自後雙日ハ坐セズ、隻日御視ス」

【赤子ノ心】 純一にして、僞りなき生れままの心、孟子に「大人者、不失其赤子之心者也」

【石人】 徒に人の形あるのみにて、好惡を知らざる者、一解に、常に存じて死せざるをいふ、漢書田蚡傳に「太后曰、帝寧能爲ーー邪」帝は武帝を斥す、

【析薪ヲ負フ】 (負析薪)父祖の業を失墜せざる義、左傳に「古人有言、其父析薪、其子弗克負荷」とあるに本づく、陳琳の書に「聞魏周桑虞仲翔各紹能ーーー」

【碩儒】 碩學に同じ、碩は大なり、後漢書荀淑傳に「荀爽遭黨錮、隱于海上、又南遯漢濱、十餘年以著述爲事、遂稱爲ーーー」後漢書儒林傳に「夫書理無二義、歸有宗而碩學之徒、莫或徙或通、人鄙其固焉」

【尺書】 書簡をいふ、漢書韓信傳に「李左車曰、發一乘之使、奉咫尺之書」咫は八寸なり(尺牘)を見よ、

【赤繩足ヲ繫グ】 (赤繩繫足)書言故事に「婚姻ノ前定セルヲーーー」トイフ、唐ノ韋固、月下ノ老ニ問フ、囊中何物カアルト、曰ク赤繩子、以テ夫婦ノ足ヲ繫グ、讐敵ノ家、吳楚ノ異鄉、富貴懸隔スト雖モ、コノ繩一タビ繫ゲバ、終ニ逭ルベカラズト、幽怪錄にも「韋固旅次宋城、遇老人、向月檢書、因問囊中赤繩、云繫夫婦之足、雖仇家異域、此繩一繫不可易」

【赤松子】 圓機活法に「ーーーハ神農ノ時ノ雨師ナリ(中略)崑崙山ノ西王母ガ石室ニ至リ、風雨ニ隨ヒテ上下ス、炎帝ノ少女之ヲ追ヒテ亦仙ヲ得テ俱ニ去リ、高辛ノ時、雨師トナル」神仙傳に「黃初平、自號ーーー」

【石鍾乳】 鍾乳石ともいふ「ツラライシ」「イシノチ」山中の洞穴に、礦物の液の滴りながら凝りて氷柱の如く垂るるもの、大なるは柱の如く、小なるは筆の如く、その中皆實す、黃又は赤みあるあり、透明なると瑪瑙の如きを上品とす、本草に「ーーーハ味甘溫ニシテ毒ナシ、目ヲ明ラカニシ、精ヲ益シ、五臟ヲ安ンジ、百節ヲ通ジ、九竅ヲ利ス、久シク服スレバ年ヲ延ブ」柳文に、零陵郡復乳穴記あり、

【籍湜】 唐の張籍と皇甫湜と、共に韓愈の門人、

【石處士】 石洪字は濬川、唐の人、明經に擧げられ、黃州錄事參軍と爲り、罷めて東都に歸り、十餘年隱居して出てず、烏重胤、河陽を鎭し、賢者を求め、以て自ら重くせんとす、或人洪を薦む、重胤曰く、彼人に求むる無し、それ肯て我が爲めに來らむやと、乃ち書幣を具し、邀へ辟す、洪亦重胤を以て知己と爲し、欣然として行を戒む、重胤その至るを喜び、之を禮遇しぬ、處士とは、漢書異姓諸侯王表の注に「謂不官於朝而居家者也」とあり、韓愈に、送ーーーー序あり、參看せよ、

【積水ヲ千仞ノ溪ニ決ス】 迅急猛烈にして當るべからざる勢をいふ、孫子に「勝者之戰、若決積水於千仞之溪、者形也」また「如轉圓石於千仞之山、者勢也」淮南子に「善用兵者、勢如決積水於千仞之隄、若轉圓石於萬丈之谿」

【尺寸】 僅少の義とす、後漢書に「禹得効其ーーー」

【刺刺】 多言の貌、韓文の、送殷員外序に「ーー不能休」管子の心術篇にも見ゆ、

【籍籍】 かまびすしき意、漢書江都易王傳に「國中口語ーーー」

【戚戚焉】 心動く貌、孟子に「於我心有ーーー焉」

【釋然】 悅ぶ貌、莊子に「南面而不ーーー」

【積善ノ家ニハ必ズ餘慶アリ】 易の文言に「積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃」とあり、積善とは、永久に善事を行ふをいひ、餘慶とは、己れ一身のみならず、其の慶餘りて子孫に及ぶをいふ、

【尺素】 「テガミ」杜甫の詩に「來陽馳ーーー」註に「ーーハ書ナリ」(雙魚)を見よ、

【積素】 雲烟をいふ、謝靈運の詩に「浮氛晦崖巘、ーーー惑原疇」

【赤族】 漢書揚雄傳の「將赤吾之族」の註に「誅殺セラルル者、必ズ血ヲ流ス、故ニイフ」と、一解に、赤は空なり、一族を空盡するをいふと、この說從ふべし、

【尺澤ノ鯢】 見識の狹き者に喩ふ、猶ほ井底の蛙といふが如し、宋玉の對楚王問に「鯤魚朝發崑崙之墟、暴鬐於碣石、暮宿孟諸、夫尺澤之鯢、豈能與之量江海之大哉」鯢は「サンセウウヲ」

【赤地】 地に物の生ぜざるをいふ、赤は物盡きて空しきなり、漢書の五行志に「ーー千里」赤貧、赤手などの赤は義同じ、

【赤墀】 墀は階上の地なり、天子の殿階の地には、丹を塗る、故にーーー、また丹墀といふ、漢書元后傳に「曲陽侯

根、驕奢僭上、——青瑣根は王根、

【石竹花】 通志略に「石竹ハソノ葉細嫩、花錢ノ如ク、愛スベシ、唐人此ニ象ドリ衣服ノ飾ト爲ス、陳眉公云フ、千瓣ノ者石竹ト名ヅケ、單葉ノモノ、洛陽ト名ヅク」

【石丈】 (奇石ヲ)を見よ、

【石女】 婦女の懷胎せざる者、齊己の詩に「——能生是聖胎」

【射鵰ノ手】 弓を射る名人、北齊の斛律光嘗て文襄に從つて校獵す、雲表に一大鳥を見、之を射て頸に中て旋轉して下る、乃ち鵰なり、丞相嘆じて曰く、此れ射鵰手なりと、鵰は「クマタカ」この語、漢書李廣傳に「射鵰者也」とあるに本づく、

【尺鐵】 すこしの「キレモノ」文選李陵答蘇武書に「兵靠矢窮、人無——」注に「——ハ兵器」

【釋奠】 奠は定なり、薦なり、爵を神前におきてすすめ祭るなり、丁祭ともいふ、孔子の祭の名、禮記の文王世子に「凡學春夏——於先師、秋冬亦如之」と、我國にても天皇の行はせたまふ祭の稱、陰曆二月・八月の上の丁の日に大學寮にて行はれ、十哲を配祀し、牲を供せらる、諸藩にて略して唯蘋藻のみを供して祭るを釋菜といふ、

【夕殿ニ螢飛ビテ、トウチナガム】 白居易が長恨歌に「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠云云」とあるを斥す、

【赤土】 赤地に同じ、荒地のことなり、白氏文集に「雨飛蠶食千里閒、不見青苗空——」

【尺牘】 類書纂要に「古ノ制、書簡ハ長サ一尺、故ニ尺牘トイヒ、又尺書トイフ」とあり、史記の匈奴傳に「漢遺單于書牘以尺一寸」匈奴遺漢書以尺二寸牘」牘はもと文字を書きつくる木簡(キフダ)轉じて手紙の義とす、漢書に「與人——、主皆藏弆、以爲榮」

【石土五穀ヲ生ゼズ】 淮南子に「石土不生五穀、禿山不游麋鹿、無所蔭蔽也」

【積土山ヲ成ス】 學問道德も小を積みて大となるに喩ふ、荀子の勸學篇に「積土成山風雨興焉、積水成淵蛟龍生焉、積善成德而神明自得、聖心循焉」

【責任】 事に任じて、自ら其の責に當るをいふ、莊子の天道篇に「帝王聖人休焉、休則虛、虛則實、實者倫矣、虛則靜、靜則動、動則得矣、靜則無爲、無爲也則任事者責矣」

【跖ノ狗堯ニ吠ユ】 (跖之狗吠堯(桀ノ狗)を見よ、

【跖ノ徒】 (跖之徒)利にのみ走る者は跖といふ、大賊の「ナカマ」である、孟子に「雞鳴而起、孳孳爲利者——也」莊子に「——問於跖曰、盜亦有道乎」

【石馬】 石にて刻みたる馬なり、唐會要に「上、先帝(太宗)ノ徽烈ヲ闡揚セント欲シ、乃チ石ニ刻シ、常ニ乘リテ敵ヲ破リシ六匹ヲ昭陵闕下ニ爲ル」わが國の社頭に設くる高麗犬の類なるべし、

【惜抱軒文集】 十六卷後集十卷詩十卷、清の姚鼐撰す、鼐字は姬傳桐城の人、乾隆二十八年の進士、その文簡古にして餘韻多し、劉大櫆に出づと雖も、工力之に軼ぐ、詩も亦清雋誦すべし

【寂寞】 人なくして「サビシキ」をいふ、楚辭に「山蕭條而無獸兮、野——乎無人」

【赤貧】 一文なしの貧者をいふ、書言故事に「常ニ人ノ貧ナルヲイッテ赤窮赤貧ト曰フ、空盡物無キヲ赤トイフ、赤地千里ノ如シト」赤地とは草木なきなり、

【射覆】 諸物を覆器の下に置き、闇に射て中つるをいふ、漢書東方朔傳に「上嘗使諸數家——置守宮盂下、射之皆不能中」守宮は蟲の名「ヤモリ」覆は「オホヒ、カブセル」

【尺布斗粟ノ譏】 兄弟の「ナカアシキソシリ」漢の文帝の時、淮南王長は高帝の第四子にして文帝の弟なり、不軌を謀る、文帝戮するに忍びず、獨に謫す、長食はずして死せり、時人謠ひて曰く、一尺の布尚ほ縫ふべし、一斗の粟尚ほ舂つくべし、兄弟二人相容れずと、帝之れを聞き、追悔するも及ばず、後ちその四子を封じて侯となす、

【赤奮若】 丑の歳をいふ、淮南子 天文訓に「太陰在丑歳、名——」(十二支)を見よ、

【石癖】 石を愛する「クセ」雲林石譜に「臨江士人、魯子明有——」

【赤壁】 方輿紀要に「湖北 省武昌府嘉魚縣ノ西七十里ニ、——山アリ、ソノ北岸相對スル者ヲ烏林トナス、即チ周瑜ガ曹操ノ船ヲ焚キタル處ナリ」と、荊州記に曰く「蒲圻縣、沿江一百里、南岸名赤壁、昔周瑜破曹操處」と、東坡志林に曰く「黃州守居之數百步、爲赤壁、或言即周瑜破曹公處、不知果是否、斷崖壁立、江水深碧、二鶴巢其上、有二蛟、或見之、遇風浪靜、聊乘小舟、至其下、捨舟登岸、入徐公洞、非有洞穴也、但山崦深邃耳」と、徐氏筆精に「東坡赤壁賦、誤以黃州赤鼻山認爲周瑜破曹操處、後人不祇指摘之、寔爲盛名所怵耳」と清の袁枚の詩に曰く、

一面東風百萬軍、當年此處定三分、漢家火德終燒

賊、池上蛟龍竟得雲、江水自流秋渺渺、漁燈猶照荻紛紛、我來不共吹簫客、烏鵲寒聲靜夜聞、

この詩題たる赤壁は、曹劉が勝敗を決したる處にして、諸葛孔明當初の目的即ち天下三分の計は、此の一戰にて成就したるなり、されば、重きを劉氏に歸したり、是れ一篇命意の在るところなり、一二の句は、諸葛が東風の便に乘じ、其の機を失はずして、三分の業を定めたることを云ふ、三四の二句は、漢家の火德と云へることを運用して、火攻の策に用ひ、また周瑜が劉備を以て蛟龍に比せし言を運用して、劉備の志を得たりしことを云ふ、五六の句は、其の實況を寫し七八の句に至りては、東坡の賦中の事を用ひ、當夜蕭騷の趣を寫し、今古映帶して、局を收めたり、之れを要するに毎句中に、赤壁の故事を引き用ひたるは、作者の苦心を知るべし、

【尺璧ヲ貴バズシテ寸陰ヲ重ンズ】 淮南子の原道訓に「聖人不重尺之璧而重寸之陰、時難得而易失也」とあり、魏文帝の典論にも「古人尺璧ヲ賤ンデ、寸陰ヲ重ンズ、時ノ過グルヲ懼ルルノミ」

【赤壁ノ戰】 曹操劉表を擊つ、表卒す、子の琮荊州を擧げて操に降り、劉備江陵に奔る、曹操これを追ふ、備、夏口に走る、操軍を江陵に進め、遂に東に下る、操權に書を遺りて曰く、今水軍八十萬衆を治めて、將軍と吳に會獵せんと 權の群下みな色を失はざるはなし、張昭之を迎へんと請ふ、魯肅以て不可となし、權に說きて周瑜を召して、これを議せしむ、瑜至り曰く、操は名を漢相に託すと雖も、其の實は漢の賊なり、請ふ精兵數萬を得て、夏口に往き、誓つて將軍のためにこれを破らんと、權刀を拔き案を斫りて曰く、諸の將吏敢て操を迎へんと言ふものは、この案と同じうせんと、遂に瑜を以て三萬人を督せしめ、備と力を幷せ操を逆へ進みて赤壁に遇ふ、瑜の部將に黃蓋といふものあり、操の船艦首尾相接するを見て、これを火攻すべきの策を建て、船十艘を取り、枯柴燥荻を載せ、油を灌ぎ帷幔を繞らし、且走舸を備へ、其の尾に繫ぎ、先づ書を操に遺り降らんことを告げ、中流に帆を揚げ、操の軍に向ふ、操の軍みな曰く、これ吳將の來り降るなりと、時に東南の風急なり、同時に火發す、火烈しく風猛くして船の往くこと箭の如く、敵船を燒盡し、人馬溺燒して死するもの算なし、周瑜等鼓噪してこれに乘ぜしかば、北軍大に壞れ、操纔に身を以て免れ還る 後ちしばしば兵を權に加ふれども、志を得ず、操嘆じて曰く

子を生まば當に孫仲謀の如くなるべし、さきの景昇が兒子は豚犬のみと、仲謀は孫權の字、景升は、劉表の字なり、

【石本】 「イシズリ」米蕃の寶章待訪錄に「世多——」打本・石板・刻石帖皆同じ、

【席門】 「ムシロ」を以て門とする、貧家のさまをいふ、漢書に「陳平少時家貧シク、好ンデ書ヲ讀ム、長ジテ婦ヲ取ルベキニ及ビ、富人與フル者ナシ、貧者ヲバ平之ヲ娩ヅ、久之ニシテ富人張負ニ女アリ、五タビ嫁シテ夫輙チ死セリ、人敢テ取ルナシ、平之ヲ得ント欲ス、負平ニ隨ッテソノ家ニ至ル、家ハ負郭ノ窮巷ニ在リ、席ヲ以テ門トナス、然レドモ門外ニハ長者ノ車轍多カリキ」

【石門關】 五代史四夷附錄に「西北入居庸關明日又西北入——關路崖狹、一夫可以當百、此中國控扼契丹之險也」

【戚揚】 戚は斧、揚は鉞なり、詩の大雅に「干戈——、爰方啓行」

【石榴】 「ザクロ」花の八重なるは實なし、李白の詩に「大火五月中、景風從南來、數枝——發、十丈藕花開」

【積流】 海をいふ、海賦に「茫茫——、含形內虛」

【鶺鴒原ニ在リ】 兄弟互に難を救ふをいふ、詩の小雅常棣篇に「鶺鴒在原、兄弟急難」の註に「鶺鴒ハ水鳥ナリ、鶺鴒飛ベバ則チ鳴キ、行ケバ則チ搖ク、急難ノ意有リ、故ニ以テ興ジテイフ」成語考に「兄弟ハ鶺鴒ノ相親ムニ似タリ、マタ患難相顧ルハ、鶺鴒ノ原ニ在ルニ似タリ」

【寂寥】 さびしき義、寂寞に同じ、楚辭に「聲嗷嗷以——兮」

【淅瀝】 雨雪の聲なり、ばらばらと音するをいふ、謝惠連の雪賦に「霰——而先集」

【鳥鹵】 一に潟滷に作る、斥鹵に同じ、鹹くして荒蕪せる地をいふ、字彙に「東方謂之斥、西方謂之鹵」とあり漢書溝洫志に「終古——兮生稻粱」

【尺蠖ノ屈スルハ信ビンコトヲ求ムルナリ】 尺蠖は「シャクトリムシ」易の繫辭に「尺蠖之屈、以求信也、龍蛇之蟄以存身也」とあり、尺蠖の屈めるは、伸びんことを求むる爲めなり、龍蛇の蟄めるは、身を保存せん爲めなり、以て人の艱難に耐ふるは、他日立身出世の基たるに喩ふ、信は伸に通ず、

【施愚山】 (施閏章)を見よ、

【世閒ノ好物ハ堅牢ナラズ】 世の中の「ヨキモノ」はなかくもたぬ、白居易の簡簡吟に「世閒好物不堅牢、彩雲

易散琉璃碎」

【世人甚ダ牡丹ヲ愛ス】（世人甚愛牡丹）周茂叔の愛蓮説の句なり、舒元輿牡丹賦の序に「天后之鄉西河也、精舍下有牡丹種、其華特異、天后歎曰、苑之有闕因命移植焉、由此京國牡丹、日日寖盛、今自禁闥泊官署、外延士庶之家、瀰漫如四瀆之流、每暮春之月、遨遊之士、亦上國繁花之一事也」

【施主】 檀那に同じ、釋氏要覽に「梵語ノ陀那鉢底唐ニ——ト言フ」

【世說新語】 三卷、宋の臨川王劉義慶撰す 後漢より東晉までの軼事佳話を三十六門に分ちて採錄す、梁の劉孝標之に注す、天保二年の翻刻本あり、新語とは劉向の舊書に對していふ、

【世尊】 佛の十號の一、法數に「謂以智慧等法破彼貪瞋癡等不善之法滅生死苦得無上覺、天人凡聖世間出世閉成皆尊重、故號——」

【刹那】 俱舍論に「時ノ極メテ長キヲ——ト名ツケ、時ノ極メテ長キヲ劫トナス」またいふ「有力ノ丈夫一彈指ノ頃ニ六十五——アリ」

【說】 文の一體なり、文體明辨に「字書ヲ按ズルニ、說ハ解ナリ、述ナリ、義理ヲ解釋シテ、己ガ意ヲ以テ之ヲ述ブルナリ、說ノ名、說卦ヨリ起ル、漢ノ許愼、說文ヲ作ルニモ、亦其ノ名ヲ祖トシテ、以テ篇ニ名ヅク」

【雪案】 雪をあつめて燈に代へて書を讀む「ツクエ」「——螢窓」と對用す、晉の孫康の故事（孫康）を見よ、

【襲衣】 「フダンギ」私服なり、論語に「紅紫不以爲褻服」また肌つきの「キモノ」司馬相如の句に「表其——」

【竊位】 論語に「臧文仲其竊位者與」疏に「賢ヲ知リテ舉ゲズ、位ニ偸安ス、故ニ——トイフ」

【攝位】 假に君位を攝するなり、左傳隱元年に「不書即位攝也」註に「君ノ政ヲ假攝シテ、卽位ノ禮ヲ修セズ云云」

【絕域】 遠き外國をいふ、漢書武帝紀に「詔州郡察吏民有可爲將相使——者」文選の遊天台山賦に「邈彼——」

【雪衣娘】 鸚鵡の異名、明皇雜錄に「開元中、嶺南獻白鸚鵡、養之宮中、頗聰慧、洞曉人言、上及貴妃皆呼——」

【雪隱】 廁（カハヤ）の異名、雪峯禪師常に此に在りて掃除の事を執られしにより稱す、烏瑟沙摩經註に「福州雪峯義存禪師常住掃除、於是大悟、故名矣」一說に、雪竇禪師、靈隱寺の司廁の職たりしによりていふと、

【絕纓】 夜宴の席にて忽ち燭の滅するを——といふ、楚の莊王群臣と夜飲せし次に、燭忽ち滅せり、一人あり、美人の衣を牽けり、美人王に告げて曰く、人あり妾の衣を牽けり、已に其の纓を絕ち得たりと、王曰く、人に飲ましむるに酒を以てして、人を責むるに禮を以てするは、吾爲さざるなりと、遂に左右をして盡く其の纓を絕たしめ、然る後に燭を繼げり

【折腰】 人の下に屈するをいふ、晉書隱逸傳に「陶潛彭澤令トナル、郡ノ督郵至ル、曰ク應ニ束帶シテ見ユベシト、潛歎ジテ曰ク、吾不能爲五斗米折腰事鄉里小兒、卽日印ヲ解キ去ル」とあるに本づく、

【折閱】 荀子修身篇に「良賈不爲折閱不市」の註に「折損也、謂損所閱賣之物價也」

【節ヲ折ル】（折節）己の主持する所ろの意をまぐる義、戰國策に「以秦之强——而下與國、臣恐其害於東周」

【拙ヲ守ル】（守拙）を見よ、

【舌耕】 辯舌講說を以て、生計を爲すをいふ、事文類聚に「賈逵、口ニ經文ヲ誦シテ以テ人ニ敎フ、贈遺者盈積ス、或ヒト曰ク、逵ハ力耕ニアラズ、乃チ——ナリト」從容錄に「才士筆耕、辯士舌耕」

【絕交】 人とつきあひをやむる義、戰國策に「西生秦患、北絕齊交、則兩國之兵必至矣」

【雪客】 「サギ」の異名、楊文公談苑に「鷺曰——」

【折檻】 漢書朱雲傳に「成帝ノ元延元年、朱雲、佞臣安昌侯張禹ヲ斬ラントテ極諫ス、上大ニ怒リテ曰ク、小臣下ニ居リテ上ヲ訕リ、師傅ヲ廷辱ス、罪死ストモ赦サズト、御史雲ヲ將キテ下ラントス、雲殿檻ヲ攀ヅ、檻折ル、雲呼ンデ曰ク、臣下龍逢比干ニ從ヒテ地下ニ遊ブヲ得バ足レリ云云」これより人を强く責め諫むるを、わが國にて——といふ、

【切玉】 古の名劒の名、列子に「周穆王征西戎、西戎獻昆吾之劒、鍊鋼赤刃用之——如切泥」と、博物志にも「昆吾獻——刀、刀——如臘布」

【薛居正】 字は子平、宋の開封浚儀の人、太祖に仕へ、參知政事より門下侍郎平章事に至り、晚に司空に進み、太平興國六年卒す、年七十、太尉中書令を贈り、文惠と諡せらる、勅を奉じて舊五代史百五十卷目錄二卷を撰す、

【絕句】 詩の一體、起句承句轉句結句の四句より成る、五言——、七言——等の別あり、また四言、六言のものもあり、朱飮山の千金譜錄要に「五言ハ眞質ヲ尙ブ、質

多クシテ文ニ勝ツヲ要ス、七言ハ高華ヲ尚ブ、文多クシテ質ニ勝ツヲ要ス、五言ハ樂府ニ近ク、七言ハ歌行ニ近シ、五言ハ七言ヨリモ難シ、要スルニ、皆微旨遠意アリ、語淺ク情深ク、開合反正一氣呵成シテ、宮商諧叶スルヲ正宗トナス」と、五言——、七言——の例を示せば、

竹里館　五言　　王維

獨坐幽篁裏、彈琴又長嘯、深林人不知、明月來相照、

楓橋夜泊　七言　　張繼

月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船、

【折桂】　科第に登るをいふ、避暑錄話に「世以登科爲——此謂郤詵對策東堂、自云桂林一枝也、自唐以來用之、溫庭筠詩云、猶喜故人先——、自憐羈客尙飄蓬」と、桂林ノ一枝を見よ、

【折戟】　「ヲレタルホコ」杜牧の赤壁の詩に「——沈沙鐵半銷」

【雪月花時最モ君ヲ憶フ】　（琴酒詩ノ）を見よ、

【節俠】　氣節ありて弱き者を助け、强き者を挫くをいふ、史記刺客傳に「爲行而使人疑之非——也」

【節儉】　用度を節減するをいふ、儉約に同じ、長楊賦に「垂意於至寧、躬服——」

【絕絃】　（知音）を見よ

【折肱】　（三タビ肱ヲ）を見よ、

【絕國】　遠く離れたる國、淮南子修務訓に「——殊俗」絕域に同じ、

【切磋琢磨】　詩の衞風淇奧篇に「瞻彼淇奧、綠竹猗猗、有斐君子、如切如磋、如琢如磨」とあるに本づく、骨角を治むる者は、すでに切るに、刀斧を以てし、而して又磋ぐに鑢を以てす、玉石を治むるものは、すでに琢くに、槌鑿を以てし、また磨くに沙石を以てす、君子の德すでに修まり、更に進みて已むことなき、亦此の如くすべしとなり、

【雪兒】　北夢瑣言に「——者、唐李密之愛姬、能歌舞、每見賓朋有文章奇麗入意者、即付——叶音律以歌之、故號——歌」と、この事は世說にも出づ、

【舌人】　「ツウベン」周語の注に「——能達異方志、象胥之官也」

【絕唱】　詩歌の格調のすぐれて佳なるをいふ、宋書謝靈運傳に「——高蹤、久無嗣音」東觀餘論に「杜子美詩古今——也」

【切齒搤腕】　切齒は、齒相摩切するなり、搤腕は、左手を以て右腕を扼するなり、皆奮怒の意なり、史記張儀傳に「天下之遊談士、莫不日夜切齒瞋目以言從之便、以說人主」また刺客傳に「樊於期偏袒搤腕而進曰、此臣日夜切齒腐心也」

【攝受折伏】　苦修練行してその心を修攝するを攝受といひ、順逆二緣に對してたとひ杖木の難に逢ひても佛法の實義を說きさかするを折伏といふ、天台曰、法華折伏破權門理、涅槃攝受更許權門、

【絕緒】　「アトツギ」の絕えたること、後漢書張衡傳の注に「——言無後也」絕嗣に同じ、

【折衝】　敵人の衝突し來るを折き止むる義、晏子春秋に「孔子曰、不出樽俎之閒、而——千里之外」晏子之謂也、淮南子に「——萬里」

【設色】　「サイシキ」揮麈錄に「李思訓——山水」名物方言に「畫工ヲ畫史マタ——工トイフ」

【攝政】　君の位に即かずして、假りに君の事を兼ね行ふをいふ、史記五帝紀に「舜得舉用事二十年、而堯遂使——」歐陽修の春秋論に「所謂攝トハ、臣、君ノ事ヲ行フノ名ナリ」

【攝生】　猶ほ生を養ふといふが如し、韓非子に「動無死地、而謂之善——矣」

【攝生四養】　四つの養生法なり、張南軒の語、曰く「少思以養神、少慾以養精、少勞以養力、少言以養氣」

【設帨令旦】　女子の生日をいふ、禮記の內則に「子生、男子設弧於門左、女子設帨於門右」と、弧は弓、帨は偏巾なり、この二物を以て男女の表とす、

【折節】　（節ヲ折ル）を見よ、

【屑屑】　安からざる貌、廣雅釋訓に見ゆ、また「ツトメハタラク」貌、漢書董仲舒傳の注に「——ハ動作ノ貌」また「ツマラヌ」ことに「アクセク」する貌、後漢書崔駰傳の注に「——ハ猶ホ區區ノ如シ」

【切切偲偲】　切切は懇到なり、偲偲は詳勉なり、朋友は互に懇到にして互に忠告して勉め勵ますべき義、論語子路篇に「孔子曰、朋友——、兄弟怡怡」

【粲梲ノ材】　粲は穀蠹、所謂析なり、「マスガタ」梲は梁上の短柱、「ウダチ」以て小才に喩ふ、班彪の王命論に「——之——不荷棟梁之任」

【薛琯】　（薛文淸）を見よ、

【節撙】　抑へて制限をすること、管子に「節飲食撙衣服」とあり（撙節）を見よ、

【雪堂】　蘇長公年譜に「公年四十七、黃州ニ在リ、臨皐亭ニ寓居ス、東坡ニ就キテ雪堂ヲ築キ、自ラ東坡ト號ス」

とあり、堂は雪中に之を爲る、因て雪を四壁に繪くといふ、

【絶倒】 驚歎の義、轉じて極めて笑ふ義にも用ふ、晉書の衞玠傳に「好ンデ玄理ヲ言フ、王澄字ハ平子、高名アリ、推服スル所ロ少シ、玠ガ言ヲ聞ク毎ニ、輒チ歎息絶倒ス、時ノ人之カ語ヲ爲シテ曰ク、衞玠談道平子絶倒ト」一說に——は感服の義とす、賓退錄にも、右の故事を引きて、今流俗、大笑を謂つて——となすは非なりといへり、駒陰冗語に「顧成章以俚語爲詩、極有思致、令人——然亦以此薄德」

【折中】 折は斷なり、中は衷に同じ、輕からず、重からず、その中正を得るなり、史記の孔子世家の贊に「孔子布衣、傳十餘世、學者宗之、自天子王侯、中國言六藝者、——於夫子、可謂至聖矣」孔子の言を取りて事の中を斷ちて、疑ふ所ろを定むるなり

【雪中ノ四友】 玉梅・臘梅・水仙・山茶をいふ、月令廣義に見ゆ、

【攝提格】 寅の歲の異名、漢書張純傳の注「太歲在寅曰——」(十二支)を見よ、

【雪泥鴻爪】 「アトカタ」の、遺らざるに喩ふ、東坡の詩に「人生到處知何似、應似飛鴻踏雪泥、泥上偶然留指爪、鴻飛那復計東西」とあり、賴山陽の鴻雪處記に「鴻之歸爪於雪、以記其所過、其來雪滅而痕不可知也、古人以喩人之游歷無跡」とあり、

【刹帝利】 田主と譯す、天竺の四姓の一、四姓とは、一に婆羅門(淨行ト譯ス、出家シテ淸淨ノ行ヲ修スルヲ以テ四姓ノ首トス)二に——(田主又ハ王種ト譯ス)三に毘舍(商賈ト譯ス)四に首陀(農人ト譯ス)

【媟黷】 媟は狎なり、慢なり、黷は汚濁なり、漢書枚乘傳に「——貴幸多く男女閒の「ナレケガルル」に用ふ、

【刹那】 最も短き時をいふ(一刹那)を見よ、

【梲ニ藻ガク】 梲は「ウツバリ」の上の短き柱「ウダチ」それに水草をふかきて飾とするなり、論語に「子曰、臧文仲居蔡山節藻梲、何如其知也」注に「居ハ猶ホ藏ノ如シ、蔡ハ大龜ナリ、節ハ柱頭ノ斗拱ナリ、藻ハ水草ナリ、梲ハ梁上ノ短柱ナリ、蓋シ藏龜ノ室タリ、而シテ山ヲ節ニ刻シ、藻ヲ梲ニ畫ケルナリ、當時文仲ヲ以テ知ト爲ス、孔子言フ、民ノ義ヲ務メズシテ鬼神ニ諂瀆スルコト此ノ如シ、安ゾ知タルヲ得ン云云」

【切ニ問ヒテ近ク思フ】 (切問而近思切に道を問ひて、近く己の身に在る者を思ふなり、論語子張篇に見ゆ、

【薛包】 漢書に「薛包、學ヲ好ミ行ニ篤シ、父後妻ノ言ヲ信ジ、包ヲ憎ミテ他ニ家居セシメントス、包日夜號泣シテ去ルコト能ハズ、毆打セラルヽニ至リテ、已ムコトヲ得ズ、出デテ舍外ニ廬シ、旦ニハ必ズ入リテ洒掃ス、父母又之ヲ逐フ、包猶ホ去ルコト能ハズ、乃チ里門ニ廬シ、晨昏ニハ、必ズ安否ヲ問フ、此ノ如キコト歲餘、終始一日ノ如シ、父母遂ニ感悟シ、命ジテ家ニ還ラシム、父母亡スルニ及ビテ、哀痛シテ疾ヲ成セリ、後チ諸弟、居ヲ異ニセンコトヲ求ム、包止ムルコト能ハズ、諸弟ノ欲スル所ロニ從フ、而シテ奴婢ハ、其ノ老イタル者ヲ引キテ曰ク、我ト事ヲ共ニスルコト久シ、若使フコト能ハジト、器物ハ其ノ朽敗スル者ヲ取リテ曰ク、吾素ヨリ服習シテ、身體ノ安ズル所ロナリト、田廬ハ其ノ荒頓セル者ヲ取リテ曰ク、吾少キ時治ムル所ロニシテ、意ノ戀フ所ロナリト、後チ弟ノ產ヲ破リテ、自立スルコト能ハザルモノアルトキハ、包復之ヲ賑給セリ」

【絶筆】 筆を止むる義、杜預左氏傳序に「絶筆於獲麟之一句」

【說郛】 百二十卷、明の陶宗儀の原本に、郁文博・陶珽二人の增補せしものなり、この書は全書を節錄して編輯せしものなり、說郛續四十六卷、明の陶珽編す、說郛は元代にとどまるを以て、この書は主として明人の雜著を鈔錄せり、

【裘服】 私居の服なり「フダンギ」論語に「紅紫不以爲——」

【折伏攝】 折は即ち挫折なり、伏は即ち摧伏なり 六道の衆生、三界の中に於て、五欲に貪著し、生死に流轉して、卒に度脫し難し、故に如來、諸の善惡の果報及び地獄等の種種の苦切の言を說きて、その心を折伏して、之を攝受せしむ、是を——と名づく、

【接物】 人に接する義、物は人物なり、漢書司馬遷傳に「敬以愼——于接物」

【竊鈇ノ疑】 疑ふまじき者を疑ふこと、疑心暗鬼を生ずといふに同じ、列子に「人鈇ヲ亡フ者アリ、其ノ隣人ノ子ヲウタガフ、其ノ行步ヲ視ルニ、鈇ヲ竊メルナリ、ソノ顏色モ鈇ヲ竊メルナリ、言語モ鈇ヲ竊メルガ如キナリ、動作態度、爲ルトシテ鈇ヲ竊ムニアラサルハナシ、俄ニシテ其谷ヲ掘リテ而シテ其ノ鈇ヲ得タリ他日復タ其ノ隣人ノ子ヲ見ルニ、動作態度鈇ヲ竊ムニ似タル者ナシ」とありて、張註に「語ニ之レアリ、曰ク萬事紛錯皆意ヨリ生ズ」

【節文】 品節して、文章あらしむる義、史記叔孫通傳に

「禮者因時世人情爲之——者也」

【薛文清】名は瑄、字は德溫、敬軒と號す明の山西河津の人、永樂十九年の進士、禮部左侍郎兼翰林院學士に至りて致仕す、天順開卒す、謚して文清といふ、學躬行を貴び、明朝理學の宗たり、讀書錄・從政名言・從政錄等の著あり、

【薛文清集】二十四卷、明の薛瑄撰す、この書は門人張鼎の編せしところなり、文章雅正にして具に典刑あり、詩も亦沖淡誦すべし、

【舌本强ナリ】書言故事に「俗語ニ、三日談ゼサレバ舌本强ナリトイフ、般仲堪自ラ言フ三日道德經ヲ讀マザレバ便チ舌本閊强ナルヲ覺ユト」世說文學篇に出づ、

【切摩】研磨して益をはかる、唐書に「——之益不盡矣」

【切夢刀】夜なかの風をいふ、藝林伐山に「施肩吾ノ閨情ノ詩ニ、三更風作切夢刀、萬種愁成係鶴線」とあり、

【絕目】目のとどく限りをいふ、文選鮑明遠の詩に「——盡平原」

【說文解字】三十卷、漢の許愼撰す、愼字は叔重、汝南の人、性淳篤にして博く經籍に通ず時人語を爲りて曰く「五經無雙許叔重」とこの書は指事・象形・形聲・會意・轉注・假借の六書によりて文字の起源意義を解說せるものなり、自序に「蒼頡ノ初メテ書ヲ作ルヤ、蓋類ニ依リテ形ヲ象ル故ニ之ヲ文トイフ、ソノ後形聲相益シ、即チ之ヲ字ト謂フ、文ハ物象ノ本、字ハ孳乳シテ寖ク多キヲ言フナリ云云」

【切問近思】（切ニ問ヒテ）を見よ、

【節用】用ふることを節して、妄に費さざるをいふ、論語に「節用而愛人」また荀子に「上以法取焉、而下以禮——之、餘若丘山」

【絕倫】倫は等なり、類なり、人に超えてすぐるなり、漢書揚雄傳に「桓譚以爲——」また甘延壽傳に「投石超距、絕於等倫」

【設醴】（醴ヲ）を見よ、

【錢】國語に「周ノ景王二十一年、將ニ大錢ヲ鑄テ以テ人ヲ振救セントス云云」財貨源流に「錢ノ啓タル、銅ヲ以テ之ヲ爲ル、體圓ニ孔方ニ、背面兩好、蓋周郭アリ、四方ニ周流スルノ象ナリ、爰ニ禹湯ヨリ始メテ金ヲ用ヒテ幣ヲ鑄ル、周ハ九府圜法ヲ立テ、輕重銖ヲ以テス從來スル處遠シ」と、史記天官書の注に「錢ハ古泉字ニ作ル」（泉布）また（錢神論）を參看せよ、

【睫ヲ交フ】（交睫）寐ること、睫は目旁の毛なり「マツ

ゲ」漢書袁盎傳に「太后嘗病、三年、陛下不——解帶」

【浹洽】あまねく行きわたる、漢書禮樂志に「敎化——」

【捷徑】「チカミチ」をいふ、離騷に「夫唯捷徑以窮步」の註に「捷ハ疾ナリ、徑ハ邪道ナリ」徑は道の小にして直なるをいふ、

【浹日】浹は「アマネク」めぐる義、——は、甲より癸に至る十日をいふ、國語の楚語に「遠不過三日、近不過——」

【浹辰】子より亥に至るをいふ周匝十二日なり、左傳宣九年に「莒恃其陋而不修城郭、——之閒而楚克其三都」「無備也夫」

【囁嚅】言はんと欲してまた口を縮むるをいふ、韓愈の送李愿歸盤谷序に「口將言而——」

【攝提格】（——）を見よ、

【慴伏】慴は讋と同じ、氣を失ひておそれ伏すなり、史記項羽紀に「一府中皆——莫敢起」

【讋服】漢書項籍傳に「諸將讋服」の注に「讋失氣也」と、服は一に伏に作る、

【摺本】「ヨリデホン」王氏書苑に「智永ノ千文、唐粉蠟紙ノ——、內一幅麻紙ナルハ是レ眞迹」

【嬉好】女官の名、顏師古曰く「嬉ノ言ハ接ナリ、上ニ幸セラルルヲイフ、好ハ美稱ナリ」と、倢伃に作る、同じ、女の「ウツクシキ」貌、史記外戚世家に「李夫人卒則有尹——之屬、更有寵」また史記に「褚先生曰、——秩比列侯」

【涉獵】涉とは、水を涉るが如く、獵とは獸を獵るが如く、之を歷覽して、專精ならざるをいふ、漢書賈山傳に「所言——書記、不能爲醇儒」また、書言故事に「博覽ヲ——トイフ」

【浹和】「トトノヒヤハラグ」彼も此もあまねくやはらぐ、韓文の新修滕王閣記に「人吏——」

【燮和之任】宰相の任をいふ、韓文の爲裴相公讓官表の句、燮は和調なり、周官に「燮理陰陽」とあるに本づく、

【蟬】董仲舒答問書に「齊王之女、怨王而死、化爲蟬登樹而鳴、故蟬名齊女化」と、また蟬に五美あり、陸士龍の寒蟬賦に云ふ「頭上ニ緌アルハ文ナリ、氣ヲ含ミ露ヲ飲ムハ淸ナリ、黍稷享ケザルハ廉ナリ、處ルニ、巢居セザルハ儉ナリ、候ニ應ジテ常ヲ守ルハ信ナリ」詩經に「五月鳴蜩」蜩は蟬なり、

【饌】立派に備はれる食物をいふ、說文に「具食也」盛——と熟す、

【膳】 說文に「具食也」とあり、徐鍇曰く「言具備此食也、庖人和味必加善故从善」具食とは種種の味をそなへたる料理なり、

【禪】 具には禪那といふ、靜慮と譯す、世間の戲樂俗緣を離れて心に一切の係累を斷つをいふ、定の義、思惟修・明心達理などと義譯す、

【善惡之應殃慶 立 至】 日本外史重盛諫父の條に見ゆ、善をなせば慶あり、惡をなせば殃ありその應報速に至るをいふ、殃は、凶咎なり、慶は福なり、立は速の義、易に「積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃」とあるに本づく、

【芟夷】 刈りて平ぐるをいふ、左傳隱六年に「見惡如農夫之務去草焉、——蘊崇之」と、蘊崇とは、蘊積崇聚するをいふ、芟正音「サン」

【瞻依】 瞻は尊み仰ぐなり、依は親み依るなり、詩經に「靡瞻匪父、靡依匪母」と、轉じて父母の義とす、

【禪位】 御讓位なり、禪はゆづりかはらしむる義、文獻經籍考に「玄宗——于太子亨」また位をゆづり受けたるをば受禪といふ、

【闡幽】 (幽ヲ闡ク)を見よ、

【先憂後樂】 范文正公神道碑に「公少クシテ大節アリ、其ノ富貴貧賤、毀譽歡戚ニ於ケル、一モ其ノ心ヲ動カサズ、慨然トシテ天下ニ志アリ、嘗テ自ラ誦シテ曰ク、士ハ當ニ天下ノ憂ニ先チテ憂ヘ、天下ノ樂ニ後レテ樂ムベキナリト」抱朴子にも「先憂爲後樂之本、暫勞爲永逸之始」とあり、

【先引】 先導に同じ、漢書蕭望之傳に「少史冠法冠、爲妻——」

【單于】 匈奴の君長の稱、廣大の義、天の單于、即ち廣大に象りて名づく、史記匈奴傳に「匈奴——曰頭曼」

【先塋】 塋は「ハカバ」——は、祖先の墓、過庭錄に「吾恐愚民致疑害爾——」

【雋永ノ論】 書言故事に「談論深長ニシテ味アルヲ雋永ノ論トイフ」とあり、漢書の蒯通傳に「通戰國ノ時、說士ノ權變ヲ論ジ、亦自ラ其ノ說ヲ序ス、凡ベテ八十一首、號シテ雋永トイフ」註に「雋ハ肥肉ナリ、永ハ長ナリ其ノ論ズル所ロ甘美ニシテ義深長ナルヲイフ」一說、雋音「シュン」鵬また俊に同じと、

【僭越】 分に過ぐるをいふ漢書の五行志に「庶位節ヲ踰ユ、コレヲ僭トイフ」また賈誼傳に「諸侯王——シテ地古制ニ過グ」北史に「宜杜漸防萌無相——」韓愈の上于襄陽書に「不爲——也」

【嬋嫣】 連るなり、揚雄の反騷に「有周氏之——」

【潺湲】 (——)を見よ、

【善ヲ行フハ以テ名ノ爲メニセズ、而シテ名之ニ從フ】 (行善不以爲名、而名從之)列子に出づ、楊朱の語なり、

【善ヲ責ムルハ朋友ノ道ナリ】 (責善朋友之道也)孟子の語、

【膳ヲ損ス】 (損膳)食膳の費を減ずるをいふ、史記平準書に「天子乃——」解乘輿駟出御府禁藏以贈之」

【善ヲ盡シ、美ヲ盡ス】 (盡善盡美)完全無缺の義、論語に「子謂韶、盡美矣、又盡善也、謂武盡美矣、未盡善也」韶は舜の樂、武は武王の樂、

【善ヲ留ムルナシ】 (無留善)善あれば直ちに行ひ、留滯することなきをいふ、荀子に「——、無宿問」

【善ヲ作スヲ百祥ヲ降ス】 (作善降之百祥)商書に見ゆ、下に「作惡降之百殃」とあり、

【善ヲ爲ス最モ樂シ】 (爲善最樂)後漢の明帝永平十一年に、東平王蒼(光武ノ第三子)來朝す、蒼は上の即位の初より驃騎將軍となり、五年にして國に歸る、是に至りて入朝す、上問ふ、家に處て何を以て樂と爲すと、蒼曰く「——」と、後漢書に見ゆ、また鶴林玉露に「余ガ家山谷ノ八大字ヲ藏ス、云フ、作德日休、——」

【善ヲ爲スモ名ニ近ヅクナカレ、惡ヲナスモ刑ニ近ヅクナカレ】 莊子の養生主篇に「爲善無近名、爲惡無近刑」とあり、生を輕んじ義に趨くも、名を要するに至らず、生を貪り利を逐ふも、罪に陷るに至らざれとの意、

【善ヲ陳ベ邪ヲ閉ヅ】 (陳善閉邪)孟子離婁上に「故曰、責難於君、謂之恭、——、謂之敬」

【善賈】 「ヨキネダン」賈は價に同じ、論語子罕に「求——而沽諸」(待賈)を見よ、

【纖介】 纖は「コマカキスヂ」介は芥なり「アクタ」微細の義なり、戰國策に「無——之禍者、馮煖之計也」また後漢書に「臣之與卓、未無纖芥之嫌」

【跣行】 「ハダシアルキ」瀛涯勝覽に「占城男女俱——」

【銓衡】 銓も亦衡なり、量なり、人物を銓量するをいふ、晉書吳隱之傳に「汝若居——、當擧如此輩人」とあり、吏部の官を、銓官、或は銓衡の職といふは、人材を量りて任用するが故なり、抱朴子に「——不平則輕重錯繆、斗斛不正、則少多混亂」

【纖巧】 こまかきたくみ、俗にいふ小刀細工の上手なるをいふ、古樂府類編序に「其末——而不振」

【善行轍迹ナシ】（善行無轍迹）轍は、車輪のあと、迹は足あとなり、眞の善行は、人に目立つことなきに喩ふ、老子の語、

【仙客】鶴の異名、楊文公談苑に「鶴曰ニ——一」また仙人をいふ、唐の明皇の句に「——厭人間」

【先覺】人に先だちて道理を悟る者の稱、孟子に「予天民之——者也、予將以斯道覺斯民」

【遷客】「ルニン」通鑑の後晉紀に「池州多ニ——一」胡三省の註に「罪ヲ以テ外州ニ遷降セラルル者、ソノ州人之ヲ謂ツテ——トナス」

【禪學】漢事始に「寶林ニイフ、佛涅槃ノ時、迦葉ニ告テ曰ク、吾清淨ノ法眼ヲ以テ汝ニ付スト、迦葉ヨリ阿難ニ傳フ、二十八代ニシテ達磨ニ至ル、梁ノ普通年中（武帝の年號）ニ南天竺ヨリ、海ニ泛ビテ廣州ニ至ル、後ニ嵩山ニ止リテ少林寺ニ住シ、惠可ニ傳フ、中國禪ヲ談ズルコレヨリ始マレリ」

【辱顏】山の清くそば立つをいふ、辱一音「サン」巉に通ず、歐陽修の句に「空碧更ニ——」蘇軾の句に「攝衣步ニ——」

【千巖萬壑】晉の顧愷之、會稽に遊ぶ、人山水の美を問ふ、答へて曰く「千巖競秀、萬壑爭流」

【錢起】字は仲文、吳郡の人、詩に工なり、唐の天寶中、進士に擧げらる、詩は郎子元と名を齊しくす、士林語して曰く、前に沈宋あり、後に錢郎ありと、大曆十才子の第一人なり、著すところ錢仲文集十卷あり（湘靈鼓瑟を見よ、

【川芎】漢藥の名、本草に出づ、古名「ヲンナカヅラ」

【氈裘】獸毛の衣にて、夷狄の服する所ろ、轉じて夷狄の義とす、司馬遷の書に「——之君長、咸震怖」

【潛邱劄記】六卷、清の閻若璩撰す、この書は經籍を考證し、雜說・釋地餘論・策跋序啓哀辭・喪服翼注・書賦等に分ちて劄記せしもの、潛邱は、作者の故鄉なり、この書皇清經解に收むるものは、節錄にして全書にあらず、

【璿璣玉衡】璿は美珠なり、璣は機なり、璿を以て璣を飾るは、天體の轉運に象どる所以なり、衡は橫なり、橫簫をいふ、玉を以て管と爲し、橫たへて之を設く、璣を窺つて日月五星の運行を齊ふる所以なり、猶ほ今の渾天儀の如し、書の舜典に「在ニ——一以齊ニ七政一」在は察なり、七政は日月五星、

【仙禽】鶴の異名、舞鶴賦に「偉胎化之——」

【千金ノ裘ハ一狐ノ皮ニアラズ】貴重の「カハゴロモ」

を爲くるは、一狐の腋の能く成すところにあらず、國を治むるも、亦衆賢の力に資るに喩ふ、說苑の建本篇に「千金之裘、非ニ一狐之皮一、臺廟之榱、非ニ一木之枝一、先王之法、非ニ一士之智一、故曰、訊問者、智之本、思慮者、智之道」とあり、王子淵の四子講德論に「千金之裘、非ニ一狐之腋一、大廈之材、非ニ一丘之木一、太平之功、非ニ一人之畧一也」の註に「狐白裘ハ、狐ノ腋下ノ毛ヲ以テツクル、價千金ナリ」

【千金ノ子】富人を稱す、史記越世家に「千金之子、不死於市」

【千金ノ子ハ堂ニ垂セズ】垂は邊なり、堂の邊陲に近づきて墜ちんことを恐るるなり、富人は自愛することの深きなり、漢書の袁盎傳に「盎曰臣聞千金之子不垂堂」蘇軾の留侯論に「千金之子、不死於盜賊」

【千金ノ珠】（驪珠）を見よ、

【千鈞ノ重ヲ鳥卵ノ上ニ垂ル】（垂千鈞之重於鳥卵上）強大を以て弱小に加ふれば直ちに破るに喩ふ、史記張儀傳に「戰孟賁烏獲之士、以攻不服之弱國、無異——一必無幸矣」

【千鈞ノ弩ヲ以テ癰ヲ潰ス】（以千鈞之弩潰癰）強大の力を以て疲弊衰弱の國を破ることの極めて易きに喩ふ、戰國策に「齊罷國也、以天下擊之、譬猶——一也」癰は「ボンノクボ」或は背に發する危害なる瘡、

【千鈞ノ弩ハ鼷鼠ノ爲メニ機ヲ發セズ】大志あるものは、小事のために心を留めざる義、魏志に「千鈞之弩不爲鼷鼠發機、萬石之鐘、不以尺梃起音」

【千金ハ死セズ、百金ハ刑セラレズ】（千金不死、百金不刑）尉繚子に見ゆる諺なり、訟を聽く者私多く、千金を持ちたる者は、死罪をも免れ、百金を有する者は、刑罰を受けざるをいふ、

【千鈞モ船ヲ得バ則チ浮ブ】（千鈞得船則浮）賢者も位を得ざれば、才を施すこと能はず、位を得てはじめて才を伸すことを得るに喩ふ、韓非子に「夫レ材アルトモ勢ナケレバ、賢ト雖モ不肖ヲ制スル能ハズ、故ニ尺材ヲ高山ノ上ニ立テ、而シテ下千仞ノ谿ニ臨ム、材長キニアラサルナリ、位高ケレバナリ、桀天子トナリ、能ク天下ヲ制ス、賢ナルニアラザルナリ、勢重キナリ、堯匹夫トナリ、三家ヲ正ス能ハズ、不肖ナルニアラザルナリ、位卑キナリ、千鈞モ船ヲ得バ則チ浮ビ、錙銖モ船ヲ失ヘバ則チ沈ム、千鈞輕ク、錙銖重キニアラザルナリ、勢アルト勢ナキトナリ、故ニ短ノ高キニ臨ムヤ、位ヲ以テシ、不肖ノ賢ヲ制スルヤ、勢ヲ以テス」

【仙境】 仙人の住むところ、また極めて清く靜かなる場所をいふ、宋之問の句に「苔閣茅軒髣髴入神仙之境」仙寰に同じ、

【荐居】 「アチラ」「コチラ」と徙り住むをいふ、左傳襄四年に「戎狄——」の註に「荐ハ草ナリ、古、狄人水草ヲ逐ヒテ居徙シ、常處ナキナリ」と、一解に、荐は聚なり、あつまり居るなりと、

【先驅】 前導に同じ、史記孟軻傳に「鄒子如燕、昭王擁ー等——」

【前驅】 「サキノリ」周禮に「王出入則自馭而——」註に「——ハ、今ノ道引ノ如シ」と、漢書周勃傳に「天子——至不得入」の註に「——ハ駕ヲ導ク者ナリ」

【先君】 亡父をいふ、また廣く先祖をも稱す(先子)を見よ、

【仙寰】 寰は「クギリ」ある場所、——は仙境に同じ、仙人のすむところ、

【潺湲】 水の流るる貌、またその聲にもいふ、楚辭九歌に「荒忽兮遠望、觀流水兮——」釋冷然の詩に「松月影寒生碧落、石泉聲亂噴——」謝靈運の詩に「乘月弄——」

【遷化】 僧の死をいふ、泊宅編に「癲僧——」大乘義章五に「菩薩後時——他土」(涅槃)を見よ、

【遷喬ノ望】 榮轉を望む義、孟子に「吾聞出於幽谷遷于喬木者、未聞下喬木而入於幽谷者」とあるに本づく、桓溫の表に「幽谷無——之望」

【宣言】 あまねく衆に布き示すをいふ、左傳に「先——曰、司馬則然」

【嬋娟】 かたちの美しき貌「アテヤカ」文選西京賦に出づ、また、孟郊の句に「菱荇咸——」娟一音エン、

【孅妍】 こづくりにてうるはし、魏書に「浩——潔白、如美婦人」孅は纖に通ず、

【善卷】 堯の時の高士、武陵の人、枉山に居る、莊子いふ、舜天下を以て——に讓る、——曰く、余宇宙の中に立ち、冬日は皮毛を衣、夏日は葛絺を衣、春は耕種し形以て勞動するに足る、秋は收斂し、身以て體息するに足る、日出でて作し、日入つて息す、天地の閒に逍遙して、心意自得す、吾何ぞ天下を以て爲さんやと、遂に受けずして去りぬ、宋の政和閒、號を賜ひて遁世高蹈先生といふ、

【錢謙益】 字は受之、牧齋と號す、江南の人なり、明の萬曆三十八年進士に第し、編修を授けらる、清の兵頻りに諸州を陷れ、京城守らざるに及び、南京に赴き、潞王を立てんとせしが、鳳督馬士英等、福王を立て、阮大鋮等事を用ふるに至り、恐れて二人に附隨し、禮部尚書となる、清、江南を平定するに及び、遂に出でて降り、禮部右侍郎となり後家居して康熙三年卒す、年八十三、牧齋詩名一時に高かりしが、その節操なきを以て、その著書は乾隆の朝に、悉く焚滅せられぬ、

【潛研堂文集】 五十卷、詩集十卷、續詩集十卷、清の錢大昕撰す、大昕の學、極めて賅博通ぜざるところなし、故にその文自ら深厚にして、風格歸有光に似たり、詩も亦清醇にして法度あり、

【旋乾轉坤】 乾は天、坤は地なり、天地を回轉する義にて、威を張り武を振ひ國家を一洗し、面目を革むるをいふ、韓愈の潮州謝上表に「陛下即位以來、躬聽斷、——天戈所麾、莫不寧順」

【善言ハ布帛ヨリモ煖カナリ】 (善言煖於布帛)善き言葉の人を益することは布帛の體を煖むるに勝る義荀子に「與人善言、煖於布帛」また同書に「贈人以言、重於金石珠玉、觀人以言、美於黼黻文章」とあるも同義、

【舛午】 午は忤なり、差ひ忤ふ義、漢書劉向傳に「朝臣——繆戾乖剌」

【染戶】 「ソメモノヤ」北夢瑣言に「有——許琛一旦暴卒、染工、染家、染人、染匠皆同じ、

【專攻】 攻は專ら治むるなり——は專ら一事を治むる義、韓愈の師說に「術業有——」

【全功】 十分なる「テガラ」列子天瑞に「天地無——」

【宣告】 あまねく告ぐるなり、宣言に同じ、左傳に「——後人無怠於德」

【戰國策】 三十三卷、撰者詳かならず、春秋以後戰國に訖るまでの事を紀す、載する所ろ縱橫捭闔の說多きに居る、その書、篇簡脫落多し、漢の劉向校定して今の卷數と爲す、舊本漢の高誘註と題すれども、實は宋の姚宏が高誘註の殘本に因りて、之を補ひしにて、そのうち二卷より四卷に至り、六卷より十卷に至るは、誘の原註にして、餘は皆宏の補註せし所ろとなす

【仙才】 韻府に「李大白——、李長吉鬼才」

【剪綵】 「ツクリバナ」事物紀原に「花朶ハ漢ニ起リ、——ハ晉ニ起ル」又曰く、「唐ノ中宗立春ノ日、——花ヲ屯ス」と、剪勝、花勝、綵勝、假花皆同じ、

【千歲ヲ觀ント欲スレバ今日ヲ審ニス】 (欲觀千歲則審今日)荀子の語、下に「欲知億萬則審一二」とあり、一種の推理法なり、

【錢財積マザレバ貧者ハ憂フ】（錢財不積則貧者憂）貧者はただ貨利をのみ是れ好む、故に錢財の多く積まざるを以て憂と爲すなり、莊子に「——、——、——、權勢不尤、則夸者悲」尤は甚なり、

【千載ノ一遇】 永久の間に、一度遇ふ所ろの幸機をいふ、文選の三國名臣序贊に「千載一遇、賢聖之嘉會、遇之不能、無欣、喪之何能無慨」とあり、また韓文の潮州刺史謝上表に「所謂千載一時、不可逢之嘉會」

【剪綵花ト爲ス】 色どれるうつくしき絹をきりて花をつくること、隋書に「煬帝西苑ヲ築キ、周圍二百里アリ、宮樹秋冬ニ凋零スレバ綵ヲ剪リテ花葉トナシ、以テ枝條ニ綴リ、色淡クナレバ易フルニ新ラシキモノヲ以テシ、名ヅケテ長春苑ト云ヘリ」

【穿鑿】 穿は委曲して入るなり、鑿は孔を穿つなり、事理を解くこと度に過ぐるの意、漢書禮樂志に「以意——各取一切」蘇軾の文に「王荆公之學——至此」

【渲刷】 畫家に——の法あり、うす墨を再三そそぐをいふ、郭熙の林泉高致に「擦以水墨、再三而淋之謂之渲」

【鬚參軍】 晉書に「鄧超少クシテ卓犖義ヲ好ム、晉ノ末ニ臨海ノ大守ト爲ル、父憎、錢數千萬ヲ積ム、超盡ク親舊ニ散與ス、桓溫以テ參軍トナス、超ガ鬚多キニ因リテ、府中語シテ鬚參軍ト曰フ」

【先子】 亡父をいふ、また廣く先祖をもいふ、實齋野乘に「今人、——先君先人ト稱シテ父ト爲ス、然レドモ獨リ父ノミナラズ、祖宗皆可ナリ」

【染指】（指ヲ染ム）を見よ、

【染髭】（鬚ヲ染ム）を見よ、

【擅恣】 ほしいままにすること、淮南子に「無——之志無矜伐之色」專恣、放恣など皆同じ、

【禪師】 禪家耆德の稱號、我が國にては、或は官賜の號とす、弓削道鏡を大臣——とせられしこと正史に見ゆ、建長五年蘭溪和尚に大覺——の諡號を賜ふ、守護國界主經に「向國王大臣門、說我法、是律師也、禪師也、能悟三藏、兼衆藝」

【前修】 前代の德を修めし人をいふ、楚辭に「謇吾法夫——、今非世俗之所服」

【善柔】 論語に「友便辟、友——、友便佞、損矣」の朱註に「——ハ媚說ニ工ニシテ諒ナラザルナリ」

【禪宗】 禪那を宗とするによりて名づく、禪那は靜慮また正思惟と譯す、靜慮正思惟を以て悟道の要術とす、また禪は佛心を究め明すを宗とすれば、佛心宗ともいふ、中峯錄五下に「禪何物、乃吾心之名也、心何物即我禪之體也云云」梁の武帝の時、天竺の達磨大師來りてこの宗を弘む、達磨は之を二祖慧可に傳へ、慧可は之を僧璨に傳へ、僧璨は之を道信に傳へ、道信は之を五祖弘忍に傳ふ、弘忍の弟子に至りて禪宗は南北二宗に別る、南宗の祖は六祖の慧能にして、北宗の祖は神秀禪師なり、この中後世に至りて隆盛を極めしは南宗なりとす、わが國にては、臨濟・曹洞・黃蘗の三宗の總稱とす、

【千秋節】 天皇の聖壽を賀する節の名、わが國の天長節に同じ、唐會要に「開元十七年八月五日源乾曜・張說等請ウテ是ノ日ヲ以テ——ト爲ス、休假セシムルコト三日、長慶七年十月十日穆宗ノ誕日ニ至リテ、天下ノ州府ヲシテ宴ヲ置カシム、文宗ノ開成二年誕日ニ始メテ屠宰ヲ禁ズ、コレ聖節ニ屠ヲ禁ジ宴ヲ置クノ始ナリ、宋朝倶ニ循ツテ之ヲ用フ」詩經に「萬壽無疆、萬壽無期」楊萬里の揮麈錄に「天寶七載八月己亥詔シテ——ヲ改メテ天長節トナス」

【仙姿玉質】 美人を形容していふ、古今詩話に「元載ガ寵姬薛瑤英、詩書ヲ能シ、歌舞ヲ善ス、——、肌香バシク體輕シ、旋波・移光・飛燕・綠珠ト雖モ、之ニ過グル能ハズ」

【前事ノ忘レザルハ後事ノ師ナリ】（前事之不忘、後事之師也）意を前事に留むるは後事をあやまらざるための資たるをいふ、史記の始皇本紀に「野諺ニ曰ク、前事ノ忘レザルハ、後事ノ師ナリ、是ヲ以テ君子ノ國ヲ爲ムル、之ヲ上古ニ觀テ、之ヲ當世ニ驗シ、參フルニ、人事ヲ以テシ、盛衰ノ理ヲ察カニシ、權勢ノ宜ヲ審カニ

【先人】 亡父をいふ、また廣く先祖をも稱すべし（先子）を見よ、

【先進】 先輩に同じ、論語に「——於禮樂、野人也」

【淺斟】「ンサカモリ」事文類聚に「——低唱」

【薦紳】 縉紳に同じ、五帝本紀の贊に「薦紳難言之」とある註に「徐廣曰ク、薦紳ハ即チ縉紳ナリ、古字假借ス」と、薦は縉と通ず、縉は搢むなり、士大夫笏を革帶の間に搢む、故に朝臣を縉紳といふ、

【憸人】 憸は詖なり、「ネヂケビト」憸利の小人なり、書の立政に「國則罔有立政用——」また問命に「爾無悅于——」

【善人能ク盡言ヲ受ク】（惟善人）を見よ、

【錢神論】 晉書列傳六十四に「魯褒字ハ元道、南陽ノ人、

學ヲ好ミテ多聞ナリ、貧素ヲ以テ自立ス、元康ノ後、綱紀大ニ懷ル、褒、時ノ貪鄙ヲ傷ミ、乃チ姓名ヲ隱シテ——ヲ著シ以テ之ヲ刺ル、ソノ略ニ曰ク、親之如兄、字曰孔方、失之則貧弱、得之則富昌、無翼而飛、無足而走、解嚴毅之顏、開難發之口、錢多者處前、少者居後、錢之所祐、吉無不利、何必讀書、然後富貴云云」時を疾む者、その文を傳ふ、後終る所ろを知らず、この無足而走の句により、俗に錢を「オアシ」といふ、

【千字文】 一卷、梁の周興嗣撰す、興嗣字は思纂、姑孰の人、梁に仕へて、給事中に累遷し、國史を撰するに與る、四言古詩二百五十句より成る故に名づく、蓋し興嗣が魏の鍾繇の千字文を韻をふみて次第せしものなりといふ、

【千章】 大木を數ふるに章といふ、千本なり、史記貨殖傳に「——之材」

【先唱】 人より先だちてとなへ說く義、首唱に同じ、抱朴子に「——者窮之路也、後動者達之原也」

【甎匠】 甎は瓦なり、また「シキガハラ」甓なり、——は「カハラシ」瓦匠に同じ、會典に見ゆ、

【擅場】 「トビキリ」たる妙手にて、場中敵なき者の稱、東京賦に「秦政利觜長距、終得——」政は始皇の名、杜甫の詩に「畫手看前輩、吳生遠——」

【僭賞濫刑】 賞罰をみだりにして、當を得ざるをいふ、詩の商頌に「天命降監、下民有嚴、不僭不濫、不敢怠遑」註に「僭賞之差也、濫刑之過也」とあり、また左傳に「善爲國者、賞不僭而刑不濫」

【輭弱】 柔弱に同じ(軟弱)を見よ、

【千雀萬鳩、鷂ト仇ヲ爲ス】 (千雀萬鳩與鷂爲仇)微力の者多くとも一の强大なるものに敵すべからざるに喩ふ、易林に出づ、下に「威勢不敵、雖衆無益」とあり

【前車ノ覆ルハ後車ノ戒】 前車の傾覆するを見て、後車は之を警戒して、覆へさざるやうにすべしとの義、說苑の善說篇に「公乘不仁曰周書曰、前車覆、後車戒、蓋言其危」この語、漢書賈誼傳には鄙諺として引けり、

【染髭】 (髭ヲ染ム)を見よ、

【饘粥】 「カユ」厚きを饘といひ、薄きを粥といふ、後漢書に「朝暮送——」

【錢樹子】 かねのなる木の義にて、藝妓をいふ、書言故事に「明皇雜錄ニ、許子和ハ、吉州ノ永新ノ倡家ノ女、宮ニ入ル、因テ永新ト名ヅク、能ク新聲ヲ變ズ、卒スルニ臨ンデ、其ノ母ニ謂ツテ曰ク、阿母ノ錢樹子倒矣ト」

【千手陀羅尼ノ持者】 千手陀羅尼を常に念持する行者なり、千手陀羅尼とは、千手觀音の陀羅尼にて、一に大悲咒ともいふ、陀羅尼は佛菩薩の咒語にして、漢に神咒と譯す、

【前緒】 猶ほ先業といふが如し、先人の遺しおきたる事業のいとぐちをいふ、楚辭に「纂就——、遂成考功」考は父なり、

【蟾蜍】 月の異名、後漢書天文志の注に「羿、不死ノ藥ヲ西王母ニ請フ、姮娥之ヲ竊ンデ以テ月ニ奔ル、是ヲ——ト爲ス」と、五經通義に「月中有兎與——」姮娥は羿の妾、淮南子精神訓にも「月中有——」

【千乘】 周代に於ける大國の兵賦をいふ、方十里に、革車一乘を出す、甲士三人、左は弓を持し、右は矛を持し、中人は御す、步卒七十二人、重車を將ゐる者二十五人、惣數百人、千乘は則ち十萬人を出す、詩經に「公車——」

【戰悚】 ふるへおそる、晉書に「夙夜——、以榮爲憂」

【戰色】 おののきて色惧るるなり、論語に「勃如——」

【纖嗇】 慳悋の義「シワキ」こと、史記貨殖傳に「其贏得過當愈於——」

【善書ハ紙筆ヲ擇バズ】 (善書不擇紙筆)後山談叢に「善書不擇紙筆、妙在心手」また歐陽詢の傳に「褚遂良、精筆佳墨ニアラザレバ、未ダ嘗テ輒ク書セズ、嘗テ虞世南ニ問ヒテ曰ク、吾ガ書詢ニ孰レゾト、答ヘテ曰ク、吾レ聞ク詢ハ紙筆ヲ擇バズシテ、皆志ノ如キヲ得、君豈ニ比スルヲ得ンヤト」

【先生】 我より先に生れて道をわきまへ知れる人の稱、孟子に「——將何之」と、章昭辨名に「古者稱師曰先生」と、禮記に「道ニ先生ニ遭ヘバ、趨リテ進ミ、正立シテ手ヲ拱ス」

【宣政】 唐の「ゴテン」の名、四夷の入つて朝貢する者、皆——殿に引見す、韓文の論佛骨表に「——一見」

【專制】 獨斷にて、ほしいままに事を爲すをいふ、漢書の文帝紀に「夫以呂太后之嚴、立諸呂爲三王、擅權專制」とあるに本づく、

【蟬蛻】 蛻は「モヌケル」——は蟬の皮のぬけたる如く、超然として世外に脫し去るをいふ、史記屈原傳に「——於濁穢、以浮游於塵埃之外」

【善逝】 佛の十號の一なり、瑜伽論に「上昇最極永不退還、故名——」また成實論に「佛有正道行施等行、故名——」

【前席】 (席ヲ前ム)を見よ、

【泉石ノ膏肓】 深く山水を愛するをいふ(烟霞ノ)を見

よ、

【仙仙】 仙、僊同じ、舞をまふ貌、詩經の賓之初筵に見ゆ、

【芋芋】 茂り盛なる貌、列子に「美哉國乎、鬱鬱——」

【淺淺】 淺は濺に同じ、疾く流るる貌、楚辭に「石瀨兮——」

【洒然】 肅恭の貌、史記范睢傳に「群臣莫不——變色易容者」また洒如に作る、義同じ、禮の玉藻に「色洒如也」

【潺潺】 水流るる貌、潺湲に同じ、李後主の句に「簾外雨——」

【冉冉】 速にうつり行く貌、楚辭に「老——其將至兮」吳質の書に「日月——歲不與我」一說に「——は、漸なりと、

【漸漸】 淚の流るる貌、楚辭に「涕——兮」

【戰戰兢兢】 恐れ戒むる貌、戰戰は、恐懼なり、兢兢は戒謹なり、詩經の小雅小旻に「——如臨深淵、如履薄氷」楚辭に「其誰不——以事百神」

【戰戰慄慄】 恐れつつしむ貌、淮南子に「——日愼一日、人莫躓於山、而躓於垤」躓は「ツマヅク」垤は蟻封「アリヅカ」

【仙鼠】 蝙蝠の異名、方言に「蝙蝠自關而東、或謂之——」

【先祖】 程子遺書に「——ハ初祖以下 高祖以上ノ祖ナリ、立春ハ生物ノ始メナリ、故ニソノ類ニ象ツテ之ヲ祭ル」と、註に「——ハ始祖ヨリシテ下、高祖ヨリシテ上ヲイフ一人ニ非ルナリ」

【踐阼】 踐は履(フム)なり、阼は主階なり、主階とは、祭祀の主人たる者が、その場に臨むに、升る所ろの階にて堂の東方に設く、主階を履みて事を行ふ、故に——といふ、禮記に「——臨祭祀」とあり、轉じて天子の位に即きたまふをいふ、阼一に祚に作る、祚は位なり、義同じ、

【賤息】 「セガレ」類書纂要に「自稱子曰——、又曰小兒、蠢頑・頑兒・小頑」

【跣足ニテ棘ヲ履ム】 (王鐵槍)を見よ

【顓孫師】 陳の人、即ち子張なり、孔門の弟子 才高く意廣し、晚年德に進む、後世陳伯に封じ、宛丘侯に進む、

【蚺蛇】 蚺は大蛇なり、尾は圓くして鱗なし、身に斑文あり、南越志に「蚺蛇ハ牙五六寸ノ者アリ、土人之ヲ重ンズ」

【賤内】 己の妻を謙していふ、奇効醫述に「——患一病、已經兩月餘」

【錢大昕】 字は及之、辛楣と號し、また竹汀と號す、江蘇嘉定の人、乾隆十九年の進士、官少詹事に至り嘉慶九年卒す、年七十七、六經百家通ぜざるところなし、凡そ經義の聚訟決し難きものは、皆能くこれを剖析す、推して當代の通儒となす、尤も算術に精しく、中西兩法に通ず、著すところ潛研堂詩文集・十駕齋養新錄・唐書史臣表・竹汀日記鈔等數十種あり、

【剪刀】 「タウバサミ」行廚集に「——曰繡剪、又曰燕尾、以形似故」

【錢塘】 浙江省杭州府に在り、秦に錢唐といふ、唐以後唐を改めて塘とす、

【全唐詩】 九百卷目錄十二卷、清の康熙四十二年彭定求等勅を奉じて編す、故に御定の二字を冠す、作者二千二百餘人詩數四萬八千九百餘首の多きに至る、先づ帝王后妃の作を錄し、次に樂章樂府を收め、次に諸臣の詩を錄し、次に聯句逸句名媛僧道外國神仙鬼怪諧謔及び諸雜體を收む、體例謹嚴にして校訂極めて周密なり、

【全唐詩錄】 一百卷、清の徐倬撰す、倬字は方虎、蘋村と號す、德清の人、康熙十二年の進士、この書は御定全唐詩に就きてその菁華を採りて一書とせしものなり、卷首に康熙帝の御製の序あり、次に總目錄全唐詩人年表各一卷あり、先づ帝王后妃を列し、次に諸臣次に方外神仙の詩を錄し、人毎に小傳を附せり、

【全唐文】 一千卷、清の嘉慶十九年董誥等勅を奉じて撰す、誥字は蕉林浙江富陽の人、乾隆二十八年の進士、この書唐人の文集を彙輯し、幷せて五代の文をも收む、體例は全唐詩と同じく、首に諸帝次に后妃次に宗室諸王、次に公主次に百官次に釋道次に閨秀次に宦官四裔の作を採錄せり、

【選擇】 えらびとる、孟子に「——而使子」

【選擢】 衆人の中よりえらびてぬく、後漢書に「古者——諸侯以爲公卿」

【然諾】 うけゆるす義、然は許なり、一言も人に許せば必ず之を信にするをいふ、史記張耳陳餘傳に「此固趙國立名義不侵、爲——者也」また江淹雜體詩に「延陵輕寶劍、季布重——」

【川澤汙ヲ納ル】 すべて物は完美を得ること難し、以て小惡は大德を損ぜざるに喩ふ、左傳宣十五年に「諺曰、川澤納汙、山藪藏疾、瑾瑜匿瑕、匿は藏なり、美玉の質と雖も、亦或は瑕穢を居藏す」國君含垢、天之道也」とあり、

【擅斷】 ほしいままに、事をさだめ行ふ、陳琳の句に「——萬機」と、また専斷は他にはからず、己ひとりにてきままにとりきめる、順宗實錄に「專斷外事」

【先達】 先進の人をいふ、文選庾亮(元規)の讓中書監表に「十餘年閒、位超——」

【鐵檀】 「イナビカリ」をいふ、宋の葉廷珪が、海錄碎事に「——ハ、電光ナリ」と、太平廣記に「月支、猛獸ヲ獻ズ、兩目、天ノ——ノ炎光ノ如シ」

【栴檀】 ハ二葉ヨリ香シ】 觀佛三昧經に「栴檀根芽漸漸生長、纔欲成樹、香氣昌盛」とあり、栴檀は一に檀香ともいふ、赤檀白檀紫檀等の種類あり、「祖庭事苑に「此云與樂、以白檀能治熱病、赤檀能去風腫、皆除病身安之樂、故名」華嚴經に「摩羅耶山栴檀香ヲ出ス、名ツケテ牛頭トイフ」正法念經に「此山ノ峯狀牛頭ノ如シ、此峯中ニ於テ生ズ、故ニ牛頭ト名ヅク」

【洗竹】 竹をすかす、杜甫に——歌あり、

【禪定】 禪とは、梵語の禪那の略にて、定とは三昧の譯なり、禪那は舊譯に、思惟修、新譯に靜慮と譯す、思惟修とは、眞理を思惟して心を修治する義、靜慮とは、念慮を安靜にする義なり、定とは、心の散れるを一處に定むる義にて、詳しくは、調直定といふ、心の暴さを調へ、心の曲れるを直し、心の散れるを定むる義なり、智度論二十八に「一切——亦名定、亦名三昧」

【千丈ノ城之ヲ尊俎ノ閒ニ拔ク】 戰國策に見ゆ、蘇秦の言、談論の閒に千里を折衝するをいふ、下に「百尺之衝、折之於席之上」の句あり、

【千丈ノ堤モ螻蟻ノ穴ヲ以テ潰ユ】 大事は細より起り、難事は易より起る、故に事を爲すには、細を愼み、易を戒むべしとの喩なり、韓非子に「千丈之堤、以螻蟻之穴潰、百尺之室、以突隙之烟焚」とあり、突は竈突(ケムリダシ)なり、

【先帝】 前代の天子、獨斷に「已ニ故スル(オカクレニナリタ)前帝ヲイフ 先朝ノ諸帝ヲ歷擧スルニハ列聖トイヒ祖宗トイフ」

【筌蹄】 物を捕へ得るまでの具なり、筌(ウヘ)は以て魚を捕り、蹄は兎の脚を繫けて取る、莊子の外物論に「筌ハ魚ニ在ル所以、魚ヲ得テ而シテ筌ヲ忘ル、蹄ハ、兎ニ在ル所以、兎ヲ得テ而シテ蹄ヲ忘ル、言ハ意ニ在ル所以、意ヲ得テ而シテ言ヲ忘ル、吾レ安ンゾ夫ノ言ヲ忘ルルノ人ヲ得テ、之ト共ニ言ハンヤ」とあり、また王陽明の文章軌範の序に「徒ニ以テ其ノ寵祿ヲ希フノ筌蹄ニ資ス」とあり、

【前程】 「ユクサキ」樂善錄に「每以——祈禱」前途に同じ(但好事)を見よ、

【洗滌】 洗ひ淸むる義、滌もあらひそそぐ、後漢書に「復見——」浣滌に作る、義同じ、

【先哲】 前の世に出たる智德のすぐれたる人をいふ、曹植の句に「德配姜嫄、不忝——」前哲皆同じ、

【前哲】 前に同じ、左傳に「賴——以免也」

【先天】 人の生れきたる以前をいふ、また人のうまれつきにもいふ、易に「先天而天弗違」

【洗腆】 洗は淸潔を致すなり、腆は厚を致すなり、饗儀を鄭重にするをいふ、書の酒誥に「厥父母慶、自——致用酒」

【鮮腆】 鮮は善、腆は厚なり、自ら善厚にする義、自ら尊大にするなり、蘇軾の留侯論に「倨傲——、而深折之」

【蟾兎】 月の異稱、古詩に「三五明月滿、四五——缺」劉孝綽の句に「——屢盈虛」

【前途】 「ユクサキ」夢溪筆記に「吳僧持一寶鑑來云、齋戒照之當見——吉凶」前程に同じ、

【先登】 衆に先だちて城に登るをいふ、左傳隱十一年に「潁考叔取鄭伯之旗蝥弧以——」蝥弧は旗の名、

【扇動】 扇にて風を起し、物を動かす如く、敎唆して事を起さしむるをいふ、魏志梁習傳に「更相——、往往棊峙」

【戰鬪】 品字箋に「戈ヲ持シテ相向フヲ戰トナシ 臂ヲ攘ヒテ前ムヲ鬪トイフ(くみうち)語ニイフ勇于公戰而怯于私鬪」とあり

【前途程遠シ、思ヲ雁山ノ暮雲ニ馳ス】 大江朝綱が於鴻臚館餞北客序の中の語なり「前途程遠、馳思於雁山之暮雲、後會期遙、霑纓於鴻臚之曉淚」と是れなり、北客とは唐使たる渤海の周文德をいふ、この時、鴻臚館は京都七條朱雀に在り、雁山は支那の西京より胡地に越ゆる閒に在る高山、西京賦に、北接雁門とあるは是れなり、この句の大意は君が前程は甚遠くして、跋涉の勞、察するに餘りあり、何時再會するを得べきか、覺束なき次第なれば、別淚の潸然として下るをとどむる能はずとなり、

【善ニ從フ流ルガ如シ】 (從善如流)善に從ふこと、水の流るるが如く、敢て逆ふことなく、速なるをいふ、左傳昭十三年に「——下善齊肅」

【善ニ從フ登ルガ如シ】 (從善如登)國語に「諺曰、——從惡如崩」とあり、如崩とは、難きに喩へ、如崩とは易きに喩ふ、

【賤ニシテ貴服ヲ服スル之ヲ僭上トイフ云云】 太平記巻十二に見ゆ、孝經卿大夫章の孔安國の註の語なり、

【千日紅】 俗に千日草といふ、高二三尺、莖は秋海棠に似て淡紫色なり、秋、深紫の花を開く、重瓣にして圓くして楊梅に似たり、天和年中、漢種長崎に來る、

【先入主ト爲ル】 (先入爲主)一番先に耳に入りたる言を以て宗とする義、漢書息夫躬傳に「觀覽古戒反覆參考、無以先入之語爲主」

【仙人】 仙は釋名に「老而不死曰仙、仙遷也、遷入山也」と、道家の方士等が唱へ出して、つひに世の俗說となるに至れり、南史隱逸傳に「龔祈風姿端雅、容止可觀、范述見之歎曰、此荆楚之——也」と、また古詩に「——騎白鹿髮短耳何長」

【仙人掌】 「サボテン」なり、花鏡に「——ハ草ニアラズ、木ニアラズ果蔬ニアラズ枝無ク葉無クマタ幷セテ花ナシ 土中ニ一片ヲ突出シ手掌ト異ルナシ、其ノ膚色青綠光潤觀ルベシ」と、泉州府志に「——一名ハ龜脚」一名は覇王樹、

【善人ト居レバ、芝蘭ノ室ニ入ルガ如シ】 孔子家語に「與善人居、如入芝蘭之室、久而不聞其香、即與之化矣、與不善人居、如入鮑魚之肆、久而不聞其臭、亦與之化矣、是以君子愼其所與處焉」

【千人ノ諾諾ハ一士ノ諤諤ニ如カズ】 衆愚は一賢に如かざるをいふ、諤諤は直言の貌、史記の商鞅傳に「商君秦ニ相タル十年、趙良、商君ニ見ユ、商君曰ク、子我ガ秦ヲ治ムルヲ觀ルニ、五羖大夫ノ賢ナルニ孰レゾト、趙良曰ク千羊ノ皮ハ、一狐ノ腋(わきのした)ニ如カズ、千人之諾諾不如一士之諤諤ト、僕請フ終日正言セン、可ナランカト、商君曰ク、語ニ之アリ、貌言ハ華ナリ、至言ハ實ナリ、苦言ハ藥ナリ、甘言ハ疾ナリ、子果シテ終日正言スルヲ肯ンゼバ、鞅ガ藥ナリト」

【善人ハ不善人ノ師】 (善人者不善人之師)老子の語、下に「不善人者善人之資」とあり、

【洗馬】 漢百官表の「庶子——」の注に「——ハ前驅ナリ、國語ニ曰ク、勾踐親ラ夫差ノ——ト爲ル、洗ハ先ナリ、或ハ洗ニ作ル」後漢百官志に「——ハ太子出ヅレバ、則チ當直ノ者、前ニ在リテ威儀ヲ導ク」晉職官志に「——ハ國籍ヲ掌リ釋奠講經ニハ則チ其ノ事ヲ掌ル」唐百官志の注に「龍朔二年——ヲ以テ司經大夫ト爲シ三年司經大夫ヲ改メテ桂坊大夫ト曰フ」

【善敗己ニ由ル】 (善敗由己)善敗は、猶ほ成敗といふが如し、事の成敗は、我が行の善惡に由りて分るるをいふ、左傳に「——ハ——、而由人乎」

【訕謗】 訕は一音サン 他人の德聲をそこなひそしる、謗は他人の短所をそしる、北史に「坐——繫獄」誹謗・毀謗・譏謗など略同じ、

【專房ノ寵】 獨り君の寵幸を專らにする義、晉書胡貴嬪傳に「胡貴嬪名芳、最蒙愛幸、殆有專房之寵焉」

【仟佰】 仟は千錢、佰は百錢をいふ、漢書食貨志に「——之得」また次の阡陌の義にも通用す、

【阡陌】 田間の道なり、史記の秦本紀に「爲田開阡陌」の註に、風俗通を引きて「南北ヲ阡ト爲シ、東西ヲ陌ト爲ス」

【前跋後疐】 跋は躡なり、疐は跲なり、狼が前に進まんとすれば、其の胡を躡み、後に退かんとすれば、其の尾に跲く如く、進退の難きに喩ふ(前ヲ跋ミ)を見よ、

【先妣】 亡母をいふ、爾雅に「父曰考、母曰妣」禮記に「生ニ父母トイヒ、死ニ考妣トイフ」

【泉布】 泉は錢なり、——は、貨幣をいふ、管子に「謹守——之謝」と、周禮天官の註に「ソノ藏スルヲ泉トイヒ、行フヲ布トイフ、名ヲ水泉ノ流行シテ徧カラザルナキニ取ル」とあり、

【仙風道骨】 仙人道士の風骨ありて、凡人に異るをいふ、李白の大鵬賦の序に「余昔於江陵見天台司馬子微、謂余有——可與神遊八極之表」

【薦福碑】 江西省饒州府薦福寺碑は唐の歐陽詢の筆、范仲淹、饒州に知たりし時、一日書生あり、詩を獻ず、仲淹その貧を憐み ——千本を摹し之に贈らんと欲す、紙墨已に具して一夕雷その碑を擊碎せりと、錦字箋に見ゆ

【先府君】 亡父をたふとびて稱す、蘇老泉の送石昌言爲北使引に見ゆ、朱子語類に「無爵曰府君夫人、漢人碑已有、只是尊神之辭、府君如官府之君」

【潛夫論】 十卷、後漢の王符撰す、符字は節信、安定臨涇の人、耿介俗に合はず、隱居して書を著し以て當時の得失を議す、その名を顯すことを欲せず故に題して——といふ、すべて三十五篇、別に叙錄一篇あり 各篇の主旨を總括せり、

【洗兵】 兵器を洗ひ收むる義、戰をやむるをいふ 杜甫の洗兵馬に「安得壯士挽天河、淨洗甲兵長不用」

【錢癖】 晉書に「和嶠ノ家至富ナレドモ、性吝ニシテ一錢ト雖モ敢テ人ニ與ヘズ時人之ヲ——トイフ」(馬癖)を參看せよ、

【先鞭ヲ著ク】 人に先だちて事を爲すをいふ、晉書劉

現傳に「劉琨、祖逖ト友タリ、親故ニ與フル書ニ曰ク、吾枕戈待旦、志梟逆虜、常恐祖生先吾著鞭」(祖逖)を參看せよ、

【千變萬化】 變化多くして極りなきをいふ、列子に「一一一、不可窮極」漢書賈誼傳に「一一一一未始有極」

【漸摩】 しだいしだいに研ぎ磨く義、摩は相切磋する義、禮の學記にも「相觀而善之謂摩」とあり、宋史に「設學校者、要以仁義一一」

【先民】 古の賢者をいふ、詩經大雅板に「一一有言、詢于芻蕘」(芻蕘)を見よ、

【善以テ寶ト爲ス】 (善以爲寶)大學に「楚書曰、楚國無以爲寶、惟善以爲寶」の註に「楚書ハ楚語ナリ、言フコロハ、金玉ヲ寶トセズシテ、善人ヲ寶トスルナリ」

【善モ積マザレバ以テ名ヲ成スニ足ラズ】 易の繫辭に「善不積不足以成名、惡不積不足以滅身、小人以小善爲無益而不爲也、以小惡爲無傷而弗去也、故惡積而不可掩、罪大而不可解」

【專門】 專ら一經を究むるをいふ、漢書儒林傳に「各一教授」張九齡の詩に「家受專門學」

【前門ニ虎ヲ拒ギテ後門ニ狼ヲ進ム】 わづかに禍をのがれて、又禍に逢ふを云ふ、陳惇脩の史斷に「前門拒虎、後門進狼」

【千門萬戶】 家屋の宏大なるさま、史記孝武記に「作建章宮、度爲一一一一」また西都賦に「張千門而立萬戶」また人家の稠密なるにもいふ、清の盧道悅の迎春の詩に「律轉鴻鈞佳氣同、肩摩穀擊樂融融、不須更向東郊去、春在一一一一中」

【穿楊】 古の射に巧なる人をいふ(百步楊)を見よ、

【千羊ノ皮ハ一狐ノ腋ニ如カズ】 衆愚は一賢に若かざるをいふ、史記の趙世家に「趙簡子、臣アリ周舍トイフ、直諫ヲ好ム、周舍死ス、簡子朝ヲ聽ク每ニ常ニ悅ビズ、大夫宰ヲ請フ、簡子曰ク、大夫非ナシ、吾レ聞ク千羊之皮不如一狐之腋ト、諸大夫ノ朝スル、徒ニ唯唯ヲ聞ク、周舍ノ鄂鄂ヲ聞カズ、是ヲ以テ憂フルナリト」鄂鄂は諤諤に同じ、やかましく爭ふをいふ

【千羊ハ獨虎ヲ捍グ能ハズ】 弱小なるもの多くとも、一の强大なるものをふせぐこと能はざるに喩ふ、抱朴子の語、下に「萬雀不能抵一鷹」易林に「千雀萬鳩、與鵠爲仇、威勢不敵、雖衆無益」とあるも意は同じ

【穿窬ノ盜】 壁を穿ち、牆を踰ゆる小盜なり 論語の陽貨に「其猶穿窬之盜也歟」孟子に「人能充無穿踰之心而義不可勝用也」禮記にも「情疏而貌親、在小人則一一之一也」

【先容】 前もつて、ほめ薦むる義、漢書鄒陽傳に「蟠木根柢、輪囷離奇而爲萬乘器者、以左右先爲之容也」注に「一一ハ雕刻シテ飾ヲ加フルヲイフ」と、駱賓王の詩に「徒懷萬乘器、誰爲一一」(左右先ヅ)を見よ、

【錢朗】 南昌の人、書を西山に讀み、五經を以て登科し、累官して光祿卿に至る、唐の文宗の朝、廬山に歸隱し、補腦還元の術を得たり、錢鏐延いて杭に致し、之を禮すること師の如し、玄孫數人皆明經を以て縣宰となる已に皓首なり、而るに朗は猶ほ童子の如し、一日家人に告げて曰く、我適〻上清の召す所ろとなる、今去らんと、俄にして氣絕す、數日顏色生けるが如し、棺を擧ぐるに尸已に解去せり、時に年一百七十歲(尸解)を參看せよ、

【專利】 利益を一人して專らに占むる義、國語の周語に「榮公好一一」

【千里行ヲ留メズ】 (千里不留行)千里の遠きに行く閒、誰も之を遮り止むる者なきは、天下に敵なきなり、莊子の說劍篇に「莊子趙ノ文王ニ謂ッテ曰ク 臣聞ク大王劍ヲ喜ムト、故ニ劍ヲ以テ王ニ見ユト、王曰ク 子ノ劍何ヲカ能ク禁制スルト、曰ク、臣ノ劍十步ニ一人、千里行ヲ留メズ、王大ニ之ヲ說ンデ曰ク、天下ニ敵ナシ」とあり、十步に一人とは、十步を行く閒に、一人を殺すをいふ、

【千里糧ヲ齎ラサズ】 (千里不齎糧)世の中太平にして且つ豐年なるをいふ、圓機活法に「唐ノ貞觀四年米斗四五錢、人數千里ニ行クニ糧ヲ齎ラサズ、民物蕃息ス、青齊ノ閒斗米三錢ナリ」

【戰栗】 をののき懼るる貌、論語に「使民一一」

【千里猶ホ對面ノ如シ】 (千里猶對面)唐書房玄齡傳に「高祖曰ク、房玄齡機識實ニ宜シク委任スベシ、每ニ吾ガ見ノ爲メニ事ヲ千里ノ外ニ陳ス、猶ホ對面シテ語ルガ如シ」

【千里ニ適ク者ハ、三月糧ヲ聚ム】 (適千里者、三月聚糧)遠方へ行く者はそれに應じて糧を多く持ち行くをいふ、莊子の逍遙遊に出づ、

【千里ノ馬ヲ却ク】 通鑑綱目孝文紀に「時ニ千里ノ馬ヲ獻ズル者アリ、帝曰ク 鸞旗前ニ在リ、屬車後ヘニ在リ、吉行ニハ、日ニ五十里、師行ニハ三十里、朕千里ノ馬ニ乘ジテ獨リ安ンゾ之ニ先ンゼンヤト、是ニ於テソノ馬ヲ還シ、道里ノ費ヲ與ヘ、詔ヲ下シテ曰ク、朕ハ獻

ヲ受ケザルナリ」とあり、また光武紀にいふ「時ニ異國ヨリ名馬ヲ獻ズルモノアリ、日ニ行クコト千里、マタ寶劒ヲ進ム、價百金ニ値ス、詔シテ劒ヲ以テ騎士ニ賜ヒ、馬ハ鼓車ニ駕セシム」と、集覽にいふ、天子の車駕出るときは、後に黄門の鼓車ありと、鼓車とは、鼓を載するの車をいふ、皇朝史略に「孝文光武却千里馬」とあるは、右の二事を斥すなり(死馬ノ)を參看せよ、

【千里ノ馬ハ常ニアレドモ伯樂ハ常ニアラズ】 すぐれたる人才はあれども之を用ふる賢相なきに喩ふ、韓愈の雜說に「世有伯樂、然後有千里馬、千里馬常有、而伯樂不常有、故雖有名馬、祇辱於奴隸人之手、駢死於槽櫪之閒、不以千里稱也」伯樂は孫陽といふ人、善く馬を相す、天上に一星あり、伯樂と名づく、天熙星の旁に在り、人孫陽の馬を識るを見、因つて號して伯樂といふ、この文借りて以て賢宰相に比す、千里馬は英雄豪傑の異材に比す、

【千里ノ行モ一歩ヨリ始マル】 千里の旅行も、其の始は足下の一歩より始まる如く、勉めて已まざるときは、如何なる大事をも、成し得べきをいふ、老子に「合抱之木、生於毫末、九層之臺、起於累土、千里之行、始於足下」

【千里ノ結言】 遠方の友と約せし言なり、後漢書に「范式字ハ巨卿、少クシテ太學に游ブ、汝南ノ張邵ト友タリ、邵字ハ元伯、二人各鄉里ニ歸ルトキ、式元伯ニ謂ツテ曰ク、後チ二年當ニ過リテ尊親ヲ拜スベシト、期ニ至リテ元伯母ニ白シテ饌ヲ設ケテ之ヲ候ント請フ母曰ク、二年ノ別ニシテ千里ノ結言ナリ、爾何ゾ相信ズルノ審ナルヤト、對ヘテ曰ク、巨卿ハ信士ナリ、必ズ乖違セズト、日ニ至リテ巨卿果シテ到ル、堂ニ升リ母ヲ拜シ、歡ヲ盡シテ別ル」

【千里ノ江陵一日還】 李白の早發白帝城詩の承句なり、曰く「朝辭白帝彩雲閒、————、兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山」江水迅急の狀をいひ得て妙なり、盛廣之の荆州記に「朝發白帝、暮至江陵、其閒千二百里、雖飛雲迅鳥、不能過也」とあり、

【千里ノ駒】 楚辭に「寧ロ昂昂タルコト千里ノ駒ノ若クセン乎」の註に「昂昂ハ志行高キナリ、千里ノ駒トハ、才絶グレテ殊ナルナリ」漢書の楚元王傳に「劉德字ハ路叔、少クシテ黄老ノ術ヲ修メ、智略アリ、少時、數事ヲ言フ、甘泉宮ニ召見セラル、武帝之ヲ千里ノ駒ト謂フ」年少なるが故に駒といふ、また事類全書に「晉ノ苻朗ハ堅ガ從兄ノ子ナリ、堅嘗テ之ヲ目シテ吾ガ家ノ

千里駒トイフ」

【潛鱗】 水中に深くひそめる魚、孫逖の句に「還見躍——伏鱗に同じ、

【善隣】 隣國に交るに善く道を盡すをいふ、左傳隱六年に「親仁善隣國之寶也」

【禪林】 禪林寶訓音義に「禪ハ靜慮ナリ、林ハ叢林ナリ蓋シ謂フ心ハ、山林ノ士、海ノ流、招提(てら)ニ雲集シ、堂ヲ同クシ、命ヲ共ニシ結伴參學シ、淨業ヲ修習ス、此ヲ以テ之ヲ言フ 故ニ——ト曰フ」禪僧の多くあつまれるところをいふ、又その仲閒をもいふ、

【千里命駕】 書言故事に「遠方ノ朋友過訪スルヲ謝シテ、仰辱千里命駕トイフ、晉ノ呂安、嵇康ノ高致ニ服シ、相思フ毎ニ、輙チ千里駕ヲ命ジテ之ニ從フ」

【潛龍】 天子の未だ位に即かざる時をいふ、易經乾卦に「——勿用」また淮南子に「——勿用者、言時之不可以行也」

【千慮ニ一得アリ】 (愚者)を見よ、

【賤劣】 「イヤシ」漢書の註に「其——如僮豎」

【謝劣】 謝一に譾に作る、淺也、才智のあさくして劣れるなり、淺劣に作る同じ、吳志に「智慧淺劣」

【蟬聯】 言語または事物の連り綴く貌、晉書王濛傳に「王恭曰、與阿大語、——不得歸」また同書に「王僧綽僧虔等爵位——文武相繼」また文選の吳都賦に「——陵邱」

【先王ニ靖獻ス】 (靖獻先王)人其の義の當に盡すべき所ろに安んじて、以て其の志を先王に達する義にて、神明に愧づることなきの意、書の微子に「自靖人自獻于——」

【責ヲ塞グ】 己の盡すべき務をなし終へたる義、漢書に「高祖逮捕趙王敖、趙相貫高對獄獨白、趙王不反、上赦趙王、貫高曰、今王已出、吾責已塞、死不恨矣」聊カ以テ)を見よ、

【芹】 爾雅に「——ハ楚葵ナリ」の注に「今ノ水中ノ芹菜ナリ」疏に「——名ハ水英」呂氏春秋に「——ノ美ナル者ハ雲夢ノ——ナリ」詩經に「薄采其——」香——は「ニホヒ」高き芹をいひ、野——は「ノゼリ」をいふ、

【芹ヲ獻ズ】 (芹)を見よ、

ソ

【遡游】 遡は泝に同じ、「サカノボル」義なれども、單に水に沿ふ義にも用ふ、——は、流に順ひて下るをいふ、詩經秦風蒹葭に「——從之宛在水中央」宛は坐ながら見ゆる貌、

【蘇易簡】 字は太簡、桐山の人、宋の太宗の時進士に及第し、翰林學士より、參知政事に終る、勅を奉じて文苑英華一千卷)を參修す、

【祚胤】 祚は福祿なり、胤は子孫なり、詩の大雅に「君子萬年、永錫——」

【僧】 梵語僧伽の略、家を捨てて佛門に入れる人の稱、比丘・沙門・桑門・出家・法師・緇徒等の異稱あり、

【窓牖】 窓は窓の俗字、鄭玄曰く「窓助戸爲明也」と、釋名に「窓聰也、於内窺外以爲聰也」と、牖は壁を穿ち明を取るなり、櫺子(窓ニ設ケタル格子)窓をいふ、

【宋璟】 字は廣平、唐の名相(漢ノ丙魏)を見よ、

【曾益】 「マシフヤス」曾は增なり、孟子の告子篇に「——其所不能」

【宋琬】 字は玉叔、荔裳と號す、山東萊陽の人、清の順治四年の進士、四川按察使に官す、詩は杜韓を學びて工なり、時に感じ事を傷むの作、凄清激宕の音多し、施愚山と名を齊うし、世に南施北宋と稱す、安雅堂集あり、

【走舸】 「ハヤブネ」三國志の吳志に「豫備——輕舸・單舸など略」同じ、

【曾開】 字は天游、準の次子、崇寧の進士、官を歷て禮部侍郎に至る、秦檜和議を主とす、開抗疏して力爭し、檜に忤ひ、出されて徽州に知たり、尋いで職を褫はる、後ち祕閣修撰に復せられて卒す、開嘗て游酢を師とし、劉安世を友とす、故に朝に立ち事に遇ひ 大節に臨んで奪ふ可からざるものあり

【綜核】 事物をすべ明かにする義、漢書の宣帝紀に「綜核名實」

【宋學淵源記】 二卷附記一卷清の江藩撰す藩字は子屏、江蘇甘泉の人、諸生たり、博聞强記にして群經に通す、この書は宋學者の傳記にして孫奇逢に始まり鄧元昌に終る、すべて三十一人、附記は沈國模以下九人を收む、

【宋學士全集】 三十六卷明の宋濂撰す、元末の文章、吳萊・柳貫・黄溍を以て一朝の後勁とす、濂、初め萊に學び、後ち貫と溍とに學ぶ、遂に經訓に根柢し、發して文章となる、明一代の冠冕と稱す、和刻あり、また別に宋景濂未刻集二卷あり(宋濂)を參看せよ、

【總角ノ好】 幼時の親交をいふ、總角とは、幼兒其の髪を總べ聚めて、兩角の形とするをいふ「アゲマキ」詩經齊風甫田篇の「婉兮孌兮總角丱兮」の註に「婉孌ハ少好ノ貌、丱ハ兩角ノ貌」とあり、三國志に「孫策曰、公瑾(周瑜の字)與孤有總角之好」

【宋祁】 宋史に、——字は子京、兄庠と同時に進士に擧げらる、禮部、祁を第一に、庠を第三に奏す、章獻大后弟を以て兄に先んぜしむるを欲せず、乃ち庠を第一に擢き、祁を第十八に寘く、呼びて二宋といひ、大小を以て之を別つ、兄弟皆文學を以て顯る、而して祁尤も能文議論を善くす、然れども清約莊重は庠に及ばず、論者以爲らく、祁の公輔に至らざる亦此を以てなりといふ、新唐書を修する十餘年、出入内外、常に稿を以て自ら隨ふ、列傳百五十卷を爲る、嘉祐六年卒す、年六十四、尙書を贈られ、謚して景文といふ(宋景文公)を參看せよ、

【曾幾】 字は吉父、茶山居士と號す、開の弟、幼にして識度あり、親に事へて孝なり、紹興の閒、浙江提刑に至る、秦檜開を怒る、幾も亦罷めらる、檜死するに及び、起つて台州に知たり、尋いで祕書少監を授けられ、賓訓を修し、書成りて權の禮部侍郎となり、致仕して乾道二年卒す、年八十三、文清と謚す、幾文を爲る純正、詩は尤も工なり、著すところ茶山集あり、

【送窮】 「ビンバフガミヲオクル」韓愈に——文あり、

【曾鞏】 字は子固、致堯の孫、宋の建昌南豐の人、幼にして警敏數千言一覽輒ち記す、嘉祐二年の進士、齊・襄・洪・福・明・亳・滄州に歷知たり、至るところ務めて民の疾苦を去る、入りて中書舍人となる、文章は歐陽修と名を齊うす、世に南豐先生と稱す、元豐六年卒す、年六十五、元豐類稿五十卷あり、

【宋玉】 字は子淵、周の楚の人、屈原の弟子、楚の大夫となる、その師の放逐せられたるを閔み、乃ち九辨を作りその志を述べ以て之を悲む、又神女高唐二賦を作る、皆寓言興を托し、諷するところあるなり、その風の賦に曰く「楚襄王遊於蘭臺之宮、宋玉景差侍、有風颯然而至、王乃披襟而當之曰、快哉此風、寡人所與庶人共者邪、宋玉對曰、此獨大王之風耳、庶人安得而共之」云云「蘇轍の黄州快哉亭記に「大王之雄風」とあるは、清凉の風にして、病を愈やし、酲を解くものをいひ、庶人

の雌風とは、溷濁の風にして、病を生じ熱を造すものを云ふ、詳しくは賦の全文を見よ、

【漱玉】 玉を漱くをいふ、瀑布などの飛び散るさまに喩ふ、文選に「山溜何泠泠、飛泉漱鳴玉」

【宋玉ガ隣ニ住ミシ女】 十訓抄第十に見ゆ、文選の四、宋玉が登徒子好色の賦の序に「臣東家之子、增之一分、則太長、減之一分、則太短、著粉則太白、施朱則太赤、然此女登牆窺臣三年、至今未許也云云」と見ゆ、宋玉は鄧の人屈原の弟子楚の大夫にて美丈夫の稱ありき、史記列傳に見ゆ、

【叢輕軸ヲ折ル】 (叢輕折軸)輕き物にても積みて多きに至るときは、車軸を折るに至るをいふ、漢書中山王傳に「――――、羽翮飛肉」

【宋景文公筆記】 三卷、宋の宋祁撰す、景文はその謚なり、この書は釋俗考古雜說の三門に分ちて隨記す、中に就きて考古は小學に益あり(宋祁)を參看せよ、

【宋景文集】 六十二卷補遺二卷附錄一卷、宋の宋祁撰す、祁の文は謹嚴にして典麗なり、但往往奇字を用ふるの癖あり、詩は文に及ばずと雖も、亦誦すべし、この書もと百卷ありしが殘缺して今の卷數となれり、

【宋元學案】 一百卷、清の黃宗羲の原撰にして全祖望の續補せしところなり、この書、每學案の首に學系表あり、次に序あり、次に各人の小傳を擧げ、後にその文集語錄等よりその學說を抄記す

【宋元通鑑】 一百五十七卷、明の薛應旂撰す、宋の太祖建隆元年より、元の順帝至正二十八年に至る四百八十二年閒の事蹟を資治通鑑の體例にならひて編せり、應旂字は仲常、嘉靖十四年の進士、官浙江提學副使に至る、文章に工なり、著すところこの書の外に四書人物考あり、

【宋弘】 後漢書に「宋弘字ハ仲子、京兆長安ノ人、光武位ニ即キ、大司空トナル、時ニ光武ノ姉湖陽公主新ニ寡居ス、帝與ニ群臣ヲ論ジテ、以テ其ノ意ヲ視ル、公主曰ク、宋弘ガ威儀ハ群臣及ブ者ナシト、帝曰ク試ニ之ヲ圖ラント、後弘ヲ徵ス、公主屏後ニ坐セリ、帝因ツテ弘ニ謂ツテ曰ク、諺ニ云フ、富ミテハ交ヲ易ヘ、貴クシテハ妻ヲ易フト、人情カト、弘曰ク、臣聞ク貧賤ノ交ハ忘ル可カラズ、糟糠ノ妻ハ堂ヨリ下サズト、帝公主ヲ顧ミテ曰ク、事諧ハズト」

【曾國藩】 清朝の名臣、字は伯涵、滌生と號す、湖南湘鄉の人、道光十八年の進士、官武英殿大學士に至る、長髮賊を平定して功あり、同治十一年卒す、年六十二、太傅を追贈し、謚して文正といふ、著すところの曾文正公全集あり、詳しくは李鴻章の撰びし神道碑を見よ、

【叢脞】 くだくだしき義、煩碎にして大略なきなり、書の益稷に「元首――哉、股肱惰哉」

【稽巢】 薪を聚めてつくれる巢居なり、禮記の禮運に「冬則居營窟、夏則居――」

【宋史】 四百九十六卷、元の托克托等勅を奉じて撰す、五代の末の周より以來、三百十七年閒の事を記す、大旨道學を表章するに在り、その餘は皆姑く以て數に備ふ、故に疎舛蕪蔓亦多し、陳全之も、宋史は一事を紀して、先後不同、一人にして彼是不同とて、遺恨あることをいへり(蓬窓日錄ニ見ユ)嘉靖中に、何維騏、之を刪略して、宋史新編二百卷を撰せり、甚だ簡約とはなりたれども、これは餘り節略に過ぎて、事實の明暢を缺くの遺憾なきにあらず、

【宗子】 嫡子なり「ソウリャウノコ」禮記に「支子不祭、祭必告于――」また同姓をいふ、詩の大雅に「――維城」

【廋辭】 廋は隱なり「ナゾ」をいふ、國語の晉語に「有秦客――於朝」の註に「隱伏譎詭ノ言ヲ以テ朝ニ聞スルヲイフ」廋一音シウ(廋詞)を見よ、

【宗周】 はじめは、三代の周の創業地(今ノ陝西省鳳翔府)をいひ、その天子となるに及びて、王都の稱に用ふ(今ノ陝西省西安府)書經に「王來自奄、至于――」また單に三代の周の世の稱、杜牧の句に「四百年炎漢、三十代――」

【曾子孝養】 說苑に「曾子曰ク、往キテ還ル可カラザル者ハ、親ナリ、牛ヲ椎シテ葬ルハ、雞豚ノ親ノ存ズルニ逮ブニ如カザルナリ、初メ吾、吏タリシトキ、祿、釜ニ及バザレドモ、尙ホ欣欣トシテ喜色アリキ、以テ多シト爲スニアラザルナリ、其ノ親ニ逮ブヲ樂ムナリ、既ニ沒セシ後、吾、南楚ニ遊ビテ、高官ヲ得タリ、堂九尺、傳百乘アリ、然レドモ北面シテ涕泣ス、以テ賤シト爲スニ非ザルナリ、吾ガ親ニ逮バザルヲ悲ムナリト」

【宋史紀事本末】 二十六卷明の陳邦瞻撰す、初め馮琦、宋の事を類次し、以て宋の袁樞の通鑑紀事本末に續がんとし、未だ成らずして沒す、この書は琦の遺稿に因る者、十の三、自ら補葺せし者十の七、凡そ一百九篇あり、諸史中にて宋史を最も蕪穢と爲す、資治通鑑の端緒の尋ね易きに似ず、邦瞻、棼絲を排比し、條理に就かしむ、その書は、袁樞に亞ぐと雖も、その難きことは樞に較ぶれば十倍せり

【宋詩鈔】 九十三卷、清の吳之振撰す、從來宋詩の選本蕪雜多きを以て、この書を選して缺典を補ひたるなり、每人小傳品評あり、この書四庫提要には百六卷とあり、蓋、未刻の分をも合せ數へたるなるべし、

【雙日】 偶數の日をいふ(隻日)を見よ、雙漢音サウ

【宋詩百一鈔】 九卷、清の張景星・姚培謙・王永祺の共に編するところなり、凡て百三十七人、六百四十三首を收む、序文に「鈔名百一、蓋謂嘗鼎一臠、窺豹一斑、亦可見宋詩宗派云爾」とあり、和版あり、

【走集】 邊境の壘壁をいふ、走りて之に集まる義、左傳昭二十三年に「險其——、李格非書洛陽名園記後に「洛陽處天下之中、挾殽黽之阻、當秦隴之襟喉、而趙魏之——、蓋四方必爭之地也」

【曾參】 字は子輿、南城の人、點の子、志孝道に存ず、故に孔子之に因つて孝經を作る、齊嘗て聘して以て卿と爲さんと欲すれども、就かず、曰くわが父母老いたり、人の祿を食めば、人の事を憂ふ、故に吾親に遠ざかりて人の役たるに忍びずと、踐履篤實、一貫の旨を悟り、道統の傳を得たり、後世鄒國宗聖公に追封し、孔子の廟庭に配享す、子は元(曾子孝養)(曾參人)を參看せよ、

【宋人ノ章甫ヲ越ニ賣ル】 駿臺雜話の「心のめしひ」の條に見ゆ、莊子の逍遙遊に「宋人資章甫而適諸越、越人斷髮文身、無所用之」とあり、章甫は殷の冠名なり、禮記の儒行篇に「孔子對曰、丘少居魯、衣逢掖之衣、長居宋、冠章甫之冠」と、陳註に「蓋緇布冠、殷世則名章甫、章明也、所以表明丈夫、故謂之章甫」耳」

【曾參人ヲ殺ス】 讒言も度重なればつひには人を惑すに至るに喩ふ、戰國策秦策に「甘茂曰ク、昔、曾子費ニ處ル、人曾參ト名姓ヲ同ウスル者アリテ人ヲ殺ス、人曾子ノ母ニ告ゲテ曰ク 曾參人ヲ殺セリト、母曰ク、吾ガ子ハ人ヲ殺サズト、織ル「自若タリ、頃アリテ人又曰ク曾參人ヲ殺セリト、ソノ母尙ホ織ル「自若タリ、頃シテ一人又之ニ告ゲテ曰ク、曾參人ヲ殺セリト、ソノ母懼レ、杼ヲ投ジ牆ヲ踰エテ走リヌ、夫レ曾子ノ賢ト母ノ信トヲ以テシテモ、三人之ヲ疑ハシムルヿハ、慈母モ信ズル能ハザルナリ云云」

【宋之問】 字は延清唐の西河の人、儀容に偉にして詞章を善くす、武后の尙方監丞に官す、嘗て張說等と三敎珠英を撰す、韋維と一臺二妙と稱せらる、中宗の朝修文館學士となる、

【宗社】 宗廟社稷をいふ、周禮に「小宗伯職、掌建國之神位、右社稷左宗廟」

【宗庠】 字は公序、安陸の人、宋の天聖二年の進士弟祁と俱に翰林に入り、皇祐中、中書門下平章を拜し、鄭國公に封ぜられ、英宗の時致仕し、年七十一にして卒す、太尉を贈らる、著すところ、宋元憲集四十卷、國語補音あり、

【宗匠】 工師をいふ、また師宗たる者を稱す、袁宏三國名臣序贊に「——陶鈞而群才緝熙」

【宋襄ノ仁】 つまらぬ「アハレミ」春秋戰國の時、宋の襄公茲父といふ者、諸侯に霸たらんと欲し、楚の成王と泓に戰ふ、公子目夷、敵の未だ陣せざるに及びて之を擊たんと請ふ、公曰く、君子は人を阨に困めずと、遂に楚の爲めに敗らる、世笑ひて以て宋襄之仁と爲す、事は左傳僖二十二年に詳かなり、

【宋鵲】 宋のすぐれたる犬の名、博物志に「宋有駿犬曰鵲」

【宋儒】 周敦頤・程顥・程頤・邵雍・張載・朱熹等の性理學者をいふ、

【宋書】 一百卷、梁の沈約、齊の武帝の勅を奉じて撰す、帝紀十卷・志三十卷・列傳六十卷に分つ、宋は六朝の宋なり、和版あり、

【宗正寺】 唐の代に、皇室の親族の屬籍を掌る役所、唐書に「——卿一人、少卿二人」

【漱石枕流】 (石ニ漱ギ)を見よ、

【曾先之】 字は從野、宋の廬陵の人、十八史略を撰す、先之は宋末元初の人なれども、その傳は詳ならず、

【奏疏】 文體明辨に「按ズルニ——トハ、羣臣論諫ノ總名ナリ、奏御ノ文、其ノ名一ナラズ、故ニ——ヲ以テ之ヲ括ルナリ、七國以前皆上書ト稱ス、秦初メテ書ヲ改メテ奏トイフ、奏ハ進ナリ、疏ハ布ナリ」

【忽忽】 急遽疾速なり、杜甫の詩に「相逢難衰衰告別莫忽忽」とあり、衰衰は安からずして去らんと欲するの貌、忽忽は草草に同じ「イソガシキ」貌、

【淙淙】 水聲なり、高適の漁父の歌に「石泉——若風雨、桂子松花常滿地」

【曾孫】 「ヒマゴ」爾雅に「孫之子爲——」郭氏曰く「曾ハ猶ホ重ノ如シ」

【宗澤】 字は汝霖、宋の義烏の人、文武の才畧あり、建炎の初、東京の留守李綱の薦むるところとなる、澤前後二十餘疏、高宗京に還り、汪黃の沮む所ろとなり、未だ一年に及ばずして憤死す、死に臨み杜詩を詠じて曰く「出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟」と、忠簡と謚す、(運用ノ妙)を參見せよ、

【甑中塵ヲ生ズ】（甑中生塵）極めて貧くして、炊くものなきをいふ、後漢書列傳七十一に「范冉字ハ史雲、好ンデ時ニ違ヒ俗ヲ絶チ、激詭ノ行ヲ爲ス、桓帝ノ時、萊蕪ノ長ト爲ル、母ノ憂ニ遭ヒ、官ニ到ラズ、後チニ世ヲ遁レ、鹿車ヲ推シ妻子ヲ載セ、捃拾シテ自ラ資ス、或ハ客廬ニ寓息シ、或ハ樹陰ニ依宿ス、此ノ如キコト十餘年、乃チ草室ヲ結ビテ居ル、時アリテ粒ヲ絶ツ、窮居自若タリ、閭里之ヲ歌ヒテ曰ク、甑中生塵范史雲、釜中生魚范萊蕪ト」塵と雲と叶韻、魚と蕪と叶韻、

【宗祧】 祧は遷廟なり、遷したる神主を藏むる所をいふ、遠祖の廟なり、左傳に「不佞失守ーーー」

【崇朝】（ーー）を見よ、

【宋朝ノ美】 宋朝は、古の美色ありし人（祝鮀）を見よ、

【曾點】 周の南武城の人、孔子の弟子、天資高明なり、嘗て孔子に對して志を言ふ、曰く「暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸」と、孔子喟然として嘆じて曰く、吾は點に與せんと、後世萊蕪侯に追封す、子は參

【蹭蹬】 勢を失ふ貌、李白の詩に「ーー遭讒毀」

【曾南豐】（曾鞏）を見よ、

【增年】 年を增し加ふる義、歐陽詹の除夜詩に「算甲恨ーーー」陸游の詩に「身老怯ーーー」

【宋ノ四賢】 韓琦・范仲淹・富弼・歐陽修をいふ、各〻その條を見よ、

【宋ノ道學五先生】 周濂溪・程明道・程伊川・張橫渠・朱晦菴をいふ、

【宋ノ武帝ノ高祖ノ葛燈籠麻蠅拂ヲ見ル】 駿臺雜話の「矯輕警惰」の條に見ゆ、通鑑卷百二十九宋孝武帝紀に「上始大修宮室、土木被錦繡、嬖妾幸臣、賞賜傾府藏、壞高祖所居陰室、於其處起玉燭殿、與群臣觀之、牀頭有土障、壁上挂葛燈籠麻蠅拂、侍中袁顗、因盛稱高祖儉素之德、上不答、獨曰、田舍公得此、已爲過矣」と、高祖は晉を亡して宋室を創建せし武帝劉裕なり、

【宗伯】 禮儀神祇の事を掌る官の名、周禮の春官に「ーー主禮之官」書經に「ーー掌邦禮、治神人、和上下」と、秩宗といひ、祝宗といふ、皆同じ、

【宋敏求】 字は次道、宋の趙州平棘の人、史館修撰に官し、龍圖閣直學士に至る、元豐二年卒す、年六十一、大唐詔令集百三十卷長安志二十卷を著せり、

【宋文鑑】 一百五十卷、宋の呂祖謙勅を奉じて撰す、收むるところ學術治法に關するもの多し、

【曾文正公全集】 一百六十八卷、清の曾國藩撰す 光緒二年の刊本にして、首卷に上諭三道、諭賜祭文二首、諭賜入祀京師賢良祠祭文一首 御製碑文一首 國史本傳 疏六篇、神道碑、墓誌銘、總目あり、その目は、

奏稿三十卷 十八家詩鈔二十八卷 經史百家雜鈔二十六卷 經史百家簡編二卷 鳴原堂論文二卷 詩集四卷 文集四卷 書札三十三卷 批牘六卷 雜著四卷 求闕齋讀書錄十卷 求闕齋日記類鈔二卷 年譜十二卷 孟子要略五卷

【曾文正公文集】 四卷、清の曾國藩撰す、道光十八年より同治五年までの作を門人の編せしもの、その文平正にして布局亦大なり、

【宗炳】（臥遊）を見よ、

【宗廟】 宗は本なり、尊なり、祖宗の廟をいふ、廟は貌なり、祖先の形貌を彷彿する所以なり、書經に「社稷ーー罔ーー不ーー祇肅」

【送別】 別れて遠く行く人を見送るなり、圓機活法に「大丈夫慷慨意氣を以て相期す、劒に樽酒の閒に仗り、鞭を功名の會に著く、唯安を懷ひ名を敗るを以て戒と爲すことを知る、夫れ豈歔欷して流涕し、戀戀として兒女子の態を作さんや その行に於てや、則ち餞送の禮あり、然れども人に餞するに物を以てするは、人に餞するに文を以てするに若かず、人を送るに酒を以てするは、人を送るに言を以てするに若かず、蓋し物の意は盡るありて文の意は盡るなし、酒の味は窮るありて、言の味は窮りなし、仁人君子人を愛するに德を以てするにあらざるよりは若何ぞ以て此に與るに足らん」（祖道ノ）また（離別）を參看せよ、

【聰明睿智】 聖人の四德なり、聰は聞かざる所ろなく、明は見ざる所ろなく、睿は通ぜざる所ろなく、智は知らざる所ろなきをいふ、易經の繫辭上傳に「古之ーーーー、神武而不殺者夫」

【聰明聖知之ヲ守ルニ愚ヲ以テス】 荀子宥坐に「聰明聖知、守之以愚、功被天下、守之以讓」

【叢蘭茂ラント欲スレバ秋風之ヲ敗ル】 帝範に「叢蘭欲茂、秋風敗之、王者欲明、讒人蔽之」とあり、くさむらの蘭が茂らんと欲すれば秋風吹きすさみて枯れ委ましむ、それに同じく王者明かに天下を治めんとすれば讒臣出でてその明德をおほひくらますとなり、

【勝理】 「ハダ」の「キメ」膚理に同じ、史記の扁鵲傳に「君有疾在ーーー」素問に「寒則ーー閉」

【葱靈】 總櫺に同じ、衣物を裝載する車にて、前後に蔽あり、兩旁總を開き、其の中に櫺を設け、觀望し得るや

うに造る、左傳定九年に「載ーー寢於其中而逃」註に「輜車ノ名」

【總領】「スベテトリシマル」統領に同じ、詩經烝民篇の注に「外則ーー諸侯、內則輔養君德」領一音リヤウ

【葱嶺ノ教】佛教をいふ、葱嶺は印度の山の名、釋迦この山にて修行せしを以ていふ、漢書西域傳の顏師古の注に「葱嶺ハ其ノ山高大ニシテ、上ニ悉ク葱ヲ生ズ故ニ以テ名ヅク」

【宋濂】字は景濂、その先は金華潛溪の人、濂に至りて浦江に遷る、元の進士、文章を以て海內に名あり、至正十七年大臣薦めて國史編修と爲さんとす、固辭して龍門山に入り書を著す、明太祖の婺州を取るや、召し見て五經の師と爲す、後ち累進して學士承旨となる、先後二十餘年、道德を以て太祖を補佐す、天下心を歸して太祖を愛戴するは、濂の功多きに居る、洪武十四年卒す、年七十二、著す所ろ宋學士全集三十三卷あり（宋學士全集）を參看せよ、

【僧錄】僧官なり、要覽に「僧史略ニ云フ、唐ノ文宗ノ開成中、始メテ左右ノーーヲ立ツ、即チ端甫法師ヲ始ト爲スナリ、法師、德宗ノ時、召サレテ禁中ニ入リ、儒道ト論議シ、紫ノ方袍ヲ賜ハル、太子ニ東朝ニ侍セシメ、順宗之ヲ重ンズルコト兄弟ノ若ク、憲宗之ヲ待ツコト賓友ノ若シ、內殿ノ法儀ヲ掌リ、左街ノ僧事ヲ錄セシム」我邦にても足利義滿の時始めてーー司を置き法儀を掌り、僧事を錄し、論事を決斷せしむ、

【蘇頲濱】（蘇轍）を見よ、

【疎影橫斜水淸淺、暗香浮動月黃昏】宋の隱士林和靖の山園小梅の詩の前聯なり、左に全文を示す、

衆芳搖落獨暄妍、占盡風情向小園、ーー

居留地の義、

【葅醢】葅は菹に同じ、果蔬を生にて酢などに漬けたるもの、醢は乾肉をきざみて、麴と鹽とをまぜ、之を酒に漬けたるもの「シシビシホ」よりて殺戮の義に用ふ、淮南子に「醢鬼侯之女、葅梅伯之骸」とあり、鬼侯梅伯は、殷の紂王の時の諸侯なり、梅伯、鬼侯の女の美なることを說き、紂に娶らしむ、女至る、紂以て美ならずとし、怒つて鬼侯の女を醢にし梅伯の體を葅にしたりとなり、

【鼠肝蟲臂】物の至微至賤なるに喩ふ、莊子に「汝ヲ以テ鼠肝ト爲サンカ、汝ヲ以テ蟲臂ト爲サンカ」

【素氣淸泚】秋の氣の淸くすみたるをいふ、宋史夏侯嘉正傳に「秋之爲神、ーーーー肅肅翛翛、羣籟四起」泚は淸く鮮かなる義、

【楚狂接輿ノ歌】論語に「楚狂接輿歌而過孔子曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而ト云云」接輿は楚人、佯狂して世を辟く、鳳道あれば見れ、道なければ隱る、接輿以て孔子に比し、その隱るる能はざるを譏りて德の衰へたるとなす、

【疏擧】一一書きたつる義、條記に同じ、漢書賈誼傳に「雖福以ーーに」

【仄韻】平聲に對して去・上・入三聲の韻をいふ（韻）を見よ、

【惻隱ノ心】惻は傷の切なるなり、隱は痛の深きなり、即ち所謂人に忍びざる心なり、孟子に「惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、辭讓之心、禮之端也、是非之心智之端也」

【息焉】「ヤスラフ」貌、禮の學記に「ーー游焉」

【息燕】やすみて「ツカレ」を去るをいふ、考工記の梓人に「則王以ーー」

【塞淵】塞は實なり、淵なり、淵は深なり、誠實にして深淵なるをいふ、詩の衞風に「秉心ーー」

【足音跫然】あし音のひびく貌、莊子の徐無鬼篇に「夫逃虛谷者、聞人足音跫然而喜矣、而況乎昆弟親戚之謦欬其側者乎」林西仲の註に「跫然ハ、空中足音ノ響ナリ」

【足下】對等の人を指していふ敬語、閣下よりは卑し、史記秦紀に「閣樂前即二世數曰ーー驕恣誅殺無道、天下共畔足下、足下其自爲計」

【息交】世人と交接をやめる義、歸去來歸に「歸去來兮請息交以絕遊」

【仄韻】平聲に對して去・上・入三聲の韻をいふ（韻）を見よ、

【疽ヲ吮フ】（疽ヲ）を見よ、

【素娥】月の異名、故事成語考に「素娥即月號」とあり、事文類聚に「張衡ガ靈憲ニ、羿不死ノ藥ヲ西王母ニ請フ、嫦娥之ヲ竊ンデ以テ月ニ奔ル、是ヲ蟾蜍トナス」と卓氏藻林に「月色白シ、故ニ素トイフ」

【阼階】東の「キザハシ」主人が客を禮するところ、儀禮鄉射禮の注に「ーー東階」

【租界】租は借なり、外國人の租借地をいふ、わが所謂

【息耗】 音信をいふ、耗の字を消息に用ふること、秉燭譚に曰く「後漢書皇后紀ニ、數〻呼〻相工、問〻息耗」トアリ、注ニ耗惡也、息耗猶言善惡也ト、畢竟息ハ蕃息ノ義、耗ハ耗減ノ義、後世ニ消息トイフガ如シ、又董仲舒傳ニモ、察〻天下之息耗、師古曰、息生也、耗虛也ト、コレニテ明カナリ 後代ニハ只耗トイヒテ、音ヅレノ事ニナル、音耗・近耗・的耗・信耗ナドイフ甚略ナリ、イヅレモ六帖ニアリ」

【屬纊】 (纊ヲ)を見よ、

【則闕ノ官】 わが國にて太政大臣の異稱、大寶令に「有德之撰、無其人則闕」とあるに本づく、

【息肩】 勞苦を休むる義、左傳襄二年に「鄭子駟請〻—于齊」とあるは、齊に賴りて休息するを得んとの意、史記律書に「得〻—〻於田畝」とあるは、耕耘の勞を休むる意なり、孟子の序に「—〻—弛擔」

【側言】 かたよりたる一偏の說なり、書經に「詳〻乃視聽、罔〻以〻—〻改〻其度」

【續紘】 書言故事に「再ビ妻ヲ娶ルヲイフ」とあり、東方朔の十洲記に「鳳麟洲、鳳喙鱗角ヲ以テ膠ヲ作ル、續紘膠ト名ツク、能ク斷絃ヲ續グ」とあるに本づく、

【仄字】 仄一音ショク漢字の上去・入三聲に屬する字をいふ、平聲に對して名つく、沈約曰く「上去入爲〻仄聲」(韻)を參看せよ、

【即時一杯ノ酒ニ如カズ】 死後の名譽よりは、眼前一杯の酒を飲む方がましぢやとの義(身後ノ名)を見よ、

【束脩】 入門料なり、論語述而に「子曰ク、束脩ヲ行フヨリ以上ハ、吾レ未ダ嘗テ誨ウル無クンバアラズ」註に「脩ハ脯ナリ、十脡ヲ束ト爲ス、古ハ、相見ルニ必ズ贄ヲ執リテ以テ禮トナス、—〻ハ、其ノ至リテ薄キモノ」とあり、皇侃の義疏に「贄ハ至ナリ、己ガ來リ至ルヲ表ス」

【續資治通鑑】 二百二十卷、清の畢沅撰す、この書は宋遼金元四朝の正史を經とし、宋紀元紀の二に分ち、參するに續資治通鑑長編契丹國志竝に百家の語錄文集等を以てす、考證頗る精し以て司馬光の資治通鑑の續篇に充つるによろし、

【側室】 妾をいふ、左傳に「卿置〻—〻」謝靈運詩に「陸展染〻白髮、欲〻以媚〻—〻」漢の文帝紀にも「朕高皇帝—〻之子也」

【俗耳ノ針砭】 砭は「イシバリ」なり、世說に「戴仲若、春日携〻雙柑斗酒、人問〻何之、答曰、往聽〻黃鸝聲、此俗耳針砭、詩膈鼓吹ト」仲若は戴顒の字、黃鸝は「ウグヒス」に

似たる鳥なり、その聲は、いやしき耳に針を立てて癒し、詩を作る膈を鼓吹するの功ありとの意、

【俗儒】 見識せまくして心卑しき學者をいふ、儒とは孔子の敎學を奉ずる學者をいふ、論衡に「—〻好〻長〻古而短〻今、言〻瑞則渥〻前而薄〻後」

【俗儒ニ習ヒテ記誦詞章ヲ學ブ】 駿臺雜話の「老學自敍」に見ゆ、朱子の大學序に「自〻是以來、俗儒記誦詞章之習、其功倍〻於小學、而無〻用」とあり、鳩巢の疏に「記誦ハ心ニ記シ口ニ誦スルニ止マル、而シテ道ニ見ル所ロナシ、詞章ハ務メテ詞藻文章ヲヲサム、而シテ道ニ得ル所ロナシ」とあり、禮の學記に「記問之學不〻足〻以爲〻人師」とあるも、記誦に同じ、

【促織】 蟲の名「コホロギ」謝朓の句に「秋夜—〻鳴〻また古諺に「—〻鳴、嬾婦驚」

【涑水紀聞】 十六卷、宋の司馬光撰す、宋の太祖より神宗に至るまでの雜事四百二十七條を記す、史家の參考とすべし、

【即世】 死なり(世ニックを見よ、

【速成】 急に事を成すをいふ、論語に「非〻求〻益者〻也、欲〻—〻—者也」宋の范質の詩に「—〻不〻堅牢、亟走多〻顚躓」

【即席】 席に即くこと、儀禮の士冠禮に「即〻席坐」即筵に同じ、またその席にて直ちにの義、梁書の蕭介傳に「高祖後進二十餘人ヲ招延シ、置酒シテ詩ヲ賦ス、藏盾詩成ラザルヲ以テ酒一斗ヲ罰ス、盾飲ミ盡シテ顏色變ゼズ、言笑自若タリ、介、翰ヲ染メテ便チ成ル、文、點ヲ加フルナシ、高祖兩ナガラ之ヲ美メテ曰ク、藏盾之飲、蕭介之文、即席之美也」

【即阼】 即位に同じ、史記孝文紀に「皇帝〻—〻—」

【惻怛】 いたみかなしむ心、禮記に「—〻之心」

【息女】 息は生なり、己の生みし所ろの女をいふ、史記高祖紀に「臣有〻—〻願爲〻季箕箒妾」季は高祖の字、

【仄慝】 月行の遲きをいふ、漢書五行志に「朔而月見〻東方」謂〻之〻—〻」註に「—〻トハ、月ノ行クコト遲クシテ日後ニ在リ、當ニ沒スベクシテ更ニ見ハルルナリ」

【俗諦】 世俗如實の理をよくあきらめたるをいふ、忠孝等一切の道を悟り得たる義、

【續貂ノ譏】 つまらぬ物を以て、よき物につぐといふ譏(狗尾)を見よ、

【則天武后】 姓は武名は曌もとの唐の太宗の才人なりしが、後、高宗の后となり、政權を專にす、高宗崩じて中宗立つに及び、遂に中宗を廢してその弟睿宗を立て、益〻權を擅にし、遂に睿宗を廢して、自ら帝位に即き、

則天皇帝と稱し、國を周と號す、在位十六年、中宗位に復し、后を廢す、尋で卒せり、年八十一、著すところ臣軌二卷あり、

【賊ニ兵ヲ借シ盜ニ糧ヲ齎ス】 史記范睢傳に「コレ所謂借賊兵、而齎盜糧者也」とあり(寇ニ)を見よ、

【俗ノ欲スル所ロ、因ツテ之ヲ予フ】 (俗之所欲、因而予之)これは管仲が齊に相として俗と好惡を同くし、論卑くして行はれ易きをいふ語なり、下に「俗之所否、因而去之」とあり、

【束帛】 十端の「キヌ」をひとたばにしたるをいふ、儀禮の公食大夫禮に「——十端束帛也」古は「ツカヒモノ」に用ふ、——加璧などいふ、

【束縛】 繫囚に同じ「シバラルル」梵辭に「管——兮、桎梏」管は管仲、

【束髮】 結髮に同じ、始めて冠するをいふと解けども、必ずしも拘せず、すべて事の初頭をいふ、漢書叙傳に「兒生亹亹——修學」兒生は兒寬饒、

【側媚】 側は「ヨコシマ」媚は諛なり、書の問命に「無以巧言令色便辟——」

【側微】 卑賤の義、側陋に同じ、史記自序傳に「尙父——、卒歸西伯」

【屬文】 屬正音「ショク」輯なり、綴なり(文ヲ屬ス)を見よ、

【卽墨侯】 硯の異名、文房四譜に「石虛中、字居默、南越人、器度方圓中心坦然、拜——」

【鏃礪括羽】 學を修め智を研きて有用の器と爲るをいふ、孔子家語に「子路曰、南山有竹、不揉自直、斬而用之、達乎犀甲、如此言之、何學之有、孔子曰、括而羽之、鏃而礪之、其入之不亦深乎」とあるに本づく、

【側陋】 微賤の人をいふ、書の堯典に「明揚——」と、明の上の明は之を明顯にする義、下の明は己に顯位に在る者をいふ、

【咀華】 「ハナ」をくらふ義、轉じし書中の「スグレテ」「ウツクシキ」ところを採り味ふ義、韓愈の進學解に「含英咀華」

【蘇過】 字は叔黨、東坡の季子なり、善く怪石叢篠を作る、咄咄父に逼り時に新意を出す、山水を作るに遠水紋多く、岩に依りて屋木多し、皆人跡絕ゆる處、竝に焦墨を以て之を爲る、これ奇を出すなり、

【溯洄】 流れに逆ひて上ぼるなり、詩經の秦風に「——從之、道阻且長」

【駔儈】 「ワルガシコキナカガヒ」牙行・經紀・牙保は皆「ナカガヒ」「スハヒ」(——)を見よ、

【疏廣】 漢の東海蘭陵の人、仕へて太子太傅に至る、兄の子受、官太子少傅に至る、在位五年、廣、受に謂つて曰く、足るを知れば辱しめられず、止るを知れば殆からず、宦成り名立つ、此の如くにして去らずんば懼らくは後悔あらんと、乃ち上疏して骸骨を乞ふ、上之を許す、公卿大夫祖道を設けて東都門外に供張す、送る者車數百輛、道路觀る者皆曰く賢なるかな二大夫と、

【素馨】 花の名、群芳譜に「——一名ハ那悉茗花、一名ハ野悉蜜花、西域ヨリ來ル、枝幹裊娜茉莉ニ似テ小ナリ」と、また廣州志に「城西九里ヲ花田ト曰フ、彌望皆——花ナリ、南征錄ニ云フ、南海ノ劉隱ノ時、美人アリ此ニ葬ル、今ニ至リ花香他處ニ異ナリト」

【狙擊】 狙は伺なり、狙の物を伺ふ、必ず伏して之をうかがふ、以て密に伺ひ擊つ義とす、史記留侯世家に「良與客——秦皇帝博浪沙中」

【蘇源明】 京兆武功の人、少くして孤、文辭に工なり、累官して國子司業となる、安祿山の京師を陷るるや、源明病と稱して僞署を受けず、肅宗の時、知制誥に擢でられ、數〻時政の得失を陳ぶ、祕書少監を以て卒す、

【齟齬】 齒の「クヒチガヒ」て値らざるをいふ、鐍の齒の出入せるをも亦——といふ、太玄經に「其志——」また鉏鋙に作る、楚辭に「圜鑿而方枘兮、吾固知其鉏鋙而難入」

【蘇公堤】 圓機活法に「杭ニ西湖アリ、潁ニモ亦西湖アリ、皆遊賞ノ勝ト爲ス、蘇東坡連リニ二州ニ守タリ、ソノ初メ潁ヲ得タリ、潁人云フ、內翰但湖中ノ遊ヲ消ヒラ便チ郡事ヲ了スベシト、杭ニ守タルニ及ビテ、東坡堤ヲ築キ水ヲ護ス、民甚ダ之ヲ利トス、因ツテ——ト名ヅク」

【楚材晉用】 他の物を取りて我に利用するをいふ、左傳に「雖有楚材、晉實用之」

【素餐】 素食に同じ、無能にして官祿を食むをいふ(尸位)を見よ、

【鼠竄】 鼠の竄げかくるるが如く、逃亡するをいふ、漢書蒯通傳に「當山王奉頭——以歸漢王」

【楚辭】 漢の劉向編す、楚の屈平の辭賦と、その門下及び後人の作とを輯む、その後に及びて、後漢の王逸、己の作九思と班固の二叙とを加へて十七卷とし章句を作れり、これこの書の注を作る者少からず、宋の朱熹に至りて前人

の註解未だ具らずとなし、集註八卷辨證二卷後語六卷を作り、平の作二十五篇を離騷となし、宋玉以下十六篇を續離騷となし、文に隨ひて箋釋し、每章繫くるに興比賦を以てすること詩經の毛傳の如くせり、林西仲の楚辭燈四卷、參考とすべし、

【蔬食】「ヤサイ」の「クヒモノ」「シヤウジンモノ」論語述而篇の集解に「——菜食也」また草の實をいふ、禮記月令の注に「草木之實爲——」また粗食(マヅイモノ)論語鄉黨篇の皇侃の疏に「——粗食也」また「クロマイ」孟子萬章篇の注に「——糲食也」

【蘇子由】(蘇轍)を見よ、

【楚囚】楚の國の「トラハレビト」轉じて他鄉にて自由を奪はれ、思鄉の情切なる者にいふ語、左傳成九年に「晉侯觀於軍府見鍾儀(楚の伶人)問之曰、南冠而縶者誰也、有司對曰、鄭人所獻——也」とあるに本つく、文天祥の正氣歌に「——縲紲其冠、傳車送窮北」

【蘇氏演義】二卷、唐の蘇鶚撰す、鶚字は德祥、武功の人、この書、典制名物を考證せり、文化七年の和版あり、

【疏食ヲ飯ヒ水ヲ飲ミ肱ヲ曲ゲテ之ヲ枕トスルモ樂亦其ノ中ニ在リ】(飯疏食飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣)論語述而篇、孔子の語下に「不義而富且貴、於我如浮雲」の句あり、飯は「クラヒ」と訓む、食は音シ疏食は麤飯なり、朱子曰く「聖人ノ心ハ渾然タル天理ナリ、困極ニ處ルト雖モ、而カモソノ樂在ラザルナシ、不義ノ富貴ヲ視ルコト浮雲ノ有ルコトナキガ如ク、漠然トシテソノ心ヲ動ストコロ無キナリ」「子曰賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也」の章と互に發明すべし、

【楚辭九歌】(九歌)を見よ

【蘇子美集】十卷、宋の蘇舜欽撰す、歐陽修の原序に極めてその古文を推せり、その歌行は、多く雄放にしてその人となりの如しと稱せらる(蘇舜欽)を見よ、

【蘇秦】字は季子、春秋戰國の時、洛陽の人なり、鬼谷先生を師とす、秦に游說して用ひられず、裘敝れ金盡き憔悴して歸る、妻機を下らず、嫂ために炊がず、父母、子とせず、乃ち周書陰符を得て之を讀み、睡らんと欲すれば錐を引きて股を刺す、後ち六國に歷說するに、從親して秦を擯けんことを以てして曰く、寧ろ雞口となるも牛後と爲ること勿れと、是に於て六國合從の約成り、蘇秦六國に弃せ相となり、行いて洛陽を過ぐ、車騎輜重王者に擬す、兄弟妻嫂目を側めて敢て視ず、俯伏して侍して食を取る、蘇秦笑つて曰く、何ぞ前に倨にして後に恭なるやと、嫂曰く季子の位高く金多きを見ればなりと、秦喟然嘆じて曰く、此れ一人の身なり、富貴なれば親戚之を畏懼し、貧賤なれば之を輕易す、況や衆人をや、我をして洛陽負郭の田あらしめば、豈能く六國の相印を佩びんやと、是に於て千金を散じ以て宗族朋友に賜ふ、

【練裳竹筒】女を嫁するに「シタク」の粗末なるを謙していふ、書言故事に「漢ノ逸民戴良五女アリ、練裳布被竹筒木履ニシテ之ヲ遣ル」東坡の詩に「竹筒與練裙、願時畢婚嫁」練は一音ショ紡ぎたる粗き絲、また縮の屬「クズヌノ」

【咀嚼】よくかみこなして玩味すること、司馬相如の上林賦に出づ、書を讀みて意味を十分に尋ね究むるにも用ふ、

【素車白馬】人を弔するに用ふ、書言故事に「范式字ハ巨卿、張邵字ハ元伯相與ニ友タリ、元伯疾ニ寢シテ卒ス、范式忽チ夢ニ、元伯呼ビテ曰ク、巨卿吾某日ニ死シ某日ニ葬ル、子未ダ我ヲ忘レザレバ、豈能ク相及バンカト、范式更メテ朋友ノ服ヲ服シ、馳セ往イテ之ニ赴ク、式未ダ到ルニ及バズシテ、喪スデニ發引ス、既ニ壙ニ至リ、將ニ棺ヲ下サントスルニ、柩肯テ進マズ、ソノ母之ヲ撫シテ曰ク、元伯豈望ムトコロアルカト、遂ニ柩ヲ停メ時ヲ移ス、乃チ——哭シテ來ル者ヲ見ル、母曰ク是レ必ズ巨卿ナラント、式至リ紼ヲ執リテ柩ヲ引ク、是ニ於テ柩乃チ前ミヌ」また神に禱り罪を請ふ時などに用ふ、史記の殷紀に「湯王齋戒シ爪ヲ剪リ髮ヲ斷チ——身ニ白茅ヲ嬰ヒ、身ヲ以テ犧牲トナリ、桑林ノ野ニ禱ル」

【祖述】遠くその道を宗とし、之をうけつぎて述ぶるをいふ、中庸に「仲尼祖述堯舜憲章文武」

【蘇洵】字は明允、老泉と號す、祐の曾孫、宋人、蜀の眉州眉山の人、少くして學を好まず、年二十七、始めて發憤して書を讀む、三たび科舉に應じ、皆中らず、歸りて悉く爲る所の文數百篇を焚き、戶を閉ぢ益書を讀み、遂に六經百家の說に通じ、筆を下せば頃刻にして數千言を成す、至和中、二子軾・轍を携へ京に到る、翰林學士歐陽修、その文を見て之を愛し、以て賈誼も過ぎずと爲す、霸州文安縣主簿となり、陳州城の令姚闕と同じく禮書を修し、太常因革禮一百卷と爲し、書成りて奏上し、未だ報ぜられずして治平三年に歿す、年五十八、光祿寺丞を贈らる、蘇老泉先生全集あり、

【蘇舜欽】字は子美、易簡の孫、宋の開封の人、少くし

て大志あり、好んで古文を爲る、弱冠にして時政を極言す、范仲淹その才を薦め、召試して集賢校理となす、後ち吳中に寓す、詩歌豪放尤も草書を善くす、慶歷八年卒す、年四十一、著すところ蘇子美集十卷あり、兄舜元亦詩歌を善くし尤も草書に工なり、官三司度支判官に至る、

【沮洳】 沮は一音ショ水にひたり濕へるをいふ、またその地、詩經に「彼汾——」

【組織】 衣を織り成すが如く、事を構へ立つるをいふ、劉峻後絕交論に「——仁義、琢磨道德」

【蘇軾】 字は子瞻、父洵四方に遊學す、母程氏親ら授くるに書を以てす、弱冠にして博く經史に通じ、文を屬すること日に數千言なり、大理評事簽書に除す、軾爲る所ろの詩忌諱に觸れ死に處せられんとす、神宗之を憐み、黃州團練副使を以て安置す、室を東坡に築き、自ら東坡居士と號す、紹聖の初、軾作る所の詞辭を以て朝廷を譏るとなし、寧遠軍節度副使に貶し、惠州に安置し、又瓊州別駕に貶し、昌化に居らしむ、建中靖國元年常州に卒す、年六十六、或はいふ六十なりと、後ち大師を贈り、文忠と謚す、著すところ東坡全集一百十五卷あり、蘇軾又畫を善くす、米芾畫史に「子瞻墨竹ヲ作ル、地ヨリ一直起シテ頂ニ至ル、余問フ何ゾ節ヲ逐ヒ分タザルト、曰ク竹生ズルトキ何ゾ嘗テ節ヲ逐ヒ生ゼント、運思清拔、文同與可ヨリ出ヅ（中略）ソノ枯木ヲ作ル、枝幹虬屈、端倪ナク、石皺硬クシテ亦怪怪奇奇、ソノ胸中ノ蟠鬱ノ如キナリ」

【蘇軾菜ヲ種ウ】 劉氏人譜に「蘇子瞻曰ク、吾王參軍ノ地ヲ借リテ菜ヲ種ウ、半畝ニ及バズ、而シテ吾ト子過ト終年菜ニ飽ク、夜半擷シテ之ヲ煮レバ、味土膏ヲ含ミテ氣霜露ニ飽ク、粱肉ト雖モ及ブコト能ハザルナリ、人生底物ヲ須ヒテ、而シテ乃チ更ニ貪ラントスルカト、因リテ詩ヲ作リテ云フ、秋來霜露滿東園、薤葅生兒芥有孫、我與阿曾同一飽、不知何苦食雞豚」ト 遂ニ其廬ニ題シテ、安蔬ト曰フ」

【蘇軾硯ヲ購フヲ辭ス】 劉氏人譜に「或人蘇東坡ニ謂フモノアリ曰ク、吾、端溪ニ往ク、公ノ爲メニ硯ヲ購フベシト、公曰ク、吾、唯兩手ノミ、其ノ一ハ字ヲ寫スコトヲ解ス、而シテ三硯アリ、何ソ多キヲ以テセント、曰ク以テ損壞ニ備ヘバ、可ナリト、東坡曰ク、吾ガ手恐ラクハ硯ニ先チテ壞レント」

【蘇軾ノ憐恕】 宋史に「軾、嘉祐二年ニ、陽羨ノ蔣穎叔ト、名ヲ進士ニ連ヌ、瓊林ニ宴スル日、座モ亦相接ス、遂ニ居ヲ陽羨ニトシ、後ニ宅一區ヲ買フ、値五百金トス、將ニ徙リテ居ラントス、偶〻月ニ村落ニ步ス、一老嫗ノ啼哭シ、且ツ其ノ子ヲ詈ルヲ聞ク、曰ク吾ガ居百餘年、今汝不肖ニシテ、諸ヲ人ニ售ル、將ニ何タニ去ラントスルカト、之ヲ扣ケバ、卽チ買フ所ロノ者ノ宅ナリ、東坡亟カニ券ヲ取リ、嫗ニ還シテ之ヲ焚キ、其ノ値ヲ索メズ、亦宅ヲ買ハズ、武進ノ白雲尖ニ寓居シテ歿セリ」

【祖生ノ鞭ヲ著ク】（先鞭ヲ）を見よ、

【蘇小】 卓氏藻林に「齊ノ時ノ錢塘ノ名妓ナリ」これより廣く藝妓の稱とす、白居易の詩に「柳色春藏——家」

【素雪】 雪をいふ、素は白なり、司馬相如の賦に「——飄零」唐太宗の句に「——曉凝華」

【鼠竊】 「コソコソヌスビト」史記叔孫通傳に「此特群盜——狗盜耳」

【祖餞】 成語考に「行ヲ送ルノ禮、之ヲ䟽儀トイヒ、酒ヲ携ヘテ行ヲ送ルヲ——トイフ」

【楚楚】 鮮明の貌「アザヤカ」詩の鄘風に「蜉蝣之羽、衣裳——」また茨棘などの「トゲトゲシキ」貌、詩の小雅楚茨に「——者茨、言抽其棘」一解に——は盛密の貌、

【祖宗】 祖は始なり、宗は本なり、皆先祖の最も尊きもの、漢書景帝紀に「古者祖有功而宗有德」禮の祭法に「有虞氏ハ顓頊ヲ祖トシテ堯ヲ宗トシ、夏后氏ハ顓頊ヲ祖トシテ禹ヲ宗トシ、殷人ハ契ヲ祖トシテ湯ヲ宗トシ、周人ハ文王ヲ祖トシテ、武王ヲ宗トス」

【措大】 書生なり、その能く大事を擧措するをいふ、五雜組に「今人秀才ヲ以テ措大トナス」五代史、東漢世家に「劉晏兵ニ號令シテ先ヅ進マシム、王得中馬ヲ叩ヘテ諫メテ曰ク、南風甚急ナリ、北軍ノ利ニアラズ、宜シク少シク之ヲ待ツベシト、晏怒テ曰ク、老措大妄ニ我ガ軍ヲ沮スル勿レト」

【祖道ノ宴】 送別の宴會なり、書言故事に「祖道ハ送行ノ際、因ツテ饗飲ス、昔、黃帝ノ子纍祖、遠遊ヲ好ンデ道ニ死ス、後人以テ行神トナス」とあり、故に行く者あるときは、之を祭り其の傍に宴を開くなり、風俗通には「祖ハ徂ナリ、今ノ人行ヲ餞スルヲ謂ツテ祖道トイフ」とあり、詩の大雅烝民篇に「仲山甫出祖、四牡業業」の註に「祖ハ行祭ナリ」また漢書疏廣傳に「公卿大夫故人邑子、祖道ヲ設ケ、東門外ニ供張ス」

【蘇張ノ辯】 蘇秦は六國の君に說し、合從して秦に當らしめ、張儀は連橫を唱へ、六國を連ねて秦に事へしむ、二人共に縱橫の策を畫し辯舌を以て志を成せり、よりて策士などの雄辯なるを稱するに用ふ（蘇秦）張

儀」を參看せよ

【卒伍】 庶人の編制をいふ、周禮地官小司徒に「乃會萬民之――而用之、五人爲伍、五伍爲兩、四兩爲卒」また史記項羽紀に「願賜骸骨歸――」とあるは、致仕して民籍に復せんとの義、

【率爾】 輕遽の貌「ブシッケ」論語先進に「子路――而對」

【卒乘】 兵士をいふ、歩を卒といひ、車を乘といふ、左傳に「――輯睦」

【卒然】 急遽の貌、孟子に「――問曰、天下惡乎定」

【帥先】 先になりて導くこと、率先に同じ、晉書に「躬稼穡之艱難、以――天下」

【率先】 衆を率ゐ先だちて專ら行ふをいふ、史記絳侯世家に「丞相吾所重、其――之」

【祖逖】 字は士雅、晉の范陽の人、博覽にして志節あり、少くして劉琨と善し、被を共にして寢ぬ、元帝の時豫州刺史となる、江を渡り楫を擊ちて誓つて曰く、中原を清めずして復濟る者あらば、此の江の如きあらんと、遂に兵を部し、石勒と相持す、是に由つて黃河以南盡く晉の土となる、卒するの日、豫州の士女父母を失ふが如し、

【蘇轍】 字は子由、蘇洵の第二子にして軾の弟なり、年十九、父兄に隨ひ京師に至り、兄軾と同じく進士の科に登り、歷進して尙書右丞と爲り、門下侍郎に遷る、徽宗位に即き、出でて永州岳州に知たり、崇寧中致仕し、室を許に築き、潁濱遺老と號し、また欒城と號す、政和二年沒す、年七十四、文定と謚す、著す所ろ、老子解・古史・詩傳・春秋傳・欒城集あり、轍、性安祥高潔、文その人と爲りの如し、而して秀傑の氣、殆ど兄と相迫る、

【俎豆】 祭器の名、牲體を載するを俎といひ、蔬醢を薦むるを豆といふ、俎は几の形、木にて造る、豆も亦木にて造る、論語衛靈公篇に「――之事、則嘗聞之矣」

【蘇東坡】 (蘇軾)を見よ、

【卒都婆】 卒一に窣に作る、廟と譯し、或は方墳と義譯す、大聚・高顯ともいふ、木石等にて地水火風空の五層の高き塔を作りて佛に供ふる者、印度にては如來親ら迦葉佛の爲めに寶塔を建て、我が朝にては敏達天皇の十四年蘇我馬子大和國高市郡大野の丘に建立せしをその創始とす、涅槃經に「一見――、永離三惡道、何況造立者、決定生安樂」

【備ハルヲ一人ニ求ム】 (求備於一人)すべての才德の兼ね備はらんことを一人に求むるをいふ、論語に「無――――」書經君陳に「爾無忿疾于頑、無求備于一夫」

【其ノ雄ヲ知リテ其ノ雌ヲ守ル】 (知其雄守其雌)剛強なるも、柔弱の道を守りて、勝を求めざる義、老子に「其ノ雄ヲ知リ其ノ雌ヲ守リテ、天下ノ谿トナル」とあり「爲天下谿」とは、天下の人に高ぶらずして、低下(ヒクミ)に安んずるをいふ、

【其ノ一ヲ知リテ未ダ其ノ二ヲ知ラズ】 (知其一未知其二)事理の一端を察知するも、他に理由あるを知らざる義、史記高祖紀に見ゆ、またこの語、莊子天地篇にも見ゆ、詩經に「人知其一、莫知其他」

【其ノ入ルヲ量ッテ之ヲ出ス】 (入ルヲ量ッテ)を見よ、

【其ノ肮ヲ搤シ其ノ背ヲ拊ッ】 (搤其肮拊其背)史記劉敬傳に見ゆ、肮は咽喉なり、「ノドブエ」人と鬪ふにそののどを搤し、その背をうたざれば勝を全うする能はず、

【其ノ誼ヲ正シテ、ソノ利ヲ謀ラズ】 君子の事を爲すや、その誼を正して一點の非理をさしはさまず、その誼にかなふや、斷じて之を行ふ、利益の有無を謀る如きことをなさずとの義、董仲舒の賢良策に「夫仁人者、正其誼不謀其利、明其道不計其功、是以仲尼之門、五尺之童羞稱五霸、爲其先詐力而後仁義也」

【其ノ位ニ非ズシテ之ニ居ル、位ヲ貪ルトイフ】 (非其位而居之、曰貪位)史記商君傳に出づ、下に「非其名而有之、曰貪名」とあり、

【其ノ源ヲ厥シ、ソノ瀆ヲ開カバ江河モ竭スベシ】 (厥其源開其瀆、江河可竭)荀子の語、厥は壓に通用す、「オシツケル」「フサグ」瀆は溝なり、楊子江や黃河も方法に由りては涸し竭すことを得る義、

【其ノ言ヲ河漢ニス】 (河漢其言)言ふ所ろのとりとめ無き義、ことさらに旨意を深遠茫漠たらしめ、人をして測り知るに難からしむるをいふ、莊子に「吾驚怖其言、猶河漢而無極也」とあるに本づく、

【其ノ子ヲ知ラザレバ其ノ友トスル所ロヲ視ヨ】 (不知其子、視其所友)家語に見ゆ、その子の善惡邪正を知らざればその子の交る所ろの友人の人と爲りを見て、その子の人と爲りを知るべし、何となれば人は同氣相求むるものなればなり、この句の下に「不知其君、視其所使」とあり、この語、荀子にも、史記の田叔傳にも見ゆ、

【其ノ妻子ヲ託ス】 (託其妻子)圓機活法に「漢ノ朱暉、字ハ文季、南陽宛ノ人、同縣ノ張堪ト友トシ善シ、暉ガ臂ヲ把リテ曰ク、妻子ヲ以テ朱生ニ託セント欲スト

堪卒ス、暉其ノ妻子ノ貧困ヲ聞キ、自ラ往キテ候視シ、厚ク之ヲ賑給シテ曰ク、堪嘗テ知己ノ言アリ、吾レ已ニ其ノ心ニ信ズルナリト」

【楚ノ囚人】 太平記卷四に見ゆ、楚、鄭を伐ちし時、伶人鍾儀虜となり囚はれしこと、左傳成九年に詳かなり、趙嘏の詩にも「空戴南冠學楚囚」とあり（楚囚）を見よ、

【其ノ父、人ヲ殺シテ仇ヲ報ゼバ、其ノ子必ズ且ニ刼ヲ行ハントス】 （其父殺人報仇、其子必且行刼）蘇軾の荀卿論に見ゆ 荀卿が先賢を歴証したるを以てその弟子李斯が遂に書を焚き儒を坑にして怪むを知らざるに至りし例に引けり、刼は「オヒハギ」

【其ノ地ニ非レバ之ヲ樹ウルモ生ゼズ】 （非其地樹之不生）史記日者列傳の語、下に「非其意教之不成、夫家之教子孫當視其所以好」とあり、說苑にも類語あり、

【其ノ德ヲ恒ニス】 （恒其德）易の恒の卦の六五に「——貞、婦人吉、夫子凶、言乃婦人之道、非夫子之所宜也」婦人は一に從ひて終るものなれば、その德を恒にするを以て吉とす、夫子は居るところの地位によりて行ふところの德を異にす、故に「——」を以て凶とはいふなり、

【其ノ文ノ好キ者ハ身必ズ剝ル】 （其文好者身必剝）晏子の語、虎豹の如き斑文の好き者はそれが爲めに皮を剝ぎとらるる禍を招くをいふ、下に「其角美者、身見殺、甘泉必竭、直木必伐」とあり、

【其ノ本ヲ修ムルヲ事トスルヲ知ラズシテ其ノ末ヲ治ムルヲ務ムルハ、是レ其ノ根ヲ釋テテ其ノ枝ニ澆グ者ナリ】 （不知事修其本而務治其末是釋其根而灌其枝者也）淮南子に出づ、世人が本を捨てて末に走るの弊を歎じたるなり、

【其ノ本ヲ揣ラズシテソノ末ヲ齊ウセバ、方寸ノ木モ岑樓ヨリ高カラシムベシ】 （不揣其本而齊其末方寸之木可使高於岑樓）孟子の語、岑樓は高き、タカドノ、（方寸ノ木）を見よ、

【其ノ兩端ヲ叩キテ竭ス】 （叩其兩端而竭）兩端は兩頭の義、終始本末上下精粗を盡して、餘蘊なきをいふ、論語に「我——ノ——ノ——ノ——焉」

【楚ハ章花ノ臺ヲ起シテ黎民散ズ】 漢書に「楚起章花之臺而黎民散、秦興阿房之殿而天下亂」とあり、楚王は章花の臺を築きて萬民疲弊し、散じて他國にのがれたりとなり、章花臺は、東西九町南北十町、高四十丈ありきといふ、

【楚ハ白珩ヲ寶トセズシテ賢ヲ寶トス】 駿臺雜話「天下の寶」の條に見ゆ、珩は、佩上の玉飾「オビダマ」なり、國語の楚語に「王孫圉聘於晉、定公饗之、趙簡子鳴玉以相、問於王孫圉曰、楚之白珩猶在乎、對曰、然、簡子曰、其寶也幾何矣、曰未嘗爲寶、楚之所寶者、曰觀射父、能作訓辭、以行事於諸侯、使無以寡君爲口實、又有左史倚相、能道訓典、以敘百物、以朝夕獻善敗於寡君、使寡君無忘先王之業（中略）若夫白珩、先王之玩也、何寶焉」

【素貧】 「シタヂカラノヒンバウ」漢書揚雄傳に「——嗜酒」

【蘇武節ヲ守ル】 蘇武字は子卿杜陵人、漢書に、漢の蘇武中郎將たり、武帝以て匈奴に使せしむ、至れば即ち單于之を降さんと欲す、武從はず、乃ち武を窖中に幽して、飲食を給せず、天雪ふる、武雪と氈毛とを併せ嚙みて、之を咽む、數日を經て死せず、匈奴以て神なりとす、乃ち武を北海上に徙して、羝を牧せしめて曰く、羝乳せば歸らしめんと、武野鼠を掘り、草實を採りて、之を食ふ、漢の節に仗り、起臥操持し、節旄盡く落つ、昭帝位に卽きて、武始めて還ることを得たり、匈奴に留ること十九年、始め往きしとき强壯なりしも、還るに及びて、鬚髮盡く白し、宣帝立ちて爵關內侯を賜ひ、年八十餘にして卒す、形を麒麟閣に圖せしむ、

蘇武　李白

蘇武在匈奴、十年持漢節、白鴈上林飛、空傳一書札、牧羊邊地苦、落日歸心絕、渴飲月窟水、飢餐天上雪、東還沙塞遠、北愴河梁別、泣把李陵衣、相看淚成血、

【素封ノ富】 財に富める人は、封土無きも、利息租稅の入ること、封侯の如きをいふ、史記の貨殖傳に「今秩祿ノ奉、爵邑ノ入無クシテ、而シテ樂之ト比スル者アリ、命ケテ素封トイフ」註に「素ハ空ナリ、仕ヘザルノ人、自ラ園田收養ノ給ヲ有ス、其ノ利封君ニ抵ル、故ニ素封トイフ」

【酥蜜】 酥と蜜の二品なり、酥は牛乳を精撰せしもの、一に蘇に作る、涅槃經に五味を、乳、酪、生蘇、熟蘇、醍醐と次第せり、蜜は蜂蜜なり、二品共に甘きに譬へていふ、神皇正統記の天地開闢の條に「味——の如し」とあり、

【損友】 （益友）を見よ、

【村園門巷多相似】 田舍の家のさまは、おほかた類似せるをいふ、唐の雍陶の城西訪友人別墅と題する詩

に「澧水橋西小路斜、日高猶未到君家、——————處處春風枳殼花」

【村塢】 塢は隖に同じ「チサキドテ」——と熟するときは村落の義、杜甫の詩に「前有毒蛇後猛虎、谿行盡日無——」

【飧ヲ傳フ】 (傳)飧は小飯なり、少しく食ひて一時の飢をしのぐをいふ、史記淮陰侯傳に「令其裨將——曰今日破趙會食」飧はもと夕食なり、俗飧に作る、

【餐霞】 仙人をいふ、呂氏春秋に出づ、顏延年の五君詠に「中散不偶世、本自——人」中散は嵇康をいふ、

【孫康】 晉人、家貧にして油なし、嘗て夜、雪に映じて書を讀む、後ち御史大夫となる、(螢雪ノ)を見よ、

【尊行】 目上の親類をいふ、齊家寶要に見ゆ、目下のを卑行といふ、

【尊庚】 「アナタノオントシ」青箱記に見ゆ、貴庚に同じ、

【尊客ノ前ニハ狗ヲ吐セズ】 (尊客之前不吐狗)曲禮の語、至賤を以て、尊者の聽を駭かさざる義、

【村甲】 「シャウヤ」無寃錄註に「——ハ本國ノ里正ノ類ノ如シ」と、社長・村長・里長・莊頭・村正皆同じ、

【餐菊】 (菊ヲ)を見よ、

【孫奇逢】 字は啓泰、夏峯先生と稱す、直隸保定府の人、明の萬曆二十八年鄉試に擧げられ、左光斗・魏大中・周順昌の三名士と親み善し、魏忠賢のこれ等の諸名士を構陷するや、奇逢身を以て之を救護せり、明の亡後家居して徒に授く、康熙十四年卒す、年九十二、初め陸王を信じ後ち程朱を奉ず、清朝理學の先驅たり、理學宗傳・四書近指・讀易大旨等の著あり、

【孫敬】 三國の時、楚の人、字は文寶、戸を閉ぢて書を讀む、その睡に堪へざるときは、繩を以て頭を繫ぎ之を梁上に懸く、人呼びて閉戸先生といふ、

【孫景初】 (四休)を見よ、

【孫吳】 孫子・吳子なり、孫子は十三篇、齊人孫武の著、吳子は今に存ずるもの六篇あり、衞人吳起の著、

【孫子】 一卷、齊の孫武著す、分ちて始計・作戰・謀攻・軍形・兵勢・虛實・軍爭・九變・行軍・地形・九地・火攻・用閒の十三篇とす、史記の孫子列傳に、武の書十三篇とあるは是れなり、兵家の書の今日に傳はる者は、此の書を以て最古となす、兵を談ずるの精妙なるのみならず、文も亦簡勁にして古文の法となすべし、注解には、魏武注孫子三卷、物徂徠の孫子國字解十三卷、佐藤坦の孫子副詮一卷等あり、

【巽二】 風の神なり(勝六)を見よ、

【蹲鴟】 芋の異名なり、文選の左思の蜀都賦に「交讓所植蹲鴟所伏」の註に「交讓ハ木ノ名ナリ、兩樹對生ス、一樹枯ルルトキハ則チ一樹生ズ、是ノ如クニシテ歲ゴトニ更終ス、俱ニ生ジ俱ニ枯レザルナリ、蹲鴟ハ大芋ナリ、其ノ形蹲鴟(うづくまれるふくろふ)ニ類ス」

【孫子ガ千變ノ謀】 太平記 卷八に見ゆ、孫子の書には、九變の術を說く、ここに千變といふは、奇正出沒千變萬化の兵謀といふ義なるべし、

【遜志齋集】 二十四卷、明の方孝孺撰す、凡そ雜著八卷文十四卷詩二卷あり、その文縱橫豪放、東坡龍川の閒に出入す、中に周禮を行ひ井田を復するの類の如き迂腐の論なきにあらざるも、大旨は醇正に歸す、

【遜志時敏】 書經說命の語、蔡傳に「ソノ志ヲ遜シテ能ハザルハ所ロアルガ如ク、學ニ敏ニシテ及バザル所ロアルガ如クシ、虛以テ人ニ受ケ、勤以テ己ヲ勵マス」

【孫思邈】 唐の華原の人、百家に通じ、善く老莊を言ひ、兼て陰陽推步醫藥に通ず、太白山に居る、文帝國子博士を以て召せども拜せず、太宗召して京師に至らしむ、時に年已に老いたり、之を官にせんと欲せしも受けず、疾と稱して山に還れり(膽ハ大)を參看せよ、

【孫晨】 徒然草に「——は冬の月にふすまなくて、わら一束ありけるを夕にはこれにふし、朝には收めけり」とあり、三輔決錄に「——字ハ元公、家貧シク席ヲ織リテ業ト爲ス、詩書ニ明カナリ、京兆功曹トナル、冬月被ナク、藁一束アリ、暮ニ臥シ朝ニ收ム」

【孫綽】 晉の人、楚の孫、字は興公、兄の盛、博學にして善く名理をいふ、綽また博學能文、後ち會稽に居り、山水に游放すること十餘年、遂初賦及び天台賦を作る、詞甚だ工なり、

【尊酒相逢】 韓愈の贈張籍詩に「————十載前、君爲壯夫、我少年、————十載後、我爲壯夫、君白首」

【孫叔敖】 戰國の時、楚の人、兒たる時、嘗て出遊して兩頭の蛇を見、殺して之を埋め、家に歸り憂へて食はず、母その故を問ふ、叔敖泣て對へて曰く、聞く兩頭の蛇を見る者は死すと、向者吾これを見る恐くは母にそむきて死せんと、母曰く、蛇今安くに在ると、曰く兒後人の又見んことを恐れて、已に殺して之を埋めぬと、母曰く吾聞く有陰德者必有陽報と、汝死せじと、長ずるに及び楚の莊王車を以て之を迎へて令尹となす、

【存恤】 あはれみ救ふ義、金史に「深加——」

【村書】 つまらぬ俗書をいふ、陔餘叢考に「陸游ノ詩ニ、

授ㇾ罷——閉門睡ノ自註ニ、謂フ所ロノ雜字百家姓ノ類、之ヲ——トイフ」

【孫星衍】 字は伯淵、季述と號す、江蘇陽湖の人、少より奇才あり、清の乾隆五十一年第二人に及第し、編修を授けられ、刑部主事に改められる、深く經史文字音訓の學を究め、旁ら諸子百家に及ぶ、また金石碑版を精研し、篆隸に工に、古書を校刻すること最も精し、嘉慶二十三年卒す、年六十六、尚書古今文義疏・周易集解・孔子集語・平津館金石萃編等の著あり、

【孫樵】 字は可之、韓愈の門人、大中九年の進士著すところ孫可之集十卷あり、

【撙節】 裁抑なり、「オサヘテ制限スル」禮記の曲禮に「君子恭敬——、退讓以明」禮撙は挫きて趨かしむるなり、節は法度なり、法度におもむかしむる義

【孫楚】 (石ニ漱ギ)を見よ、

【尊俎】 尊は酒を奠く罇をいひ、俎は牲を載する器、後漢書孔融傳に「起ㇾ謀於——之閒」

【尊屬】 目上の親類、家禮儀節に「——謂ㇾ伯叔祖父母伯叔父母之類」とあり、目下の親類を卑屬といふ、

【蹲蹲】 舞ふ貌、詩の小雅に「——舞ㇾ我」

【尊大】 傲りたかぶる、後漢書に「馬援謂ㇾ隗囂ㇾ曰、子陽井底蛙耳、而妄自——」子陽は公孫述の字、

【忖度】 忖は思なり、度なり ——は「ハカリハカル」義、猶ほ推測の如し、詩小雅巧言に「他人有ㇾ心、予——之」

【存亡禍福己ニ在リ】 說苑に、孔子の言を引きて「存亡禍福皆在ㇾ己而已、天災地妖亦不ㇾ能ㇾ殺也」とあり、

【孫武】 周の齊の人、兵法を以て吳王闔廬に見え、將となり、西、强楚を破り、北齊魯を威し、名を諸侯に顯す、兵法十三篇を著す、

【孫武ガ十三篇】 (孫子)を見よ、

【孫謀ヲ詒ス】 (詒ㇾ孫謀)後嗣の計を爲して、人才を遺す義、詩の大雅に「詒ㇾ厥孫謀ㇾ以燕ㇾ翼子」略して詒謀の二字とす、

【蘇迷盧】 (須彌)を見よ、

【飧饔】 共に熟食なり、夕食を飧といひ、朝食を饔といふ、孟子に「饔飧而治」また柳文の郭橐駝傳にも見ゆ、

【巽與ノ言】 巽は柔なり、婉にして導く詞なり、論語子罕に「巽與之言、能無ㇾ說乎、繹之爲ㇾ貴」とあり、巽言は乖き忤ふ所ろなき故に、必ず之を說べども、其の緒を尋ねざれば、微意の在る所ろを知るに足らざるを以て、之を尋ぬるを貴ぶとはいふなり、

【村落】 落は居なり、人の聚り居る所ろをいふ、屯落・聚落の落は皆同じ、世說に「逆旅嫗曰、此東數十里、無ㇾ——、止有ㇾ山陽王家墓耳、」

【作麼生】 「如何ニ」といふ義、作麼生、什麼・恁麼など、皆支那の俗語なり、傳燈錄に「香嚴衆ニ謂ツテ曰ク、人ノ千尺ノ懸崖ニ在ツテ、口樹枝ヲ銜ンデ、脚蹋ム所ロナク、手攀ヅル所ロナキガ如シ、忽チ人アツテ如何ゾ是レ西來ノ意ト問ハンニ、若シ口ヲ開イテ答ヘバ、卽チ喪身失命セン、若シ答ヘズンバ、又他ノ所問ニ違ハン、恁麼ノ時ニ當ツテ、且ツ作麼生」

【蘇門山】 晉書阮籍傳に「籍嘗于ㇾ——、遇ㇾ孫登ㇾ與商略終古及栖神遁氣之術、登皆不ㇾ應、籍因而長嘯而退、至ㇾ半嶺、聞有聲若鸞鳳之音、響乎巖谷、乃登之嘯也、遂歸著大人先生傳」

【素養】 平素德を養ひ畜ふる義、漢書李尋傳に「馬不伏櫪、不可以趨、道、士不——、不可以重國」

【疎野甚】 心の「アラク、イヤシキコト」甚しきなり、孟貫の詩に「自慚——多失故人期」

【疎慵】 慵は懶なり、白居易の詩に「世名檢束爲ㇾ朝士、心性——是野夫」慵、正音ショウ

【租庸調】 通鑑唐紀に「武德二年初メテ——ノ法ヲ定ム」註に「唐ノ制、田ヲ授クル者ニハ、一歲ニ粟二斛ヲ輸セシム、之ヲ租トイフ、歲ニ絹二匹ヲ輸セシメ、布ハ五ノ一ヲ加フ、綿ハ三兩、麻ハ三斤、或ハ銀十四兩ヲ輸セシム、之ヲ調トイフ、人ノ力ヲ用フルコト、歲ニ二十日、閏ハ二日ヲ加フ、役セザレバ、日ニ絹三尺ト爲ス、之ヲ庸トイフ、加役二十五日ナルトキハ、調ヲ免シ、三十日ナルトキハ、租調皆免ス」

【徂徠集】 二十卷、附錄一卷、宋の石介撰す、介の學、孫復に出でて更に加ふるに迂僻を以てす、その文章大抵倔强勁直にして雕繪綺靡の態を一掃す、これその長ずるところ、客氣太だ深く名心太だ急、これその短とするところなり、附錄には、宋史本傳及び歐陽修の撰びし墓誌銘等を載す(石介)を參看せよ、

【蘇老泉】 (蘇洵)を見よ、

【殂落】 帝王の死をいふ、殂は魂氣天に歸するをいひ、落は體魄地に歸するをいふ、書經の舜典に「帝乃——」孟子の萬章篇に「放勳乃——」殂一に徂に作る

【徂落】 (殂落)を見よ、

【麤糲】 粗食なり、糲は、しらげざる玄米をいふ、史記刺客傳に「進ㇾ百金者、將用爲ㇾ夫人——之資」

【疎嬾】 「ウトク、モノウシ」嬾は懶の正字、北史盧思道傳に「才本駑拙、性實——」蘇軾の詩に「予今正——、官

長幸見レ函レ

【素履】 己の本分を履むをいふ、質素に安んずる義、易の履卦に「——往无咎」

【祖龍】 秦の始皇帝の「アダナ」史記の始皇紀に「今年——死」祖は始なり、龍は皇帝の象、(博浪沙)を見よ、

【疎簾】 「マバラ」に編みたる「スダレ」杜甫の句に「清簟——看奕碁」細簾(コマカニアミタルスダレ)の反なり、

【素王】 王者の德を身にそなへて、その位だけなきもの、莊子の天道に「以此處下元聖——之道也」孔子家語に、齊太史餘、孔子を歎じて曰く、「天其——之乎」杜預の左傳序に「或曰、春秋之作、左傳及穀梁無明文、說者以爲仲尼自衛反魯、修春秋、立——、丘明爲素臣」

【楚王細腰ヲ愛シ、宮中餓死多シ】 (楚王愛細腰、宮中多餓死)後漢書馬廖傳に見ゆ、細腰は腰の細き美人なり、宮女腰の細からんことを欲し、食を減じて餓死する者多きなり、上の好むところ、下爭ひてその意を迎ふるをいふ、管子にも「楚王好小腰、而美人省食」とあり、杜牧の桃花夫人廟の詩に「細腰宮裏露桃新(劒客)を參看せよ、

【楚王弓ヲ失ヒテ、楚人之ヲ得】 (楚王失弓、楚人得之)孔子家語の好生篇に「楚ノ恭王出デテ遊ビ、烏嗥ノ弓ヲ亡フ、左右之ヲ求メント請フ、王曰ク止メヨ、楚王弓ヲ失ヒテ楚人之ヲ得、又何ゾ之ヲ求メント、孔子之ヲ聞イテ曰ク、惜イカナ其ノ大ナラザルコト、人弓ヲ遺レテ人之ヲ得ルノミトイハザル、何ゾ必ズシモ楚ノミナランヤ」とあり、この話は、說苑の至公にも見ゆ、

蘇黃遺文

蘇東坡贊文與可梅竹石云、梅寒而秀、竹瘦而壽、石醜而文、是爲三益之友、席子擇遺喪、黃山谷憐其貧、糾合同志者助之、其辭云、富者不仁、理離共語、仁者不富、夢蘇獨成百足之蟲、至死不偃、以扶之者衆也、願與諸君同力掘之、二帖余皆見其眞跡、坡谷集所不載

(鶴林玉露)

タ

【田】 說文に「陳ナリ穀ヲ樹ルヲートイフ、四口十阡陌ノ制ニ象ル」正韻に「土已ニ耕スヲートイフ」釋名に「田ハ塡ナリ、五稼ソノ中ニ塡滿スルナリ」易の乾卦に「見龍在——」職田は一に職分田ともいふ職分に應じて官給する田をいふ、文獻通考に「隋開皇中始給職田」火田は、耕地の草を燒きて其灰を肥料として作る田をいふ、禮記に「昆蟲未蟄不以火田」また田獵の義にも用ふ、詩經に「叔于田」

【敦】 黍稷を盛りて神に供ふる器、槃の類、禮の明堂位に「有虞氏之兩敦」

【朶頤】 欲食之貌(頤ヲ朶ル)を見よ、

【戴安道】 (戴逵)を見よ、

【太阿龍泉】 古の名劒の名(龍泉)を見よ、

【大尉】 軍事を掌る官名、秦に——あり丞相あり、漢は丞相・——(後チ大司馬大將軍ト改ム)是を兩府と爲す、東漢は大傅を上公となし、——大司徒・大司空を三公となす、上公を併せて四府と稱す、晉は太傅・太宰・太保是を上公となし、——、大司馬・大將軍・司徒・司空を上公に併せて八公となす、以下歷朝沿革あり一一錄すべからず隋唐以後位あり官なし、新王藩鎭の加官となす、詳しくは文獻通考を見よ、

【大猷】 大道に同じ、詩經に「秩秩——、君子莫之」莫は定なり、また書經に「若昔——、制治于未亂、保邦于未危」とあるは、大道の行はれたる世といふ義、

【第一義】 聖智の自覺して得たる所ろをいふ、大藏法數に「——ハ即チ无上甚深ノ妙理ナリ、ソノ體湛寂ソノ性虛融、名ナク相ナク、議ヲ絕チ思ヲ絕ツ、云云」

【第一流】 第一等の義、世說に「劉曰ク、極メテ進メリ、然レドモ故是レ第二流中ノ人ノミ、桓曰ク、——ハ復是レ誰ソ、劉曰ク、正ニ是レ我輩ノミト」劉は劉眞長、桓は桓溫なり、戴叔倫の長門怨に「自憶專房寵、曾居——」

【太一玉臺】 太一は、天帝の在す所、玉を以て臺とす、楚辭に「登太一兮玉臺」

【大威德】 五大尊明王の一にして西方に配せり、本地は彌陀如來にして一切の惡毒龍を摧伏す、大は普遍廣博の義、威は威勢、德は功德の義なり、三面六臂劒鉾輪杵を執り、摧伏の印を結び、大白牛に御し忿怒の相

を表せり、光明疏に「——者、德勝群輩」

【退院】 僧の寺を退きて隱居すること、道山清話に「長老遂——而去」

【滯陰】 夏時になりて陰氣猶ほ滯伏するをいふ、國語に「氣無——亦無散陽」

【大隱ハ朝市ニ隱ル】 文選の晉の王康琚の反招隱の詩に「小隱隱陵藪、大隱隱朝市、伯夷竄首陽、老聃伏柱史」とあり、柱史とは老子が周の柱下の史(ショモツブギャウ)となりしをいふ、伯夷の德は、老聃に如かず、則ち小隱の大隱に劣ること明けし、高士傳に「毛公薛公、戰國ノ亂ニ遭フ、二人俱ニ處士ヲ以テ、邯鄲ノ市ニ隱ル、毛公ハ隱レテ博徒トナリ、薛公ハ賣膠(にかはうり)ニ隱ル」とあるも、能く市にかくれたる者といふべし、朝廷に隱れたるは、東方朔の如き人をいふ、一解朝市にて、市中の義とす、從ふべし、

【大禹ハ聖人ナレドモ寸陰ヲ惜メリ】 晉の陶侃の語、曰く「大禹聖人、乃惜寸陰、至於衆人、當惜分陰、豈可逸遊荒醉、生無益於時、死無聞於後、是自棄也」

【大瀛】 大いなる海をいふ、史記孟荀傳に「乃有大瀛海環其外」

【體要】 趣の完く具はるのみなるを體といひ、衆體の會する所ろを要といふ、書の畢命に「政貴有恒、辭尙——」

【大液ノ芙蓉】 大液は漢の武帝の作りし池、芙蓉は蓮なり、長恨歌に「——未央柳」

【玳筵銀燭】 盛んなる宴席をいふ、趙德麟の侯鯖錄に「劉原父晚ニ長安ニ守タリ、官妓禁嬌ヲ眷ス、召還セラルルトキ、詩ヲ作リテ別ル、曰ク——徹宵明、白玉佳人唱渭城、更盡一杯須起舞、關河秋月不勝情」

【大圓鏡智】 萬德圓滿し法界の諸法を顯すこと大圓鏡の衆影を現ずるが如きをいふ、即ち佛陀四德の一なり、大藏法數に「如來眞智本性清淨、離諸塵染、洞徹內外、无幽不燭、如大圓鏡洞照萬物、无不明了、是名——」

【大家】 學問の大成したる人を稱す、また姑(シウトメ)をもいふ、類書纂要に「婦稱姑爲——」とこの時は家の音、コ

【大哥】 俗語、アニキ、廣韻に「哥ハ今呼ンデ兄トナス」韻會に「潁川ノ語ニ小ヲ哥トイフ今人以テ姐字ニ配シテ兄弟ノ稱トス」水滸傳解に「哥ハ兄ナリ、大ヲ加フルハ尊敬ノ語トス」

【待賈】 賈は價なり、善き直段を以て買手の來るを待つ義、論語子罕に「子貢曰、有美玉於斯、韞櫝而藏、諸求善賈而沽、諸子曰、沽之哉、沽之哉、我待賈者也」美玉を假りて、士は禮を待つて進む、自ら沽り自ら求むることをせざる意を說く、

【大凱】 史記主父偃傳に「天下既平、天子——」の注に「——ハ周禮、師ヲ還シ振旅スルノ樂」

【薈芥】 小さき「トゲ」微細の事に比す、薈蔚に同じ、司馬相如子虛賦に「其於胸中、曾不——」

【薈蔚】 薈は蔥に同じ、小鯁なり、鯁は魚骨なり蔚は芥に通ず、——は薈芥に同じ、刺鯁なり「トゲ」史記賈誼傳に「細故——兮何足以疑」微細の事は、我が心に留めて疑ふに足らずとの義、

【體解】 殺して體軀を析つなり、史記秦紀に「——軻」以徇」軻は荆軻なり、徇は行示なり、衆に示して後の戒とす、

【臺海使槎錄】 八卷、清の黃叔璥撰す、叔璥字は玉圃、篤齋と號す、安徽歙縣の人、康熙四十八年の進士、官御史に至る、朱子學を宗とし篤行を以て稱せらる、乾隆元年卒す、年七十七、この書は、康熙六十一年命を奉じて臺灣を巡視せしとき著せり、

【大行】 帝崩じ未だ諡を奉らざる時の稱、史記李斯傳に「——未發、喪禮未終」通典に「帝初メテ登遐スル、朝臣稱シテ——皇帝トイフ」風俗通に「天命終ルアリ、往テ返ラズ、故ニ——トイフ」

また周に——の官あり、賓客の禮を掌る、史記叔孫通傳に「——設九賓臚句傳」上に語を傳へ下に告ぐるを臚となし、下に語を傳へ上に告ぐるを句となす、

【大較】 大法をいふ、史記律書に「世儒闇於——不權輕重」また「オホムネ」の義、

【太昊】 春の神(太皞)を見よ、

【太皞】 春の神なり、淮南子に「東方ハ木ナリ、ソノ帝ハ——ソノ佐ハ句芒、規ヲ執リ春ヲ治ム、ソノ神ヲ歲星トナシソノ獸ハ蒼龍ナリ」漢書に「東方ノ神ハ太昊、震ニ乘ジ、規ヲ執リ春ヲ司ル」皞俗に皡に作る

【推敲】 字句を鍛煉するをいふ、湘素雜記に「劉公嘉話ニイフ、賈島初メ舉ニ京師ニ赴ク、一日驢上ニ於テ句ヲ得タリ イフ、鳥宿池邊樹、僧敲月下門ト 始メ推ノ字ヲ著ケント欲シ、又敲ノ字ヲ著ケント欲ス、之ヲ煉ツテ未ダ定マラズ、遂ニ驢上ニ於テ吟哦ス、時時手ヲ引キテ推敲ノ勢ヲナス 時ニ韓愈吏部、權ノ京尹タリ 島覺エズ衝キテ第三節ニ至ル、左右擁シテ尹ノ前ニ至ル、島具サニ得ル所ロノ詩句ヲ對ヘテ云云ス、韓馬

ヲ立テ良ク久クシテ島ニ謂ツテ曰ク、敲ノ字ニ作ル佳ナリト、遂ニ轡ヲ竝ベテ歸ル」俗に推音スキに從ふ、

【大行ノ路能ク車ヲ摧ク、若シ君ガ心ニ比スレバ是レ坦途】（大行之路能摧車、若比君心是坦途）白樂天の大行路と題する詩中の句なり、大行は險を以て名ある山なり、下に「巫峽之水能覆舟、若比君心是安流」の句あり、人心の險を以て山川の險に比したるなり、太平記卷九に引用したり、

【大羹ハ和セズ】 大羹は肉の汁にて、鹽梅の調和なし、禮記の樂記に「大羹不和有遺味者矣」この語、禮器篇にも見ゆ、さて大羹は、滋味の調和なく、質素の食にして、人の嗜み悅ぶ所ろの味にあらざれども、其の中には不盡の餘味存ずるありとの義、淮南子にも「大羹之和可食而不可嗜也」

【大行ハ細謹ヲ顧ミズ】 大事を行はんと欲する者は、少しの謹みなどはかへりみざる義、史記の項羽本紀に「樊噲曰ク、大行不顧細謹、大禮不辭小讓」とあり、また李斯傳に「大行不小謹、盛德不辭讓」とあり、

【大巧ハ拙ナルガ若シ】 眞に巧妙なる者は、却つて粗拙なる者の如くなるをいふ、老子に「大直若屈、大巧若拙、大辯若訥」と荀子には「大巧在所不爲、大智在所不慮」

【大壑】 一に巨壑ともいふ、海をいふ、莊子天地篇に「——之爲物也、注焉而不滿、酌焉而不竭」

【岱嶽】 泰山の異稱、文選東京賦に「巡乎——」（泰山）を見よ、

【大覺】 佛の異稱、また佛果を稱へいふ、翻譯名義集に「悟夢惺而——常明」

【大學】 國都に設くる最高程度の學問所をいふ、漢書董仲舒傳に「——者賢士之所關也、敎化之本原也」

【大學】 一卷、古本と、朱子の改補本との二種あり、古本は古學派陽明學派之を用ふ、大學には三綱領八條目あり、明明德・新民・止於至善之を三綱領とし、格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下之を八條目とす、儒學の原理を說明したれば訓詁の小學に對して——と名づけたり 中村蘭林の講習餘筆に曰く「中庸・大學ノ二篇ハ、漢儒之ヲ禮記ノ中ニ收メケルニ、晉ノ戴顒中庸ヲトリ出シテ、中庸傳二卷ヲ作ル 梁ノ武帝モ、中庸講疏ヲ撰セリ、宋朝ニ至リテ、范仲淹中庸ヲ以テ張橫渠ニ授ケ、傳道ノ書トシテ揭示セシトナリ、コレ程子ヲ待タザルナリ、唯大學ハ程子ニ至ツテ始メテ表章セリ、然ルニ皇朝ノ清原賴業ハ、高倉帝ノ侍讀トナリテ、官大外記タリ、禮記ノ中、大學・中庸ノ二篇ヲ讀ミテ、聖學ノ至要トナシ、大ニ之ヲ尊信表章シ、之ヲ人ニ敎ヘタリトナリ、大抵朱子ト同時ノ人ニテ、四書集註未ダ渡ラザル以前ナレバ、誠ニ卓識ノ人トコソ云フベケレ云云」參考書は、

大學 一篇、鄭玄注、孔穎達疏、收めて十三經の禮記中に在り、

大學證文 四卷、清儒毛奇齡撰す、大學の書、程朱より以來、改本日に增し、往往私心に騁せ、古義を汨亂す、著者諸本を參校して、この書を著す、考證極めて精確なり、

大學章句 一卷、朱熹撰す、

中庸 一篇、註疏、大學に同じく禮記中に收む、

中庸章句 一卷、朱熹撰す、

四書講義困勉錄 三十七卷、松陽講義、十二卷、清の陸隴其撰す、

四書輯疏 二十九冊、安部井聚編す、

四書解義 二十六卷、康熙十六年、大學士庫勒納等敕を奉じて撰す、

以上列記する書目は、古來著名のもののみを擧げたるなり、その他參考して博覽に資すべきもの亦多し、

【臺閣】 後漢書仲長統傳の注に「——ハ尙書ノ官ヲ謂フ」廣く內閣の義、またその大臣の稱とす、

【大樂ノ成ルハ一音ニ取ルニアラズ】 中論に「大樂之成、非取乎一音、嘉膳之和、非取乎一味、聖人之德非取乎一道」

【大夏皇帝】 宋の仁宗の景祐元年、西夏の趙元昊反し、陝西甘肅等十四州の地に據有し、尋で——と僭號し、屢邊寇す、西鄙騷然たり、西夏は即ち漢の西南羌の地なり、

【大廈成リテ燕雀相賀ス】 淮南子說林に「大廈成而燕雀相賀、湯沐具而蟣蝨相弔」の註に「廈ハ大屋ナリ、燕雀大屋ノ成リテ、安キヲ得ルヲ喜ビ、蟣蝨ハ、湯沐ノ水具ハリテ、將ニ死セントスルヲ憂フルナリ」

【大廈ノ材ハ一丘ノ木ニアラズ】 大なる事功は一人の力にては出來ざるに喩ふ、四子講德論に「大廈之材非一丘之木、太平之功、非一人之力也」

【帶甲】 「ヨロヒ」を著けたる兵士をいふ、史記蘇秦傳に「——數十萬」轉じては廣く兵士を斥していふ、

【大廈將ニ顚レントス、一木ノ支フル所ロニアラズ】 國家の覆らんとする危き場合にあひては、獨力にては支へ難きに喩ふ、文中子に「大廈將顚非一木所支也」

とあり、宋書に「袁粲、劉秉ト、蕭道成ヲ誅セント謀ル、褚淵、之ヲ知リテ以テ道成ニ告グ、遂ニ載僧靜ヲシテ粲ヲ攻メシム、粲其ノ子最ニ謂ツテ曰ク、本ト一木ノ大廈ノ崩ルルヲ支フル能ハザルヲ知ル、但名義ヲ以テ此ニ至ル、國家ノ爲メニ臣タル職分ヲ盡スノミト僧靜城ヲ踰エテ獨リ進ム、最身ヲ以テ粲ヲ衛ル、粲最ニ謂ツテ曰ク、我レ忠臣タルヲ失ハズ、汝孝子タルヲ失ハズト、父子俱ニ死ス、百姓之ヲ哀ミ謠ヒテ曰ク、寧ロ袁粲ト爲リテ死スルモ、褚淵ト作リテ生キズト、秉父子モ亦殺サル」

【大鑑】（慧能）を見よ、

【大寒ニシテ裘ヲ索ム】「ヌスビト」捕へて繩をなふと同じ、法言に「大寒而後索裘、不亦晩乎」裘は「カハゴロモ」

【大旱ノ雲霓ヲ望ムガ若シ】渴望の切なるをいふ、孟子に「民望之若大旱之望雲霓也」

【大姦ハ忠ニ似タリ】甚だしきよこしまなる惡人は、かへりて表面はまことある人のやうに見ゆるものなりとの義、呂誨の語に「大姦似忠、大詐似信」

【大伽藍】大寺なり（伽藍）を見よ、

【大器】大いなる才器ある人をいふ、管子に「施伯謂魯侯曰、管仲者天下之賢人也、——也」

【戴逵】字は安道、晉の譙郡の人、會稽剡縣に徙る、博學能文善く琴を鼓し書畫に工なり、性高潔にして、禮度を以て自ら處る、太宰武陵王晞その琴を善くするを聞きて、人を遣して之を召す、逵、使者に對し琴を破りて曰く、戴安道不能爲王門伶人と、王徽之（子猷）嘗て雪夜に舟に乘じ之を訪はんとし、門にいたり興盡きて返りき、孝武の時累徵せらるれども就かず、子の顒（字ハ仲若）亦高潔、文學を以て名あり、

【耐久ノ朋】いつまでも、親交のかはらざる友をいふ、書言故事に三國志を引きて「魏玄同裴炎ト交ヲ締ビ、能ク始終ヲ保ツ、時ノ人呼ンデ耐久ノ朋ト號ス」の註に「交道ヲ保全シテ、始終其ノ心ヲ移サズ」

【大義親ヲ滅ス】（大義滅親）君臣の大義を全うせんために父子の私親を滅するをいふ、左傳隱四年に「君子曰、石碏純臣也、惡州吁而厚與焉、——、其是之謂乎、厚は碏の子なり、厚衞の公子州吁の亂に與みしたるを以て、碏が之を殺したるを嘉みせるなり、

【大器晚成】大才は、速に成就せざるに喩ふ、老子に「大方無隅、————」とあり、後漢書「馬援ガ兄況、援ニ謂ツテ曰ク、汝ハ大才、當ニ晚成スベシト」論衡には「大器難成、寶貨難售」

【太釣】造物者をいふ、陶人器を釣上に作る、造化の人を爲るも、亦猶ほ陶の瓦を造るが如きのみ、漢書賈誼傳に「——播物釣」とは、陶人の模の下に用ふる輪器、

【大嘘】嘘は笑聲なり、——は大に笑ふをいふ、漢書叙傳に「談笑——」

【大去】去りて復た反らざるをいふ、左傳に「紀侯——其國」

【大魚】淮南子に「——蕩而失水、螻蟻皆得志」大魚も水に離るれば螻蟻の爲めに啖はるるを免れず、

【戴顒】字は仲若、逵の子、丹青を善くす、父仕へざりしを以て、復その業を修め、亦琴を善くし新聲を作す、號して清曠と爲す、逵善く佛像を鑄る、顒その法を參す、喜んで名山に遊び、累徵せらるれども就かず、晉の太元戊寅に生れ、元嘉辛巳に卒す、年六十四、莊周の大旨を述べ逍遙篇論を著し、禮記中庸に注す（戴逵）を參看せよ、

【太極】天地未だ分れざる以前をいふ、易の繫辭に「易有——、是生兩儀」

【太極圖說】一卷、宋の周惇頤撰す、太極とは天地に先ちて存ずる無形の條理にして萬物の本源たるものをいふ、この太極には動靜二種の活動力あり、之によりて陰陽二氣を生じ、更に分れて木火土金水の五行となり、五行の精凝りて人を生ず、人はこの五行に由りて仁・義・禮・智・信の五性を得るが故に萬物の靈たるなり、されどもこの五性を動かして外物と接する時は、その行事に善惡の別を生ずるを以て、聖人中正仁義の道を立てて靜を主とし、以て正に復歸せしむと、天人合一の原理を說明す、これこの書の大意なり、參考書には、朱熹の太極圖解一卷あり、また清の毛奇齡の————遺議一卷、伊藤長胤の————管窺一卷等はこの書を排して儒家の言にあらずして道家の說たることを指陳せしもの、亦幷せ見るべし、

【大區】天をいふ、淮南子に「縱志舒節、以馳——」

【太和】中和の氣をいふ、班固の答賓戲に「沐浴玄德、禀仰——」

【大過】大に過ぐること、易の——の釋文に「——ハ超越ナリ」また大いなる「アヤマチ」論語に「可以無——矣」

【題畫】山水人物等の畫に贊又は詩文を書きつくるをいふ、

顧愷之秋江晴靄圖　元　黃公望

三絶如君少、斯圖更擅長、設施無斧鑿、點染自微茫、山碧林光淨、江清秋氣涼、憐余瞻對久、疑入白雲鄉、

題畫　明　唐寅

楊柳陰濃夏日遲、村邊高館漫平地、隣翁挈榼乘清早、來決輸贏昨日棊、

【大塊】 天地をいふ、莊子に「――噫氣其名爲風」また造物者の義、同書大宗師に「――載我以形勞我以生佚我以老息我以死」李白の春夜宴桃李園序に「――假我以文章」一解に地球をいふ、

【台槐】 三公なり、三公は天の三台に比す、また周の世三槐を朝庭に植ゑ、之に面して三公の座位を定めたるにより、三公の義とす、晉書に「史臣曰、晉氏中興、衣冠斯盛、英彥如林、或以雅望處――、或以高名居保傅、自非一時之秀、亦曷能至於斯」

【怠荒】 怠りすさむ義、禮記の曲禮に「勿――」

【大經】 通鑑の唐紀に「唐、士ヲ取ル、禮記・春秋・左氏傳ヲ以テ――ト爲シ、詩・儀禮・周禮ヲ以テ中經トナシ、易・書・春秋公羊・穀梁傳ヲ以テ小經トナス」

【胎教】 子のいまだ胎内に在るうちに教を施すをいふ、即ち孕婦が心を正し、行をつつしみて自づから胎中の兒に善き感化を及ぼすをいふ、列女傳に「文王生而明聖、君子曰太任能――」

【大絃急ナレバ小絃絕ユ】 後漢書に「爲政猶張琴瑟、大絃急者小絃絕、故子貢非臧孫之猛法、而美鄭尙之仁政」ことあり、一の絃は太ければ強くかけ、四の絃は細ければ弱くかくるなり、若し一の絃の如くに、四の絃をも、きびしくかくるときは、たちまちきるに至るものなり、以て民を治むるには寬をたふとぶに喩ふ、

【太玄經】 十卷、漢の揚雄著す、玄とは猶ほ太極といふが如く天地萬物の本根をいふ、この書は易に擬して作りたるものにて、諸儒のこの書を評する褒貶一ならず、司馬光は大にこの書を尊びて「玄ヲ讀ミテ後、易ヲ讀マバ、易ハ刃ヲ迎ヘテ解セン、眞ニ天地ノ祕ヲ闡クモノ、以テ孔子ニ次グベキナリ」といひ、太玄集註を作れり、

【大故】 大喪をいふ、孟子に「不幸至於――」また惡逆をいふ、論語に「故舊無――則不棄也」

【醍醐】 五味の一、熟酥より製出す、味甘美なるもの、以て佛法の妙趣に喩へて――味といふ(――ノ)を見よ、

【太公】 祖父をいふ、輟耕錄に「今人曾祖父ヲ謂ツテ――トイフハ謬レリ、當ニ祖父ヲ稱スルヲ是ト爲スベシ、後漢ノ李固ノ父郃、司空タリ、固ガ女、固ノ誅ニ伏スル日ニ當リテ曰ク――以來云云、註ニ――ハ祖父郃ヲ謂フナリト」

【大功】 大いなる「テガラ」(重實)を參看せよ、また喪服の名、布を治むるに精麤の分あり、故に大小の別あり、――は五月、小功は三月の服なり

【廼公】 乃公に同じ、尊大にして自ら稱する語、漢書高祖紀に「漢王輟飯吐哺曰、豎儒幾敗――之事」

【大功ヲ天下ニ建ツル者ハ必ズ先ヅ閨門ノ內ニ修ム】 陸賈の新語に「建大功于天下者、必先修于閨門之內、垂大名于萬世者、必先行之于纖微之事」

【大功ヲ論ズル者ハ、小過ヲ錄セス】 大功を論じて之を賞するときは、其の小過は措いて問はざるをいふ、漢書陳湯傳に「論大功者、不錄小過、擧大美者、不疵細瑕」

【太公望】 (呂尙)を見よ、

【大功ハ世世絕タズ】 大賓令の田令に「大功世世不絕、上功傳三世、中功傳二世、下功傳子」大功田を賜はりしものは永く世襲せしむるをいふ、

【大國ヲ治ムルハ小鮮ヲ烹ルガ如クス】 (治大國若烹小鮮)老子の語、小鮮とは小魚なり、小魚を烹るには腸や鱗を去らず、そのまま烹るなり、國を治むるにも政を煩にせず、自然に任ずべしとの義、

【體國經野】 (國ヲ體シ)を見よ、

【醍醐ノ法味】 最上の美味をいふ、以て佛法の妙なる旨に喩ふ、涅槃經の聖行品に「善男子譬ヘバ牛從リ乳ヲ出シ、乳ヨリ酪ヲ出シ、酪ヨリ生酥ヲ出シ、生酥ヨリ熟酥ヲ出シ、熟酥ヨリ醍醐ヲ出スガ如シ、醍醐ハ最上ナリ、若シ服スルアレバ、衆病皆除カル」とあり、卓氏藁林に「佛經ニ言フ、正法ヲ聞クコト、醍醐ヲ食フガ如ク然リトハ、其ノ能ク性ヲ養フヲ謂フナリ、此レ直チニ佛ノ正法ニ喩フルナリ」

【太歲】 (十干)(十二支)を見よ、

【大造】 造は作なり、爲なり、就なり、大に功を爲す義、左傳に「是我有――于西也」

【太早計】 速了(ハヤガッテン)に過ぐる義、莊子の齊物論に「汝モ亦太早計、見卵而求時夜、見彈而求鴞炙」とあり、鷄の卵を見て、すぐに時をうたはんことを求め、彈(ハジキユミ)を見て、鴞(フクロ)の炙(アブリモノ)を求むといふ意、

【太倉ノ粟陳陳相因ル】 官の倉の中に藏むる米、多くして用ひ盡すを得ず、陳腐に歸する者、相累積するを

いふ、史記平準書に「——之一、————、充溢露積於外」

【大倉ノ稊米】 猶ほ滄海の一滴と云ふが如し、莊子秋水に「計中國之在海內、不似稊米之在太倉乎」稊は小米なり 稗の類、

【對策】 政事經義の問を出して、之に對へしめ、其の文辭を觀て高下を定むるをいふ、晉書郤詵傳に「臣舉賢良、——爲天下第一」

【岱山】 次の(泰山)を見よ、

【泰山】 山東省の青州の西方に在り、初學記に「——ハ五嶽ノ東嶽ナリ 五經通義ニ一名ハ岱宗、王者命ヲ受ケ姓ヲ易ヘ、功ヲ報イ成ルヲ告グル、必ズ岱宗ニ於テス、東方ハ萬物始メテ交代スルノ處ナレバナリ」風俗通山澤に「——ハ山ノ貴キ者」(岱宗)を參看せよ、

望嶽　杜甫

岱宗夫如何、齊魯青未了、造化鍾神秀、陰陽割昏曉、盪胸生層雲、決眥入歸鳥、會當凌絕頂、一覽衆山小、

【太山ニ登リテ天下ヲ小ナリトス】 その居るところ高ければその下を見ることますます小に、見るところ大なれば、小なるものは觀るに足らずとの義、孟子に「孟子曰、孔子登東山而小魯、登太山而小天下、云云」太山は泰山なり、

【泰山ノ雷ハ石ヲ穿ツ】 微少なる力も積みてやまざるときは大功を成すに喩ふ、枚乘の諫吳王書に「泰山之雷穿石、殫極之綆斷、韓、水非石之鑽、索非木之鋸、漸摩使之然也」雷は溜に通ず「シタタリ」綆は「ツルベナハ」韓は「キゲタ」

【泰山ハ土壤ヲ讓ラズ、故ニ能ク其ノ大ヲ成ス】 度量を廣くして多く物を容るるに喻ふ、李斯の逐客上書に「泰山不讓土壤、故能成其大、河海不擇細流、故能就其深、王者不却衆庶、故能明其德」とあり、泰一に太に作る、同じ(山ハチヒサキ)を見よ、

【泰山北斗ノ如シ】 泰山北斗を仰ぐが如く、之を尊崇するをいふ、排韻に「韓愈字ハ退之、唐ノ文宗ナリ、宋景文ガ公ノ贊ニイフ、愈六經ノ文ヲ以テ、諸儒ノ首タリ、學者之ヲ仰グコト泰山北斗ノ如シ」と、唐書韓愈傳の贊に見ゆ、北斗は北辰なり、略しては泰斗ともいふ、

【泰山前ニ崩ルトモ色變ゼズ】 心をおちつけて恐れざるをいふ、蘇老泉の文に「爲將之道、當先治心、泰山崩於前而色不變、麋鹿興於左而目不瞬、然後可以制利害、可以待敵」

【泰山梁木】 泰山は山の最も尊きもの、梁木は「ウツバリ」にて大木なり、それよりすべて賴りたのむべき尊きものに喩ふ、禮記檀弓に「孔子蚤作(中略)歌曰、泰山其頹乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎」とあるに本づく、

【太子】 東宮に同じ、明敖英綠雪亭雜言に「古者天子ノ嫡子モ亦世子ト稱シ、諸侯ノ子モ亦——ト稱ス、西漢ハ天子ノ嫡子ヲ皇太子ト稱シ、諸王ノ子ヲ——ト稱ス 皇太子殺梁王——ノ類是レナリ、金元ハ庶子モ皆——ト稱ス、四太子兀朮ノ類是レナリ、本朝(明朝)ハ東宮ニ皇太子ト稱シ、親王ノ嫡子ヲ世子ト稱シ、郡王ノ嫡子ヲ長子ト稱ス」伊藤長胤曰く「春秋ノ時、天子諸侯ノ嗣子、通ジテ世子ト稱シ、太子トモ稱ス、漢ノ時ニ及ビテ侯國モ亦太子ト稱ス、而シテ天子ノ元子ハ皇太子ト稱ス、吳——侍皇——飲博コレナリ、後世ハ唯天子ニ皇——ト稱スルヲ得、而シテ諸侯ハ即チ世子ト稱ス」

【太師】 文官の最も高きもの、三公の第一、天子の師法たる義、詩經に「尹氏——、惟周之氏」また大師は朝廷より高僧に賜はる稱、唐の太宗の朝に始まる、

【大士】 菩薩を——といふ、また開士ともいふ、大とは大心を發するをいふ、開は發の義、瑜伽論に「自利利他名——」大乘教によりて、大信心を發し、大行を修め行ひ、大果を成すが故にいふ、

【大姊】 善信女の稱なり、佛、諸天女を諸姊と稱せしに本づく、

【內子】 卿大夫の嫡妻(ホンサイ)なり、左傳僖二十四年に「以叔隗爲——而己下之」また國語に「欲以其妾爲——」またひろく嫡妻をいふ、類書纂要に「嫡妻ヲ——トイフ、閨門ノ內ニ在リテ以テ家ヲ治ムルヲ以テナリ」

【大醜】 元惡に同じ、易に「獲其——」

【大慈悲】 能く他に樂を與ふるを慈といひ、他の苦を拔くを悲といふ、法華經に「大慈大悲常无懈倦」

【大人】 大德の人なり、また聖人の義とす、易經に「飛龍在天、利見——」また「——者與天地合其德」孟子に「——者不失其赤子之心者也」また後漢書蘇章傳には「——ハ長老ノ稱」とあり、また父母の稱とす、漢書淮陽王傳に「王遇——益懈」とあるは、淮陽王の、外舅張博が、我が母を稱せしなり、また范滂傳に「滂將就誅、與母訣曰、大人割不忍之愛」とあるも、母を稱す、されど多くは父を稱する辭とす、類書纂要に「子稱父爲——」(大人)を參看せよ、

【大侵】 甚だしき饑饉をいふ、穀梁傳襄二十四年に「五穀不登、謂之——」韓詩外傳に「一穀不升曰歉、二穀不升曰饑、三穀不升曰饉、四穀不升曰荒、五穀不升曰——」——は一に大饑ともいふ。

【大秦】 後漢書に見ゆる——は、蓋し今の亞細亞土耳其の地方を指す、當時は東羅馬帝國の領土たりしなり、同書に「大秦一名黎軒、後漢時始通焉、其國在西海之西、亦云海西國、其王治安都城、宮室皆以水精爲柱、條支西渡海曲萬里、去長安蓋四萬里、其國平正人居星布(中略)其王無常人、皆循立賢者、有災異及風雨不時、輒廢而更立、受放者無怨、其人長大平正有類中國、故謂之——、或曰、本中國人也」

【戴震】 字は愼修、一の字は東原、清の休寧の人、乾隆二十七年の擧人、許氏の說文解字を得て大に之を好み、遂に盡く十三經注疏に通じ、能く全く其の辭を擧ぐ、嘗て曰く、經は以て道を載す、道を明かにする所以の者は辭なり、辭を成す所以の者は字なり、學者は當に字に由りて以てその辭に通じ、辭に由りて以てその道に通ずべし、某十七歲の時より道を聞くに志あり、謂へらく之を六經孔孟に求むるに非れば得べからず、字義制度名物に從事するに非ざれば、由りて以てその語言に通ずるなしと、之を爲すと數十年、灼然として古今治亂の源是に在るとを知る、宋儒が訓詁の學を譏りて語言文字を輕んずるは、これ猶ほ江河を度らんとして舟楫を棄つるが如きなりと撰述する所ろ、毛鄭詩考正・考工圖記・孟子字義疏證・方言疏證・聲韻考・爾雅文字考・東原文集等數十種あり、段玉裁王念孫等皆その門に出づ、乾隆四十三年卒す年五十五、

【大臣】 論語先進篇に「所謂——者、以道事君、不可則止」漢書朱雲傳に「——無益于民、皆尸位而素飡」

【大人虎變】 大人は王者を指す、王者が天下の事を變革するは條理炳然として、著しるく虎の皮毛の變更して文采あるが如きをいふ、易經に「——、未占有孚」

【大人ニ說クニハ則チ之ヲ藐ズ】 (說大人則藐之)孟子盡心篇の下に「——」、勿視其巍巍然」大人は、尊貴の者をいふ、藐は輕視するをいふ、巍巍は富貴高顯の貌、藐焉として之を畏れざるときは則ち志意舒展して、言語盡すことを得るなり、

【大秦ノ珠】 魏畧に「大秦國出明月夜光珠眞白珠」と、辛延年の詩に「頭上藍田玉、耳後——」

【代謝】 四時の「ウツリカハル」をいふ、淮南子に「道ハ

輪轉シテ窮リナシ 日月ノ運行ニ象リ、春秋ノ——アル若ク 日月ノ晝夜アルガ若シ」(荏苒)を見よ、

【臺榭】 臺は土をつきあげて四方を望むやうにつくる、屋根なきを露臺といふ、漢孝文帝欲作露臺とある是れなり、左傳の靈臺の注に「服虔曰ク天子曰靈臺、諸侯曰觀臺」とあり、榭は儀禮の注に「凡屋無室曰榭」と、——と連稱す、爾雅に「有木者謂之榭」とあり、木とは土ばかりてなく、材木を構へて築きたるをいふ、故に劉勰の新論に「淩雲之榭非一木所構」史記劉敬叔孫通列傳にも「——之榱、非一木之枝」也、三代之際、非一士之智也」とあり、書經泰誓の「宮室——」の注にも「土高曰臺、有木曰榭」とあり、管子の七臣七主に「——相望者亡國之廡、馳車充國者追寇之馬」

【大將】 軍の總指揮官なり、抱朴子に「——民之司命、社稷存亡、於是乎在」また「——者凜凜若負重而履薄氷」戰戰若登朽木以臨萬仞」

【大匠】 すぐれたる「タクミ」老子に「代——斲、希有不傷其手」呂氏春秋に「——不斲、大庖不豆、大勇不鬬、大兵不寇」孟子に「——不爲拙工改廢繩墨、羿不爲拙射變其彀率」

【大祥】 三周忌をいふ(小祥)を見よ、また大祥は大吉なり、左傳昭十八年に見ゆ、

【太上】 極めてすぐれたる德、大戴禮曾子立事篇に「——樂善」注に「——ハ德ノ最上ナル者」また天子の稱、荀子の君子篇に「莫敗犯——之禁」の注に「——ハ至尊ノ號」

【退讓】 自ら「ヘリクダリ」て人に讓るをいふ、禮記の曲禮に「——以明禮」

【太上皇】 位を讓られたる天子を尊稱していふ、略しては「ダジャウクワウ」といふ「セントウゴショ」漢書に「上尊太公曰——」と、註に「師古曰ク、太上ハ極尊ノ稱、皇ハ君ナリ、天子ノ父、故ニ號シテ皇トイフ、國ヲ治ムルニ預ラズ、故ニ帝ト言ハザルナリ」と、按ずるに此より前、秦の始皇莊襄王を追尊して——となす、これその始なるべし、後世略して上皇と稱す、

【太常寺】 唐の代、禮樂郊廟社稷の事を掌る役所の名、唐書に「——寺卿一人、少卿二人」

【大上ハ德ヲ立ツ】 人の最上の行は、德を立て以て世を理め、人を濟ふをいふ、左傳襄二十四年に「豹聞之大上有立德其次有立功其次有立言雖久不廢、此之謂不朽」豹は叔孫豹なり、註に「立德ハ黃帝堯舜、立功ハ禹稷、立言ハ、史佚周任臧文仲」

【太聖 不動】 佛敎の五大明王の一、青龍疏に「——者降一切鬼魅諸障惱者」

【大蛇ヲ見ルトモ女人ヲ見ル可カラス】 女人は愛欲の根本にして大蛇よりも怖るべしとの義、寶積經に「一見於女人、能失眼功德、雖見大蛇、不可見女人」

【帝釋】 具には釋提桓因といふ、釋を能、提を天、桓因を主と譯す、能く天主たるなり、一に六欲天主、三十三天主、忉利天帝釋、三十三天尊等の名あり、眷屬の天三十二あり、所居の忉利天を合せて三十三天なればいふ、その居城を喜見と名づく、帝釋は別に千眼といふ、了義燈に「猶——如名爲千眼、非有千眼、以能一時見千法」

【大嚼】 嚼は「カミクラフ」——は大いに食ふ義、曹子建の與吳季重書に「過屠門——豈不快意」東坡の綠筠軒の詩に「若對此君仍——」唐書に「長啜——」

【太守】 秦に郡守といふ、漢の景帝改めて——といふ、漢書に「郡守ハ秦ノ官、ソノ郡ヲ治ムルコトヲ掌ル、秩二千石、景帝名ヲ——ト更ム」

【大儒】 すぐれたる儒者、荀子に「彼——者、雖在於窮閭漏屋、無置錐之地、而王公不能與之爭名」

【大樹】 わが國にて將軍の異名に用ふ、後漢書の馮異傳に「馮異字ハ公孫、人トナリ謙退ニシテ伐ラズ、諸將功ヲ論ズルニ、異常ニ獨リ樹下ニ屏ク、軍中號シテ大樹將軍ト爲ス、邯鄲ヲ破ルニ及ビ、乃チ更ニ諸將ヲ部分ス、各〻配隷アリ、軍士皆言フ願クハ大樹將軍ニ屬セント」

【戴叔倫】 字は幼公、唐の金壇の人、詩賦を能くす、撫州の刺史となり、均水法をつくる、俗之を便利とす、詔書褒美し譙縣男に封じ金紫服を加ふ、後ち容管經畧使に遷り、威名流聞す、德宗爲めに詩を賦して之を寵せり(沅湘)を見よ、

【大樹ノ下ニハ美草ナシ】 賢路の蔽塞せる所ろには、才能の士出でざるに喩ふ、說苑の說叢篇に「高山之巔、無美木、傷於多陽也、大樹之下無美草、傷於多陰也」

【太初】 萬物の由りて生ずる一番のもとをいふ、宋儒の太極といふに同じ、列子に「——者氣之始也」太一に泰に作る、莊子天地篇の注に「泰初ハ氣ノ初ナリ」

【大乘】 名義集の、宗釋論主篇に「夫レ大乘敎トハ、至眞ノ理ナリ、諸佛ノ讚スル所ロ、衆聖ノ宗トスル攸ロ」大は普遍廣博なり、乘は運載なり、衆生を運載して生死を出離せしむる意、

【戴勝】 鳥の名なり、鳩鳩の一名、禮記の月令に「季春之月、——降于桑」とあり、農耕を勸むる鳥なりといふ、一に戴紝また戴鴆ともいふ、(布穀)を見よ、

【退食】 朝より家に歸り、休息して食ふをいふ、詩經の羔羊に「——自公、委蛇委蛇」

【戴嵩】 王氏書畫苑に、韓晉公之鎭浙右、署爲巡官、師晉公之畫、不善他物、唯善水牛而已」とあり、韓晉公は、唐の韓滉(字ハ太沖)なり、佩文韻府に「幹馬嵩牛」とあり、韓幹の馬、戴嵩の牛をいふ、東坡の書——畫牛の文に、

蜀中有杜處士、好書畫、所寶以百數、有戴嵩牛一軸、尤所愛、錦囊玉軸、常以自隨、一日曝書畫、有一牧童見之、拊掌大笑曰、此鬬牛也、牛鬬力在角、尾搖入兩股閒、今乃掉尾而鬬、謬矣、處士笑而然之、古語有云、耕當問奴、織當問婢、不可改也、

【太清】 天をいふ、鶡冠子に「聖人之德、上及——、下及太寧、中及萬靈」太寧は地をいふ、後漢書蔡邕傳の注に「——ハ天ヲ謂フ」

【太聖】 すぐれたる聖人、堯舜禹湯文武周公孔子などを斥していふ(——不動)を參看せよ、

【胎生】 母の胎中より生まるるをいふ、獸の類なり、史記の樂書に「——者不殰殰は音トク」說文に胎敗なり、未だ生るるに及ばずして胎敗するをいふ、流產すること、殰に作るも同じ、

【戴星】 (星ヲ戴キ)を見よ、

【戴聖】 (戴德)を見よ、

【大聲ハ里耳ニ入ラズ】 正しき音樂は、里俗の人の耳には分からぬをいふ、莊子の天地篇に「大聲不入於里耳」とあり、以て高尙なる古樂は俗人に解し得られざるに喩ふ、

【大雪】 左傳隱八年に「平地尺ニ盈ツルヲ、——ト爲ス」また二十四候の一、孝經緯に「小雪ノ後、斗、壬ヲ指ス——トイフ、十一月ノ節ナリ、積陰ノ雪トナル、此ニ至リ栗烈ニシテ大ナルヲイフ」

【大雪山】 佛經にて印度の「ヒマラヤ」山をいふ、梵語の「ヒマ」は雪の義、「ラヤ」は藏の義、千古の雪を藏するの意なり、

【大節身ニアル時ハ、小過アリト雖モ、不孝トセズ】 十訓抄第一に見ゆ、孝經の孔安國の註に「故ニ君トナリテ惠、父トナリテ慈、臣トナリテ忠、子トナリテ順、コノ四者ハ人ノ大節ナリ、大節身ニ在レバ、小過アリト雖モ不孝トナサズ」

【大漸】 大に進む義、書經顧命「疾——惟幾」とあるに

よりて、後世多くは、病勢の甚しく進みし義に用ふ、幾は危なり、

【退然】 謙卑怯弱の貌、禮記の檀弓に「其中——如不勝衣」に和柔の貌とも解く、

【泰然】 心のしつかりとして動かざる貌、元史許衡傳に「家貧躬耕(中畧)處之——」

【頽然】 柔順なる貌、易の繫辭傳に「——示人簡矣」禮記の曲禮の注に「——ハ順ナリ」頽は隤また穨に通ず、

【大全集】 十八卷、明の高啓撰す、啓の詩、初め五集あり、凡そ二千餘首、後ち自ら定めて缶鳴集となす、凡そ九百餘首、諸集遂に亡ぶ、景泰中、徐庸、逸篇を掇拾し、輯めてこの本となす、啓天才高逸、明一代詩人の冠たり、凡そ古調を摹擬する、眞に逼らざるなし、惟世に行はるる太だ早く、殞折太た速かにして、未だ鎔鑄變化して自ら一家の體を爲す能はず、惜むべし(高啓)を參看せよ、

【大川滔灌タレバ虬螭游ブ】 人の德性は涵養するによりて道義備るに喩ふ、抱朴子に「大川滔灌、則虬螭游、日就月將、則德立道備」滔灌は水の廣き貌、

【太素】 天地未だ分れざる時をいふ、列子に「——者質之始也」また質朴なる性をいふ、淮南子に「偃其聰明、而抱其——」

【太簇】 禮記に「孟春(はつはる)ノ月、律——ニ中リ、東風凍ヲ解ク」史記の律書に「——トハ、萬物簇生スルナリ、ソノ十二支ニ於テ寅トナス」

【岱宗】 泰山の別名、應劭の風俗通に「東方泰山尊曰——、岱者長也、萬物之始、陰陽交代、雲觸石而出、膚寸而合、不崇朝而徧雨天下、其唯泰山乎、故爲五嶽之長」また博物志には「泰山一曰天孫、言爲天帝孫也」(泰山)を參看せよ、

【太宗皇帝】 唐の第二世なり、姓は李、諱は世民、高祖の次子なり、聰明勇決にして識量人に絕す、隋末の亂に乘じ、高祖を勸めて義兵を擧げしめ、遂に天下を奄有せしむ、位に即くに及び大に文敎を興し、精を勵し治を圖る、後世稱して貞觀の治といふ、貞觀二十三年崩ず年五十二、著すところ帝範四卷あり、

【太宗ハ蝗ヲ呑ム】 太平記卷三十五に見ゆ、貞觀政要第八農務篇に「貞觀二年京師旱ス、蝗蟲大ニ起ル、太宗苑ニ入リ禾ヲ視、蝗蟲ヲ見、數枚ヲ掇リテ咒シテイフ、人ハ穀ヲ以テ命トナス、而ルニ汝之ヲ食フ、是レ百姓ニ害アリ、百姓過アレバ、予一人ニ在リ、爾其レ靈アラバ但當ニ我心ヲ蝕ムベシ、百姓ヲ害スル無カレト、將ニ之ヲ呑マントス、左右遽ニ諫メテ曰ク、恐クハ疾ヲ成サン、不可ナリト、太宗曰ク、蘖フ所ロハ災ヲ朕ガ躬ニ移サン、何ゾ疾ヲ之レ避ケント、遂ニ之ヲ呑ム、是ヨリ蝗マタ災ヲナサズ」

【大息】 「タメイキヲツク」史記蘇秦傳ニ「仰天——」註ニ「——ハ、久シク氣ヲ蓄ヘテ大呼(おほひにはく)スルナリ」

【內則】 家の中に在りて守るべき法則をいふ、禮記の篇名、また後漢書に「述宣陰化、修成——」

【大儺】 「オニヤラヒ」をいふ、後漢禮儀志に「季冬ノ月、大ニ享臘ス、臘ニ先ダツ一日——ス、之ヲ逐疫トイフ」

【棣棣】 閑習する貌、威儀にならひ、なるる義、詩の邶風に「威儀——不可選也」

【大怒】 怒は惡なり、——は、大惡の義、書經の康誥に「元惡——、矧惟不孝不友」また柳宗元の獻平淮夷雅表に「天造神斷、克淸——」これは吳元濟を平ぐるをいふ、

【褦襶子】 代醉篇に「褦襶ハ涼笠ナリ、竹ヲ以テ胎トシ、蒙ラスニ帛ヲ以テス、此ヲ戴キテ日ヲ遮ルナリ」と、子とはその人を指す、すべて笠を戴く人をいふ、轉じて酷暑、人の高臥を樂む時に、盛服して見えんことを請ふは事を曉らざる者なり、そを稱して——といふ、魏程曉の伏日の詩に「今世——、觸熱到人家、主人聞客來、褦襶奈此何云云」

【大戴禮】 (——)を見よ、

【大道】 すべて宇宙開を支配する一定の道、周書の周祝の注に「——ハ天道ナリ」また大いなる道路、列子に「——以多岐亡羊、學者以多方喪生」

【駘蕩】 曠遠の貌、春の景色の「ノドカ」なる貌、謝朓の詩に「朋情以欝陶、春物方——」宋祁の詩に「風光——百花春」

【頽唐】 「クヅレオチル」文選の洞簫賦に「——逐往」

【太唐西域記】 十二卷、唐の僧玄奘譯し、僧辯機撰す、この書は玄奘が印度に遊び、經るところの百四十一國の風俗衣服地理物產等の梗概を記せしものなり、

【大刀頭】 故鄕に還るといふ隱語、刀頭に環あり、環還音通ず、故にいふ、古詩に「何日——」

【大道廢シテ仁義アリ】 (大道廢而有仁義)老子の語なり、無爲の大道、世に行はれし太古は、人の風儀厚く、人氣和ぎ、仁もていつくしむべき窮民もなく、義もて正すべき惡人もなければ、仁義もいらざりき、然るに時代降りて、無爲の大道、世にすたれ、人の風儀も漸く薄く、人氣も漸く暴くなりゆくままに、窮民惡人多くな

国立国会図書館

り、始めて、仁義の道を立てて教ふることとはなれるなりとの意(六親和)を參看せよ、

【大智ハ愚ノ如シ】 蘇軾、歐陽少師の致仕を賀する啓に「大勇若レ怯、大智如レ愚、至貴無レ軒冕、而榮、至仁不レ導引而壽」

【大椿ノ壽】 長壽をいふ、莊子の逍遙遊篇に「上古有レ大椿者、以八千歲爲レ春、八千歲爲レ秋」

【大丈夫ノ世ニ處スル當ニ天下ヲ掃除スベシ】 (大丈夫處レ世、當レ掃除天下)圓機活法に「陳蕃、一室ニ閑居ス、庭宇蕪穢ナリ、室ニ糞アルモ除カズ、同郡ノ薛勤、往キテ之レヲ候ヒテ曰ク、孺子、何ゾ掃除シ、以テ賓客ヲ待タザルト、蕃曰ク、大丈夫ノ世ニ處スル、當ニ天下ヲ掃除スベシ、安ンゾ一室ヲ事トセンヤト」詳しくは、後漢書陳蕃傳を見よ(丈夫)を參看せよ、

【大丈夫ハ當ニ雄飛スベシ】 (雄飛)を見よ、

【大氐】 氐は抵に同じ、大凡と同義、漢書食貨志に見ゆ、

【台鼎】 三公に喩へていふ、天に三台星あり、鼎に三足あり、三公は人臣の最高位にして國家の要職なり、故に象を三台星と、鼎の三足とに取りて——といふ、後漢書に「位登——」

【大篆】 說文に「——ハ、周ノ宣王ノ時、史籀ノ作ル所ロナリ(科斗の文を變じて大篆となす)小篆ハ、始皇ノ時、李斯ガ作ル所ロナリ」小篆は大篆の文を省きて作る、新井白石の同文通考に詳說あり、

【泰斗】 人を仰ぎ尊ぶ義(泰山北斗)を見よ、

【大東】 東の「ハテ」詩經の閟宮の「遂荒——」の註に「——ハ極東ナリ」

【大統】 天子の繼嗣をいふ、後漢書に「皇后之子、宜承——」

【大同】 混同して細分せざるをいふ、莊子の天地篇に「不同同之、之謂大」の註に「萬物萬形、各〻其ノ分ニ止マリ、彼ヲ引キテ、以テ我ニ同ジクセズ、乃チ大ヲ成スノミ」また地名、山西省大同府に在り、秦に雲中といひ、漢に平城といふ、

【大同小異】 大體同じくしてすこしく異るをいふ、莊子に「萬事畢ク同ジク畢ク異リ、此レ之ヲ——イフ」

【戴東原】 (戴震)を見よ、

【大德】 高僧を稱す、ダイトコ」と訓む、僧輝記に「行滿チ德高キヲ——トイフ」

【戴德】 漢人、字は延君、兄の子戴聖字は次君と、同じく禮を后蒼に受く、德禮說を輯めて八十五篇となす、大戴禮といふ、聖の輯むるところ四十九篇、之を小戴禮といふ、今の禮記これなり、漢書儒林傳を參看せよ、

【大德ハ小怨ヲ滅ス】 (大德滅レ小怨)大なる恩德は小なる怨恨を滅するをいふ、左傳定五年に見ゆ、

【大內】 天子の府藏をいふ、史記景帝紀に「以——爲二千石置左右內官屬——」註に「——ハ京師ノ府藏ナリ」

【大ナル者ハ棟樑トナシ、小ナル者ハ榱桷トナス】 宋史に「宋太宗、嘗謂樞密使張宏曰、朕自御極以來、親擇羣材、大者爲棟樑、小者爲榱桷」官吏を擇ぶに、才能の大小によりて相應の職に任ずるに喩ふ、榱桷は共に「タルキ」なり

【題ニ雕リ齒ヲ黑クス】 (雕題黑齒)題は額なり、額に雕り刻み、丹青を以て之に涅す、黑齒は齒を黑く染む皆蠻夷の習俗なり、楚辭に「——、——、——、得人肉而祀」

【大日如來】 佛經に如來法身に名づく、即ち日輪なり、梵語に毘盧遮耶といふ、最高また顯廣と譯す

【耐忍】 耐へ忍ぶ義、荀子の仲尼篇に「能——之」

【大人】 轉輪王を稱す、轉じて廣く佛菩薩また大有力人の稱とす 長阿含經に「初民主王號——」また佛祖統記に「如來之先、起自——」(大人)を參看せよ、

【大寧】 地をいふ(大清)を見よ、

【大旆】 大いなる「ハタ」日月と、のぼり龍と、さがり龍とをゑがく、太常に同じ、儀禮に「天子乘龍載——」

【鮐背】 年老いたる人を稱す、人老年に至れば鮐といふ魚のやうな「シミ」が背に生ずるによりていふ、釋名の釋長幼に「九十曰——、背有鮐文也」鮐は「サメ」の類、鮐一に台に作る、同じ、詩經の閟宮に「黃髮台背」

【大梅常和尙】 五燈會元三卷に「明州大梅山法常禪師者、襄陽人也、姓鄭氏幼歲從師於荊州玉泉寺、初參大寂問如何是佛、寂曰、即心是佛、即大悟遂之四明梅子眞舊隱縛茆燕處、剛被世人知住處、又移茅舍入深居云云」

【大方】 猶ほ大道といふ如し、また世の中の賢き人をいふ、莊子に「吾長見笑於——之家」

【大寶】 天子の位をいふ、易の繫辭に「聖人之——曰位」

【體貌】 禮容を加へて敬ふをいふ、戰國策に「今人——而迎之」また漢書賈誼傳に「——大臣而厲其節」

【太白】 罰杯なり(白ヲ)を見よ、また星の名、明星をいふ、あしたに東方にあらはるるを啓明といひ、日くれて西方にあらはるるを——といふ、徐九皐の句に「軍

占——星」天官星占に「——ハ金ノ精ニシテ白帝ノ子、大將ノ象ナリ」

【戴白】 老人の頭髮の白きをいふ、轉じて老人の義とす、垂髫と連用す、垂髫は小兒をいふ、漢書に「——之老、不見兵革」

【太白月ヲ捉フ】 五侯鯖錄に「李白過采石、酒狂入水捉月而死」

【題跋】 文體明辨に「按ズルニ、題跋ハ、簡編ノ後語ナリ、凡ソ經傳子史詩文圖書ノ類、前ニ序引アリ、後ニ後引アリ、盡セリト謂フベシ、其ノ後覽ル者、或ハ人ノ請求ニ因リ、或ハ感ニ因リテ、而シテ得ルアレバ、則チ復タ詞ヲ撰ビテ、以テ末簡ニ綴ル、而シテ總ベテ之ヲ題跋トイフ、其ノ實ヲ綜ルニ至リテハ、則チ四有リ、一ニ曰ク題、二ニ曰ク跋、三ニ曰ク、書某、四ニ曰ク、讀某、夫レ題ハ諦ナリ、其ノ義ヲ審諦スルナリ、跋ハ本ナリ、文ニ因リテ而シテ本ヲ見ハスナリ、書ハ其ノ語ヲ書ス、讀ハ讀ムニ因ルナリ、題・讀ハ、唐ニ始マリ、跋・書ハ宋ニ起ル 今之ヲ特ニ題跋トイフハ、類ヲ擧ゲテ以テ之ヲ該ヌルナリ、其ノ詞ハ、古ヲ考ヘ今ヲ證シ、疑ヲ釋キ、謬ヲ訂シテ、善ヲ褒シ、惡ヲ貶シ、法ヲ立テテ誡ヲ垂ル、各〻爲メニスル所ロアリテ、而シテ專ラ簡勁ヲ以テ主ト爲ス 故ニ序引ト同ジカラズ、又題辭アリ、其ノ書ノ本末ヲ題號スル所以ニシテ、指義文辭ノ表ナリ、漢ノ趙岐ガ、孟子ノ題辭ヲ作ルガ若キ、其ノ文稍煩ハシ、而シテ宋ノ朱子之ニ倣ヒテ、小學題辭ヲ作リテ更ニ韻語ヲナス、是レ題跋ノ一種トス、然レドモ題跋ハ後ニ書シテ、題辭ハ前ニ冠ス、コレ又其ノ辨ナリ」

【大凡】 大概の義「オホヨソ」荀子に「禮之——、事生飾也、送死飾哀也、軍旅飾威也」また韓愈送孟東野序に「——物不得其平則鳴」

【大半】 半分より大いに過ぎたる義、史記項羽紀の註に「凡ソ數、三分シテ二ヲ有スルヲ——ト爲ス」

【大般若】 六百卷、玄奘三藏の翻譯なり、般若は梵語知慧と譯す、

【大美】 大いなる美なり、莊子の知北遊に「天地有——而不言」

【退筆】 「フルフデ」「チビフデ」東坡の詩に「——如山未足珍、讀書萬卷始通神」廢筆に同じ、徐氏筆精に「隋ノ智永禪師、筆頭ヲ取リテ之ヲ瘞メ、——塚ト號ス」

【太父】 祖父なり、漢書鄭當時傳に「鄭當時知友、皆——行、天下有名之士也」行とは年輩なり、當時、才德あり、故に祖父と同年輩の人と友たりしなり、また張良傳にも「——開地」とあり、註に「——ハ、祖父ナリ」

【大夫】 卿の次なり、家老をいふ、白虎通に「——之爲言、大扶進、人者也」また松の異名(五大夫)を見よ、

【大布】 粗き布なり、莊子の山木に「莊子衣——」

【太傅】 官の名、三公の一、書經に「立太師——太保」傳は輔佐の義、天子の德義を傳相するなり、

【大風】 「カッタイ」惡疾なり、柳宗元の捕蛇者說に見ゆ、素問に「病大風、骨節重、鬚眉落、名曰大風」

【颱風】 南洋より襲來する暴風、馬琴の弓張月に、程順則の指南講義の文を譯して「大風烈しきを颶といふ、又甚しきを颱と稱ふ、颶は常に驟に起り、颱は漸ありて來る、(中略)正二三四月は颶多く、五六七八月は颱多し」とあり、

【大風ノ歌】 漢の高祖十二年に、帝黥布を破りて、還り沛に過り置酒し、宗室故人を召して飲す、酒酣にして帝自ら歌ひて曰く「大風起兮雲飛揚、威加海內兮歸故鄉、安得猛士兮守四方」と、沛中の子弟をして之を習ひ歌はしむ、風は帝自ら喩へ、雲は亂に喩ふ

【鮐文】 「サメ」の如き「シミ」をいふ(鮐背)を參看せよ、

【太平御覽】 一千卷、宋の太平興國二年、李昉等勅を奉じて撰し同八年に成る、凡そ五十五門、採る所ろの書、一千六百九十種、萬羅浩博、今に至りて考據の淵藪と爲す、山槐記の治承三年十二月二十日の條に、この書の事見えたれば、當時わが國に舶來せしを知るべし、

【太平象ナシ】 太平の世とて、別にこれといふ形象なきをいふ、唐の文宗帝勵精治を求め、中外翕然、太平冀ふべしとなす、然れども宦官の爲めに制せられて竟に爲すこと能はず、嘗て宰相に問ふ、何時か太平ならむと、蓋し宰相の尸位素餐にして治を佐け化を興す心なきを責めたるなり、時に牛僧孺答ふるに「太平無象、今雖未及至治、亦足爲治矣」といへり、その意は當時を誣いて太平と爲さんと欲し、今日が卽ち太平にしてこの外に、別に太平の形象として名づくべきものはなしとなり、唐書牛僧孺傳を見よ、

【太平ノ功ハ一人ノ力ニアラズ】 (大廈ノ材)を見よ、

【太平ノ人、德ヲ樂ミテ刑ヲ惡ム】 唐書の陳子昂傳に「太平之人、樂德而惡刑、刑之所加、人必慘怛、故聖人貴措刑也」子昂八科を奏す、刑を措くはその一、

【大廟ニ入リテ事毎ニ問フ】 論語八佾「子入大廟、毎事問、或曰、孰謂鄹人之子知禮乎、入大廟、毎事問、子聞之曰、是禮也」大廟は周公の廟、蓋し孔子出仕の初、入りて祭を助けしならん、鄹は魯の邑、孔子の父叔梁紇

嘗てその邑の大夫たり、孔子禮を知るを以て聞ゆ、故に或人此に因つて之を譏る、孔子の是禮也といひしは、警謹の至、乃ち禮たる所以なり

【大廟ノ犧】 「リッパ」に飾られてもやがて殺さるるものなり、されば莊子の郭注にも「樂生者畏犧而辭聘」とあり、韓愈の詩に「孤豚服糞壤不慕——」と(犧ヲ畏レテ)を見よ、

【大辟】 大罪なり、辟は刑なり、死刑をいふ、書經に「——之罰、其屬二百」

【題壁】 壁上に詩文をかきつくること、南史に「題其贊于壁」

【大辯ハ訥ノ如シ】 老子に「大巧如拙、大辯若訥」とあり、莊子には「大道不稱、大辯不言」

【太母】 漢書文三王傳の註に師古曰く「——ハ祖母ナリ」

【太保】 古の三公の一、初學記に「武王殷ニ克チ、周官ヲ作リ、太師太傅——ヲ立テテ三公ト爲ス」——は天子の德義を保安する義、

【逮捕】 其の人在りて直ちに之を追ひ取るを逮といひ、其の人亡げて之をたづね捕ふるを捕といふ、漢書王莽傳に「召會吏民、——證左」

【大鵬ノ九霄ノ雲ニ搏ツ】 太平記卷三十七に見ゆ、莊子の逍遙遊に「北冥有魚、其名爲鯤、鯤之大、不知其幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背、不知其幾千里也、怒而飛、其翼若垂天之雲(中略)搏扶搖羊角而上者九萬里、絕雲氣、負青天」云云」九霄とは九天といふに同じ、大空をいふ、

【太僕寺】 唐の代、廐牧輪輿の政を掌る役所の名、寺とは政を執る省廳の義、唐書に「——卿一人、少卿二人」

【大梵天】 色界天の初禪天を三層に分つ、上なるを——といひ、中なるを梵輔天といひ、下なるを梵衆天といふ、——は君主、梵輔天は臣佐、梵衆天は人民なり(梵天)を參看せよ、

【璃瑁】 瑁音「バイ」「マイ」は吳音、龜の屬、熱帶の海に產す、形「ウミガメ」に似て首は鸚鵡の如く、背尖り前肢長く後肢短し、甲十三片、鱗次してつらなり甲の邊は缺けて鋸齒の如し、色黃褐にして黑き斑文あり、煮て柔皮の如くし、櫛笄の屬を製す、俗に鼈甲といふ、異物志に「雄曰——、雌曰背螭」史記司馬相如傳の「——鼈黿」の註に「背螭ニ似テ甲ニ文アリ、南海ニ出ヅ、以テ器物ヲ飾ルベシ」と、玳は璃の俗字、續漢書に「皇后太后ノ簪ハ玳瑁ヲ以テス、長サ一尺、端ニ花勝ヲ爲ル左右各一、橫ニ之ヲ簪ス」

【大味ハ必ズ淡】 濃厚の味は、一時口に適するも、飽き易し、是れ至味と爲すべからず、至味は必ず淡泊なるものに存ず、揚雄の解難に「——、大音必希」

【大明一統志】 九十卷、明の李賢等勅を奉じて選す、卷首に英宗の御序、賢等の序、進書表、地圖あり、すべて京師・南京・中都・典都の四大門に分ち、都毎に先づその地理を叙し、次にその都に屬する府に就きて建置沿革風土人物等を詳叙す この書支那にては亡佚したりしが、我が國には足利氏の末傳來せしものありて、元祿年閒に紀藩の儒官蔭山元質これを翻刻す、

【大明律】 三十卷、明の刑部尙書劉惟謙敕を奉じて撰す、體例は唐律に擬して明の律令を記せり、荻生徂徠の明律國字解十六卷あり、

【大明】 日の異名、禮記に「——生於東」また明朝敬語、

【大名ノ下、以テ久シク居リ難シ】 史記の越世家に「范蠡、越王勾踐ニ事ヘ、既ニ身ヲ苦メ力ヲ戮セ、勾踐ト深謀スルコト二十餘年、竟ニ吳ヲ滅シ、會稽ノ恥ヲ報イ、北、兵ヲ淮ニ渡シ、以テ齊晉ニ臨ミ、中國ニ號令シ、以テ周室ヲ尊ビ、勾踐以テ霸タリ、而シテ范蠡上將軍ト稱ス、范蠡以爲ラク大名之下、難以久居ト(中略)乃チソノ輕寶珠玉ヲ裝ヒ、舟ニ乘リ海ニ浮ビテ行リ、終ニ反ラズ云云」大名とは大なる名譽なり、

【太陽】 日をいふ、張衡靈憲序に「日者——之精、積而成烏象」また晉書王導傳に「——下同萬物蒼生何由仰照」

【大勇】 大なる勇氣、血氣の勇に對して義理より出づる勇をいふ、孟子に「子好勇乎、吾嘗聞——於夫子矣」(大智ハ)を參看せよ、

【大庾嶺】 江西省南安府城の南に在り、漢武帝南粵を擊つとき、楊僕、部將庾勝を遣し、兵を此に屯せしむ、因りて大庾と名づく、その初險峻にして行く者之を苦む、張九齡開鑿してより始めて車馬すべし、その上多く梅を植う、又梅嶺と名づく、或は傳ふ、梅福嘗て此に隱ると、錦字箋に見ゆ、東坡いふ「嶺上梅花、南枝已落、北枝始開」

【體用】 陳淳の性理字義に「心、體アリ用アリ、衆理ヲ具スル者ハソノ體、感ジテ遂通スル者ハソノ用、寂然不動ノ者ハソノ體、萬事ニ應ズル者ハソノ用、體ハ即チ所謂性、ソノ靜ヲ以テ言フナリ、用ハ即チ所謂情、ソノ動ヲ以テ言フナリ」

【逮夜】 逮は及なり、一に宿忌といふ、亡人忌日の前夜なり、

【大老】 常人にすぐれたる老者をいふ、孟子に「二老者天下之——也」

【太牢ノ滋味】 牛羊豕を合せ具ふるをいふ、小牢は羊豕なり、滋味は「ウマミ」なり、禮記に「君子太牢而祭、謂之禮」文選の王褒の聖主得賢臣頌に「羹藜含糗者、不足與論太牢之滋味」の註に「藜ハ野菜、含ハ食フナリ、糗ハ麥飯ナリ、太牢ハ牛ナリ」とあり(牛ノミヲ太牢トイヒ、羊ノミヲ小牢トイフハ後世ノ謬リナルコト野客叢書ニ辨ゼリ)

【大理】 檢非違使別當の唐名に用ふ、初學記に「——ハ古官ナリ、唐虞皋陶ヲ以テ士(理官)トス、初メ秦、廷尉ヲ置キ、漢之ニ因ル、景帝改メテ——ト曰フ」

【大略】 大凡に同じ、孟子に「此其——也」

【台嶺】 台嶽・北嶺ともいふ、支那の天台山の異稱、轉じて我が比叡山の稱とす、

【頽齡】 老年をいふ、陶潛の詩に「酒能祛百慮、菊解頽齡——」

【帶厲ノ誓】 かたき誓をいふ、漢書功臣表に「封爵之誓、曰使黄河如帶、泰山若厲、國以永存」帶は衣帶なり、厲は砥石なり、たとひ黄河をして衣帶の如く、泰山をして砥石の如くならしむることありとも、長く國を存ぜしめんとの意、

【大論】 高大なる議論なり、申鑒に「不聞——則志不弘、不聽至言則心不固」

【大王豳ヲ去ル】 太平記卷二に見ゆ、大王は古公亶父の尊稱なり、古公德義あり、人皆之を戴く、戎狄之を侵す、民怒りて戰はんとす、古公は人の父子を殺して君たるに忍びずと、遂に豳を去りて岐山の下に移る、豳人老を扶け弱を攜へ、古公に從ひ移住す、後子孫繁昌して周の世となる、孟子に「昔者大王居豳、狄人侵之、去之岐山之下居焉」とあるは是れなり、

【陶猗】 陶朱・猗頓とて支那古代の富豪の名、抱朴子に「夫結綠・懸黎非——不能市也」

【唐寅】 明の人、字は白虎、一の字は子畏、六如と號す、吳縣の人寧王宸濠幣を厚くして之を聘す、寅その異志あるを察し、酒を使ひてその醜穢を露す、宸濠堪ふる能はず、放還す、晩に佛氏を好む、室を桃花塢に築き日にその中に飲む、嘉靖癸未卒す、年五十四、詩文を能くし、又畫に工なり、黄奐言提錄に「唐子畏ノ畫ハ周臣ヲ師トス、而ルニ雅俗迥カニ別ナリ、或ヒト問フ、臣ノ畫ハ何ヲ以テ俗ナルカト、曰ク祇唐生數千卷ノ書ヲ少クノミト」寅は胸に數千卷の書あり、故に畫品も高雅なれども臣はこの讀書を少けり、故にその畫俗を免れずとの意、著すところ六如居士全集あり、

【道引】 道は導なり、氣を導きて體に引き、和柔ならしむる義、莊子に「——之士、養形之人」素問に「其治宜——」道一に導に作る、

【倒景】 人天上に在りて、下に向つて日月を視れば、影倒まに射るをいふ、司馬相如の賦に「貫——之列缺」蘇軾韓文公廟碑に「滅沒——不可望」藻林には「日月下ニ在リ、反ツテ上ヨリ照スヲイフ」また夕日の地平より下に在りて、カゲの倒まなるをいふ、溫庭筠の句に「人過橋邊——來」

【桃夭】 嫁期にあたるをいふ、詩經の桃夭篇に「桃之夭夭灼灼其華、之子于歸宜其室家」の註に「夭夭ハ少好ノ貌、灼灼ハ華ノ盛ナルナリ、木少ケレバ華盛ンナリ、之子ハ嫁スル者ヲ指シテイフ、婦人嫁ヲ謂ツテ歸トイフ、周禮ニ仲春ニ令シテ男女ヲ會スト、然ラバ則チ桃ノ華有ル、正ニ婚姻ノ時ナリ」

【桃園】 「モモゾノ」また蜀の劉備がその臣關羽張飛と三人義を結びしところ、

【陶淵明】 宋に在つては名を潛といふ、字は元亮、晉の潯陽の人侃の曾孫少くして高尚を好み、博學にして文を善くす、嘗て五柳先生の傳を作り、自ら況ふ、世に靖節先生と號す、性菊を愛し、採菊東籬下、悠然見南山の句あり、宋、禪を受くるに及び、劉裕屢徵せども就かず、詩酒を樂みて元嘉四年卒す、年六十三、

歸田園居　陶潛

少無適俗韻、性本愛丘山、誤落塵網中、一去三十年、羈鳥戀舊林、池魚思故淵、開荒南野際、守拙歸園田、方宅十餘畝、草屋八九間、榆柳蔭後園、桃李羅堂前、曖曖遠人村、依依墟里煙、狗吠深巷中、鷄鳴桑樹巔、戶庭無塵雜、虛室有餘閒、久在樊籠裏、復得返自然、

【陶淵明集】 八卷、四言詩一卷・五言詩三卷・記辭一卷・傳述一卷・賦一卷・疏祭文一卷、その詩、淵深樸茂、詩品、人品と並に高し、唐の王維・孟浩然・韋應物・柳宗元の一派の源をなせり、

【陶泓】 硯の異名、韓愈の毛穎傳に「絳人陳玄、弘農ノ——、及ビ會稽ノ楮先生ト友トシ善シ、其ノ出處相推致ス」と、陳玄は墨、楮先生は紙、

【刀ヲ鼓ス】 (鼓刀)屠者の爲す所ろをいふ、史記刺客傳に「聶政乃市井之人、——以屠」また淮南子に「呂望——而入周」

【陶家】「ヤキモノシ」陶人・燒窰家・窰戸に同じ、書敍指南に「燒窰家ヲ——トイフ」

【道家】黄帝老子の說ける虛無恬淡を主とする學派を稱す、漢書の藝文志を見よ、

【唐庚】字は子西、眉山と號す、宋の丹陵の人善く文を屬す、進士に擧げられ、承議郎となり卒す、年五十一、文をつくるに精密、學者之を稱す、唐眉山集二十四卷あり、兄の伯虎易春秋を治め、皆家法あり、

【倒行逆施】道理を倒逆して施行するの義、一に顚倒疾行して理にさかひ、事を施すをいふと、史記伍子胥傳に「吾日暮途遠、吾故——而——之」また主父偃傳には「吾日暮途遠、故倒行暴施之」に作る、義同じ、

【道學】程朱の學を斥す、道學の稱は程子に始まり、朱子に至りて、盛なり、大學の序に「子思子憂道學之失其傳」とあり、宋史には道學傳と儒林傳とを別に立てたり、

【堂下ノ陰ヲ審ニシテ日月ノ行クヲ知ル】一小部分を察して大部分の理を推知するに喩ふ、呂氏春秋に「審堂下之陰、而知日月之行、見瓶水之冰、而知天下之寒」

【陶侃】字は士衡、晉の鄱陽の人、家を潯陽に徙す、縱陽武岡の令を歷て能名あり、後ち功を以て東鄉侯に封ぜられ、江夏太守に遷る、元帝の時廣州刺史となる、州に在りて朝に百甓を齋外に運び、暮に百甓を齋內に運ぶ、曰く吾方に力を中原に致さんとす、故に勞を習ふのみと、後ち王敦・蘇峻を平げ皆功あり、太尉に拜し、長沙公に封ぜらる、二子瞻興俱に節に死す、晉書に「陶侃恭ニシテ禮ニ近ヅキ、人倫ヲ愛好ス、職事ノ暇、終日膝ヲ斂メテ危坐ス、嘗テ子弟ヲ戒メテ曰ク、老莊ハ浮華、先王ノ法言ニ非ズ、行フ可カラザルナリ、君子ハ、當ニ其ノ衣冠ヲ正シクシ、其ノ威儀ヲ攝ムベシ、何ゾ亂頭箕踞シテ以テ宏達ト爲スコト有ランヤト」

【唐鑑】二十四卷、宋の范祖禹撰す、唐の高祖より昭宣に及ぶまでの史事の大綱を採りて繫くるに論斷を以てせり、初め十二卷なりしが呂祖謙分ちて二十四卷となし、之が音註を作れり 和版あり、

また人名、字は鏡海、清の湖南善化の人、嘉慶十四年の進士、官太常卿に至る、宋儒の學に精し、咸豐七年卒す、著すところ國朝學案小識十四卷あり、

【陶侃ノ母】晉書に「陶侃家甚ダ貧ナリ、母湛氏、每ニ紡績シテ之ニ給ス、侃ヲシテ交ヲ己ニ勝レル者ニ結バシム、鄱陽ノ孝廉范逵來リテ侃カ家ニ寓ス、適〻大ニ

雪フル、湛氏自ラ臥ス所ロノ新薦ヲ撤シ、剉シテ以テ其ノ馬ニ給シ、又其ノ髮ヲ截チ隣人ニ賣リ、肴饌ヲ買ヒテ以テ供ス、逵聞キテ歎ジテ曰ク、此ノ母ニ非ズンバ此ノ兒ヲ生ムコト能ハズト、侃遂ニ功名ヲ以テ高ク顯ハル」

【陶鈞】鈞は陶人の用ふる模型の下に備へて圓轉する輪器なり、「ロクロ」これによりて能く大小の器を製す、よりて天下を治むるに喩ふ、鄱陽書に「聖王制世御俗、獨化於——之上、而不牽乎卑辭之語、不奪乎衆多之口」運鈞・陶車・旋盤皆同じ、

【道殣相望ム】殣は「ユキダフレ」なり、————は、行路に死する者多きをいふ、左傳昭二年に「宮室滋侈、——」註に「餓死ヲ殣トナス」

【刀鋸】刑具なり、漢書刑法志の「中刑用——」の註に「刀ハ割刑ニ用ヒ、鋸ハ刖刑ニ用フ」と、國語に「今吾司寇之刀鋸日弊而斧鉞不行」とあり、小人の刑に用ふる刀鋸は、屢〻用ふる故に弊ぶれども、大臣の刑に用ふる斧鉞は用ひられざるをいふ、

【當局者】局は博局(スゴロクノバン)なり、局に當りて棊を下すをいふ、要路に當りて、事を行ふにたとふ、唐書の元澹傳に「當局者迷、傍觀者審」

【戇愚】正直にして才智鈍きなり「バカシャウヂキ」周禮に見ゆ、唐書韓愈傳に「愈至潮洲、以表哀謝曰、臣以狂妄——不識禮度、陳佛骨事、言涉不敬」

【憨愚】オロカ(憨愚)を見よ

【唐虞三代】唐は堯なり、堯初め唐侯と爲り、後ち天子と爲り、陶に都す、故に陶唐氏と號す、虞は舜なり、その先虞に國す、故に有虞氏と曰ふ、三代は夏殷周をいふ、

【韜晦】わが才德を包みかくしてあらはさざる義、南史に「霖霞——」

【唐會要】一百卷、宋の王溥撰す、唐代政事の綱要を輯む、この書竄入闕佚多かりしが、清の乾隆帝儒臣に命じて補訂せしめしより、體例略備はる、王溥別に五代會要三十卷の著あり、

【湯鑊ノ罪】「カマイリ」の罪なり、史記の范雎傳に「須賈頓首言死罪、曰、賈有湯鑊之罪、請自屏於胡貉之地」唯君死生之」鑊は、足なき大鼎なり、

【湯火避ケズ】尹文子に「越王句踐、吳ニ報ゼント謀リ、人ノ勇ヲ欲ス、路ニ怒蛙ニ逢ヒテ之ニ軾ス、數年ニ及ブ比、民長幼トナク、敵ニ臨ミテ雖湯火不避」

【桃花酒】圓機活法に「酒ニ桃花ヲ漬シテ之ヲ飲ム、能

ク百病ヲ除キ、顏色ヲ好クス」

【桃花水】 桃花の開く頃のあたたかき水をいふ、花一に華に作る、河防一覽に「二月三日桃花始開、氷泮雨積、川流猥集、波瀾盛漲、謂之——」と、宋史河渠志にも見ゆ、藤井竹外の花朝下澱江に「——暖送輕舟」

【桃花粉】 「べに」をいふ、雲麓漫鈔に「燕脂ハ紅藍汁ヲ以テ凝シテ之レヲ爲ル、宮人之ヲ塗リ、——ト號ス」燕は一に胭に作る、

【刀圭家】 醫者をいふ、刀圭は藥匙(クスリノサジ)にて分量をはかるをいふ、一刀圭とは、桐の子一粒ほどのことなり、本草綱目に「刀圭十分方寸匕之一也、淮南子梧桐子大也」庾信の詩に「量藥用刀圭」

【唐荆川】 (唐順之)を見よ、

【棠谿ノ劍】 名高き劍、棠谿は地名、劉勰新論に「棠谿之劍、天下之銛也、用之獲稻、曾不如鉤鎌之功也」銛は利なり、

【唐堯ノ宮ニ、土ノ階ヲ用ヒ、茅ノ軒ヲキラザリケル例ナリ】 十訓抄第一に見ゆ、堯は天子となり、陶に都し、陶唐氏と號す、故に唐堯といふ(茅茨剪ラズ)を見よ、

【桃源】 陶淵明の桃花源記に、

晉太元中、武陵人捕魚緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林、夾岸數百步、中無雜樹、芳華鮮美、落英繽紛、漁人甚異之、復前行欲窮其林、林盡水源、便得一山、山有小口、髣髴若有光、便捨船從口入、初極狹纔通人、復行數十步、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然、有良田美地桑竹之屬、阡陌交通、雞犬相聞、其中往來種作、男女衣著、悉如外人、黃髮垂髫、怡然自樂、見漁人乃大驚、問所從來、具答之、便邀還家、爲設酒、殺雞作食、村中咸來問訊、自云先世避秦亂、率妻子邑人來此絕境、不復出、遂與外人間隔、問今是何世、乃不知有漢、無論魏晉、此人爲具言、聞皆歎惋、餘人各復延至其家、皆出酒食、停數日辭去、既出得其船、便據向路、處處誌之、及郡下、詣太守、說、太守即遣人隨往、尋向所誌、遂迷不復得路、南陽劉子驥高尚士也、聞之欣然欲往、未果、尋病終、後遂無問津者、

湖南省常德府に武陵縣桃源縣あり、桃源山は縣南十里に在り、本集の註に「漁人姓ハ黃、名ハ道眞、太守ハ劉歆ナリ」一說この記は淵明假託の辭なりと、

【陶甄】 甄もまた陶なり、陶器をやきつくる義、轉じて人民を善に化し治むる義とす 晉書に「——萬民」(甄陶)を見よ、

【倒懸】 身體を、倒につるさるる如き、甚しき困苦をいふ、孟子に「今ノ時ニ當リ、萬乘ノ國、仁政ヲ行ハバ、民ノ之ヲ悅ブコト、猶ホ倒懸ヲ解クガゴトシ」とあり、潘岳の句に「纍卵之危、——之急」

【讜言】 孟子趙注に、尙書の益稷を引きて曰く「禹拜——」釋文に「——善言也」

【韜鈐家】 兵法家といふが如し、武臣をもいふ、韜は弓衣なり、鈐は揚子方言に「矛其柄謂之鈐」とあり、張說の詩に「禮樂逢明主、——用老臣」

【陶犬瓦雞】 「ヤク」に立たぬ喩、成語考に「空シク存ジテ用ナキハ、何ソ陶犬瓦雞ニ殊ナラン」とあり、また金樓子に「陶犬ハ、夜ヲ守ルノ警無ク、瓦雞ハ、晨ヲ司ルノ益無シ」

【唐彥謙】 字は茂業、鹿門先生と號す、唐の幷州晉陽の人、中和中、晉絳二州の刺史を歷、畫を善くし、流輩を拔く、才高く氣を負ひ屈降するところなし、博學多藝、文詞雄麗、尤も詩文に工なり、書を善くし亦音律博飮の技を善くす、集三卷あり、

【桃弧】 桃の木の弓、鬼は桃を畏る、故に棘矢をつがへて射る、左傳昭四年の傳に「——棘矢以除其災」注に「桃ハ凶ヲ逃ゲシムル所以ナリ」周禮戎右の注に「桃ハ鬼ノ畏ルル所ロナリ」

【倒語】 文章の法に倒語といふことあり、義理の違あるにあらず、ただ文勢によることなり、古文にこの法尤も多し、たとへば「巧言令色鮮矣仁」とかくは「仁鮮矣」とかきても同じことなり「賢哉回也」「久矣吾不復夢見周公」(述而)「何哉爾所謂達者」「若是乎賢者之無益於國也」(告子下)の類、みな上に辨ずると同じことわりなり、文勢の緩急を考ふべし、倒語の上の段には必、矣哉乎等の字あり、上の例を見るべし、

【堂構ヲ紹グ】 (紹堂構)父祖の德業をうけ繼ぐをいふ、王莽の誥に「考作室、厥子堂而構之」陳琳の言に「聞魏周榮虞仲翔各——能負析薪」

【陶弘景】 字は通明、秣陵の人、丹陽に居る、六歲の時、荻を以て筆と爲し、灰中に畫して書を學ぶ、長ずるに及び、書を讀むこと萬卷、畫品超邁筆法精眞なり、又琴棋を善くし、草隸に工なり、齊の高帝引きて諸王の侍讀となす、永明中冠を神武門に掛けて去り、句曲山に居り自ら華陽隱居と號す、梁の武帝早く之と遊ぶ、位に即きて之を徵すれども出でず、大事あれば咨詢せざるなし、時人之を山中の宰相といふ、大同丙辰年八十五、病なくして逝く、貞白先生と謚す(山中ノ宰相)

を見よ、

【樽机】 古の兇人なり、頑凶にして匹儔なきの貌、四凶の一なり、左傳文十八年に「顓頊氏有不才子、不可教誨、不知話言、告之則頑、舍之則囂、傲很明德、以亂天常、天下之民、謂之——」また楚の史書の名、孟子に「晉之乘、楚之——、魯之春秋一也」とあり、——は、惡木の名、よりて凶人の號とす、史に名つけたるは、惡を記し戒を垂るるの義に取ると、朱熹は、——を以て惡獸の名とす、神異經に、「——狀似虎、毫長二尺、人面虎足豬牙尾長丈八尺」

【唐語林】 八卷、宋の王讜撰す、唐代の小說を取り、世說の體例にならひて彙輯す、記錄するところ正史と相發明するもの多し、この書原本久しく佚す、現行の本は清初武英殿に藏せし殘本、一卷ヨリ四卷マデ)に增補せしものなり、

【唐才子傳】 十卷、元の辛文房(字ハ良史、西域ノ人)撰す、この書收むるところ三百九十七人、その新舊唐書に見ゆる者僅に百人その他は皆傳記隨筆等より採錄せり、この書支那には一部分闕佚せしが幸に我が國に完本傳りて林述齊が佚存叢書に之を收めたるよりその後支那にても翻刻するを得たり、

【唐肆】 唐は堂途なり、肆は市なり、莊子 田子方に「是求馬於——也」

【道士】 道人に同じ、大雩 良書經に「人行大道號曰——」こまた老莊の學を修むる者をも——といふ、

【導師】 釋氏要覽に「十住斷結經云、號——者、令衆生類示其正道、故華首經云、能爲人說无生死道、故名——云云」今は佛事の主僧をいふ、

【唐子西】 (唐庚)を見よ、

【唐詩正聲】 二十二卷、明の高棅(字ハ彥恢、長樂ノ人)撰す、棅嘗て唐詩品彙百卷の撰あり、されども卷帙浩瀚なるを以て、その中より聲律の純正なるものを抄して初學に便せしもの即ちこの書なり、明の郭濟の增定評註——十二卷あり、

【唐詩選】 七卷、明の李攀龍編と題すれども、僞書たること疑ひなし、されども明末より盛んに鄉塾の閒に行はれ、わが國にても服部元喬之を刊して童蒙の課本となせしより今に至るまで大に世に行はる、

【唐詩品彙】 九十卷、拾遺十卷、明の高棅撰す、卷首に、歷代名公叙論、凡例、引用諸書、總目、叙目、詩人爵里詳節あり(唐詩正聲)を參看せよ、

【陶人】 「ヤキモノシ」陶工、陶人、陶家に同じ、荀子 性惡篇に「——埏埴而爲器」の註に「——ハ瓦工ナリ」

【道心】 義理より發する心をいふ、書の大禹謨に「人心惟危、——惟微、惟精惟一、允執厥中」佛經にては菩提心をいふ、

【道人】 佛者又は道家の說を修めて得道したる人、智度論に「得道者名曰——、餘出家者、未得道者、亦名——」

【瞠若】 直視の貌、熟視緘默して呆然(アキレル)たる意、莊子田子方に「夫子奔逸絕塵、而回——乎其後」夫子は、孔子、回は顏回、

【陶者】 ハ缺盆ヲ用フ】 (屠者ハ)を見よ、

【陶鑄】 陶冶に同じ、物を造り成す義、莊子に「是其塵垢粃糠、將猶——堯舜者也」

【道術】 佛老又は仙人の術なり、後漢書の靈思何皇后紀の注に「道人トハ——ノ人ヲ謂フ」

【陶朱ノ富】 大金持をいふ、史記の越世家に「范蠡、陶ニ止リ、以爲ラク、陶ハ天下ノ中、四モニ通ジ、貨物ノ交易スル所ロナリト、產ヲ治メテ、千金ヲ致シ、自ラ稱シテ陶朱公ト爲ス」また貨殖傳に「范蠡陶ニ之キ、朱公ト爲リ、產ヲ治メ積居シ、三タビ千金ヲ致シ、子孫業ヲ修メテ之ヲ息シ、遂ニ巨萬ニ至ル、故ニ富ヲイフ者、皆陶朱公ヲ稱ス」(猗頓)を參看せよ、

【唐順之】 字は應德、荆川と號す、明の武進の人、嘉靖己丑の進士、翰林院編修を授けられ、累遷して淮陽巡撫、右僉都御史に至り、嘉靖三十九年卒す、年五十四、順之博學にして古今に通じ、經濟に練達し、世の名儒たり、士林その德行文章を高しとし、欽仰せざるなし、時に王愼中(遵巖)の文を作る、法を歐曾に取り尤も力を曾鞏に得たり、順之亦その說に從ひ益〻力を古文に肆にし卓然として一家を成すに至る、時に之を王唐と稱す、李王の徒力めて之を排せしも、竟に掩ふこと能はざりき、著す所ろ荆川文集、史纂左編右編文編雜編、左氏始末等あり、世に行はる

【島嶼】 「シマ」「コジマ」嶼は水中の小洲なり、文選 吳都賦に「——綿邈」

【唐書】 (新——)並に(舊——)を見よ、

【逃暑ノ飲】 暑を避くるための酒宴をいふ、唐明皇詩序に「廚人ハ、散熱ノ饌酒ヲ嘗メ、正ニ逃暑ノ飲ヲ行フ」と、また陸游の詩に「安用更爲——、虛堂三伏自蕭然」

【道邃和尙】 天台大師七世の法孫にして、荆溪尊者の上足なり、宋高僧傳二十九にその傳あり、和尙は天

台にて「クワシャウ」法相にて「ワジャウ」禪宗にて「ヲシャウ」と讀む、律宗にては和上と書く、

【倒生】 倒さまに生ずる義、草木の稱、淮南子原道訓に「——挫傷」の注に「草木ハ地ニ首シテ生ズ、故ニ——トイフ」

【當世ノ儒宗】 晉書に「賀循朝廷ノ凝滯皆之ニ諮フ、輙チ經禮ニ依リテ對フ、當世ノ儒宗トナス」と、漢書劉向傳に「董仲舒爲ニ世儒宗」

【啁噍】 啁哳と同義、小鳥の羣り鳴く聲、禮の三年問に「小者至ニ于燕雀ニ猶有ニ——之頃ニ焉」

【蕩析】 さすらひ別るる義、書の盤庚に「今我民用——離居、罔有ニ定極ニ」

【陶潛】 (陶淵明)を見よ、

【瞠然】 驚いて目を「ミハル」貌、管子に「——視」瞠若に同じ、

【盜泉ヲ飲マズ】 尸子に「孔子盜泉ヲ過ギ、渴スレドモ而カモ飲マズ」渴スレドモ)を見よ、

【道宣律師】 唐の丹徒の人、釋智首に從ひて律學を受け、四分律宗を立つ、乾封二年寂す、年七十二、佛祖統記第三十に「道宣京兆錢氏、母夢梵僧語之曰、仁者所懷梁僧祐律師也、處胎彌十二月而生、九歲徧覽群書、十二善習文墨、十五師日嚴頴公、十六誦法華、兩旬而徹、十七落髮云云」著すところ釋迦方誌あり

【唐宋八家文讀本】 三十六卷(韓愈文卷、柳宗元文三卷、歐陽修文五卷、蘇洵文三卷、蘇軾文七卷、蘇轍文二卷、曾鞏文二卷、王安石文二卷)清の沈德潛撰す、是より先、明の茅坤、唐宋八大家文を編す、清の儲同人その疎漏を病みて八大家類選を編す、德潛二氏の選本及び八家の全集に就き精選してこの書を成し初學の讀本となせり、每篇評點段落を施し、前人竝に自己の評語を加へ、文を學ぶ者の資とせし等、用意親切なれば、今に至るまで世に盛行せり、賴襄の增評唐宋八家文讀本善し、

【道俗】 道は出家(僧)、俗は在家、南史の梁紀に「設ニ四部ノ無遮大會——五萬餘人」緇素に同じ、

【淘汰】 洗濯する義、後漢書に「淘ニ汰學者之累惑ニ」とあり、沙汰と同じ、

【丁丁】 木を伐る聲の相應ずるなり、詩の小雅に「伐木——」また碁を打つ聲にもいふ、

【忉忉】 憂ふる貌、詩の甫田に「勞心——」

【滔滔】 流れて反らざるの意、また世の中一般なること、論語微子に「——者天下皆是也」また流るる貌、詩經の齊風に「汝水——」また行く貌、楚辭に「年——而日遠矣」また大水の貌、詩經の四月に「江漢——」また漢書叙傳の註に「——ハ亂ル貌」

【陶陶】 驅逐の貌、詩の鄭風に「清人在ニ軸、駟介——」(陶陶)を參看せよ、

【蕩蕩】 廣大の貌、論語に「——乎民無ニ能名ニ焉」また法度のやぶれたる貌、詩の大雅に「——上帝」また廣平の貌(漢書王莽傳ノ注)平易の貌(詩經ノ南山ノ註)寬大の貌(左傳襄二十九年ノ疏)等種種の義に用ふ、

【盪盪】 蕩蕩と通用す、爾雅釋訓の注に「——ハ法度壞ノ貌」また漢書郊祀志の注には「——ハ空曠ノ貌」とありて、何物もなく「ヒロヤカ」なる義に用ふ、すべて廣大なる貌とす、

【堂堂】 盛なる貌、史記滑稽傳に「以ニ楚國——之大、何求不ニ得」また論語子張に「——乎張也、難ニ與竝爲ニ仁ヲ矣」張は子張、これは容貌の盛なるを稱す、

【呶呶乎】 かまびすしき聲なり、多言の貌、集韻に「呶或ハ譊ニ作ル」と、韓愈の句に「呶呶以害ニ其生ヲ」

【陶唐氏】 帝王世紀に「帝堯——伊祁姓ナリ、母ヲ慶都トイフ、孕ムコト十四月ニシテ堯ヲ丹陵ニ生ム、名ヅケテ放勛トイフ」書傳に「堯初メ唐侯タリ、後チ天子トナリ陶ニ都ス、故ニ——ト號ス」堯は帝嚳の子なり、その仁天の如く、その知神の如く、之に就く日の如く、之を望む雲の如し、在位一百年、壽一百十七歲(輯覽ニ據ル)堯崩じて舜代りて位に即く、詳しくは史記を見よ、

【堂堂ノ陣】 (正正ノ旗)を見よ、

【忉怛】 憂愁の義、李陵の書に「祇令ニ人悲、增ニ——耳」

【啁哳】 鳥の聲、また鳥の繁く囀る聲、楚辭に「鵾雞——而悲鳴」啁噍に同じ、

【陶答子ノ妻】 劉氏人譜ニ「戰國ノ陶答子、大夫トナリ、陶ヲ治ムルコト三年、名譽興ラズシテ、家ノ富、三倍セリ、其ノ妻諫メテ曰ク、妾聞ク、南山ノ玄豹、霧雨七日ニシテ、而シテ食、啗ヲ下ダラズ、其ノ毛ヲ澤シテ、文章ヲ成サント欲スレバナリ、豕ハ食ヲ擇バス、故ニ肥エテ而シテ死スト、今夫子ハ、富ヲ貪リテ、後患ヲ顧ミザルカト」詳しくは列女傳を見よ、

【湯池】 (金城——)を見よ、

【道場】 僧の佛道を修する所、釋氏要覽に「閑宴修道之處、謂ニ之——、隋煬帝敕遍改ニ僧居名ニ——」一に蓮社ともいふ、轉じては武技を習ふ所の名とす、

【道聽塗說】 塗は途なり、道上にて聽き、直ちに道上にて說くは、輕薄なる人のすることなり、——は善

言を聞くと雖も、心に留めて己の有となさざるをいふ、論語陽貨に「——而——德之棄也」また漢書藝文志に「小說家者流蓋出於稗官街談巷說、————者之所造也」

【蕩滌】「サツパリ」と洗ひ清むる義、史記の樂書に「蕩滌邪穢、塩酌飽滿、以飾厥性」また漢書の律歷志に「所以作樂者、諧八音、——人之邪意、全其正性、移風易俗也」

【饕餮】左傳の文十八年に「縉雲氏ニ不才子アリ、飲食ヲ貪リ、貨賄ヲ冒ル、天下ノ人、以テ三凶ニ比シテ、之ヲ——トイフ」の註に「財ヲ貪ルヲ饕トイヒ、食ヲ貪ルヲ餮トイフ」一解に——は惡獸、以て凶人に比す、

【滔天ノ惡】滔は漫なり、天にはびこる程の大惡をいふ、一解に、滔は漫なり、天をあなどり畏れざるをいふと、漢書叙傳に「咨爾賊臣、簒漢滔天」

【當塗】塗は途なり、世に合ふの意、揚雄の解嘲に「——者、入青雲、失路者委溝渠」また要路に居て事を用ふる人をいふ、韓非子に「當途之人」

【丁東】玉佩鐵馬の聲なり、康熙字典に「凡玉佩鐵馬聲、皆曰丁當、當東二音古通」とあり、唐の韓偓の詩に「坐久忽聞鈴索動、玉堂西畔響丁東」

【道德ノ符】道德を行ふの効をいふ、史記禁澤傳に「豈非道德之符而聖人所謂吉祥善事者與」

【唐突】「ダシヌケ」後漢書の桓帝紀の注に「——ハ卒遽ナリ」とあり、また類書纂要に「唐突ハ不遜ナリ、觸犯スルヲ唐突トイフ」とあり、書言故事に「觸犯好人曰唐突西施、晉周顗字伯仁、少有重名、庾亮嘗謂曰、諸君咸以君方樂廣、顗曰、何乃刻畫無鹽唐突西施、註に「咸ハ皆ナリ、方ハ比ナリ、言フココロハ、諸人皆君ヲ以テ樂廣ニ比ス、樂廣ノ賢者ナルガ如キナリ、刻畫ハ雕琢ナリ、無鹽ハ齊ノ醜婦、西施ハ越ノ美女、周顗自ラ謙シテ言フ、若シ我ヲ以テ樂廣ニ比セバ即チ無鹽ヲ雕刻シテ、西施ニ對スルガ如キナリト」

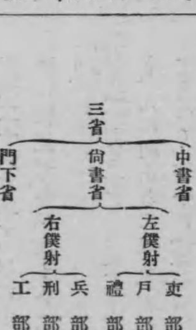
【堂ニ升リ室ニ入ル】（升堂入室）道に進む次第に喩ふ、論語先進に「由也升堂矣、未入於室也」由は仲由なり、其の學已に正大高明の域に至れるも未だ精微の奥に入らざるをいふ、

【堂ニ怡ブ燕雀ハ後災ヲ知ラス】（怡堂燕雀不知後災）苟安して後日の災を知らざるに喩ふ、孔叢子の陳士義篇に「秦ノ兵趙ヲ攻ム、魏ノ大夫以爲ラク、魏ニ於テ便ナリト、子順曰ク、然ラズ、秦ハ貪暴ノ國ナリ、趙ニ勝タバ必ズ復タ他ニ求メン、吾レ恐ル、時ニ於テ其

ノ師（いくさ）ヲ受ケンコトヲ、先人言アリ、燕雀屋ニ處リ、子母相哺シ、煦煦然トシテ其ノ相樂シムヤ、自ラ以テ安シト爲ス、竈突炎上シテ棟宇將ニ焚ケントス、燕雀顏變ゼズ禍ノ己ニ及ブヲ知ラズ、今子趙ノ破レテ、患將ニ己ニ及バントスルヲ悟ラズ、人ヲ以テシテ燕雀ニ同ジカルベケンヤト」

【唐ノ姚宋】（漢ノ丙魏）を見よ、

【唐ノ官制】中書・尚書・門下の三省に分つ、尚書省は、百官を總領し、端揆を儀刑する事を掌る、長官を令といひ、位二品に叙せらるるを例とす、中書省は、侍從獻替及び制勅、冊命の事を掌る、長官をまた令といひ、位正三品たり、門下省は、帝命を出納し、禮儀の事を掌る、長官を侍中といふ、位また正三品たり、尚書省の下に、吏部・戶部・禮部・兵部・刑部・工部の六部あり、吏部は官吏の選叙勳封考課の事を掌り、戶部は、戶口班田の事を掌り、禮部は禮儀・祀祭・燕饗・貢擧の事を掌り、兵部は軍衞及び武選の事を掌り、刑部は、律令刑法及び徒隸關禁の事を掌り、工部は、百工・屯田・山澤の事を掌る、以上の六官はいづれも其の長官を尚書と稱して、位は正三品たり、これを六部尚書といふ、八省の如きなり、尚書令の副に左右僕射あり、左僕射は、吏戶禮の三部を統べ、右僕射は兵刑工の三部を統ぶ、また尚書・中書・門下の三省の外にまた三省あり、祕書省・殿中省・內侍省といふ、合せてこれを六省といふ、祕書省は、經籍圖書の事を掌る、長官を監といひ、位從三品たり（我カ留學生タリシ阿部仲麿呂ハ、唐ニ仕ヘテコノ官ニ拜セラル）殿中省は、衣食車乘の事を掌る、長官を監といふ、位從三品たり、內侍省は宮中に供奉し、制令を宣傳することを掌る、長官を內侍といひ、位從四品たり、六省の外に一臺九寺五監等あれども、こゝには略す、左に三省六部を表示すれば、



【道傍ノ苦李】誰も取るものなし、以て人に棄てらるるに喩ふ、事類全書に、晉書の王戎傳を引きて「王戎年七歲、嘗テ諸ノ小兒ト遊ブ、道邊ノ李樹ニ子アリ、枝ヲ

折ラルルヲ睹ル、小兒競ヒ走リテ之ヲ取ルニ、惟ダ戎動カズ、人之ヲ問フ、答ヘテ曰ク、樹道邊ニ在リテ而シテ子多シ、此レ必ズ苦李(にがきすもも)ナラント、之ヲ取ルニ信ニ然リ」

【唐伯虎】(唐寅)を見よ、

【湯婆子】「ユタンポ」陔餘叢考に「今人銅錫器ヲ用ヒテ、湯ヲ盛リ、衾中ニ置キ、脚ヲ煖ム、之ヲ——トイフ、或ハ以テ竹夫人ニ對ス、按ズルニ、東坡楊君素ニ致ス札ニイフ、煖脚銅缶一枚ヲ送ル、每夜熱湯注滿シ、其ノ口ヲ塞ギ、仍ホ布單ヲ以テ之ヲ裹ム、以テ旦ニ達シ冷ナラザルベシ、又范石湖ニ脚婆ノ詩アレバ、則チ是レ幷ニ脚婆ノ稱アルナリ」

【刀瘢】「カタナキズ」唐の盧弼の詩に「朔風吹雪透——」

【唐彪】字は、翼修、清の金華の人、讀書作文譜十二卷を著す、

【刀筆ノ吏】小吏をいふ、史記の蕭相國世家に「太史公曰ク、蕭相國何、秦ノ時ニ於テ刀筆ノ吏トナリ、錄錄トシテ未ダ奇節アラズ」註に「按ズルニ、刀ハ書ヲ削ル所以、古ハ簡牘ヲ用フ、故ニ吏皆刀筆ヲ以テ隨フ」とあり、即チ筆を用て字を竹木の上に書き、刀を以て削り去りて、又書くなり、それよりただ字を書くのみの小吏をいふ、

【湯斌】字は孔伯、荆峴と號し、又潛菴と號す、清の河南睢州の人、順治九年の進士、累官して工部尚書に至り、康熙二十六年卒す、年六十一、文正と謚し、道光三年孔廟に從祀せらる、著すところ湯子遺書・洛學編等あり、

【刀布】刀も布も皆錢なり、刀はその形刀の如くに作り、人に利あるに取る、布はその廣く流布するに取りて名つく、管子に「珠玉爲上幣、黃金爲中幣、刀布爲下幣」史記平準書に「龜貝金錢——之幣興焉」

【桃符】荆楚歲時記に「正月一日ニ畫雞ヲ戶上ニ貼シ、葦索ヲ其ノ上ニ懸ケ、——ヲ其ノ旁ニ插ム百鬼之ヲ畏ル」

【湯武ノ放伐】湯は殷の成湯、武は周の武王をいふ、成湯は夏の桀王の虐政を見るに忍びず諸侯より起りて仁政を施し、民心を收め遂に桀を南巢に放ちて、帝位に即き、武王は殷の紂王の凶暴にして民を苦むるを惡み、伐ちてこれに代れり、

【唐文皇ノ神藻ヲ奮フ】太平記卷十七に見ゆ、太宗は御製聖敎序をあらはし、武后は華嚴經の序を製し、中宗も叡宗も代宗も何れも文筆を以て經論の極理を述べたまへるを廣く文皇とはいふ、神藻とはすぐれたる文藻の義なりと抄に說けり、

【唐文粹】一百卷、宋の姚鉉撰す、古賦・詩頌・贊・表奏書疏・文・論・議・古文・碑・銘・記・箴・誡・銘・書・序・傳・銘・紀事の十六類に分つ、選擇嚴精文粹の名に稱へり、

【湯餅】歸內錄に「——ハ唐人之ヲ不托トイフ 今世俗之ヲ餺飥トイフ」と、また靑箱雜記に「——ハ、溫麵ナリ、凡ソ麵ヲ以テ食ト爲シ、之ヲ煮ル、皆之ヲ——トイフ」「ウンドン」

【刀墨】黥刑(イレズミ)なり、刀を以てその額を刻み、之に墨を涅するをいふ、國語に「有蠻夷之國、有斧鉞刀墨之民」

【湯網】寬大の處置をいふ、史記の殷本紀に「湯出見野張網四面祝曰自天地四方皆入吾網湯曰嘻盡之矣、乃去其三面祝曰欲左左、欲右右、不用命、乃入吾網諸侯聞之曰湯德至矣及禽獸」とあるに本づく、成語考に「人ニ宥罪ヲ求ムルニ幸ニ——ヲ開ケトイフ」

【朶雲】人の書翰を稱していふ、事類全書に「唐韋陟常以五采牋爲書記使侍妾主之其牋答受意而已皆有楷法陟唯署名自謂所書陟字若五朶雲時人慕之號郇公五雲體」とあり、韋陟は郇國公に封ぜらる、故にいふ、

【湯沐ノ邑】朝宿の邑に同じ、諸侯京師に入る時、暫く此に留り、齋潔して往く、故にいふ、禮記に「方伯爲朝天子皆有——之——」戰國策に「効萬家之都以爲——之——」とあるは、萬家の都を獻じ、其の邑入を以て、湯沐の資に供するをいふ、また史記高祖紀に「朕自沛公以誅暴逆遂有天下其以沛爲朕——」とあるも、戰國策の義と同じ、漢舊儀に「皇后、太后ハ各三十縣ヲ食ム、——トイフ」

【湯沐具ハリテ、蟣蝨相弔ス】國政善く治まりて、小人相悲む意、淮南子說林に「湯沐具而蟣蝨相弔、大廈成而燕雀相賀」

【盜モ亦道アリ】(盜亦有道)莊子の胠篋篇に「跖ノ徒、跖ニ問ヒテ曰ク盜モ亦道アルカト、跖曰ク、何ニ適トシテ道アル無カランヤ、夫レ妄リニ室中ノ藏ヲ意フハ、聖ナリ、入ッテ先ンズルハ、勇ナリ、出ヅルニ後ルルハ、義ナリ、可否ヲ知ルハ、智ナリ、分ッコト均シキハ仁ナリ、五者備ハラズシテ、能ク大盜ヲナス者ハ、天下未ダ之レアラザルナリ」とあり、跖は古の大盜の名

なり、

【陶冶】 陶の器を造り「カヌチ」の金を鑄る如く、人才を育成するを云ふ、漢書の董仲舒傳に「臣聞ク、命ハ天ノ令ナリ、性ハ生ノ質ナリ、情ハ人ノ欲ナリ、或ハ天、或ハ壽、或ハ仁、或ハ鄙、陶冶シテ之ヲ成スモ、粹美ナル能ハズ」云云

【道腴】 腴は腹下の肥えてやはらかなる肉なり、轉じて美なること、豐なることに用ふ、班固の答賓戯に「味道之腴、身窮道則腴、年高氣彌壯」

【螳蜋蟬ヲウカガフ】 己をうかがふ者の後に在るを知らざるに喩ふ、莊子山木篇に「莊周遊乎雕陵之樊、觀一異鵲自南方來者、翼廣七尺、目大運寸、感周之顙、而集於栗林、莊周曰、此何鳥哉、翼殷不逝、目大不視、蹇蹇步、執彈而留之、覩一蟬方得美蔭而忘其身、螳蜋執翳而搏之、見得而忘其形、異鵲從而利之、見利而忘其眞、莊周怵然曰、噫物固相累、二類相召也、捐彈而反走」云云、說苑正諫篇にも「園ニ榆アリ、上ニ蟬アリ、蟬高居悲鳴シ、露ヲ飲ンデ螳螂ノ其ノ後ニ在ルヲ知ラズ、螳螂ノ蟬ヲ捕フル、而カモ黃雀ノソノ後ニ在ルヲ知ラズ、臣彈丸ヲ執ツテ黃雀ヲ取ラント欲シテ露ノ衣ヲ沾スヲ覺エズ」螳蜋は「カマキリ」

【螳螂ノ衞】 兵備の微弱なるに喩ふ、魏都賦に「弱卒鎖甲、無異螳螂之衞」陳琳書に「欲以螳螂之斧、禦隆車之隧」螂は蜋に同じ、

【螳螂臂ヲ怒ラシテ車轍ニ當ル】 己が分を知らずして、妄進するに喩ふ、莊子の天地篇に「猶螳螂之怒臂以當車轍、則必不勝任矣」とあり、淮南子の人閒訓にも、亦類語あり、文選に「欲以螳螂之斧禦隆車之隧」の註に「前ニ兩足アリ、之ヲ擧グレバ斧ヲ執ルノ象ノ如シ」駱賓王の文にも「振螳螂之力拒轍當車」韓愈の詩に「螳臂怒當轍」

【桃李】 試驗官取るところの門下生に喩ふ、唐の劉禹錫の詩に「一日聲名徧天下、滿城——屬春官」春官は禮部の官なり、下の(——門ニ)を參看せよ、

【桃李言ハザレドモ、下自ラ蹊ヲナス】 蹊とは「コミチ」なり、桃李は其の華實あるの故を以て、自ら街はざるも、人爭ひて歸趣し、來往すること絶えず、其の下自然に蹊をなす、以て德ある人は、默して潛み居るも、人自ら歸服するに喩ふ、史記の李廣傳に「太史公曰ク、傳ニ曰ク其ノ身正シケレバ、令セズシテ行ハル、其ノ身正シカラザレバ、令スト雖モ從ハズト、其レ李將軍ノ謂ナリ、余李將軍ヲ睹ルニ、悾悾トシテ鄙人ノ如シ、口道辭スル能ハズ、死スルノ日ニ及ンデ、天下知ルト知ラザルト、皆爲メニ哀ヲ盡ス、彼レ其ノ忠實ノ心、誠ニ士大夫ニ信ゼラレタレバナリ、諺ニ曰ク、桃李不言、下自成蹊ト、此ノ言小ト雖モ、以テ大ニ喩フベシ」

【唐六如】 (唐寅)を見よ、

【唐六典】 三十卷、唐の玄宗帝撰し、李林甫敕を奉じて註す、六典とは三師・三公・三省・九寺・五監・十二衞をいふ、この書唐代の官制を詳叙せり、享保九年の和版あり、

【唐律疏義】 三十卷、唐の長孫無忌等勅を奉じて撰す、名例・衞禁・職制・戶婚・廐庫・擅興・盜賊・鬪訟・詐僞・雜律・捕亡・斷獄の十二篇に分ち、每篇更に數十條に分ちて細說す、わが大寶令は主として之に擬して制定せりといふ、

【忉利天】 三十三天と譯す 欲界六天中の第二なり、帝釋の居るところ、その城を喜見といふ、

【桃林處士】 牛の異名、史記の周本紀に「武王已克殷、縱馬於華山之陽、放牛於桃林之虛、偃干戈、振兵釋旅、示天下不復用也」書經武成にも見ゆ、また事類全書に「寧因、大僚莊南山ノ下ニ假宿ス、月夜ニ關ヲ叩クア、桃林班特處士因訪ト稱ス、繼デ南山ノ班寅將軍來謁ス、因爲メニ置酒ス、明ニ及ンデ視レバ、門外唯ダ牛蹄虎跡ノミ」

【桃李門ニ在リ】 事文類聚前集卷の二十九に「唐武后、問狄仁傑、朕欲得一佳士用之、誰可者、仁傑曰、必欲卓犖奇才、則有荊州長史張柬之、其人雖老宰相才也、太后擢柬之爲洛州司馬、數日又問仁傑、曰、臣所薦者、可爲宰相、非司馬也、乃遷秋官侍郎、又曰云云、卒用爲相、又嘗薦夏官侍郎姚崇、監察御史亘彥範、太平州刺史敬暉數人、率爲名臣、或謂仁傑曰、天下桃李盡在公門、仁傑曰、薦賢爲國、非爲私也」

【韜略】 兵書をいふ、轉じて兵謀にも用ふ、崔日用の詩に「——又縱橫、六韜三略」を見よ、

【當路ノ人】 要路に當る重臣をいふ、孟子公孫丑上に「公孫丑問曰、夫子當路於齊、管仲晏子之功、可復許乎」の註に「當路トハ、要地ニ居ルナリ」當路者とも用ふ、許はなほ期の如し、

【討論】 討は尋究なり、論は講議なり、利害を論究する義、論語憲問に「世叔——之」

【道路目ヲ以テス】 公言することを憚り、互に怨恨の情を目にて通ずる義、國語に「國人莫敢言、道路以目」

目」

【絶エザルコト綫ノ如シ】（不絶如綫）微細にして殆ど絶えんとするの義、公羊傳に「中國不絶若綫」綫は綫に同じ、漢書袁盎傳に「劉氏不絶如帶」また廣陵王傳に「劉氏不絶如髮」とあるも、皆同義なり、

【絶エテ無クシテ僅ニアリ】（絶無而僅有）全くなくして、「タマ」にありしと、蘇軾の上神宗書に「改過不吝、從善如流、此堯舜禹湯之所勉強而力行、秦漢以來之所——————」

【鷹】 爾雅に「鷹ハ鴔鳩ナリ」月令に「仲春ニ鷹化シテ鳩ト爲リ、七月ニ鳩化シテ鷹トナル」格物論に「鷹ハ鷙鳥、金眼鈎嘴爪、劍翮、善ク攫搏ス」鶻は鷹の一種、クマタカ「ハヤブサ」

【鷹ヲ養フガ如シ】（如養鷹）飽くまで食はしむるときは、背き去る、以て奸人を御する術に譬ふ、綱鑑の漢獻帝紀に「陳登呂布ニ謂ツテ曰ク 登、曹公ニ見エテイフ、將軍ヲ養フハ、虎ヲ養フガ如シ、當ニ其ノ肉ニ飽カシムベシ、飽カザレバ即チ人ヲ噬マント、公曰ク、然ラズ、譬ヘバ鷹ヲ養フガ如シ、飢ウレバ則チ用ヲ爲シ飽ケバ則チ颺リ去ルト」また晉書慕容垂載記にも類語あり、

【高ニ登ルハ卑ヨリス】 事の進行には、次第あるをいふ、中庸に「君子之道辟如行遠必自邇辟如登高必自卑」とあり、辟は譬に同じ、書經の太甲篇にも「高キニ升ルニハ、必ズ下ヨリスルガ若ク、遐キニ陟ルニハ、必ズ邇ヨリスルガ若シ」

【寶ノ山ニ入リテ手ヲ空シクシテ歸ル】 正法念經に「閻羅王爲人說偈云、汝得人身不修道如入寶山空手歸云云」

【貨悖リテ入ル者ハ亦悖リテ出ヅ】（惡錢身ニツカズ）といふ義に同じ、大學に「言悖而出者亦悖而入、貨悖而入者亦悖而出」の註に「悖ハ逆ナリ、此レ言ノ出入ヲ以テ、貨ノ出入ヲ明カスナリ」

【蛇虺】（蛇虺）を見よ、

【打毬】 荆楚歲時記に「寒食——」の注に「蹴鞠ハ黄帝ノ造ル所ロ、兵勢ニ本ヅク、或ハ云フ、戰國ニ起ル、按ズルニ鞠ト毬ト同ジ、古人蹋蹴シテ以テ戲ト爲スナリ」

【薪ヲ抱キテ火ヲ救フ】（抱薪救火）害を除かんと欲して、却つて益々その害を長ぜしむるに喩ふ、史記の魏の世家に「魏氏ノ地盡キザレバ、則チ已ムコトヲ知ラズ、且ツ夫レ地ヲ以テ秦ニ事フルハ、譬ヘバ猶ホ薪ヲ抱イテ火ヲ救フガ如シ、薪盡キザレバ火滅エズ」また

文子にも「其ノ本ヲ治メズシテ、其ノ末ヲ救フハ、渠ヲ繫リテ水ヲ止メ、薪ヲ抱イテ火ヲ救フニ異ナルナシ」漢書董仲舒傳にも「以湯止沸、——」

【薪ヲ負ヒ行ヽ歌フ】（負薪行歌）前漢書に「朱買臣、薪ヲ賣リ以テ食ヲ給シ、行ヽ且ツ書ヲ誦ス 妻モ亦負戴シ、相隨フ、數ヽ買臣ヲ止メ歌フコト毋ラシム 買臣愈ヽ疾ク歌フ、妻之ヲ羞ヂ去ランコトヲ求ム、買臣曰ク、我レ年五十ナラバ、當ニ富貴ナルベシ、今已ニ四十ナリ、妻曰ク、公等ノ如キハ、終ニ當ニ溝壑ノ中ニ餓死スベシ、何ゾ富貴ナラント、後チ會稽ノ守ト爲ルニ及ビ、妻自ラ縊レテ死ス」

【多岐亡羊】（亡羊）を見よ、

【他鄉故知ニ遇フ】 遠き他國にて、故鄉の友に「フト」出あひたるは、最も喜ばしきことの一なり（久旱甘雨）を見よ、

【打魚】 「アミヲウツ」歸田錄に「網魚曰——」

【宅ヲ徙シテ其ノ妻ヲ忘ル】（徙宅而忘其妻）資治通鑑に、「唐太宗謂侍臣曰、吾聞西域賈胡得美珠、剖身以藏之、有諸、侍臣曰、有之、上曰、人皆知彼之愛珠而不知愛其身也、吏受賕抵法、與帝王狥奢欲而亡國者何以異於彼胡之可笑邪、魏徵曰、昔魯哀公、謂孔子曰人有好忘者、徙宅而忘其妻、孔子曰、又有甚者、桀紂乃忘其身、亦猶是也、上曰然、朕與公輩、宜戮力相輔庶免爲人所笑也」この事もと孔子家語に出づ、

【逞行】 遠行に同じ、史記霍去病傳に「——殊遠而糧不絶」

【卓詭】 卓は特立なり、詭は異なり、言行などの高遠にして衆に異るをいふ、後漢書劉輔傳に「其言必有——」

【琢玉】 玉をみがくをいふ、詩經に「他山之石可以爲錯」の傳に「錯石也、可以——」とあり、周禮天官太宰職の疏に「珠ニ切トイヒ、象ニ磋トイヒ、玉ニ琢トイフ」

【澤虞】 古、水澤を司る官の名、周禮に「有山虞——以掌山澤」とあり、虞は度なり、山澤の大小及びその生ずるところを度り知る義、文選の西京賦に「——是濫」また戴勝といふ鳥の一名、

【磔刑】 「クルマザキ」の刑、荀子正論篇の注に「磔ハ車裂ナリ」また「ヤッザキニスル」刑、史記李斯傳の索隱に「磔ハソノ肢體ヲ裂キテ之ヲ殺スヲイフ」轘磔車磔など皆同じ、わが國にては「ハリツケ」の刑に用ふ、

【槀吾】 「ツハブキ」顏師古の急就篇の注に「——ハ款冬（ふき）ニ似テ腹中ニ絲アリ、陸地ニ生ズ、花ハ黄色、

一名ハ獸須」とあり、本草の注には、款冬亦——ト名ッ

【託孤寄命】 遺孤を託し、國政を委ねるをいふ、論語泰伯篇に「可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節、而不可奪也、君子人歟、君子人也」朱子曰く「ソノ才以テ幼君ヲ輔ケ國政ヲ攝スベク、ソノ節死生ノ際ニ至リテ奪フベカラズ、君子ト謂フベシ、與ハ疑辭、也ハ決辭、問答ヲ設ケ爲スハ、深クソノ必然ヲ著ス所以ナリ」程子曰く「節操是ノ如キハ、君子ト謂ッベシ」

【托克托】 一に脱脱に作る、字は大用、蒙古の人、生れて岐嶷、元の順宗の時、叔父伯顔に代り右丞相となり悉く伯顔の舊政を改む、詔勅を奉じて宋、遼、金の三史を修す、後ち讒によりて斥けられ、至正十四年丞相哈麻のために鴆殺せらる、年四十二

【卓爾】 すぐれて秀でたる貌、論語子罕に「如有所立——」

【濯枝ノ雨】 周處の風土記に「六月大雨アルヲ、濯枝ノ雨ト名ヅク」

【跅弛ノ士】 跅は跅落にして檢局（シメククリ）なきなり、弛は放廢して禮法にしたがはざるなり、漢書武帝紀に「泛駕之馬、跅弛之士、亦在御之而已」

【濁酒一杯】 事文類聚前集卷の三十二に、絶交書を引きて「嵇康曰、但願守陋巷教子孫、時時與親舊叙契闊陳説平生、————、彈琴一曲、志願畢矣」

【掉舌】 掉一音「テウ」「フルヒウゴカス」——は辯舌を弄するをいふ（三寸ノ舌）を見よ

【卓然】 すぐれて秀でたる貌、卓爾に同じ、漢書成帝紀に「使——可觀」

【槖駝】 駝は馬の類、背の肉槖に似たり駱駝に同じ、また植木屋の別稱、柳宗元の種樹郭槖駝傳に「郭——、不知始何名、病僂隆然伏行、有類槖駝者、故鄉人號之駝、駝聞之曰、甚善名我、固當因捨其名、亦自謂槖駝云云」とあるに本づく（槖峯炙）を參看せよ、

【拓提】 寺をいふ、後人誤りて、拓を招につくる、唐の武宗——蘭若四十萬區を毀つ、また杜詩に「更宿——境、蘭若秋風晚」

【濯濯】 肥えて「ツヤ」ある貌、一解に娛み遊ぶなりと、詩經の大雅に「麀鹿——」また山に草木なき貌、孟子の告子に「是以若彼——也」またしなやかにして「ツヤ」ある貌、晉書に王恭の美容を稱して「——如春月柳」

【度地】 地を「ハカル」禮記王制に「——居民」

【宅兆】 「ハカバ」墳域・塋域に同じ、後漢書趙咨傳の注

に見ゆ、

【坼副】 ——二字皆裂くるなり、難産の義、詩の大雅に「先生如達不——」とあるに本づく、達は小羊なり、羊の子は生れ易くして留まり難むことなし、ここは姜嫄が、后稷を生むの易かりしをいふ、坼拆同じ、

【卓文君】 前漢書司馬相如傳に「卓文君ハ、蜀郡臨邛ノ富人卓王孫ノ女ナリ、新ニ寡シテ音ヲ好ム、司馬相如客ト其ノ家ニ至ル、酒酣ニシテ琴ヲ鼓シ、琴心ヲ以テ之ヲ挑ム、文君心ニ悅ンデ之ヲ好ミシ、夜亡ゲテ相如ニ奔ル、相如與ニ馳セテ成都ニ歸ル、家徒ニ四壁立ッノミ、王孫大ニ怒ル、後チ臨邛ニ之キ、盡ク車騎ヲ賣リテ酒舍ヲ買ヒ、文君ヲシテ壚ニ當ラシメ相如自ラ犢鼻褌ヲ著ケ庸保ト雜作シ、器ヲ市中ニ滌グ、王孫之ヲ恥ヂ文君ニ僮百人、錢百萬ヲ分與ス、成都ニ歸リ田宅ヲ買ヒ、富人ト爲ル、武帝子虛ノ賦ヲ讀ミテ之ヲ善トシ、相如ヲ召シテ郎ト爲シ、後チ拜シテ孝文園ノ令ト爲ス云云」

【拓本】 字をひろげて大きくしたるなり「イシズリ」楊升菴集に「愼、石鼓ノ文ノ——ヲ先師李文正公ニ得タ

【琢磨】 玉石を「トギミガク」轉じて學德を修養するに用ふ（切磋——）を見よ、

【槖籥】 「フイゴ」老子に「天地之間、其猶——乎」の口義に「籥ハ槖ノ管ナリ」と、翼に「——ハ冶鐵ノ用フルトコロ、風ヲ致スノ器ナリ、槖トハ外ノ櫝、籥ヲ受クル所以ナリ、籥トハ內ノ管槖ヲ鼓スル所以ナリ」と、槖は皮槖、風を入る、籥は囊口の管なり、韜・風箱皆同じ、

【拓落】 猶ほ蹭蹬といふが如し、不遇の義、官の達せざるをいふ「フシアハセ」揚雄の解嘲に「何爲官之——也」また廣大の貌、文選の魏都賦に見ゆ、

【卓犖】 超絶なり「モヌケテスグレル」卓は高なり、犖は力あるなり、一解に才辯あるなりと、晉書郗超傳に「——不羈、有曠世之度」また文選に「——觀群書」

【卓躒】 卓犖に同じ、孔融の文に「英才——」

【劉輪】 心に自得することあるも、言に發して人に傳ふること能はざるに喩ふ、莊子の天道篇に「齊ノ桓公書ヲ殿上ニ讀ミ輪扁輪ヲ堂下ニ剉レリ、椎鑿ヲ釋イテ上リ、桓公ニ問ヒテ曰ク、敢テ問フ公ノ讀ム所ロハ何ノ言トナスカト、公曰ク、聖人ノ言ナリ、曰ク聖人在ルカ、公曰ク已ニ死セリ、曰ク然ラバ則チ君ノ讀ム所ロノモノハ、古人ノ糟魄ノミ、桓公曰ク、寡人書ヲ讀ム、輪人安ンソ議スルコトヲ得ン、說アラバ則チ可ナ

リ、說ナケレバ則チ死サント、輪扁曰ク、臣ヤ、臣ノ事ヲ以テ之レヲ觀ルニ、輪ヲ斲ヅルコト、徐クスレバ甘クシテ固カラズ、疾スレバ苦シミテ入ラズ、徐ナラズ疾ナラズ、之ヲ手ニ得テ心ニ應ズ、口言フコト能ハザルモ、數ノ其ノ間ニ存スルアリ、臣以テ臣ノ子ニ喻スコト能ハズ、臣ノ子モ、亦之レヲ臣ニ受クルコト能ハズ、是ヲ以テ行年七十ニシテ老イテ、尙ホ輪ヲ斲レリ、古ノ人ヤ、其ノ傳フベカラザルヤ死セリ云云」

【踔厲風發】 韓文の柳子厚墓誌銘の語、踔は、卓と同じ、踔厲は、卓絕嚴厲なり、風發は敏疾にして當るべからざるをいふ、

【竹】 史記に「渭川千畝竹、其人與千戶侯等」山海經に「衞丘ノ山ノ南ニ帝俊ノ竹林在リ、大ニシテ舟ヲ爲ルベシ」と、俊は舜の借字、竹の一節、則ち以て舟につくるべしとなり、羅浮山記に「邛竹ハ本邛山ヨリ出ヅ、張騫、西ノ方大夏ニ至リテ見ル所ロナリ、而シテ此ノ山ノ左右、時ニ之レアリ、鄉老多ク以テ杖トナス」爾雅に「東南之美者、有會稽之竹箭焉」白樂天の養竹記に「竹本固、固以樹德、竹性直、直以立身、竹心空、空以體道、竹節貞、貞以立志、故君子樹之」檀几叢書に載する、竹連珠に「其節勁、故卒成凌雲之材、其心虛、故卒成耐寒之器」また「斷之嶰谷、爰成鸞鳳之音」揭作緒生、忽走龍蛇之影」また笛譜に「竹ハ八月ヲ俗ニ之ヲ小春トイフ、熱去ラント欲シ、寒來ラント欲シ、氣至リテ凉シ 故ニ小春トイフ」渭川（此君）（竹中兒）を參看せよ、

【竹ナケレバ人ヲシテ俗ナラシム】 蘇軾の綠筠軒の詩に、

可使食無肉、不可居無竹、無肉令人瘦、
無竹令人俗、人瘦尙可肥、俗士不可醫、傍人
笑此言、似高還似癡、若對此君仍大嚼、世間
那有揚州鶴、

【筍】 爾雅に「一ハ竹萌ナリ」說文に「一ハ竹胎ナリ」箏譜に「箏一名ハ萌、一名ハ蒻竹、一名ハ竹胎、一名ハ竹牙一名ハ茁、一名ハ初簧、俗ニ呼ビテ龍孫ト爲ス」竹譜に「箏ヲ呼ビ稚子トナシ、又稚龍ト爲ス」箏は筍に同じ、

【竹ノ竿ニ願ノ絲ヲ懸ク】 （願絲）を見よ、

【竹ノ平安ヲ報ズ】 酉陽雜俎に「李衞公守北平、唯童子寺有竹一窠、纔長數尺、相傳其寺綱維每日報竹平安」

【竹ノ實ヲ食ム鳥】 （鳳凰）を見よ、

【多言】 多辯の義、詩經に「人之一一、亦可畏也」金人の銘に「無一一一多敗」老子に「一一數窮、不如守中」

【多言ノ戒】 劉氏人譜に「蔡清人ニ語テ曰ク、道德アル者ハ、必ズ多言ナラズ、信義アル者ハ、必ズ多言ナラズ、才謀アル者ハ、必ズ多言ナラズ、唯夫ノ細人、狂人、妄人ハ、乃チ多言ハルノミト」

【多故】 故は事なり 多難の義、國語に「王室一一、余懼及焉」

【章擧】 閩書南產志に「一一一名ハ紅擧、烏賊ニ似テ差大ナリ、味更ニ珍好」浙江縣志に「望潮魚ハ頭圓クシテ足多シ亦海和尙ト名ヅク」

【唾壺】 「ツバキ」の「ツボ」、晉書王敦傳に「王敦酒後ニ、輙チ魏武ノ樂府、老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心不已ヲ咏ジ、如意ヲ以テ一一ヲ擊チ節トナス、壺邊盡ク缺ク」と、これより慷慨の狀を一一擊碎といふ、唾盂ともいふ、東坡の詩に「醉後哀歌擊唾壺」

【鼉鼓】 詩經靈臺に「一一逢逢」の傳に「鼉ハ蜥蜴ニ似テ長ケ丈餘、皮ハ鼓ニ冒フベシ、鼉一ニ鱓ニ作る、晉安海物記に「鼉ハ宵鳴ク、桴鼓ノ如シ、今江淮ノ間、鼉鳴ヲ謂ヒテ鼓トナス、亦或ハ之ヲ鼉更トイフ、ソノ聲逢逢然トシテ鼓ニ似テ而シテ又善ク夜鳴キ、ソノ數モ更ニ應ズ、初更ノ如キハ一鳴ニシテ止ミ、二更ハ即チ再鳴スルヲ以テナリ」

【柁工】 「カヂトリ」陸深溪山餘話に「篙師（サヲサシ）一一」とあり、柁師・舵工・梢工皆同じ、

【他山ノ石以テ玉ヲ攻クベシ】 （他山之石可以攻玉）小人を石に比し、君子を玉に比し、君子が小人に侵されて、善く省修研磨して、德器を成すに喩ふ、詩經の鶴鳴篇に「一一一一、一一一一」攻は磨なり、また「他山之石可以爲錯」ともあり、錯は礪石なり、程子曰く「玉ハ天下ノ至美ナリ、石ハ天下ノ至惡ナリ、然レドモ玉ハ石ヲ以テ之ヲ磨キ、器ヲ成ス 猶ホ君子ト小人ト處ルガ如シ、心ヲ動カシ性ヲ忍ベバ、義理生ジ道德成ル」

【他志】 「ワタクシ」の心「アダシゴコロ」禮記の檀弓に「或敢有一一」

【太上皇】 （太上皇）を見よ、

【蛇首ヲ見テ長短ヲ知ル】 （見蛇首知長短）一斑を見て、全豹を推知すると同義、淮南子に「蛇擧首尺而脩短可知也、象見其牙而大小可知也」

【吒食】 吒は咤に同じ、一一は口舌中に於て聲をなすをいふ、禮記の曲禮に「毋一一」

【多錢翁】 「カネモチヂヒ」貴耳集に「有一一一一、每自誇侈」

【多錢善ク賈フ】 （長袖善ク）を見よ、

【蛇足】 無益の事に喩ふ、戰國策に「楚ニ祠ル者アリ、其

ノ舍人ニ巵酒ヲ賜フ、舍人相謂ヒテ曰ク、數人ニテ、之ヲ飲メバ足ラズ、一人ニテ之ヲ飲メバ餘アリ、請フ地ニ畫キ蛇ヲ爲リ先ヅ成ル者ハ酒ヲ飲マント、一人蛇先ヅ成ル、酒ヲ引キマサニ飲マントス、乃チ左手ニ巵ヲ持チ、右手ニ蛇ヲ畫ク曰ク、吾能ク之ガ足ヲ爲ラント、未ダ成ラズシテ一人ノ蛇成ル、其ノ巵ヲ奪ヒテ曰ク、蛇ハ固足ナシ、子安ンゾ能ク爲ラント、遂ニ酒ヲ飲ム　蛇足ヲ爲ル者、終ニ其ノ酒ヲ亡フ」

【佗佗】　うつくしき貌、爾雅釋訓に「——美也」德のうつくしき貌にもいふ、詩經の君子偕老の釋文に「——德之美也」

【大戴禮】　漢の戴德(字ハ延君、戴聖ノ叔父ニシテ漢ノ宣帝ニ仕フ)の輯むるところ、戴聖の傳へたる禮記を小戴禮といふに對して名づく、この書殘闕多く且つ編次冗雜なるを以て、禮記の如く盛行せず　その中四十七篇の夏小正(夏ノ月令)四十九篇曾子立事以下曾子の言行を記したる十篇は、最も讀むべき文字にして、單行本もあり、畢沅の夏小正考注一卷、阮元の曾子注釋四卷參考すべし、

【但好事ヲ行フヲ知リ、前程ヲ問フヲ要スルナカレ】　(但知行好事、莫要問前程)馮道の詩なり　人はただ日日よき事を行ずるを知るべし、徒に前途の事を問ふを要せずとの義、

【唯好鬚ト稱ス】　ただよき口ひげてあると稱せしは、他にとりどころなく、その職にかなはざる義なり、唐書に「太宗翠微宮ニ在リ、李緯ヲ以テ民部尚書トナス、京師ヨリ來リシ者アリ　帝曰ク、房玄齡、緯ノ尚書トナリシヲ聞キテ、何ト謂ヒシゾト、曰ク唯好鬚ト稱セシノミト、帝遽ニ之ヲ改ム」

【戰勝チテ肥ユ】　(臛肥)を見よ、

【戰勝チテ將驕リ卒惰ル者ハ敗ル】　(戰勝而將驕卒惰者敗)漢書項籍傳に出づ、

【戰勝ツハ易ク、勝ヲ守ルハ難シ】　(戰勝易、守勝難)吳子の語、

【戰ヘバ必ズ勝チ、攻ムレバ必ズ取ル】　(戰必勝攻必取)善く兵を用ふるをいふ、史記高祖紀に「連百萬之軍、——戰——攻——吾不如韓信」

【但愚者ノ悅ヲ欲シテ賢者ノ嗤ヲ思ハズ】　(但欲愚者悅不思賢者嗤)白居易の立碑の詩の句なり　人の虛名を欲するをそしる、

【惟酒以テ憂ヲ忘ルベシ】　晉書顧榮傳に「惟酒可以忘憂、但無如作病何耳」

【徒四壁ノミ】　家貧しく一物もなきをいふ、漢書に「司馬相如、成都ニ家ス、徒四壁ノミ」(卓文君)を參看せよ、

【惟善人能ク盡言ヲ受ク】　韓愈の爭臣論に「傳曰、惟善人能受盡言、謂其其而能改之也」とあり、國語の周語に「單襄公見國武子、其言盡、襄公曰、立于淫亂之朝而好盡言、以招人過怨之本也、惟善人能受盡言」とあるを引きたるなり、

【止ダ風月ヲ談ズ可シ】　(止可談風月)名利の話をせずして、風流の話のみをすべしといふ義、梁書の徐勉傳に「徐勉吏部尚書ニ遷リ、選官ニ居ル、嘗テ門人ト夜集ス、客ニ虞暠トイフアリ、詹事ノ官ヲ求ム、勉色ヲ正シテ答ヘテ云フ、今タハ止ダ風月ヲ談ズベシ、宜シク公事ニ及ブベカラズト、故ニ時ノ人咸其ノ私ナキニ服ス」

【多多益善シ】　(多多益善)兵數多ければ、多き程、益善く之を用ふるをいふ、史記淮陰侯傳に「上問曰、如我能將幾何、信曰、陛下不過能將十萬、上曰、於君何如、曰臣多多而益善耳」漢書の韓信傳には善を辨に作る、

【他端】　史記信陵君傳に「今有難無、——而欲赴秦軍、譬如以肉投餓虎、何效之有哉」註に「——ナシトハ他ノ奇策ノ以テ端ヲ發スルヿナキヲイフ」別の考また は策などをいふ、

【橘化シテ枳トナル】　(橘化爲枳)周禮に「橘淮ヲ踰エ而シテ北スレバ、化シテ枳トナル、此レ地氣然ルナリ」また晏子春秋に「晏子曰、嬰聞之、橘生淮南則爲橘、生淮北則爲枳、葉徒相似、其實味不同、所以然者何、水土異也」また淮南子にも類語あり、

【他腸ナシ】　(無他腸)心腸の內に他の邪惡の念なきをいふ、史記衞綰傳に「上以爲廉忠實無他腸」

【闥ヲ排ス】　(排闥)勢よく戶をひらきて入る義、漢書に「樊噲ハ沛ノ人ナリ、屠沽ヲ以テ業トナス、後チ高祖ニ從ヒ征伐ノ功アリ、高祖既ニ天下ヲ定ム、嘗テ疾ニ禁中ニ臥シ、人ヲ見ルヲ欲セズ、闞者ニ詔シ、群臣ヲ放チテ入ラシメズ、噲乃チ闥ヲ排シ直チニ入リテ高祖ヲ見、流涕シテ曰ク、陛下臣等ト豐沛ニ起ル、其レ何ゾ壯ナルヤ、今天下已ニ定レリ、又何ゾ憊レタルト、帝乃チ笑ツテ起ツ」

【獺多ケレバ魚擾ル】　抱朴子に「獺多則魚擾、鷹多則鳥亂、有司設則百姓困」

【達孝】　達は通なり、天下の人通じて之を孝といふ者をいふ、中庸に「武王周公其——矣乎」達尊の達と同義、

【脱監】「ラウヤブリ」大明律に「凡犯罪—レ—越獄加二等」便讀に「門ヨリ出ヅルヲ——トイヒ、墻ヲ踰エテ出ヅルヲ越獄トイフ」

【妲己】（殷ノ紂王）を見よ、

【達觀】 徧く見て殘す所ろなきをいふ、書經召誥に「—于新邑營」

【達言】 道理に通達する言なり、曹植書に「歎此—、以爲美談」

【獺祭魚】 多く書冊を檢するをいふ、談苑に「李商隱爲文、多檢閲書冊、左右鱗次、號獺祭魚」多くの參考書を閲して 左右に散亂したるさまは、恰も獺の魚を祭るが如きなり、禮記の月令に「孟春之月、獺祭魚」

【達辭】 意のよく通達せる詞（辭達スル）を見よ、

【脱屣ノ如シ】（如脱屣）脱は「ヌグ」なり屣は小履なり、位を棄つるの易きに喩ふ、孟子盡心上に「舜視棄天下、猶棄敝蹝也」また漢書郊祀志に「視妻子如脱屣耳」

【脱躧ノ如シ】（如脱躧）躧は小さきわら履なり、之を脱ぎ棄つるも、惜むに足らざるなり、史記孝武紀に「嗟乎吾誠得如黄帝、吾視去妻子、—耳」と躧一に屣また蹝に作る同じ、

【達人】 ひろく道理に通達する人をいふ、嵇康絶交書に「柳下惠・東方朔、——也」

【達人ハ大觀ス】 道理に通達する人は、能く公平の觀察を爲すを以て、事物の情理を得ざるとなきをいふ、賈誼の鵩鳥賦に「小智自私、賤彼貴我、達人大觀兮、物亡不可」鶡冠子に「————乃見其符」

【脱粟飯】 脱粟は、穀に殼を脱するのみにて、精げざる玄米をいふ、史記公孫弘傳に「食一肉脱粟之飯」また晏子春秋にも「晏嬰齊ノ相トナリ、常ニ脱粟米ヲ食シ、味ヲ重ネズ」とあり、粟は「モミ」

【達尊】 達は通なり、天下を通じて尊むべき者なり、孟子に「天下有—三爵一、齒一、德一」

【奪胎】（換骨——）を見よ、

【達道】 天下古今共に由る所ろの路にて、書經の五典、孟子の所謂父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信是れなり、中庸に「天下之——五（中略）曰君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友也、五者天下之——也」

【怛怛】 心のかなしみ勞るる義、忉忉・忉怛皆同じ、詩經の市田に「勞心——」

【韃靼】 支那の北狄の名、「ダルダリイ」韃狄・韃兒・韃人などは、その國人をいやしめて稱す、

【達德】 天下古今同じく得る所ろの理をいふ、中庸に「知仁勇三者、天下之——也」

【脱兎ノ如シ】 勢の急速なるに喩ふ、孫子九地篇に「始ハ處女ノ如クニシテ敵人戸ヲ開ク、後ニハ脱兎ノ如クニシテ敵拒グニ及バズ」

【龍ニ乘ルラム山人】 莊子の逍遙遊に「藐姑射之山、有神人、中略、乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外」とあるに本づく、

【龍ノ御顔】（龍顔）を見よ、

【佗傑】 志を失ふ貌、佗は立つ貌、傑は住なり、立ちとどまりて悵然たる意、屈原の離騷に「忳鬱邑、余——兮」忳は自ら思ふなり、

【妥帖】 妥は安、帖は定なり、詩文を作るに、字句の穩に「シツカリ」と落ちつきたるをいふ、文選の文賦に「——而易施」王逸の楚辭の序に「義多乖異、不——」妥當に同じ、

【掌ヲ抵チテ談ズ】（掌ヲ抵チテ）を見よ、

【掌ヲ反ス】（掌ヲ）を見よ、

【掌ヲ反スヨリモ易シ】（掌ヲ反ス）を見よ、

【多能】 藝能多きをいふ、鄙事ニ）を見よ、

【樂極レバ必ズ哀生ズ】 樂の永くつづかざるをいふ、劉向の列女傳に「陶答子妻曰、樂極必哀生」また史記の滑稽列傳に「酒極レバ則チ亂レ、樂極レバ則悲ム」また漢の武帝の秋風辭に「歡樂極兮哀情多」

【樂ハ極ム可カラズ】（樂ハ極ム可カラズ）を見よ、

【樂而不淫セズ】（樂而不淫）論語八佾に「子曰關雎樂而不淫」朱註に「淫ハ樂ノ過ギテ其ノ正ヲ失フ者ナリ」

【多方】 萬方といふが如し、左傳に「——以諛之」

【打包】 行脚僧の「フロシキ」包を負ひたるをいふ（富士見西行ノ像ノ如シ）「チヤウハウ」と讀む、陸游の詩に「挈榼人沽村市酒、打包僧趁寺樓鐘」また僧の一處に滯留せるを挂包といひ、飛錫と對用す、また三衣を納むる行囊をいふ、

【茶毘】 梵語、闍鼻多の略、焚燒の義、火葬をいふ、禪林寶訓音義に「此云火化」

【懦夫】 心のおぢけたる者、孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、——有立志」

【蹈歌】 古の歌垣と似たれども、これは支那の風俗を我に傳へしなり、伊呂波字類抄に、本朝事始を引いて「天武天皇三年正月朔、朝大極殿、詔男女無別、闇夜——」と見え、日本紀に、持統天皇の七年八年とも正月の十六日に「漢人奏——」とあり、淵鑑類函十七に、朝野

僉載を引きて、「唐ノ明皇先天二年正月十五十六十七夜、安福門外ニ於テ高燈ヲ作リ、少女ソノ下ニ――ース」とあり、この事、舊唐書睿宗紀に見ゆ、

【踏襲】 前の人の言論、若くは行事をその儘にうけつぐをいふ、韓文に、「――前人言句」、金史に、「不――前人」

【闘茸】 駑頓なり、いやしく劣る義、一解に闘は下、茸は細毛なり、よりて下材細微の義とす、漢書賈誼傳に、「――尊顯兮、讒諛得志」また司馬遷報任安書に、「爲掃除之隷在――之中」また鹽鐵論に、「賢知之士、――之所惡也」、

【踏青】 蘇轍詩序に、「眉ノ東門外ニ、墓頤山アリ、上ニ亭榭アリ、松竹ノ下、大江ニ臨ム、正月八日ゴトニ、士女相與ニ遊嬉シ、其ノ上ニ飲酒ス、之ヲ――トイフ」また歳華紀麗譜に、「二月二日ハ踏青節ナリ、張公詠是ノ日ヲ以テ、萬里橋ニ出デ、綵舫數十艘ヲ爲リ、賓僚ト分ツテ之ニ乘リ、歌吹前導ス(中略)士女群集シ、觀ル者堵ノ如シ、公詩ヲ爲リテ曰ク、春遊千萬家、美人顏如花ト」黄山谷の詩に、「白白紅紅相閒開、三三五五踏青來」舊唐書代宗紀に、「大歴二年二月壬午幸昆明池――」逐思邈の千金月令には、「三月三日――鞋履ヲ上ル」とあり、

【搨本】 搨は、「シキウツシ」する、――はしきうつしせし帖子、また「イシズリ」の類をもいふ、宣和畫譜に、「亦有御府――」

【多聞】 多く物事を聞き知るなり、荀子に、「――曰博、少聞曰淺(益友)また(――)を參看せよ、

【打扮】 扮は一音、「ヘン」「ヨソホフ」――は俗語、「イデタチ」中原雅音に、「今俗以裝飾爲――」打は助語にして意味なし、

【斃テ後ニ已ム】 死するまで勉むるをいふ、禮記の表記に、「俛焉日有孳孳斃而後已」の註に、「俛焉ハ、他ヲ顧ルコトナキノ意、孳孳ハ勤勉ノ貌孜孜に同じ、

【駝峯炙】 錦字箋に、「將軍曲良翰、――ヲ爲ル、駏駝(らくだ)ノ背肉起チテ峯ノ如キトコロ、味極メテ美ナリ、杜詩ニ、紫駝之峯出翠釜」炙はあぶりたる肉なり、

【玉】 圓機活法に、「財貨源ニ、玉ハ天地ノ精ナリ、山ノ玄文ノ者アリ、水ノ蒼文ノ者アリ、白クシテ截肪ノ如ク、赤クシテ雞冠ノ如ク、黒クシテ純漆ノ如ク、黄ニシテ蒸粟ノ如クナル者アリ、山ニ生ジテ木潤ヒ、水ニ產シテ流芳シク、璞ニ藏レテ文采外ニ露ハル、于闐ハ玉ヲ產ス、河源ノ出ルトコロ云云」禮記に、「玉在山而木潤」また文選陸機の文賦に、「石韞玉而山輝」また鹽鐵論に、「崑山之下、以玉抵烏鵲」とあるは、その多きをいふなり劉勰新論に、「玉可碎、而不可改其白」揚子法言寡見に、「玉不雕與璠不作器、言不文典謨不作經」與璠は美玉なり、典謨は書經の舜典堯典、大禹謨皋陶謨なり、尸子に、「買玉不論美惡、以大小爲議、必無良寶矣」亢倉子に、「玉之所以難辨者、謂其有恠石也、金之所以難辨者、謂有其鍮石也」恠石は玉に似たり、鍮石は金に似たり、

【珠】 財貨源に、「珠ハ大海ノ中ニ生ズ、乃チ蚌蛤胎ナリ、云云」文選の陸機の文賦に、「水懷珠而川媚」新論に、「璧不可以禦寒、珠不可以充飢、雖有奪日之鑑、代月之光、歸于無用也」(齊魏賓ヲ)を參看せよ、

【玉ヲ改ムレバ行ヲ改ム】 (改玉改行)玉は佩玉なり、行は行步なり、佩玉は行步を節する者にて、尊卑に由り遲速の度を異にす、故に佩玉を易ふれば、步調も亦改めざるべからず、以て法を變ずれば、事も亦革まるに喩ふ、國語に、「先民有言、――」

【璧ヲ懷キテ罪アリ】 (懷璧有罪)(匹夫罪ナシ)を見よ、

【璧ヲ反ス】 (反璧書言故事に、「人ノ餽ヲ受ケザルヲ、謹ミテ璧ヲ反ストイフ」左傳の僖二十三年に、「晉ノ公子重耳、曹ニ及ブ、僖負羈、盤飧ヲ饋リ璧ヲ寘ク(註に、臣竟外の交無し、故に盤を用ひて、璧を飧中に藏む、人をして見しむることを欲せず)公子飧ヲ受ケテ、璧ヲ反ス」

【玉ヲ漱グ】 (漱玉)泉水のそそぎ流るるを形容す、陸士衡の招隱の詩に、「山溜何泠泠、飛泉漱鳴玉」

【玉ヲ藍田ニ種エテ美婦ヲ得タリ】 (種玉于藍田而得美婦)搜神記に、「楊公雍伯、篤孝父母ヲ無終山ニ葬ル、山ハ高クシテ水ナシ、義漿ヲ作リテ行人ニ給スルコト三年、一人アリ、飲ミ訖リテ懷中ヨリ石子一升ヲ取リ之ニ與ヘテ曰ク、此ヲ種レバ美玉ヲ生ジ、幷ニ好婦ヲ得ント、公之ヲ種ウ、數歳、北平ノ徐氏女アリ極メテ美ナリ、公之ヲ求ム、徐氏云フ、白璧一雙ヲ得バ、當ニ婚ヲナスベシト、公種エシ所ニ至リテ、白璧五雙ヲ得タリ、以テ聘ス、遂ニ妻スニ女ヲ以テス、其ノ地ヲ名ツケテ玉田トイフ」

【卵ヲ盜メドモ干城ノ將ヲステズ】 駿臺雜話、「天下の寶」の條に見ゆ(一卵ヲ以テ)を見よ、

【卵ヲ以テ石ニ投ズ】 (卵ヲ以テ)を見よ、

【玉ト碎ケテモ瓦ノ全キニハナラハジ】 上田秋成の文に見ゆ、北齊書元景安傳に、「寧可玉碎不能瓦全」とあるに本づく、

【玉ノ杯ノ底ナキガ如シ】 (玉巵當ナシ)を見よ、

【玉琢カザレバ器ヲナサズ】（玉不琢不成器）玉の質は、もと美なり、然れども雕琢を加へざれば、器と爲りて用に應ずる能はずとの意、禮記の學記に「——人不學不知道、是故古之王者、建國君民、教學爲先」

【民ヲ視ルコト傷ツクガ如シ】（視民如傷）民すでに安けれども、之を視ること、猶ほ傷つく所ろあるが如きなり、孟子に「文王——、——」左傳に「國之興也、——、是其福也、及其衰也、以民爲土芥、是其禍也」

【民ヲ視ルコト子ノ如クス】（視民如子）賈誼の新書に「鄒穆公、親寶以定國、視民如子」

【民ノ彝ヲ秉ル是ノ懿德ヲ好ム】（民之秉彝、好是懿德）詩經大雅烝民篇に出づ、上に「天生烝民、有物有則」の句あり、朱傳によるに、烝は衆なり、則は法なり、秉は執なり、彝は常なり、懿は美なり、言ふ心は、天の衆民を生ずる、此の物あれば必ずこの則あり、蓋し百骸九竅五臟よりして之を君臣父子夫婦長幼朋友に達して、物に非るはなきなり、而して法あらざるなし、視の明、聽の聰、貌の恭、言の順、君臣の義あり、父子の親あるの類の如き是れなり、是れ乃ち民の執るところの常の性なり、故にその情この美德を好まざる者なきなり、

【民ノ口ヲ防グコト水ヲ防グヨリ甚シ】（防民之口、甚於防水）史記に見ゆ、下に「水壅潰、傷人必多、民亦如之、是故爲水者、決之使導、爲民者、宣之使言、民之有口也、猶土之有山川」とあり、民の口を防ぎとむれば、民の怨鬱つもりて、君の禍となること、水を塞ぎて氾濫せしめ人を傷むるよりも、その害甚しとなり、國語に「防民之口、甚於防川、大決所犯、傷人必多」子產の言なり、

【民ノ樂ヲ樂ム者ハ、民モ亦ソノ樂ヲ樂ム】孟子の梁惠王に「樂民之樂者、民亦樂其樂、憂民之憂者、民亦憂其憂」衆と樂を共にすべきをいふ、

【民ハ之ニ由ラシムベシ、之ヲ知ラシムベカラズ】論語泰伯篇に「子曰、民可使由之、不可使知之」とあり、兩の之は斯の理を斥す、民は斯の理の當然に由り循ひて身を行はしむることは爲し得べきも、その本原の理は、學者さへも知り得ること難ければ、まして民をして知らしむるは尙ほ更難しとなり、可使とは能使の義、不可使とは不能使の義として見るべし、

【民ハ三ニ生ズ】國語の晉語に「武公伐翼殺哀公、止欒共子曰、苟無死吾以子見天子、命子爲上卿、制晉國之政、辭曰、成聞之民生於三、事之如一、父生之、師教之、君食之、非父不生、非食不長、非教不知、生之族也、故壹事之唯其所在、則致死焉」欒共子は晉の哀公の大夫共叔成なり、

【端衣】禮服なり、孔子家語の五儀に「——元裳」（端委）に通ず、

【褌衣】「ヒトヘ」釋名の釋衣服に「——ハ裏ナキヲ言フナリ」

【端委】朝廷に於ける禮服なり、左傳昭元年に「劉子謂趙孟曰、吾與子弁冕——、以治民臨諸侯」また「晏平仲——立于虎門之外」

【端闈】正門なり、後漢書班彪傳の注に見ゆ、

【丹鉛總錄】二十七卷、明の楊愼（字ハ用修、升庵ト號ス）撰す門人梁佐編して刊行す、天文・地理・時序・花木・鳥獸・宮室・冠服・珍寶・音律・物用・人事・人品・史籍・訂訛・字學・官爵・博物・禮樂・卦名・飲食・干支・數目・怪異・身體・詩話・璅語の二十六類に分つ、

【炭ヲ抱キテ涼ヲ希フ】（抱炭希涼）行ふ所ろと望む所ろと相反するをいふ、魏志高柔傳註に「孫盛曰、信不足焉、而祈物之必附、猜生於我而望彼之必懷、何異挾氷求溫、——」

【男ヲ生ム猥ノ如キモ猶ホ其ノ庇ヲ恐ル】班昭の女誡に鄙語として引けり、曰く「生男如狼猶恐其庇、生女如鼠猶恐其虎」

【男ヲ生ムハ惡シク、女ヲ生ムハ好シ】杜甫の兵車行に「信知生男惡、反是生女好、生女猶得嫁比隣、生男埋沒隨百草」

【短ヲ護ス】（護短）短所をおほひ護るをいふ、稽康の與山巨源絶交書に「仲尼不假蓋於子夏、是其短也」この事もと孔子家語に出づ、

【鍛ヲ好ム】鍛冶の業を好む（柳下ニ）を見よ、

【短ヲ舍テテ長ヲ取ル】（舍短取長）是非を取捨して宜しきを得る義、漢書藝文志に「觀此九家之言、——、則可以通萬方之略矣」

【檀越】檀家の義、ダンナ名義集に「稱——者、檀即施也、此人行施、越貧窮海」とあり、祖庭事苑に「——檀那、此云施者、越謂度越彼岸」書言故事に「僧道稱施主、曰檀那——云云」——は舊譯なり、

【彈ヲ見テ鴞炙ヲ求ム】（卵ヲ見テ）を見よ、

【膽ヲ破ル】（破膽）驚き懼るるをいふ、漢書賈誼傳に「大諸侯之有異心者、——而不敢謀」また後漢書班超傳に「不入虎穴、不得虎子、當今之計、因夜火攻、彼必震怖可殄盡也、滅此虜則鄯善——、功成事立矣」

【彈劾】 人の罪惡を咎めて、上に告ぐるなり、劾は罪人を推窮する義、事類全書に「呂誨字ハ獻可、召サレテ殿中侍御史トナル、彈劾シテ避ク所ロナシ」北史魏收傳にも見ゆ、

【淡交】 「サーツバリ」としたる交をいふ、莊子山木篇に「君子之交淡如水、小人之交甘若醴、君子淡以親、小人甘以絶」醴は音「レイ」「アマザケ」この語禮記の表記にも出づ(君子ノ交ハ淡キ)を見よ、

【暖香】 あたたかき氣の薫香なり、馮贄の雲仙雜記に「寶雲溪有僧舍、盛冬若客至、則然薪火——一炷、滿室如春」

【斷梗】 飄轉して定らざる貌、佩文韻府に「元好問出京詩ニ、半生無根著、飄轉如——」

【短綆】 ハ深井ヲ汲ムベカラズ】 識見淺短なる者は、深遠の道理を會得すること能はざるに喩ふ、管子に「短綆不可以汲深井、知鮮不可以與聖人之言」荀子に「短綆不可以汲深井之泉、知不幾者、不可與及聖人之言」また淮南子說林訓に「短綆不可以汲深、器小不可以盛大、非其任也」

【短歌行】 詩の一體魏武帝(曹操)の作、二首あり、その一、對酒當歌、人生幾何、譬如朝露、去日苦多、慨當以慷、幽思難忘、何以解憂、惟有杜康、青青子衿、悠悠我心、但爲君故、沉吟至今、呦呦鹿鳴、食野之苹、我有嘉賓、鼓瑟吹笙、明明如月、何時可掇、憂從中來、不可斷絶、越陌度阡、枉用相存、契闊談讌、心念舊恩、月明星希、烏鵲南飛、繞樹三匝、無枝可依、山不厭高、水不厭深、周公吐哺、天下歸心、

【端慤】 心や行の正しく誠ある義、淮南子の主術訓に「其民樸直——」

【段干木】 呂氏春秋に「段干木晉國之駔」說文に「駔ハ會ナリ、兩家ノ買賣ヲ合スルヲイフ」かかる賤業に從事せしも、行を高くし、道を守りて仕へず、魏の文侯見んと欲しその門に至るに、干木牆を踰えて之を避けぬ、史記魏世家註に、皇甫謐高士傳、淮南子、呂氏春秋を引きて、詳しく載せたり、

【短晷】 短日をいふ、潘岳秋興賦に「何微陽之——覺涼夜之方永」と、說文に「晷ハ日景ナリ」

【赧愧】 はぢて顏をあかくする、世說に「鬼——而退」

【談議】 佛經の語、對話商議する義、西域記に「未遑——」

【丹邱】 晝夜いつも明かなりといふ「ヲカ」楚辭遠遊の

注に「——ハ晝夜常ニ明カナリ」

【檀几叢書】 清の王晫・張潮の同編なり、初集二集餘集に分ち、清朝諸家の雜著百五十七種を輯む、凡例に「古、七寶靈檀几アリ、几上ニ文字アリ、意ノ及ブ所ロニ隨ヒテ文字輙チ現ハル、今書中經タリ史タリ子集タリ禮節ノ大端タリ、家門ノ訓戒タリ、土物瑣屑タリ、種種畢ク具ハル、披覽ニ意アレハ卷ヲ展シラ即チ得ベシ、名ヅケテ檀几トイフ」

【斷機ノ戒】 學を廢することの戒なり(學ヲ廢スル)を見よ、

【斷金ノ交】 至つて親密なる交をいふ(金蘭ノ契)を見よ、

【斷金伐木ノ契】 十訓抄第五に見ゆ、極めて親しき朋友の交りをいふ、斷金の解は(金蘭ノ)を見よ、伐木は、詩經小雅に「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷于喬木、嚶其鳴矣、求其友聲、相彼鳥矣、猶求友聲、矧伊人矣、不求友生、神之聽之、終和且平」とあり、朱子の說に、この詩は朋友故舊を宴する時の樂歌なりと、

【暖噓】 暖き息の義、正韻に「脣ヲ蹙メテ氣ヲ吐クヲ吹トイヒ、口ヲ虛ニシテ氣ヲ出スヲ噓トイフ、吹氣ハ肺ヨリ出デ、陰ニ屬ス、故ニ寒シ、噓氣ハ丹田ヨリ出ヅ、陽ニ屬ス、故ニ溫ナリ」

【段玉裁】 字は若膺、茂堂と號す、金壇の人、乾隆庚辰の擧人、戴東原の門に遊び、經史に湛深にして、尤も六書に精し、說文解字注・六書音均表・周禮漢讀考・儀禮漢讀考等の書あり、

【彈極ノ綆ハ斡ヲ斷ツ】 (泰山ノ)を見よ、

【彈冠】 結綬と同義に用ふ(冠ヲ彈ズ)を見よ、

【彈丸黑子】 微小の地をいふ、庾信賦に「地惟黑子、城猶彈丸」(彈丸ノ黑子ノ)を見よ、

【彈丸ノ地】 極めて狹小の地なり、彈丸は「ハジキダマ」戰國策に「此彈丸之地、猶不予也」

【端倪】 端は山巔なり、倪は水涯なり、端倪を知らずとは、本末始終を知るを得ざる義、莊子の大宗師篇に「反覆終始、端倪ヲ知ラズ」とあり、また韓文に「旭之書、變動猶鬼神不可端倪」とあり、旭は、張旭なり、またその南海廟碑には、「乾端坤倪、軒豁呈露」とあり、

【端月】 正月をいふ、史記の索隱に「二世三年正月也、秦避正字諱、故曰端月」端は始なり、秦の始皇の名は政なり、正と同音、故に之を避くるなり、

【彈劾】 (長鋏歸來)を見よ、

【談言微中】 明白に言はずして人の急所をつく義、史

記滑稽列傳に見ゆ、下に「亦可以解紛」とあり、

【擔鼓】 牽牛星の一名、爾雅釋天の注に「今荆楚ノ人、牽牛星ヲ呼ンデ——ト爲ス」

【短後】 後ろの短き服、莊子說劍に「吾王所見劍士、皆蓬頭突鬢、——之衣云云」蘇軾の句に「麻鞋——隨獵夫」

【端五】 五月五日の節句、端午・蒲節・端陽に同じ

【端午】 五月の節句をいふ、端は始めなり、古は始めの午の日を用ひしが、後に五日に定めたるも、なほ古名を存ず、類書纂要に「五月初五ヲ、端午トナス、マタ端陽トイヒ、マタ端五トモイフ」續齊諧記に「屈原五月五日ニ汨羅ニ投ジテ死ス、楚人之ヲアハレミ、此日ニ至ル毎ニ竹筒中ニ米ヲタクハヘ、水ニ投ジテ之ヲ祭ル」

【團坐】 「マトヰ」「クルマザ」圓坐に同じ、團欒坐ともいふ、文獻經籍考に「——飲酒以爲樂」

【啖咋】 「カミクラフ」蚊などの人をかびにも用ふ、韓愈の雜詩に「與汝恣——」

【郯子】 左傳昭十七年に「——來朝ス、公之ト宴ス、昭子問ヒテ曰ク、少皞氏、鳥ヲ以テ官ニ名ツクルハ、何ノ故ゾト、——曰ク、吾ガ祖ナリ、吾之ヲ知ルト、仲尼之ヲ聞キテ、——ニ見エテ之ヲ學ブ、乃チ人ニ告ゲテ曰ク、吾之ヲ聞ク、天子官ヲ失スレバ、學四夷ニ在リト、猶ホ信ナリト」

【覃思】 深く思ひ考ふる義、書經の孔安國の序に「研精——」

【端士】 行の端正なる士をいふ、大戴禮に「昔、周ノ成王幼ニシテ襁褓ノ中ニ在リ、天下ノ孝悌博聞道術アル者ヲ選ミ、以テ之ヲ輔翼シ、太子ト與ニ居處出入セシム、故ニ太子目ニ正事ヲ見、耳ニ正言ヲ聞キ、左右前後皆——正人ナリ」

【段秀實朱泚ヲ罵ル】 秀實、字は成公、唐の汧陽の人、幼にして孝童と號せらる、長じて涇原の節度使となり、司農卿に至る、唐書に「朱泚叛スルトキ、段秀實ヲ召シテ帝號ヲ僭セント欲ス、秀實、泚ノ面ニ唾シ罵リテ曰ク、狂賊、吾汝ヲ斬リテ萬段ニセザルヲ恨ム、豈汝ニ從ヒテ反センヤト、笏ヲ以テ之ヲ擊チ、其ノ額ニ中ツ、血流レテ地ニ滿ツ、朱泚ガ黨、遂ニ之ヲ殺ス」後に太尉を贈られ、忠烈と謚せらる、

【簞食壺漿】 簞は竹器なり、食は飯なり、飯を竹器に盛り、漿を壺に容れたるをいふ、行旅の携ふる所ろなり、孟子梁惠王下に「——以迎王師」

【單絲線ト成ラズ】 片われにては、ものにならざるに喩ふ、水滸傳に「單絲不成線、孤掌豈能鳴」

【男子ハ婦人ノ手ニ死セズ】 禮記の喪大記に「男子不レ死ニ於婦人之手ニ、婦人不レ死ニ於男子之手ニ」の註に「其褻(なるる)ナルヲ惡ミテナリ」

【簞食瓢飲】 漢書貨殖傳に出づ、少しばかりの飲食物をいふ(一簞ノ食)を見よ、

【丹心】 赤心に同じ、忠誠にして僞なきなり、謝朓の詩に「既秉丹石心、寧流素絲涕」

【端人】 「タダシキヒト」端正なる人、孟子に「尹公之他ハ——ナリ」

【誕辰】 「タンジャウビ」閒中今古錄に「世人生辰ヲ稱シテ——トイヒ、華誕トイフ、コノ誕ノ字、詩經ノ誕生后稷ニ因リテイフ、然レドモ殊ニ知ラズ誕ハ發語ノ詞ナルコトヲ」

【殫盡】 二字共に「ツクス」なり、全く無くなる義、淮南子の覽冥訓に「——大半」

【丹心ヲ留取シテ汗青ヲ照ス】 (留取丹心照汗青)宋の文天祥が過零丁洋詩の末句なり、詩に曰く「辛苦遭逢起一經、干戈落落四周星、山河破碎水漂絮、身世浮沈風打萍、皇恐灘邊說皇恐、零丁洋裏歎零丁、人生自古誰無知、——ニ丹心は、赤心に同じ、至誠にして僞なきをいふ、汗青は竹帛といふに同じ、

【丹心萬古ヲ照ス】 忠誠の心が萬古までも照りかがやく義、楊繼盛の椒山集に「浩氣還太虛、丹心照萬古、生前未了事、留與後人補」とあり、因に同上臨刑詩に「天王自聖明、制度高千古、平生未報恩、留作忠魂補」

【誕章】 誕は大なり、章は憲法なり、國の憲章の大なる者をいふ、漢書班固叙傳に「贊國之——」

【探春ノ宴】 天寶遺事に「長安ノ士女、春時花ヲ鬬ハスニ、千金ヲ以テ名花ヲ市フ、正月ノ半ニ車ニ乘リ、馬ニ跨リ郊野ニ遍ウス、探春ノ宴トナス」

【澹如】 澹は淡に通ず、淡泊にして水の如きをいふ、北史に「後周柳靖性愛閑素、其于名利、澹如也」

【淡水ノ交】 (淡交)を見よ、

【丹青】 「サイシキエ」をいふ、漢書の蘇武傳に「雖古竹帛所載、丹青所畫、何以過子卿」子卿は蘇武の字なり、晉書の顧愷之傳に「尤善丹青、圖寫特妙」劉後村題跋に「李伯時羅漢、前世名畫如顧陸、吳道子輩皆不能不著色、故例以——二字目畫家、至龍眠李伯時の號)始掃去粉黛、淡毫輕墨、高雅超詣、譬如幽人勝士褐衣草履居然簡遠、固不假衮繡蟬冕爲重也、於乎亦可謂天下之絕藝矣」

【斷齏畫粥】 齏は「ナヅナ」粥は「カユ」貧しくして力學

するをいふ、書言故事に「范希文修學最モ貧シ、長白山ノ僧舍ニ在リ、粟二升ヲ煮、粥一器ヲ作ル、宿ヲ經テ遂ニ凝ル、刀ヲ以テ畫シテ四塊トナシ、早晩二塊ヲ取リ、薺數十莖ヲ斷ジテ之ヲ啗フ」

【檀褐】 袒裼に同じ、肉袒なり、臂をあらはすをいふ「カタヲヌグ」詩經鄭風に「——暴レ虎獻于公所ニ」

【儋石ノ儲】 儋は擔に通ず、石は一石、儋は二石なり、人之ガ擔ふをいふ、儲蓄の少きをいふ、漢書揚雄傳に「產不過ニ十金、乏シシテ無ケレバ——之ニ」、晏如也」また魏志に「華歆素清貧、祿賜以賑ヲ賜親戚、家無ケレバ——之ニ」

【貪泉ヲ飲ム】 事文類聚に「晉吳隱之、性廉操、廣州ノ刺史トナル、界上ノ一水、之ヲ貪泉トイフ、古老イフ、此ノ水ヲ飲ム者ハ、廉士モ皆貪トナル、隱之至リ酌ンデ之ヲ飲ミ、詩ヲ賦シテイフ、古人言ヒ此水ニ一飲懷ヒ千金、試使ヒ夷齊飲ミ、終當ニ不ル易ヘ心ヲ、清操愈厲シ」

【談藪】 談論多くして、盡さざるをいふ、晉書に、「裴頠字ハ逸民、司空秀ノ子、弘雅ニシテ遠識アリ、博學稽古、少クシテ名ヲ知ラル、樂廣嘗テ頠ト清言シ、理ヲ以テ之ヲ服セント欲ス、而シテ頠カ辭語豐博ナリ、廣笑ッテ言ハズ、時ノ人頠ヲ謂ッテ言談ノ林藪トナス」

【丹臺】 仙宮をいふ(苟シクモ金骨ノ)を見よ、

【段太尉】 (段秀實)を見よ、

【膽大心小】 膽力は大ならんことを要す、心を用ふるは細小ならんことを要す、孫思邈曰く「智欲ル圓ニ而行欲ル方ニ、膽欲ル大ニ、而心欲ル小ニ」

【澹臺滅明】 孔子の弟子、史記の仲尼弟子傳に「武城ノ人、字ハ子羽、孔子ヨリ少キコト三十九歲、狀貌甚ダ惡シ、孔子ニ事ヘント欲ス、孔子以テ材薄シト爲ス、スデニ業ヲ受ケ退テ行ヲ修ム、行クニ徑ニ由ラズ、公事ニ非レバ卿大夫ニ見エズ、南游シテ江ニ至ル、弟子三百人ヲ從フ、名、諸侯ニ施ス、孔子之ヲ聞テ曰ク、吾以言取ル人、失ヒ之宰予ニ、以貌取ル人、失ヒ之子羽ニ」

【探湯】 沸湯を探るは恐れ戒めて濫に手を入れざるなり、論語季氏篇に「孔子曰、見善如ル不ル及ヒ見ル不善如ル探湯ヲ、吾見ル其人ヲ矣、吾聞ル其語ヲ」

【坦坦】 路などの極めて平かなる貌、易の履卦に「履道——」

【湛湛】 重厚の貌、楚辭九章に「忠——而願ル進ム兮」また水の深くたたへたる貌、楚辭招魂に「——江水兮」また露けき貌、詩經の湛露篇に見ゆ、

【眈眈】 下を見おろす貌、また威あつて視る貌、易の頤卦に「虎視——」轉じて强國が弱國を幷呑せんとて「ニラミ」居る義にも用ふ、

【慱慱】 憂勞の貌、詩の鄘風に「勞心——兮」

【團團】 まろき貌、班婕妤の怨歌行に「裁爲合歡扇、——似ル明月ニ」また露などの盛んなる貌、謝惠連の詩に「——滿葉露」

【斷斷】 誠一の貌、書の秦誓に「——猗無ケレバ他技ニ」猗は助辭、疏に「——ハ善ヲ守ル一ノ貌」公羊傳文十二年の注に「——ハ專一ノ貌」要するに誠心を以て專一に守る貌、

【赧赧然】 慙ぢて面赤き貌、孟子滕文公下に「觀ル其色ヲ——」

【丹堊】 丹漆にてぬりこめたる庭にて、朝廷に限りて設く、赤堊に同じ、西京賦に「青瑣——」注に「丹漆ル地ヲ故曰ク——ニ堊ハ殿階の下の庭なり(青瑣)を參看せよ、

【短長】 人の短所と長所と、また善惡の義にも用ふ、夷堅志に「大家飛上梧桐樹、自有ル旁人ノ說ク——ニ都統明椿自ら生祠を關王廟の側に立つ、時人之を嘲るの詩なり、

【斷腸】 悲の甚だ切なるをいふ、搜神後記に「臨川ノ東興ニ人アリ、山ニ入リ猿子ヲ得テ歸ル、猿母後ヨリ其ノ家ニ至ル、此ノ人猿子ヲ庭樹ニ縛ス、ソノ母頰ヲ搏チ、人ニ向ヒテ哀ミ乞ハント欲ス、コノ人竟ニ之ヲ殺ス、猿母悲ミ嘆ビ、自ラ擲チテ死ス、コノ人腹ヲ破リ之ヲ視ルニ、腸皆斷裂セリ」また佩文韻府に「巴峽ノ諺ニ曰ク、巴東三峽巫峽長、哀猿三聲斷ル人腸ヲ」杜牧の詩に「芳草復芳草、斷腸復斷腸」

【斷腸花】 秋海棠の異名、錦字箋に「舊傳昔有ル女子ヲ、懷ヒ人不ル至ラ、淚洒ル地ニ、遂ニ生ル此花ヲ、色如ル美婦ノ、而甚媚ル名ヲ——」

【短長ノ命ヲ制ス】 猶ほ生殺の權を握るといふが如し、書經に「矧予制ル乃短長之命ヲ」

【男女功ヲ貿フ】 男女各〻その仕事を易へて相助くるをいふ、亢倉子に「男子不ル織ラ而衣、婦人不ル耕ラ而食、男女貿ヒ功ヲ、相資ル爲ル業ヲ」

【男女姓ヲ同クスレバ、其ノ姓蕃セズ】 (男女同ル姓、其姓不蕃)左傳に見ゆ、

【短亭長亭】 六帖に「五里ニ一短亭、十里ニ一長亭」風俗通に「亭ハ留ナリ、行旅ノ館スル所ロナリ」

【丹鳥】 螢の異名、古今註に「螢火一名ハ景天、一名ハ燐、一名ハ——、一名ハ夜光、一名ハ宵燭」(螢)を參看せよ、

【斷頭將軍】 蜀志に「劉璋ガ將嚴顏、江州ヲ守ル、蜀ノ將張飛攻メテ之ヲ破リ、遂ニ顏ヲ獲タリ、飛喝シテ曰ク、何ゾ早ク降ラザルト、顏ガ曰ク、卿無狀、我ガ州ヲ侵奪

ス、我ガ州ニハ、但斷頭將軍アリテ、降將軍ナシト」

【檀特山】 中天竺健駄羅國に在り、また彈多落迦といふ、西域記に「彈多落迦舊曰——訛也、普賢菩薩證明功德經に「於——六年苦行」

【膽斗ノ如シ】 膽の大なるに喩ふ、蜀志に「姜維死スル時、割カル、膽斗ノ大サノ如シ」斗とは酒を酌む器、唐書に「膽大於身」また十升を容るる「マス」

【檀那】 檀越に同じ、韻府に「梵語陀那鉢底、唐言施主、稱——者、訛陀爲檀」

【談何ゾ容易ナラン】 漢書東方朔の非有先生論中の語、易林にも「君子服之談何容易」

【單ナレバ折レ易ク衆ナレバ摧ケ難シ】 北史吐谷渾傳に「阿豺母弟慕利延ニ命ジテ曰ク、汝一隻ノ箭ヲ取リ之ヲ折レト、延即チ之ヲ折ル、汝又十九隻ヲ取リ之ヲ折レト、延折ル能ハズ、阿豺曰ク、汝ガ曹知ルヤ否ヤ、單則易折、衆則難摧、戮力一心、然ル後ニ社稷固カルベキナリト」毛利元就が箭を折りて諸子を戒めし語、これと暗合せり、

【難ニ臨ミテ兵ヲ鑄ル】 難は兵亂なり、兵亂にのぞみて兵器を鑄りつくるも、まにあはざるをいふ、諺に「ヌスビトヲ捕ヘテ繩ヲナフ」といふに同じ、晏子春秋に「臨難而遠鑄兵、噎而遠掘井、雖速亦無及已」

【丹ノ藏スル所ノ者ハ赤シ】 (丹之所藏者赤)人は善惡の友によりて、善ともなり、惡ともなるに喩ふ、家語に「善人ト居レバ、芝蘭ノ室ニ入ルガ如シ、久クシテ其ノ香ヲ聞カズ、即チ之ト化スレバナリ、不善人ト居レバ、鮑魚ノ肆ニ入ルガ如シ、久クシテ其ノ臭ヲ聞カズ、亦之ト化スレバナリ、丹ノ藏スル所ロノ者ハ赤ク、漆ノ藏スル所ロノ者ハ黑シ、是ヲ以テ君子ハ、必ズ其ノ與ニ處ル所ロノ者ヲ愼ム」

【斷梅】 梅雨の節雷鳴して「ツユ」の「アガル」をいふ、梅雨を斷畫する義なり、陸游の句に「輕雷轣轆——初」自註に「鄉人梅雨ニ雷アルヲ謂ツテ——トイフ」

【暖房】 「ヤウツリノサカモリ」輟耕錄に「今ノ宅ニ入ルト、居ヲ遷ス者ハ、隣里金ヲ醵シ、具ヲ治シテ主人ニ過リテ飲ム、之ヲ暖屋トイヒ、又——トイフ、王建ガ宮詞ニ、大儀前日——來ト、則チ暖屋ノ禮ハソノ來ルコト尙シ」

【暖飽】 あたたかく衣を著、飽くまで食ふこと、飽食暖衣を見よ、

【澹泊】 私慾なく心しづかに無爲なる貌、長楊賦に「人君以玄默爲神、——爲德」諸葛武侯の戒子書に「非——無以明志、非寧靜無以致遠」淡泊に同じ、

【膽ハ大ナランコトヲ欲シ、心ハ小ナランコトヲ欲ス】 (膽欲大、心欲小)この語は、唐書の隱逸傳に出づ、孫思邈の言なり、下に「智欲圓、行欲方」とあり、膽大とは敢爲をいひ、心小とは畏敬をいひ、智圓とは變に通ずるをいひ、行方とは守るところあるをいふ、この語は、淮南子主術訓に「凡人之論、心欲小、而志欲大、知欲圓、而行欲方」文子に「心欲小志欲大」とあるに本づく、

【斷髮文身】 斷髮は、頭髮を斷つをいひ、文身は、針を以て肌膚を刺し、丹青を以て之を涅し、龍文を爲すなり、左傳哀七年に「仲雍嗣之——、嬴以爲飾、豈禮也哉」嬴は裸に同じ、この語史記の周紀にも見ゆ、

【擔板漢】 佛經の語、板をになひたる人夫の、一方のみは見ゆるも他方は見えざる如く、一を知りて二を知らざる迂人に喩ふ、

【潭府】 高官の家をいふ、韓愈の符讀書城南と題する詩に「一爲公與相、潭潭府中居」とあるに本づく、潭潭は奥深き貌、

【貪夫ハ財ニ狥ズ】 (烈士)を見よ

【短兵】 刀劍をいふ、楚辭に「車錯毂兮、——接」また史記匈奴傳に「長兵則弓矢、——則刀鋋」

【貪兵】 敵の「タカラ」を「ムサボル」兵をいふ、後漢書の臧洪傳の注に「人ノ土地貨寶ヲ利スル者、之ヲ——トイフ」

【談柄】 話の「タネ」をいふ、傳燈錄に「棲雲寺ノ大朗法師談論スル毎ニ、手ニ松枝ヲ執リ、以テ談柄トナス」

【短兵接戰】 短兵は刀劍をいふ、刀劍にて近接して戰ふ義、史記項羽紀に「令騎皆下馬步行持——」

【箪瓢】 箪は小さき「ハコ」小筥なり、飯をいるる器、瓢は「ヒサゴ」酒をいるべし、論語雍也篇に「一箪食一瓢飲」

【旦暮】 朝夕をいふ、轉じて急迫の義に用ふ、史記晉世家に「君老矣——之人、曾不能待而欲弑之」また戰國策に「魏且——亡矣」

【貪墨】 墨は、黑色にてけがれたる義、——は貪りて汚れたるをいふ、左傳に「貪以敗官爲墨」

【澶漫】 縱逸(ホシイママ)の貌、莊子馬蹄篇に「——爲樂」また遠き貌、司馬相如の子虛賦に「案衍——」また川原の貌、張衡の西京賦に「——靡迤」

【丹磨クベクシテ、其ノ赤ノ奪フ可カラズ】 呂氏春秋に「丹可磨而不可奪其赤、石可破而不可奪其堅」とあり、丹と石とは、その形こそ變ぜしむべけれ、その赤と堅との質をば奪ふべからず、

【端門】 宮中の正門をいふ、漢書五行志に「王宮——」

【貪婪】 財を愛むを貪といひ、食を愛むを婪といふ、列子に「衆皆競進以——」韓愈の順宗實錄に「韋執誼性——詭賊貪惏と同義にも用ふ、

【貪惏】 貨を貪り人を殘ふなり、又人を殺して財を取るを惏といふ、揚子方言に「河之北謂貪曰惏」左傳に「爾以讒慝——事君、而多殺不辜」

【團欒】 欒は圞に作るを正とす、相聚まりて娛む意「マドキ」傳燈錄に「有男不婚、有女不嫁、大家團圞頭、共說無生話」また趙孟頫の詩に「相呼——坐」

【檀林】 一に叢林ともいふ、布施によりて衆僧の棲居する處、王融の法樂辭に「春山玉所府、——鑾所棲」

【煖爐】 歳時雜記に「京人十月朔、酒炙鬻肉ヲ爐中ニ沃シ、團坐シ飲啗ス、之ヲ——ト謂フ」夢華錄に「十月一日有司——炭ヲ進ム、民閒皆酒ヲ置キ——會ヲ作ス」

【唾面】 (面ニ唾ス)を見ヨ、

【帖木兒】 (——)を見よ

【袂ヲ投ズ】 (投袂)袖を振ふ義、奮起の形容をいふ、左傳宣十四年に「楚子聞之——而起」淮南子には、投を奮に作る、同じ、

【多聞】 博聞なり、多識なり、无量壽經鈔註に「釋迦阿難同時發心、阿難常樂——、故未成佛道」法華經に「——有知慧所說无所畏能令衆歡喜」——天は毘沙門なり(——)を參看せよ、

【貝多】 (貝葉)を見よ、

【墮落】 惡道惡事に陷りたる義、法華經に「或當——爲火所燒」

【他力】 淨土門に說くところにして、彌陀如來の本弘誓願力に乘じ、極惡の凡夫も愚痴の衆生も極樂に往生することを得るは全く自力にあらず、彌陀願力の回向なりとの義、敎行信證に「言——者如來本願力也」

【墮淚碑】 晉の羊祜、字は叔子、嘗て襄陽に守たり、遠近を綏懷し、甚だ民の心を得たり、卒するに及び民之が爲めに市を罷め、哭聲相接す、襄陽の百姓、峴山の祜が平生游憩せし所に於て碑を建て、廟を立て、歳時饗祭す、その碑を望む者、流涕せざるなし、杜預因つて名つけて——と爲す、晉書の傳に「祜與鄧潤甫、登峴山、垂涕曰、自有宇宙、便有此山、因立碑、後人名——」

【足ルヲ知ル者ハ富ム】 (知足者富、老子の語なり、足るを知りて心に滿足するときは、富者に同じ、されば莊嚴論偈にも「知足第一富」とあり、又遺敎經には、「不知足者、雖富而貧」拾遺の(牛衣)を見よ、

【足ルヲ知レバ辱メラレズ】 (知足不辱)足ることを知りて分に安んずる者は、垢辱を受けざるをいふ、老子に「——知止不殆可以長久」漢書疏廣傳に「——知止不殆功遂身退天之道也」

【達磨】 具には菩提——といふ、南天竺國香至王の子、梁の大通二年逝く、これ支那禪宗の第一祖たり、法脈を二祖に傳へし時、袈裟を付して信となし、且つ曰く、わが滅後二百年に衣は止まりて傳はらず、法は沙界に周からんと、偈に曰く、吾本來茲土、傳法救迷情、一花開五葉、結果自然成と、唐の代宗の時圓覺大師と謚す、

【誰カ烏ノ雌雄ヲ知ラン】 詩の小雅の「具曰予聖、誰知烏之雌雄」註に「烏ノ雌雄ハ、相似テ辨ジ難キ者ナリ、皆自ラ聖人ト爲スモ、亦誰カ能ク其ノ言ノ是非ヲ別タンヤ」子思の衞侯を諫むるにも、この語を引けり、

【誰カ知ラン僞言巧簧ニ似タリ云云】 太平記卷十二に見ゆ、白氏文集卷三に出づる詩の句なり、簧は笙の中の金葉をいふ、笙には十三簧あり、調子によりて何れの簧にも移るなり、僞言も巧にいふときは簧の如くに美しく、人その僞たるを知らずとなり、詩經にも「巧言如簧」とあり、掩鼻とは、韻府に「魏王遺楚美人、夫人鄭褒愛之、甚於王、鄭知王以己爲不妬、因謂美人曰、王惡子之鼻、見王必掩之、美人從之、王謂鄭曰、美人見我必掩鼻何也、對曰、似惡聞王之臭、王劓其鼻」また參商とは二つの星の名、その相去ること隔遠にして近つかざるなり、杜甫の詩に「人生不相見、動如參與商」またいふ「各在天一涯、又如參與商」また擬峰とは、韻府に「尹伯奇母取蜂去毒、擬衣上、伯奇前欲去之、母大呼曰、伯奇牽我、父吉甫見疑之、伯奇自殺」ここに母とあるは繼母なり、繼母その子を嗣となさんと欲す、故に伯奇を讒せしなり、尹吉甫は周の宣王の賢大夫なり、孔子家語の弟子解を見よ、

チ

【知】「サトリ、ワキマフ」荀子に「一莫大乎棄疑、行莫大乎無過」また認識する義、易の繫辭に「百姓日用而不一」また記憶する、論語に「父母之年、不可不一」また「シリアヒ」左傳昭二十八年に「遂如故一」

【智】釋名に「智ハ知ナリ、知ラザル所ロナキナリ」孟子に「是非之心、一之端也」荀子の正名に「知而有所合謂之一」經典に或は知と通じ用ふ、淮南子に「有一而無爲、與無一者同道、有能而無事、與無能者同德」又同書に「一過萬人者謂之英、千人者謂之俊、百人者謂之豪、十人者謂之傑」晉書張載傳に「一無所運其籌、勇無所奮其氣、則勇怯一也、才無所騁其能、辯無所展其說、則頑慧鈞也」

【質】人質(ヒトジチ)なり、左傳に「周鄭交一」「ニヘ」の義のときは音シ贄に通ず、

【置郵シテ命ヲ傳フルヨリモ速カナリ】(速於置郵而傳命)置は驛なり「シユクバ」郵は馹なり「ツギウマ」驛馹に由りて命を傳ふるよりも速かなりとは、傳達することの極めて迅速なるをいふ、孟子に「德之流行一一一一一一一」風俗通に「漢、郵ヲ改メテ置ト爲ス、置モ亦驛ナリ、ソノ遠近ヲ度リテ之ヲ置クナリ」增韻に「馬傳ヲ置トイヒ、步傳ヲ郵トイフ」置郵は置驛ともいふ、呂覽上德篇に「德之速、疾乎以郵傳命」

【之罘島】之は今芝に作る、同じ、山東省登州府福山縣に屬す、芝罘港は、北黃海に面し、東南西の三面は、丘陵連亙し、海岸を北に距る凡二里にして、一島恰も靈芝狀を爲して、北より東南に灣出し、海面に聳立す、之を芝罘山といふ、外人は錯りてこの地の總稱と爲し、港名に用ふれども、港の本來の名は、烟臺といふ、之罘の名は、最も舊くより史上に顯はる、秦始皇紀に「二十八年之罘ニ登リ石ヲ立ツ」とあり、又漢武帝紀にも「東海ニ幸シテ之罘ニ登ル」とあり、

【知音】己の心を善く知れる人をいふ、列子の湯問に「伯牙善ク琴ヲ鼓ス、鍾子期善ク聽ク、伯牙琴ヲ鼓スルニ、志、高山ニ在レバ、鍾子期曰ク、善哉峩峩トシテ泰山ノ若シト、志、流水ニ在レバ、鍾子期曰ク、善哉洋洋トシテ江河ノ若シト、伯牙ノ念フ所ロハ、鍾子期必ズ之ヲ得」とあるに本づく、揚雄の解難に「師曠之調、鍾竢知音者在後也」呂氏春秋に「鍾子期死シテ伯牙琴ヲ破リ絃ヲ絕チ、終身復琴ヲ鼓セズ、以爲ラク世ニ知音ノ者ナシト」

【忠】「スナホ」にして敬み深し、また正直にして詐なしまた君に事へて誠を盡すをいふ、說文に「忠ハ敬ナリ」書經に「爲下克忠」禮記に「善則稱君、過則歸己、則民作忠」左傳に「趙孟曰、臨患不忘國忠也」孝經に「君子之事上也、進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡」史記樂毅傳に「忠臣去國、不潔其名」左傳に「忠ヲ令德トナス」管子に「忠者臣下之高行」(忠臣)を參看せよ、

【仲由】孔子の弟子、字は子路、卞の野人、孔子より少きこと九歲、性鄙にして勇力を好む、志伉直にして孔子を陵暴す、孔子禮を設けて稍く之を誘く、子路後ち儒服して質を委ね請ひて弟子となる、子路問ふ、君子勇を尙ぶか、孔子曰、義之爲上、君子好勇而無義則亂、小人好勇而無義則盜と、詳しくは史記の仲尼弟子傳を見よ、

【中陰】人死して後七七日即ち四十九日間をいふ、佛經の語、大藏法數に「此色身死後、未托生前、名爲一一こと、一に中有ともいふ、現世と冥途との間に在る暗き界をいふ、佛祖統記に「人死七七、然後、免一一之趣」

【紬繹】その端緒を引くなり、漢書谷永傳に「燕見一一、以求咎怨」

【中葉】中世の義、詩の商頌に「昔在一一、有震且業」震は惧、業は危なり、

【衷ヲ誘フ】(誘衷)衷は偏倚する所ろなきをいふ、誘は啓きみちびくなり、中心を開き導きて、善を爲さしむるの意、左傳に「天誘其衷」

【忠ヲ盡シ國ニ報ズ】(盡忠報國)宋の忠臣岳飛が背に涅せし語、宋史本傳に見ゆ、

【柔ヲ守ルヲ强トイフ】(守柔曰强)老子の語、註に「强ヲ守ルハ强ナラズ、柔ヲ守ル乃チ强ナリ」

【中夏】(中華)を見よ

【中賀】(中謝)を見よ、

【中行】行は道なり、中道にして過不及なきをいふ(狂狷)を見よ、

【忠孝】善く君に事ふるを忠といひ、善く親に事ふるを孝といふ、書經に「惟忠惟孝」孝經に「資于事父以事君而敬同」また曰く「君子之事親孝、故忠可移于君」漢書劉向傳に「奉安君父一一之至也」(陽城)を參看せよ、

【中籌ノ言】中籌は、宮中の結構深奥の處にて、隱祕猥

褒の言をいふ、猶ほ閨中の言といふが如し、詩經郿風牆有茨に「中冓之言不可道也、所可道也、言之醜也」

【忠孝兩全】 父母に孝をつくし、君に忠をつくして兩ながら全うする義、李義山集に「貴忠孝之兩全、則忠可移孝、正文武之二道、則武可輔文」

【衷甲】 衣の下に甲を被る義、左傳襄二十七年に「楚人——」通鑑の漢紀に「呂布刺董卓、卓——不入」註に「胡三省曰ク、——ハ甲ヲ内ニ被テ、衣ヲ甲上ニ加フ」

【中饋】 婦人は專成する所ろなく、ただ室中に在りて、饋食を主るのみ、よりてまた妻の稱とす、易の家人に「在——貞吉」また張衡の詩に「綢繆主——奉禮助蒸嘗」

【仲弓】 孔子の弟子、冉雍の字、家語に「伯牛ノ宗族、孔子ヨリ少キコト二十九歲」史記の仲尼弟子傳に「仲弓政ヲ問フ、孔子曰ク、出門如見大賓、使民如承大祭、在邦無怨、在家無怨ト、孔子、仲弓ヲ以テ德行アリト爲ス、曰ク雍也可使南面ト、云云」

【酎金】 酎は醇酒なり、初めて熟して之を宗廟に嘗むる時、諸侯を廟中に會し、金を出し祭を助けしむるを——といふ、史記平準書に「列侯坐——失侯者百餘人」

【忠經】 一卷、舊本漢の馬融撰、鄭玄註と題すれども隋唐二志に著錄せずして、宋の崇文總目に初めて出づるを見れば後人の僞作なるべし、孝經に擬して十八章に分ち、人臣たる者、君に事へて忠を盡すべきことを述ぶ、明和三年の和版あり、

【中和】 人の性情の中正にして和げるをいふ、中庸に「喜怒哀樂之未發、謂之中、發而皆中節、謂之和」

【中華】 支那人自ら其の國を稱して中華又は中夏と云ふ、華は榮なり、また文華なり、夏は大なり、故に中華また中夏と稱するは、世界の中央に位する文明國、又は大國といふ義なり、中國・中州皆同じ、

【抽黃對白】 黃を抽き白に對する義にて、四六駢儷文の巧みなるを稱す、柳宗元の乞巧文に「——、——、噚哢飛走噚哢は鳥聲、

【中浣】 一月中にて中の十日をいふ、中澣に同じ（上浣）を見よ、

【中經】 詩儀禮・周禮をいふ（大經）を見よ、

【中扃外閉】 扃は閉なり「トザス」——は心中の欲を外に出さず、外部の邪惡を心中に入れざる義、文子に「中欲不出、謂之扃、外邪不入、謂之閉、——何事不節、外閉中扃、何事不成」

【中堅】 上中下三軍の中軍をいふ、中軍は、最も堅固を貴ぶ、故にいふ、後漢書光武紀に「光武與敢死者三千人、衝其——」

【中元】 陰曆七月十五日をいふ、この日盂蘭盆の供をなし、百味百瓜を佛に供す、父母長養慈愛の恩を謝し、その冥福を祈る、唐六典に「七月十五日地官爲——」

【忠賢】 忠實なる賢臣なり、漢書元帝紀に「明王在上、——布職、則羣生和樂、方外蒙澤」

【中權後勁】 中軍と後殿となり、中軍は將軍ありて謀を制し、後殿は精兵を用ふるによりていふ、左傳宣十二年に「——」と見ゆ

【中原ノ鹿】 鹿を以て天子の位に喩ふ、史記淮陰侯傳に「蒯通曰ク、秦ノ綱絕エテ而シテ維弛ブ、山東大ニ擾レ、異姓竝ビ起リ、英俊烏集ス、秦其ノ鹿ヲ失ヒテ天下共ニ之ヲ逐フ」また北史に「徐光、趙ノ石勒ニ謂ツテ曰ク、陛下ハ神武謀略、漢高ニ過ギタリト、勒笑ツテ曰ク、朕若シ漢高ニ遇ハバ、當ニ北面シテ之ニ事フベシ、若シ光武ニ遇ハバ、當ニ中原ニ竝ビ驅ルベシ、未ダ鹿ノ誰ガ手ニ死スルヲ知ラズト」一說に、鹿祿音通ず、天下の大福をいふと、後世利を爭ふを逐鹿といふ、

【忠言ハ耳ニ逆フ】 忠實の言は却て聞くに快からざるをいふ、孔子家語六本篇に「良藥苦於口、而利于病、忠言逆於耳、而利于行」史記留侯世家にも類語あり、

【中興】 盛に興る運にあたる義、詩經の序に「周室——」通鑑「周宣王成——之名」の註に「中ハ當ナリ」中は去聲にて「アタル」なり、平聲に讀みて「ナカゴロ」興ると解するは非なり、宋史筆斷に「——ハ理ニ中リテ復タ興ルヲ謂フナリ、今皆平聲トナスハ誤レリ」

【中國】 支那人自ら己の國を稱していふ、華夏、または中華といふに同じ、蓋し天下の中央に位する文明國の義、歐陽修の日本刀の歌に「徐福行時書未焚、逸書百篇今尙存、令嚴不許傳中國」云云」もと大學に出づ、

【忠告】 誠心を盡して告げ諭す義、論語顏淵篇に「子貢問友、子曰、——而善道之、不可則止、無自辱焉」

【晝想夜夢】 晝の思が夜の夢となる義、列子の周穆王篇の語、また潛夫論に「晝有所思、夜夢其事」

【籌策ヲ帷幄ノ中ニ運ラシ、勝ヲ千里ノ外ニ決ス】 謀計のすぐれたるをいふ、帷幄は幕なり、史記の高祖本紀に「高祖曰、夫運籌帷帳之中、決勝於千里之外、吾不如子房」と子房は張良の字、

【仲氏】 なかの兄をいふ（伯氏ハ壎）を見よ、

【冑子】 冑は長なり、天子より卿大夫に至るまでの嫡子なり、書經の舜典に「夔命汝典樂教ーーー」華族の子弟を華冑といふはこの義に本づく、冑は甲冑の冑と別なり、

【中秋】 夢粱錄に「八月十五日ハ、中秋節ナリ、此ノ日ハ三秋恰モ半ナリ、故ニ之ヲーートイフ、此ノ夜月色ノ明ナル、常時ヨリモ倍ス、マタ之ヲ月夕トイフ」白樂天の詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心」

【仲秋】 陰曆八月の異名、中秋とは異り、

【中秋賞月】 林羅山の說に、此の夜月を玩ぶこと李唐の世より盛んにして詩人文人其の詠多しと雖も古樂府に嫦娥怨の曲あり漢人の中秋の月なきによりて此の曲を作るとある時は、漢の世よりもあることにやと、

鶴林寺中秋翫月　　唐　許渾

待月東林月正圓、廣庭無樹草無煙、中秋雲盡出滄海、半夜露寒當碧天、輪彩漸移金殿外、鏡光猶挂玉樓前、莫辭達曙殷勤望、一墮西巖又隔年、

【仲尼再生ス】 隋書に「隋ノ陳果、幼ニシテ孝經尙書ヲ受ク、一タビ覽レバ誦ヲ成ス、八歲ニシテ能ク文ヲ屬シ、十三ニシテ徧ク諸史ヲ讀ム、時人皆謂フ、仲尼再生スト、年甫メテ十八ニシテ、監察御史ヲ授ケラル」仲尼は孔子の字、

【中人】 賢ならず、愚ならざる尋常の人をいふ、論語の雍也に「ーー以上、可以語上也、ーー以下、不可以語上也」また富まず、貧しからざる家產を有する人をいふ、漢書文帝紀に「文帝欲作露臺、召匠計之、直百金、曰百金ーーー十家之產也、遂罷之」またなみなみの力ある人をいふ、龜錯の論貴粟に「數石之重、ーーー弗勝」

【冲人】 幼者なり、書經の金縢に「昔公勤勞王家、惟予ーーー弗及知」の註に「冲ハ幼也」

【忠臣】 史記魯仲連傳に「ーーー不先身後君」列女傳に「ーーー與孝子不爲昭昭信節、不爲冥冥墮行」文中子に「ーーー之事君也、盡忠補過、君失於上則臣補於下、臣諫於下則君從於上」宋史司馬光の言に「ーーー之事君也、責其所難、則其易者不勞而正、補其所短、則其長者不勸而遂」忠經に「忠也者一其心之謂也、爲國之本在忠、忠能固君臣、安社稷、感天地、動神明」唐書魏徵傳に「徵嘗テ太宗ニ謂ヒテ曰ク、臣願クハ陛下、臣ヲシテ良臣タラシメヨ、忠臣タラシムルコト無カレト、帝曰ク忠良異レル乎ト、曰ク良臣ハ稷契咎陶ナリ、忠臣ハ龍逢比干ナリ、良臣ハ身美名ヲ荷ヒ、君顯號ヲ都ベ、子孫傳承シ、祚ヲ無疆ニ流ス、忠臣ハ、己

禍誅ニ嬰リ、君昏惡ニ陷リ、國ヲ喪ヒ家ヲ夷シ、祇空名ヲ取ル、此レソノ異ナリト」魏徵のこの語、故に忠良を別ちて諷諫の資とせしなれば必ずしも字義に拘泥すべからず、

【稠人】 「オホゼイノヒト」稠は多なり、却掃編に「ーー廣衆ノ中、愼ンデ臧否スル所ロアル可カラズ」

【忠信篤敬】 論語衞靈公篇に「子張問行、子曰、言忠信行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉」忠信とは、言ふところは中心より出でて信實にして虛妄なきなり、篤敬とは、行ふところ深厚敬愼にして少しの浮薄怠忽なきなり、

【忠臣ノ勇】 勇には種種あれども、忠臣の勇を最も貴しとするなり、臣軌に「夫レ高棟ニ登リ、危檐ニ臨ミテ目眩カズ、心懼レザルモノハ、コレ工匠ノ勇ナリ、深泉ニ入ツテ蛟龍ヲ刺シ、黿鼉ヲ抱イテ出ヅルモノハ、此レ漁夫ノ勇ナリ、戰ニ臨ンデ先登シ、骨ヲ暴ラシ血ヲ流シテ辭セザルモノハ、此レ武士ノ勇ナリ、廣廷ニ居テ、色ヲ作シ辨ヲ瑞シテ以テ君ノ嚴顏ヲ犯シ、前ニ乘軒ノ賞アリト雖モ、未ダ之レガ爲メニ動カズ、後ニ斧鑕ノ誅アリト雖モ、未ダ之レガ爲メニ懼レザルモノハ、此レ忠臣ノ勇ナリ、君子此ノ五ノ者ニ於テ忠臣ノ勇ヲ以テ貴シトナス」

【忠臣ハ畎畝ニ在リト雖モ猶ホ君ヲ忘レズ】 (忠臣雖レ在畎畝、猶不忘君) 漢書の劉更生の封事の語、在畎畝は仕へずして野に在るをいふ、

【忠臣ハ二君ニ事ヘズ】 齊の晝邑の人、王蠋の語、燕の將樂毅、齊を破る、蠋の賢を聞き請ひて將たらしめんとす、蠋固く謝して曰く「忠臣不事二君、烈女不更二夫」云云」事は史記の田單傳に出づ、また戰國策の齊策にも見ゆ、

【中謝】 秉燭譚に「先輩表文ノ內ニ、中謝ト云フコトアリテ、分註ニワリテ書ケリ、人多クソノ義ヲ會セズ、翰墨大全第二卷ニ出ヅ、誠懼誠怖頓首頓首コレヲ中賀ト云フ、賀表ニコレヲ用フ、誠惶誠懼頓首頓首コレヲ中謝トイフ、陳述ノ表ニ之ヲ用フ、但上ヘ上ル表ニハ直チニコノ八字ヲ書クコトナリ、文集等ニ畧シテ中謝中賀等ノ二字ヲ分註ニスルナリ、又按ズルニ中慰トイフコトアリ、コレハ慰表ニ用フ、上ノ凶事ノ時ニ上ル表ヲ慰表ト云フ、慰ハ弔慰ナリ」

【中傷】 人の過失を射り之に中てて傷くる義、漢書尹翁歸傳に「屬縣長吏雖ーーー莫有怨者」

【冲讓】 冲は、沖と同じ、虛なり、和なり、己をひなしく

して讓るなり、柳文の箕子の碑に「——居禮」

【中酒】 酒酣なる義、酔はず醒めず 故に中といふ、史記樊噲傳に「項羽既饗軍士、——、亞父謀欲殺沛公」また酒に「アテラルル」義にも用ふ、韋莊の詩に「近來中酒起常遲、臥見南山改舊詩」

【中壽】 八十歳をいふ（上壽）を見よ、

【中宿】 「フタバンドマリ」左傳の僖二十四年に「命女三宿、女——至雖有君命、何其速也」林註に「三宿ヲ待タズ次宿即チ至ル、蓋シ二宿ナリ」

【蟲出】 死して葬らざるをいふ、史記田叔傳に「臣等當——こまた漢書陳萬年傳に「自絞死者歳數百千人、久者——腐爛」

【忠恕】 己を盡すを忠といひ、己を推すを恕といふ、恕は「オモヒヤリ」論語里仁に「夫子之道——而已矣」

【中書君】 筆の異名、韓愈の毛穎傳に「穎、中書令ニ拜セラル、上嘗テ呼ビテ——ト爲ス、進見ニ因リテ、上將ニ任使スル有ラントシテ、之ヲ拂拭ス、穎因リテ冠ヲ免シテ謝ス、上其ノ髮ノ禿ナルヲ見、マタ摸畫スル所ロ、上ノ意ニ稱ハズ、上笑ヒテ曰ク、中書君老イテ禿ス、吾ガ用ニ任ゼズ、吾レ君ヲ中書トイフ、而シテ今ハ書ニ中ラザルカト」

【中正ニシテ私ナシ】 人の君たる者は至中至正の道を守りて偏私することなしとの義、管子に「爲人君者、中正而無私、爲人臣者、忠信而不黨」また曰く「如地如天何私何親、如月如日唯君之節」

【啁噍】 （——）を見よ、

【疇昔】 疇は發語の辭、昔は猶ほ前の如し、左傳の宣二年の註に「疇昔ハ猶ホ前日ノゴトシ」「已の柱弓の「——之夜」は前夜なり、

【中說】 （文中子）を見よ、

【抽籤】 神佛に祈りて「クジ」を引き吉凶を判斷する義、幸蜀記に「抽籤得逆天者殃四字」

【中堂】 宰相の政を行ふ處をいふ、また直ちに宰相の異稱とす、事物紀原に「唐制、宰相常ニ門下省ニ於テ事ヲ議ス、之ヲ政事堂ト謂フ、永淳中、中書令裴炎移シテ中書省ニ在リ、開元十一年張說奏シ改メテ中書門下トイフ云云」

【中道】 事の「ナカバ」をいふ、論語雍也に「力不足者——而廢、今女畫」

【蟲豸】 爾雅に「足アルヲ蟲トイヒ、足ナキヲ豸トイフ」

【忡忡】 憂ふる貌、詩經草蟲に「未見君子、憂心——」惙惙と義同じ、

【蟲蟲】 「ムシアツシ」詩經の雲漢に「旱既大甚蘊隆——」註に「——ハ熱氣ナリ」蘊は蓄、隆は盛なり、

【惙惙】 忡忡に同じ、心憂ふる貌、楚辭九歌に「極勞心兮——」

【惆悵】 「ウラミイタム」惆は失意なり、悵は望恨なり、楚辭に「——兮獨自憐」後漢書に「情——以增傷」白居易の題慈恩寺の詩に「——春歸留不得、紫藤花下漸黃昏」

【幬帳】 「カヤ」南史に「夏日無——、而夜臥未嘗有蚊蚋」

【譸張】 譸は誑なり、張は誕なり「タブラカス」義、書の無逸に「民無或胥——爲幻」幻とは名を變へ實を易へ、幻觀して人を惑はすをいふ、

【仲長統】 漢の高平の人、少くして學を好み、書記に博渉し、文辭に贍なり、尙書郎となる、論じて時事に及ぶ毎に、恒に憤發歎息す、因つて著論し、名づけて昌言といふ、卒する年四十一、著すところの樂志論、古文眞寶に載す、

【躊躇】 進まんとして進まざる貌、ためらひて決せざる貌、博雅に「猶豫ナリ」前漢李夫人傳の「哀徘徊以——」の註に「師古曰ク、——ハ住足也」

【中庭地白クシテ樹鴉ヲ栖マシム】 王建の十五夜望月に「中庭地白樹栖鴉、零露無聲濕桂花、今夜月明人盡望、不知秋思在誰家」起承二句月明の景を描きて清氣骨に透る、轉結、この清夜に對し人人月を望み秋思を動かすこと、誰家か最も多きぞ、自己の悲を說かずして他人の心を想像し自ら凄凉秋に感ずるの意を見る、

【啁哳】 （——）を見よ、

【神放】 字は明逸、宋の洛陽の人、七歳にして文を能す、母と終南山に隱れ、講習を以て業となす、從學する者衆し、太宗之を召せども起たず、錢を賜ひ母を養はしむ、母卒し復錢帛を賜ひ喪を助く、召して左司諫を授け寵賚甚だ厚し、尋て山に歸らんことを乞ふ、後ち數〻召して諮問せらる、乃ち經に據りて以て對ふ、神益するところ多し、汾陰に從ひ祠り、工部侍郎に拜す、徒りて嵩山に居る、祥符八年、一日晚く起きて道衣を服し諸生を娶めて共に飲み、平生作るところの文藁を取りて之を焚き酒數行にして逝く、壽六十、娶らずして子なし、工部尙書を贈らる、

【冲漠無朕萬象森然】 天地の空漠にして何の「キザシ」もなき中に萬物の將に生ぜんとする形象の森然とし